「八幡史学館」資料　第12シリーズ　平成29年

番号	表題	内容	実施日	講師	備考
	昭和29年度　八幡公民館主催事業「八幡史学館」ポスター				
	八幡公民館主催事業「八幡史学館」第12シリーズ				
1	◎重要	第１回講座＝明治維新「八幡・五井戦争」と房総新藩	平成29年6月6日	山岸弘明	ＰＰ説明
		「鳥羽伏見の戦い」徳川慶喜敗走す　1徳川家康の再来か栄光復活にかけた男　2錦の御旗に敵前逃亡　3徳川慶勝、譜代諸藩を新政府恭順へ			
		旧幕脱走正規軍の最後～市川船橋戦争と八幡五井戦争　１江戸開城に不満の兵士が房総に集結、2船橋大神宮坂で激突、３八幡五井戦争の			
		永一い一日　4戦火は東北に広がり五稜郭で終わる			
		房総新藩の成立～徳川家の静岡移封で玉突き　1旧領徳川氏の「総房三州鎮撫方、柴山文平が旧幕領を接収　2八幡に生まれた知事役所			
		3宗家16代を家達が相続、静岡徳川家の成立　4菊間藩(城、陣屋、藩庁舎)水野忠敬5万石　5鶴舞藩(城、陣屋、藩庁舎)須井上正直6万石、			
2	◎重要	第２回講座＝上総の五大力船	平成29年7月11日	宮本敬一	ＰＰ説明
		江戸湊と八幡浦～澪から考える～			
		新規澪掘割拝借証文差上帳　慶長19年飯香岡八幡宮文書			
		木更津船の航路　上総澪について			
		1幸田露伴の「上総澪」、2江戸時代の上総澪、3江戸湊と木更津河岸、4人も乗せた木更津船、5木更津船の特権			
		元禄3年「関八州伊豆駿河国廻米津出湊浦々河岸之通道法幷運賃書付」にみる湊、河岸、浦			
3	◎重要	第３回講座＝八幡と飯香岡八幡宮	平成30年8月8日	平澤牧人	ＰＰ説明
		飯香岡八幡宮柳楯神事			
		柳楯神事(1柳楯神事について知る、2柳楯神事を深める)　柳の木(神降臨の霊木)、市原地区、柳楯、司家、柳を採取する			
		柳楯の奉製、柳楯の渡御、柳楯の渡御に関する古記録、柳楯の起源筏説、筏説の変化			
		八幡宮神額、柳楯の起源、柳箸の伝承、神体山について、神社の遷座伝承、御影山伝承、青野が原伝承、			

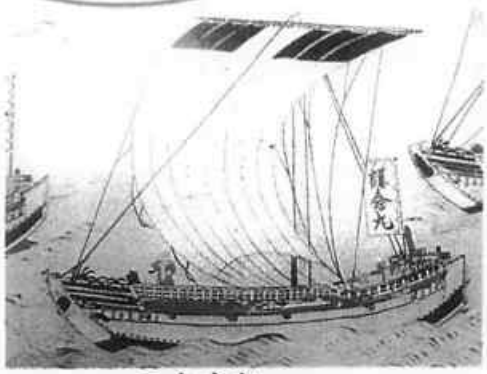
4		第４回講座＝鶴舞藩とその藩士たち	平成29年9月12日	塚原　茂	ＰＰ説明
		鶴舞藩の歴史と伏屋如水			
5	◎重要	八幡史学館ブラス1＝柳楯神事	平成29年10月6日	山岸弘明	
		千葉県無形民俗文化財「市原の柳楯神事」国府総社飯香岡八幡宮(昭和58年＝市川教生)			
		國府総社「飯香岡八幡宮の栞」、市原の柳楯神事絵巻、柳楯の調整など			
5	◎重要	第5回講座＝中世前期(鎌倉時代)房総平氏ものがたり	平成29年10月17日	山岸弘明	
		広常なくして頼朝の挙兵はならず、広常がいては頼朝の政権は確立できない～惣領上総家の悲劇			
		頼朝をして「父」と呼ばしめた、誇り高き東国武者・常胤～下総千葉氏の栄光			
		1「皇族賜姓」で生まれた「桓武平氏」～房総平氏の源流　2始めての「武家政権」誕生から平清盛の権勢と源頼朝の挙兵			
		3上総氏と千葉氏の分離～房総平氏　4源頼朝をして父と呼ばしめた男～千葉常胤			
		5上総介は奉公深かりきも悪きことありて御勘当～広常謀反人として抹殺　6三浦与党として北条軍に攻め滅ぼされる～上総介千葉秀胤の悲劇			
		7鎌倉後期から続いた足利氏との深いつながり～室町幕府と飯香岡八幡宮、8「坂東８平氏から「守護大名、7戦国大名」へ～千葉氏の盛衰			
	千葉市史研究講座「千葉市域や近隣地域の歴史を学ぶ」		千葉市生涯学習センター2階ホール		
6	◎重要	上総八幡湊と五大力船～市川本店、飯香岡八幡宮文書を中心に	平成29年7月22日	山岸弘明	ＰＰ説明
		八幡・市川本店文書　明治6,7年千葉県船改所八幡宿戸長文書群解説			
		飯香岡八幡宮五大力船関係文書			
		千葉市稲荷町内会五田保湊五大力船関係文書			
	八幡小学校「ようこそ先輩受業」ほか				
7	◎重要	五大力船から潮干狩りへ～やわたはむかし海の町だった	平成29年10月14日	山岸弘明	
		１はじめに「八幡さま」ありき～プロローグは「町名の由来」から　2駅名の「八幡宿」　3五大力船が江戸を結んだ～江戸の物流を支えた			
		4市原海苔はおいしい～全国に轟いた名声　5旧八幡中学校グランドを埋め尽くした潮干狩り観光バス　６明日への飛翔～近代産業工場の町へ			
		7八幡の歴史文化を語り継ごう			

平成29年度　八幡公民館主催事業　5月18日（木）より先着受付

第12シリーズ

50名募集

八幡史学館


五大力船

柳楯神事

千葉氏居城跡

回	月日	内容	講師
1	6月　6日	維新「八幡・五井戦争」と上総新藩	山岸弘明氏
2	7月11日	上総の五大力船	宮本敬一氏
3	8月　8日	飯香岡八幡宮と八幡	平澤牧人氏
4	9月12日	鶴舞藩とその藩士たち	塚原　茂氏
5	10月17日	千葉氏と生実（臼井）原氏～中世八幡、五井の支配者	山岸弘明氏

曜日・時間　すべて火曜日・午前9時30分から11時30分

場所　視聴覚室

参加費　無料

持ち物　筆記用具

問い合わせ
八幡公民館
（41）1984

昨年度　講座風景

八 公 運 委　第1号
平成 29年 4月 7日

山岸 弘明 様

市原市立八幡公民館
館長　　池田 好徳

八幡公民館主催事業の講師について(依頼)

時下、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素、公民館事業に格別なるご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、当公民館主催事業 「八幡史学館」を下記のとおり開催いたします。

ご多用の折恐縮ですが、事業の講師としてご指導を賜りますようよろしくお願いいたします。

記

1．事業名　　「八幡史学館」

2．依頼日時　　平成２９年　６月６日（火）・１０月１７日（火）
　　９：３０～１１：３０

3．場　所　　市原市立八幡公民館　視聴覚室

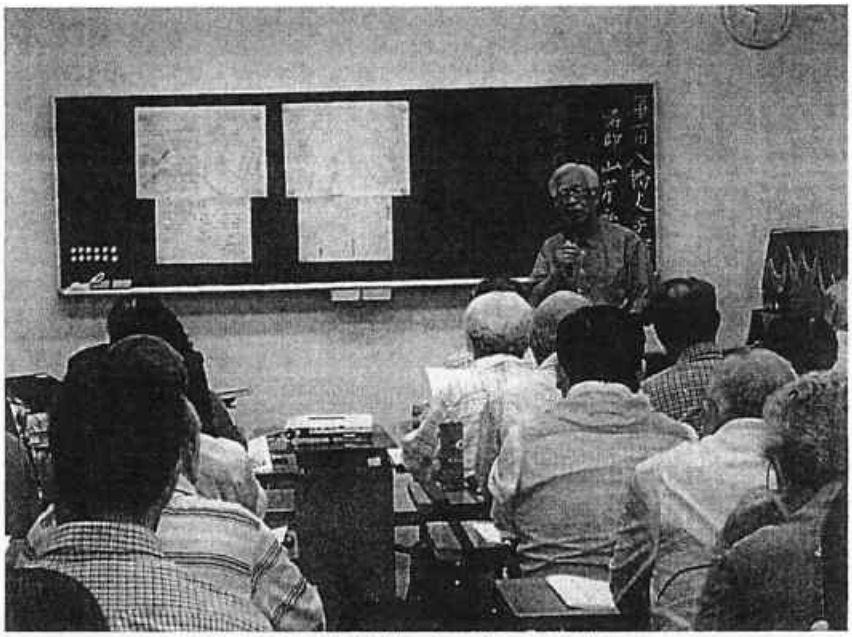
4．内　容　　６月　６日（火）　維新「八幡・五井戦争」と「上総新藩」
　　１０月１７日（火）　千葉氏と生実（臼井）原氏
　　～中世八幡、五井の支配者

5．受講対象者　　一般成人　５０名

6．その他　　・受講者への配布資料や公民館で用意するものにつきましては、事前にご連絡いただきますようお願いいたします。
　　・当日、印鑑をご持参ください。

〒２９０－００６２
市原市八幡１０５０－１
ＴＥＬ　　０４３６－４１－１９８４
ＦＡＸ　　０４３６－４３－７４５７
担当　　松濱　忍・吉岡恭代

第１回　市原市公民館運営審議会　資料



八幡史学館（八幡公民館）

いきいき健康講座（姉崎公民館）

日時：平成 29 年 7 月 28 日（金）14：00～

場所：市原市市民会館 3 階　大会議室

市原市立八幡公民館

感謝状贈呈式

記念写真

平成29年 4月10日(月)

山岸弘明様

これからも公民館事業に、
多面にわたりご協力を
お願い致します。

八幡公民館主催事業「八幡史学館」第 12 シリーズ

明治維新「八幡・五井戦争」と「房総新藩」

～幕末日本史の中の郷土史～

平成２９年６月６日　　山岸弘明

第 12 シリーズ、次回以降のスケジュール

第２回（７月１１日＝火曜日）　上総の五大力船　宮本敬一
第３回（８月８日＝火曜日）　飯香岡八幡宮と柳橋神事　平沢牧人
第４回（９月 12 日＝火曜日）　鶴舞藩とその藩士たち　塚原　茂
第５回（１０月１７日＝火曜日）千葉氏と生実（臼井）原氏　山岸弘明
　お断り＝都合でテーマを変更することがあります

プラス１　特別企画（任意参加＝公民館の主催事業ではありません）　参加費＝無料
「八幡史学館」プラス１　飯香岡八幡宮秋季大祭「柳橋神事」調製と巡行見学会
＊柳橋の調整（１０月６日８時３０分市原柳橋司家集合～１２時ころ）
＊柳橋の巡行（１０月７日１４時３０分光善寺、市原町会公民館集合～１６時ころ）
　詳細は第４回に説明します。祭礼当日のご案内はありません

参考企画
①「千葉市史研究講座」主催＝千葉市立郷土博物館
　７月２２日（土曜日）１３時３０分～　千葉市生涯学習センター（千葉駅から徒歩）
　「上総八幡湊と五大力船～市川本店、飯香岡八幡宮文書を中心に～」　山岸弘明
　　募集＝「千葉市政だより」５月１５日号ほか　受付終了
②「城を歩く会」会長講師・山岸弘明
　７月定例会（２８日＝金曜日）　「夏季研修会」大森・入新井集会場
　　「熊本大地震と熊本城～石垣崩壊のメカニズム～」ほか
　９月定例会（１５日＝金曜日）　「下町探検クルーズ」と中川船番所資料館見学
　１０月定例会（１１日＝水曜日）日帰りバス見学会「掛川城と横須賀城を歩く」

主な参考資料
市原市史、市原のあゆみ、市川市史、船橋市史、千葉市史、船橋歴史風土記、市川・船橋戦争
鳥羽伏見の戦い、市原を駆け抜けた戊辰戦争、複製義軍官軍むかしむかし・名主日記
詳説日本史図録、幕末新詳解事典、幕末維新ものしり事典、戦乱の日本史、ビジュアル日本の歴史
歴史群像シリーズ・幕末諸隊録

中学校「日本史」教科書別紙より

戊辰戦争

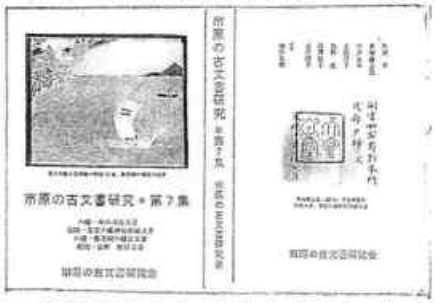
詳日 通史編2 p.237～238

玉はすでに薩長の手中にあり。王政復古のいま、薩長の不正を正さん　　徳川慶喜（大坂城から京都へ向けて出陣）

徳川氏が天下に覇たるは関ヶ原の一役にあり。而して徳川氏が覇業を滅ぼしたるは伏見鳥羽の一敗にあり。
千古を俯仰して誰か覇図銷沈の感なからんや　　川崎紫山（明治のジャーナリスト）

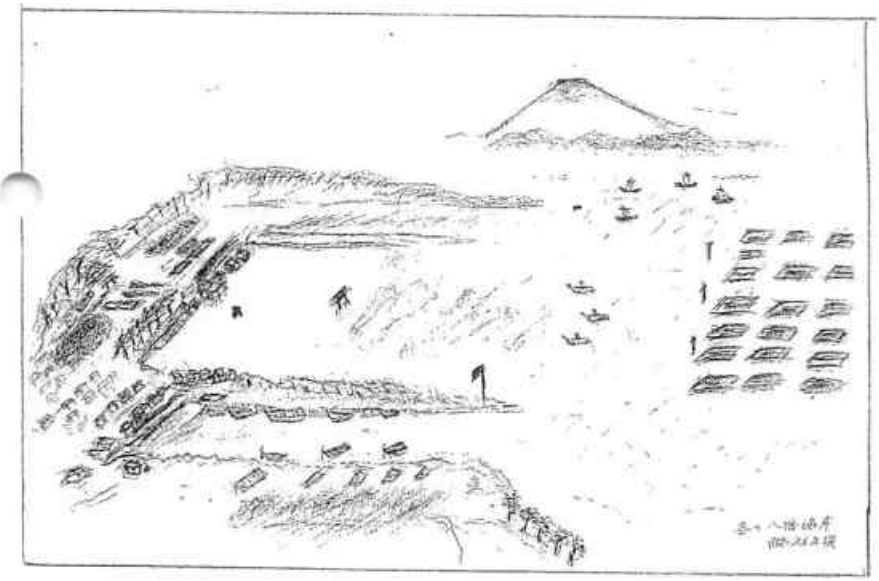
「八幡史学館」郷土史ニュース

1）市原の古文書研究会が「市原の古文書研究」第７集発行



６月１日第１刷発行、Ｂ５判３０４ページ
五大力船史料特集
八幡・市川本店（千葉県船改め所八幡宿戸長文書群）
菊間・若宮「八幡神社」旧蔵文書（江戸時代の神官家文書）
八幡・飯香岡八幡宮文書（由緒本記、姉崎・榊原義久家文書）
勝間・佐野彪家文書（日米和親条約阿部伊予守書付写しほか）

2）大厩の清水友吉さんが画いた昭和 25 年ころの八幡～「冬の八幡海岸」



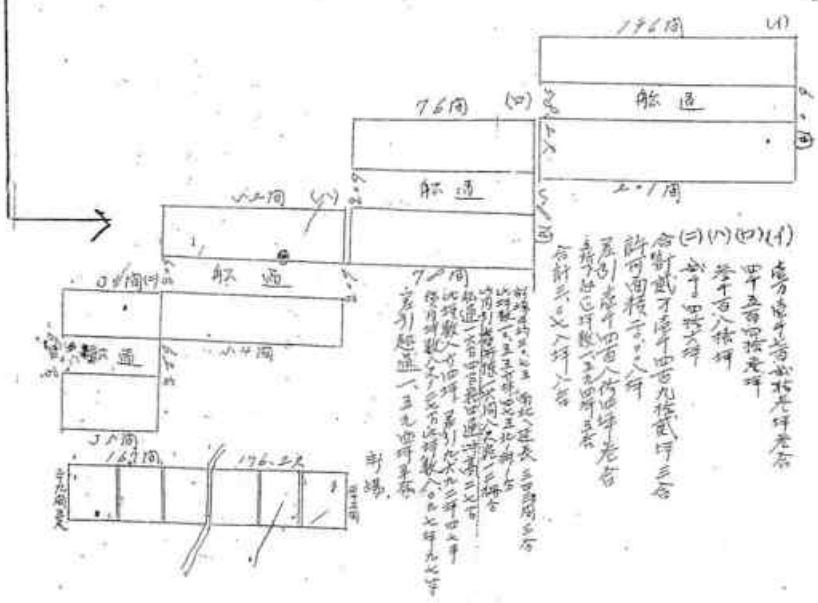
遠く大海原に富士の裾野が広がり、夏「潮干狩り」と「海水浴」で賑わった八幡海岸は、冬「海苔の養殖場」と変わり、「海苔干し場」は八幡の「風物詩」でした。
そこは八幡の人たちの「職場」で「生活の場」でもありました。
作品には 65 年前の八幡海岸の様子が分かりやすく丁寧に描かれています。町の人ならでは、思い出の「原風景」です。

3）昭和６年ころの「海苔養殖場」（略図）

市川本店文書ＸＸ１－３「八幡五所漁業協同組合史料」から

4）明治の商家屋敷図

明治２５年八幡・浅野清蔵宅測量家相図
当時薪炭業（母屋と蔵は現存）



「鳥羽伏見の戦い」徳川慶喜敗走す

慶応2年（1866）、3年のできごと

2年1月　薩長同盟成立
　6月　長州再征、幕府軍各地で敗走
　7月　将軍家茂陣中の大坂城で逝去
　12月　慶喜15代将軍就任、孝明天皇崩御
3年1月　明治天皇即位
　10月　慶喜大政を奉還
　12月　慶喜大坂城に入る、江戸城2の丸焼失、薩摩藩の挑発行為つづく、薩摩藩邸焼き打ち
　　王政復古の大号令、小御所会議

慶応4年（1868）のできごと

1月2日　慶喜京都へ向け進軍を開始
1月3日　鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争始まる
1月6日　慶喜軍敗れ、慶喜大坂城を脱出
1月9日　大坂城、引き渡しの混乱の中出火焼失、原因は不明
1月12日　慶喜、江戸城に入る
1月21日　慶喜尾張藩ほかに赦免を依頼し、隠退を表明
1月23日　旧幕府職制を徳川家に改編、勝海舟、大久保一翁らを登用
2月12日　慶喜寛永寺に謹慎
2月23日　慶喜護衛のための彰義隊結成
2月　　慶喜謝罪書を提出
4月11日　江戸開城、慶喜寛永寺から水戸へ向かう

1）「徳川家康の再来か」最後の徳川将軍・慶喜～幕府の栄光復活にかけた男

①徳川⑮代将軍・慶喜は、天保8年水戸藩主・徳川斉昭の7男として誕生、徳川三卿の一ツ橋家を養子相続、幼少から秀才の聞こえが高く、周囲の期待を担って成長した。病弱であった⑬代・家定の継嗣問題では、本命候補であったが、大老・井伊直弼が強引に紀州藩の慶福（家茂）を⑭代に据え、慶喜は一転、隠居、謹慎の処分も受けた。しかし直弼が桜田門で暗殺されると復帰し、家茂が病弱で若死にしたことで最後の将軍に。慶応2年12月、30才の冬のことであった。

②当時政治の表舞台は京、大坂にあった。慶喜の「将軍宣下」も、「大政奉還」も京都で行われた。慶喜は将軍就任とともに幕制の大幅改革、公武合体策や諸外国、とくにフランスと接近するなど意欲的に取り組んだ。「家康の再来」か、まさに徳川将軍家が再び天下の実権を握った感さえあった。しかしこのことが薩長ら武力討幕派の危機感を煽らせることにもなった。

③慶喜が将軍に就任した慶応2年12月、後ろ盾でもあった孝明天皇が急死。毒殺説や刺殺説など死因は解明されていない。時は慶喜を見放し、討幕派に味方したのか。慶応3年1月外祖父で「尊皇攘夷」強硬派公卿・中山忠能の影響を受けた16才の明治天皇が即位された。

④「大政奉還」は「委任されていた政権を朝廷に返す」こと。慶喜の独裁政治と薩長による武力討幕計画の折衷案として土佐藩が提案、慶喜には政権から離れるつもりはない。大統領的立場での主導を考えたともされるが、王政復古でその構想は夢と消える。慶応3年10月15日朝廷は上奏を受理、260年間におよんだ徳川幕府があっさりと終わりを告げた。

＊「王政復古」は神武天皇のころのように、天皇自らが政治を行う「親政」に戻すことをいう

⑤新体制の基本方針を決める「小御所会議」は慶応3年12月9日明治天皇が臨席して行われた。山内豊重、松平慶永、徳川慶勝らは「慶喜を新政権に迎えるべきだ」と主張し、岩倉具視をリーダーとする薩摩派は徳川家の「官位辞退、領地上納」と「武力討伐」を主張して激しく対立した。岩倉は山内の失言を追及して薩摩案をごり通すが、慶喜派の復権工作も活発で予断を許さぬ展開になった。

山崎合戦官軍大勝利之図(部分)　神戸市立博物館蔵
1868年(慶応4)1月3日から6日に戦闘が行なわれた鳥羽・伏見の戦いを描く。

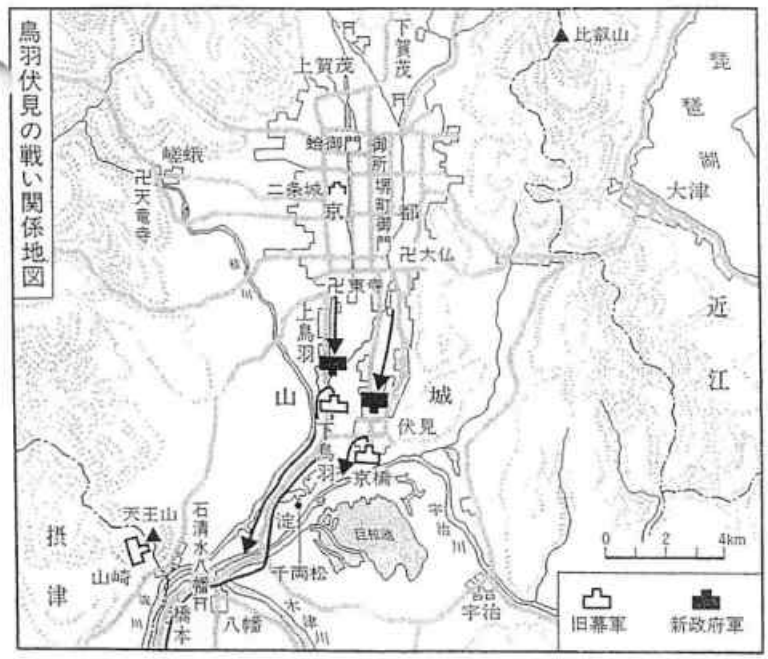
将軍時代の徳川慶喜　茨城県立歴史館蔵
前年12月に将軍に就任した慶喜が、1867年(慶応3)3月28日に大坂城で英・仏・蘭各国公使を謁見した翌日、英国のサットン大佐が撮影した写真。当時31歳。

鳥羽・伏見の戦い

徳川慶喜は、徳川家主導による政治体制を考えていたが、王政復古によりその構想は夢と消える。一方、薩長を中心とする朝廷側は、旧幕府の息の根を止めるべく挑発行為を繰り返していた。

そんな中、薩長の挑発に耐え切れなかった者たちによる江戸薩摩藩邸焼き討ちの知らせが、大坂城の慶喜のもとに届く。ここに来て、彼は京都進撃を決意。指揮下にある旧幕府・会津藩・桑名藩を中心とする約1万5000の兵力に出陣を命じた。迎え打つ薩長土芸の4藩を中心とする朝廷軍は約5000。その両者が、鳥羽・伏見の地で激突する。数の上では旧幕軍が圧倒的優勢であった。しかし、朝廷軍の装備が最新のものだったことにくわえ、旧幕軍の作戦ミスが重なったこともあり、戦いは朝廷軍の大勝利で幕を閉じた。

この戦いで勝利した薩長らは、朝敵として慶喜追討を発令、東へと軍を向ける。箱館五稜郭まで続く戊辰戦争の幕開けとなった戦いである。



第3図　鳥羽両軍配置図

第2図　伏見両軍配置図

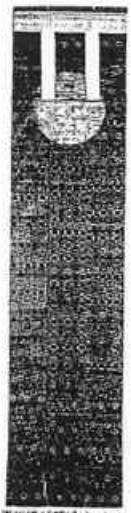
monoストーリー

女物の帯地でできていた！新政府軍ご自慢の錦旗

新政府軍が掲げた錦旗は、建武中興時代に楠木正成らが後醍醐天皇から賜ったと、いう伝説がある。すなわち錦旗を掲げた軍は天皇軍＝官軍となるわけだ。しかし、残念ながら幕末当時にはすでに、旗は現存していなかった。

しかしこの伝説に目をつけたのが、謀略において第一級の岩倉具視。具視は腹心の国学者、玉松操とともに、この旗を創作し、鳥羽・伏見の戦いで使うことを計画する。そして大久保利通が西陣織の帯地を使用して作らせたという。ちなみに、この帯地を買いに行くにあたり、大久保は受入から「ほかにもオンナがいるんでしょ」とあらぬ疑いをかけられたらしい。

岩倉の期待通り、旗が新政府軍に翻ったときから、中立の立場をとっていた諸藩大名たちはいっせいに新政府軍に加担したという。これだけの効果があれば、西陣織の帯地のモトは取れただろう。



玉松操がデザインしたといわれるこの旗は、西陣織の帯地に、天皇家の正式紋章である16弁の菊があしらわれたものだった。(東京国立博物館蔵)

2）慶喜「錦の御旗」に「敵前逃亡」～多勢の幕府軍、鳥羽・伏見に大敗

①薩摩は何としても戦争に持ち込みたい。大義名分作りのための挑発行為を始めた。江戸市中のならずものや浪士を藩邸に集め、日夜江戸市中で乱暴、狼藉を繰り返した。こんな中で江戸城２の丸が不審火で焼失、堪忍袋の緒を切った幕府手兵が「江戸薩摩屋敷」を襲撃した。大坂に知らせが届くと城内の興奮は極限に達し、慶喜にももはやこれ以上抑えることが出来なくなっていた。

②「玉（ぎょく＝天皇）はすでに薩長の手中にあり。王政復古のいま、薩長の不正を正さん」
慶応４年１月２日、慶喜は指揮下にあった旧幕府、会津藩、桑名藩を中心とする１万 5000 の兵力に出撃を命じた。

＊徳川軍配備（本陣＝淀城）総督＝大河内正質（老中格、大多喜藩主）、副総督＝塚原昌義（若年寄並）
伏見道＝城和泉守（歩兵奉行並）。窪田備前守（歩兵頭）、会津、新撰組、見廻組
鳥羽道＝竹中丹後守（若年寄格、陸軍奉行）。秋山下総守（歩兵頭）、桑名、浜田、高松、大垣、伊予松山

③しかし徳川軍は、この重大決戦に陣立てや作戦ミス、連携の乱れなどが続出した。全軍を淀から鳥羽、伏見へと進めたものの、鳥羽隊はいきなり砲撃されて大混乱に陥り、伏見隊は伏見奉行所も放棄した。最前線の会津、桑名、新撰組、見廻組は刀槍歩兵隊で、最新兵器に追いまくられた。本来主力となるべく幕府正規軍の伝習隊や奥詰め銃隊、撤兵隊は後陣か大坂城に留め置かれて力を発揮できなかった。

④一方、薩長軍は 5000、慶喜を平和裡に京都に入れてはもはや討幕は不可能になる。
主力の薩摩軍は小銃 20 隊と３砲隊、小銃隊は前挿式のミニエー銃をもった軽輩の武士で、「半首（はつぶり）」という円錐形の笠をかぶり全身黒ずくめの軍装であった。

⑤両軍は鳥羽と伏見で激突した。幕府軍は敵の３倍もの兵力を擁したが、最前線の装備は圧倒的に劣り、「錦の御旗」が現れると敗勢は確定的となった。淀藩、津藩、彦根藩などが次々と寝返り、総大将の慶喜はまだ戦っている兵士を前線に残したまま大坂城を退去して江戸へ逃げ帰った。

＊錦の御旗＝建武の中興の時、楠木正成が後醍醐天皇から賜ったという故事に由来、錦旗に逆らうことは朝敵を意味した。この錦旗は模擬で薩摩の大久保が作成した

⑤敗れた慶喜に追討の命が下った。２月３日天皇親征の詔が発せられ、大総督が設置された。東征大総督には有栖川宮が任命された。

⑥江戸城での慶喜は主戦派の松平容保や小栗忠順らを罷免、勝義邦（海舟）を抜擢して後事を託し、自ら上野・寛永寺に引きこもり、ひたすら天皇への恭順を貫いた。江戸開城後の慶喜は水戸弘道館に謹慎、のち駿府に移り、晩年は東京に住んだ。明治 11 年公爵、40 年勲一等旭日大綬章、大正２年没、77 才。墓所は谷中霊園にある。

⑦戦えば勝てたかも知れない。徳川政権と江戸城をあっさり放棄した慶喜の評価は分かれる。「歴史にもしたらはない」という、史実は一本勝負で変えることはできないからだ。しかしだれもが慶喜の行動にもしたらの「禁じ手」を思いはせる。慶喜の真意は計り知れないが、一方で日本を内戦、外国の脅威から救った功労者であることは間違いない。その「先見」は次の世代、明治維新によって開花していった。

3）徳川慶勝、譜代諸藩に新政府恭順をまとめる～新政府軍、東海道をすんなり通過

①徳川慶勝＝御三家尾張徳川家⑭、⑰代藩主。文政７年、支藩高須松平義建次男として誕生。弟に尾張⑮代茂徳、会津藩主（京都守護職）松平容保、桑名藩主（京都所司代）松平定敬がいる。水戸斉昭、松平慶永と親しく、日米通商条約調印では開国に反対、将軍家定の継嗣問題では一ツ橋慶喜を推挙して井伊直弼と対立、安政５年隠退を命ぜられたが文久２年赦免、元治元年の第１次征長は総督で、王政復古時は議定職を勤めた。徳川一門として朝幕の間で苦しむが勤皇の大義についた。明治 16 年没。

②慶勝は名古屋藩の佐幕派を一掃して藩論を恭順に統一、東征軍の江戸進軍は譜代諸藩に勤皇の趣旨に沿った恭順書を提出させた。名古屋城から江戸城へ、新政府軍の一員として進軍、岡崎城（本多忠民）吉田城（松平信古）浜松城（井上正直）掛川城（太田資美）と続く東海諸藩の協力体制は慶勝の根回しによるところが大きかった。

4）主役は西郷隆盛、勝海舟と２人の未亡人～江戸城、無血開城へ

慶応４年（１８６８）のできごと

1月４日　嘉彰親王、征夷大将軍就任、各方面鎮撫総督を任命、進軍を開始
1月７日　新政府、慶喜追討を発令
2月３日　天皇親征の詔を発令、大提督を設置する、諸藩に出兵を命ず
2月９日　有栖川宮熾仁親王を東征大総督、３道の新政府軍を指揮、５万の大軍で東征開始
2月12日　慶喜、寛永寺に閉居
3月14日　西郷隆盛と勝海舟の間で江戸開城交渉成立、５か条の誓文を発表
4月11日　江戸城開城、慶喜水戸に去る

①江戸を目指した東征軍５万、３つの進軍コース
東征大総督府＝有栖川宮、西郷隆盛、林玖十郎、正親町公薫
東海道鎮撫軍＝先鋒総督橋本実梁、柳原前光、木梨精一郎、海江田信義
東山道鎮撫軍＝先鋒総督岩倉具定、岩倉具綱、板垣退助、伊地知正治
北陸道鎮撫軍＝先鋒総督高倉永祜、四條隆平、黒田清隆、品川弥二郎

②宮さん宮さんお馬の前に、ひらひらするのはなんじゃいな　トコトンヤレナ
リズミカルな進軍マーチに乗って、慶喜追討、新政府軍の進撃は驚くべき速さで進んでいった。

③有栖川宮は３月５日駿府城に入り江戸城総攻撃を３月 15 日と決定、東海道鎮撫隊は途中一戦もまじえることなく３月 12 日に品川に到着、東山道鎮撫隊は勝沼で新撰組の後身・甲陽鎮撫隊と交戦したが３月 13 日には江戸へ入った。

④江戸城総攻撃を目の前に控えた危機的状況を救ったのが勝海舟と２人の将軍家未亡人だった。勝は親書を山岡鉄舟に託して駿府に走らせ、３月 13、14 日芝での「西郷・勝会談」を実現して、江戸無血開城の道をひらいた。

⑥⑬代正室篤姫は出身家薩摩藩の西郷に、「公武合体」のため⑭代家茂に降嫁した和宮もまた徳川家の存続と江戸の戦争回避、朝廷への嘆願に尽力した。和宮が明治 10 年箱根で息を引き取る時「私を決して皇室の方に葬らず、徳川の墓に埋めてほしい」と言い残したという。いまも芝・増上寺の徳川家墓所の家茂の墓の側にひっそりと眠っている。

⑭ 家茂 正室
皇女和宮の静寛院宮

⑬ 家定 正室
篤姫の天璋院

新政府軍江戸城入城

→ 瓦版「トコトンヤレぶし」

旧幕脱走正規軍の最後～市川船橋戦争と八幡五井戦争

慶応４年（１８６８）のできごと

４月１１日　江戸城無血開城、歩兵奉行・大鳥圭介、撤兵頭・福田八郎右衛門ら房総方面へ脱走
　　海軍副総裁・榎本武揚、全艦隊を率いて館山に走る
４月　　福田隊は真里谷・真如寺を本拠に「義軍府」を名乗り、船橋、市川方面に布陣
　　請西藩主・林忠崇脱藩、伊豆、箱根、東北で新政府軍と戦い降伏
閏４月３日　義軍、市川船橋戦争で敗れる。７日八幡、五井、姉崎地区の戦いで壊滅

１）江戸開城に不満の兵士が房総に集結～「徳川義軍府」の成立

①慶応４年４月 11 日江戸が開城されると、これに不満の旧幕軍兵士の一部が脱走して房総方面に集結した。海軍奉行榎本武揚は全艦隊を率いて安房の館山に走り、歩兵奉行大鳥圭介は市川に脱走、のち日光、宇都宮、会津をへて五稜郭と転戦した。

②脱走集団の一つに福田八郎右衛門が率いた「撤兵隊」があった。文久２年幕府洋式陸軍歩兵隊として誕生、江戸開城の４月 11 日に霊岸島から海路、千葉の寒川に上陸し、八幡宿、五井、姉ヶ崎をへて木更津に進み、長須賀村の泉著寺に本陣を設置した。

＊福田八郎右衛門＝鉄砲頭、甲府町奉行を勤めた旗本福田下総守の嫡男、鳥羽の指揮官小笠原大和守の後任として撤兵頭、真里谷退去後会津で戦い？「木更津市史」は墓所を文京区浄信寺とする

③嶋野村『名主日記』によれば「(11 日）私が五井の問屋に出向いた。宿泊している人々はどうしたことかと聞いたところ、彼らは幕府の軽兵大隊、重兵大隊、兵糧護衛隊で五井村に 350 人泊まっており、船橋から五井村までの宿駅にも泊まっているとのことであった」と記している。撤兵隊は 14 日までに八幡、五井を通過して木更津の泉著寺に集結した。各隊は寺院、旅館、名主、商家へ分宿、江戸湾の制海権は榎本隊が握り、木更津周辺は幕府脱走兵で溢れた。

＊市川本店文書Ａ14「御組旅宿」（別掲）は閏４月 11 日と考えられる。八幡村名主名の書付で一分隊から八分隊まで合計 74 名が分宿している

⑤撤兵隊は真里谷の真如寺に本拠を移して「徳川義軍府」を称した。義軍は房総各藩に呼びかけ米、金、武器、人員を差し出させ、周辺の村々からも軍用金、兵糧米を徴発した。

⑥義軍は５大隊に編成、撤兵頭江原鋳三郎率いる第１大隊を中山法華経寺に、第２大隊を船橋大神宮、第３大隊を姉ヶ崎に進駐させた。３隊は 17、18 才から 30 才、真里谷の第４、第５大隊は 30 才以上で編成した。大隊は４こ中隊、中隊は４小隊、小隊は 40 名、実数は 1000 人程度であった。

＊江原大隊は亀里鉄五郎、渡辺儀左衛門、中村小源次ほかを中隊長に 300 人、ミニエー銃を携行していた

＊江原は小普請組長男に誕生、講武所砲術教授、撤兵隊指図役頭取などをへて撤兵隊頭、市川戦争後離脱して江戸に戻り、明治４年海外視察、28 年麻布中学校を創立して終生校長を務めた

ミニエー銃（左）
とゲベール銃

義軍本陣の真如寺

八幡宿の義軍旅宿割

2）船橋大神宮宮坂で激突～市川・船橋戦争で義軍敗走

①新政府軍は義軍戦線へ薩摩（島津）、長州（毛利）、備前（池田）、津（藤堂）、大村（大村）、佐土原（島津）の諸藩を出動させた。義軍はいったん「武装解除」交渉の席に着いたが強硬派の突き上げで降伏を拒否、閏４月３日早暁下総八幡の官軍岡山陣所を急襲して戦端を開いた。

②荏原隊は当初圧倒的勢いで新政府軍を追撃、午前 10 時ころ市川宿を占領した。しかし援軍がかけつけると戦況は一転、船橋方面へと退却した。11 時ころ佐土原軍が船橋に攻め込み、大神宮前の宮坂で市街戦となった。佐土原軍は宿中央に臼砲をすえて大神宮に直撃弾を浴びせると炎上、義軍は総崩れになった。この日の戦いで船橋 814 軒、市川 127 軒を焼失した。

③敗走する義軍を追って薩摩藩の一隊は４日検見川に到着、６日には薩摩と佐土原隊が千葉町に直進し、長州と岡山藩は蘇我へと進んだ。

④千葉町では大きな戦闘はなかったが千葉神社に薩摩、佐土原藩兵などが宿営し、周辺住民は荷駄継ぎ立てや炊き出しに駆り出された。

3）養老川出津渡し場で多くの犠牲者～八幡五井戦争のなが―い１日

①戦いは市原へと移る。姉ケ崎の姉崎神社（妙経寺ともいう）を本陣とした第３大隊は、市川船橋戦争の敗残兵を収容しながら養老川を防御ラインに迎撃体制を布く。また五井宿に前線基地を築いた。五井隊ははじめ村田川を防戦基地に考えたが川幅がせまく戦いにならないということで五井に拠点を移したという。五井宿入口の波渕に土塁を築き、逆茂木を植えた。

②開戦前日の６日に前哨戦があった。新政府軍の斥候２人が八幡宿で捉えられ首をはねられ、五井を焼き払おうと潜伏した密偵５人も捕縛された。

＊東京都杉並区大円寺「戊辰薩摩藩戦死者墓」は「明治元戊申四月六日総集八幡にて死す。隊号不明、菊池竹庵四十歳、助市二十五歳」とし、千葉市史は寒川に進駐した大村藩兵とする
市原市史資料集＝「骸は八幡村日蓮宗円頓寺へ改葬し、厚く弔いけるとなり」。墓はない

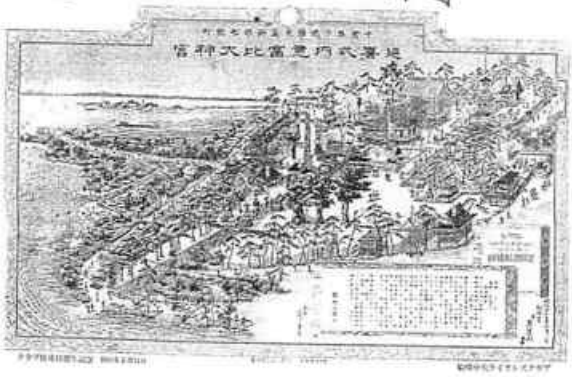
③五井隊は北五井名主の中島甚五左衛門家（現在＝梨木公園、五井支所）を本陣に民家に分宿した。

＊義軍官軍むかしむかし（要旨）＝五井村は南北に長く家々が続いて、その先がカギの手で喰い違い（枡形）になっていた。甚五左衛門家は黒門、白壁の土塀で囲まれていた。義軍の本陣となり、主将や首領株がここに止宿した。門には部隊名を記した名札が書き連ね、その人数は 150 人をこえた。この日五井の若い主将は黒馬に跨り金の采配を朝日に輝かせ、多くの村人に見送られて北に向かって出発した。五所村に近づくと散兵陣を敷いた官軍が真向いに引き寄せておいて一斉射撃、ごう音が高鳴り響いた。馬上の主将は体をかすめた鉄砲玉に肝を潰し、先頭切って逃げ帰った。村人たちの物笑いとなり、これがきっかけで義軍は浮足立ち、南へ南へと敗走する主因となったと村の人は語り伝えた。

第1大隊の中山法華寺

第2大隊の船橋大神宮

基点となった船橋宿



← 明治の船橋大神宮

市川船橋戦争

④戦いは閏４月７日早暁から始まった。村田川を越えて八幡宿に入った新政府軍は南新田で義軍一隊と交戦、敗走する義軍に砲弾を撃ち込んだが五井支所裏の蓮田に落ちた。新政府軍は五所で３方向に分かれた。本隊の薩摩藩と長州藩の半隊と大村藩の半隊は五井を直進、備前藩と大村半隊は海岸線を、津藩は君塚、岩野見、村上、宮原を進んで養老川へと進撃した。

⑤脱走隊とはいえ旧幕府主力軍・撤兵隊の流れ。前装式ライフルのミニエー銃も携行していた。装備も力も大差ないが、勢いが違った。義軍は始めから劣勢で、みるみる養老川に追いつめられた。出津の渡し場あたりの一隊が頑強に抵抗したが、海岸を進んだ備前、大村隊に背後から攻撃をしかけられて全滅した。山側を進んだ津藩は義軍の中核地・村上観音寺に向かったがすでに退去した後だった。津藩は観音寺に火を放って焼失させた。義軍は多くの犠牲者を出しながら真里谷めざして敗走していった。

＊島野村名主日記＝閏４月７日。五所五井の境にて戦争始まり、五井村入り口にて戦う。出津川端にて戦い、官軍方五井川岸、吹上、中瀬渡る。村上観音寺焼失、海保、畑木の内永津、今津、青柳、松ヶ島、出津戦場に相成り、義軍方討ち死に出津にて 19 人、松ヶ島にて 12 人、青柳４人、今津４人、畑木半四郎屋敷あたりに６人、姉崎、椎津にて 15、６人、村上にて２人、この最寄りにて死人 60 人、砲戦にて騒がしく、このあたり男女老若所どころ散乱、午後より官軍方御通行につき川端へ出張

＊一方新政府軍の市原郡内での死者は５名程度であった

⑥この戦いは１日ですべてが終了した。本陣の真如寺には敗報と久留里藩が新政府軍についたという流言が伝わった。第４大隊と第５大隊は本陣を払って利根川方面に撤退、閏４月 16 日茨城の鹿島神宮で新政府軍に降伏した。元撤兵頭並以下 543 名、小銃 400 丁、弾薬は 3000 発であった。隊から離れた兵士の一部は武器を捨て農夫に変装して逃走したものもあった。

⑦翌８日岡山、津藩が真如寺に入った。再び義軍が集結しないよう伽藍を焼いた。新政府軍は木更津方面に逃れた敗残兵を追討する一方、久留里、大多喜、佐貫、鶴牧など態度をあいまいにしていた房総諸藩を一気に帰順させた。

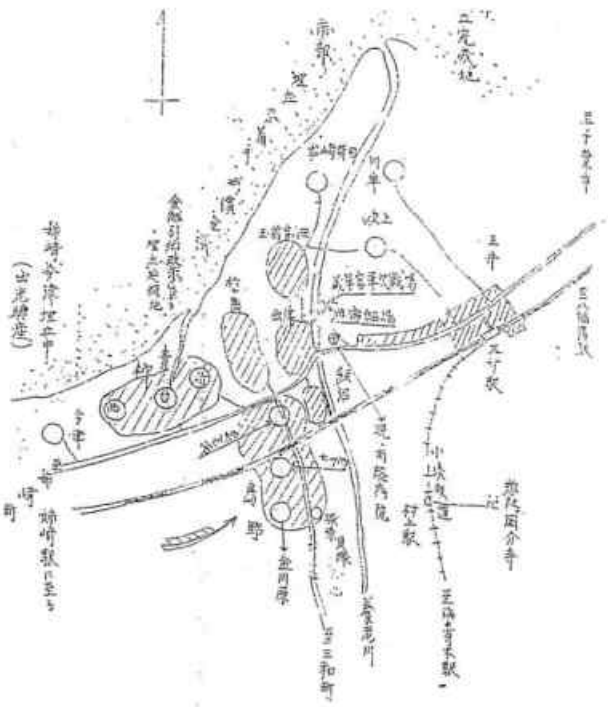
⑧義軍騒動はおよそ１か月間だったが、地元領民たちの負担は大きかった。義軍と新政府軍双方から御用金や兵糧米を調達され、宿舎や継ぎ立て人馬の提供、炊き出しなどが強要された。村人たちの多くは、当日戦火を避けるため近くの山や竹藪、畑の中に潜んだり、親戚を頼って疎開した。家を焼かれ、流れ玉に当った死者も出た。その後も義軍残党や食い詰め浪人らが徘徊し、強盗や村方騒動が多発した。しばらくの間治安が安定することがなかった。

＊島野村名主日記＝閏４月 27 日。この夜４つころ強盗６、７人押し込み、今富出生下男文蔵と申す者、殺害され即死、同苗深手負い隣家へ通達

＊八幡・寺嶋家文書＝４月 21 日当村へ乱暴人ども 40 人、宿にて表向きは村役人どもへ強談これあり金子掠め取られ、夜は６、７人抜き身を携え、ことの外村方一統恐怖まかりあり候

→ 養老川の激戦地跡

改修前の写真



4）戦火は東北に広がり、五稜郭で終る

①義軍の敗北は上野の彰義隊にも打撃を与えた。孤立無援となり５月 15 日の総攻撃で壊滅した。

②戊辰戦争の戦火は以後東北に広がった。新政府軍は奥羽列藩同盟軍を次々と突破、籠城１か月に及んだ松平容保の会津城も６月に落城し、明治２年５月榎本武揚の五稜郭も新政府軍の軍門に下った。多くの犠牲を払いながら１年半にわたった戊辰戦争が終わった。

房総新藩の成立～徳川家の静岡転封で玉突き～

1）旧幕徳川家が「総房三州鎮撫方」を設置～房総３国の治安維持をめざす

①朝敵とされた慶喜が上野寛永寺謹慎中の慶応４年３月、1 大名となった徳川家は旗本 3000 石の阿部邦之助と信田歌之助を「房総鎮静御用」に命じた。「将軍恭順の折りから一揆、強盗、蜂起など村々騒ぎ立てないよう」との触れ書がある。夷隅郡若山村と銚子にそれぞれ役所をおいた。

②阿部邦之助＝白河 10 万石阿部家の分家、旗本 3 千石阿部正蔵３男だが、長男正定、２男正外が白河藩主の養嗣子となったことでくりあがった。慶応４年勝海舟の指示で陸軍重立取り扱いとして和平処理に尽す。また総房三州鎮撫方の時、砲兵隊 70 名を率いた天野釣之丞を降伏させた。明治元年５月徳川家達の駿河移封が決まると近代的陸軍士官養成のための兵学校創設を建白して沼津兵学校を実現し、翌２年１月沼津奉行、８月静岡藩少参事兼軍事掛などを勤めた。

2）久留米藩の柴山文平が旧幕領、旗本領を接収～八幡に生まれた新政府知事役所～

①江戸開城、義軍騒動の余波も冷めやらぬ慶応４年７月２日、新政府の「上総房州監察兼知県事」として柴山文平（典）が任命され八幡宿に役所を置いた。柴山は真木保臣とともに久留米有馬藩の勤皇攘夷志士の中心にたつ。明治維新の戦いが始まると新政府軍の軍監となり、東北戦線から戻されて上総、安房の天領、旗本領の接収にあたり、そのまま宮谷（みやさく）県の初代知事となった。利根川の治水工事などにあたったが、部下の内紛で一時官職剥奪などの処分を受けた。

②「市原市史」は、仮役所を八幡宮司市原信明邸とする。一方八幡・寺嶋千鶴子家文書は慶応４辰年７月 15 日夕刻八幡宿着任、８月朔日大多喜へ引き移り、知県事芝山文平様御出張に当村東屋御宿、仮御役所寄せ場と詳しい在任期間を記している。

＊「名主日記」＝知県事役所より御呼出しにつき訴答、一同東屋本陣へまかり出候

中野・中村家文書＝八幡村、知県事御宿陣中諸入用

③上総房州知県事役所は大多喜をへて長南宿浄徳寺に移し、明治２年２月芝山文平の支配地を宮谷県と改称、庁舎を宮谷村本国寺に置いた。支配地は上総、安房、下総、常陸の内 37 万余であった。

房総新藩配置図

菊川藩庁舎跡

鶴舞城碑（上）と本丸濠

3）徳川宗家16代はわずか6才の亀之助が相続～静岡藩70万石の成立～

①慶応4年5月24日新政府はわずか6才の御三卿田安亀之助（家達）に宗家相続を命じ、駿河府中（静岡）70万石に封じた。

②家達は文久3年田安慶頼3男として誕生、慶応元年兄逝去の後を受けて田安家を相続、慶喜謹慎後の宗家を継いだが、明治4年廃藩置県、のち貴族院議員議長、公爵。昭和15年77才で没した。上野寛永寺の徳川家墓所に眠っている。

③静岡徳川藩の新領地となった駿河国の沼津水野家、小島松平家、田中本多家の3藩には慶応4年7月「今般、徳川亀之助駿府城主に仰せ付けられ候あいだ、かねて用意これある旨御沙汰候こと」との予告があったが、転封先は決まらず、とりあえず城地を明け渡し、東京の藩邸や近くの社寺や民家に逗留した。沼津藩主水野忠敬に転封先市原郡の内ほかが正式決定したのは年号も明治と改まった9月21日のことであった。

④遠江の浜松井上藩、横須賀西尾藩、相良田沼藩、掛川太田藩の4藩は9月4日に申渡し、翌2年1月から6月新政府に引き渡された。

4）菊間藩（菊間城、菊間陣屋、菊間藩庁舎）水野忠敬5万石

①慶応4年5月徳川宗家の静岡藩成立にともない、沼津城主・水野忠敬が5万石のうち2万3千石を市原郡の内に移されて成立した。藩領は市原郡のほか、三河、伊豆、越後国のうち。表高は5万石だが実高は5万4450石あった。

②水野家は徳川家康の生母お大の方（伝通院）の生家で、一族の多くが大名、旗本として分家した。宗家は備後福山5万石であったが途中に無嗣廃絶があった。その3代弟の家が沼津、菊間水野家で、忠友と忠成、忠誠の老中3人を出すなど将軍家外戚として重用された。

③忠敬は分家水野忠明嫡男に生まれ、慶応2年「長州再征」の陣中で急逝した忠誠の養嗣子となる。同4年の戊辰戦争は名古屋藩主徳川慶勝の勧告にしたがいいち早く新政府に恭順した。

④徳川宗家の駿府城入封が決まると、ひとまず残された領地の伊豆戸田村に退き、8月に引渡しを終了した。10月市原郡内で1万3590石の村替えがあり、12月築城経費として3年間、新政府から現米1000石と1万5000両が下賜された。

⑤翌2年1月忠敬が国入り、菊間千光院を仮居所として菊間台地一帯（菊間、大厩、山木3か村の内）で築城工事を開始した。

⑥工事は急ピッチで進み、字雲の境一帯に2階建て「医局」、時の鐘を取り付けた層塔や仮藩庁舎、藩校「明親館」、「御殿」と呼ばれた隠居下屋敷、知事邸などが相次いで建設されたが、本庁舎は土台を廻した時点で「廃藩置県」のため中止、資材は初代千葉県庁に転用された。

⑦沼津藩の家臣数は侍屋敷105軒、惣長屋56軒、惣世帯数385軒、うち男1181人、女1188人、江戸詰め男170人、女156人で総計1695人だった。移住にあたり家屋を解体し移築するものも少なくなかった。解体家屋はいったん江の浦港に集積し、ここよりダンベイ船で八幡宿浜本に陸揚げ、あるいは村田川を遡って新住居の菊間村、大厩村、山木村などに運んだ。

⑧徳永台を中心に「総構え城下」が出現したが一瞬の夢物語に終わる。明治4年忠敬に江戸居住を命じられると旧藩士たちは次々と離散していった。150年をへた今日、城跡は畑地と民家と変わり、土塁や大空堀、新坂、五の字道などがその痕跡をとどめている。現況は築城図面もなく遺構から当時の縄張りを想定することはできない。

5）鶴舞藩（鶴舞城、鶴舞陣屋、鶴舞藩庁舎）井上正直6万石

①慶応4年5月、浜松城の井上正直が市原郡ほかに移されたことで成立した。

②井上家は2代将軍・秀忠の老中・正就を藩祖する新参譜代大名で、歴代藩主が老中や若年寄、京都所司代などを勤めた。正直も老中が2回、外国御用取次、勝手入用掛など幕末激動期の幕府中枢で活躍、戊辰戦争は藩論を恭順にまとめて無難に乗り切った。

③９月上総への転封を命じられた正直は翌２年２月国入り、石川村桐木原に鶴舞城の建築に着手した。城は１年後の明治３年４月一応の完成を待って入城。しかしこれより早い２年６月版籍奉還が行われた。正直は鶴舞城主から藩知事となり、４年７月に廃藩置県を迎えた。

④城地は２面を切り立つガケ地に囲まれた天然の要害で、江古田側のからめ手尾根を掘り切り、本丸、２の丸、３の丸、外曲輪、城下からなる総構え「連郭式平山城」で、本丸に土塁、水濠、空堀を配し、藩主（知事）御殿、藩庁舎を構えた。

⑤経費は新政府から３年間、現米 1200 石と１万 8000 両を支給される計画であったが、明治２年５万 1000 両と永 122 貫文、３年は３万 4000 両と永 122 貫文、４年分を残し未完成のまま終った。

⑥鶴舞保育園と道路を挟んだ民家、畑地などが本丸跡で鶴舞小学校の本丸土塁に「鶴舞城本丸跡碑」「鶴舞藩庁高札」が立つ。本丸の水濠と周辺土塁は旧状をよく残している。

⑦山野に突如誕生した城下町は城地と藩士住宅、総構え城下、およそ 40 万坪、「藩制一覧」の士族 1188 人、卒族 2136 人、廃藩置県後、明治７年鶴舞村人口は 627 戸、3126 人、千葉県第８位だった。正直は教育の振興、勧農と産業の育成に注力したが実を結ぶことなく終息した。

⑧明治６年の「存廃令」で廃城、本丸の主要建物は鶴舞小学校として明治 43 年まで使用された。

６）柴山藩、松尾藩（松尾城、松尾陣屋、松尾藩庁舎、太田城）太田資美５万石

①明治元年９月、遠江掛川５万石の太田資美が転封で、仮庁舎を芝山村の観音教寺に移したことで芝山藩が成立したが、明治２年５月新しい城を開くことになり、９月着工、翌３年 11 月新庁舎が完成して松屋城と改称した。城名は掛川城の別称をあてた。

②太田家は太田道灌の子孫資宗が家光に取り立てられて大名に列した。浜松、田中、棚倉、館林と転封を重ね⑤代資俊の時掛川５万石となる。幕末の資始は３度にわたって老中を務め、維新の戦いは恭順して事なきをえた。

③縄張りは平山城「西洋式三稜郭」というべきか。「稜」はかどのこと。蝦夷地の五稜郭や信濃龍岡城（五稜郭）のようにかどを持つ城で、おおむね３角形になっている。急ガケ上から太平洋の外房海岸に向けて砲列を構える計画であったが、明治４年廃藩置県を迎えて廃城となった。

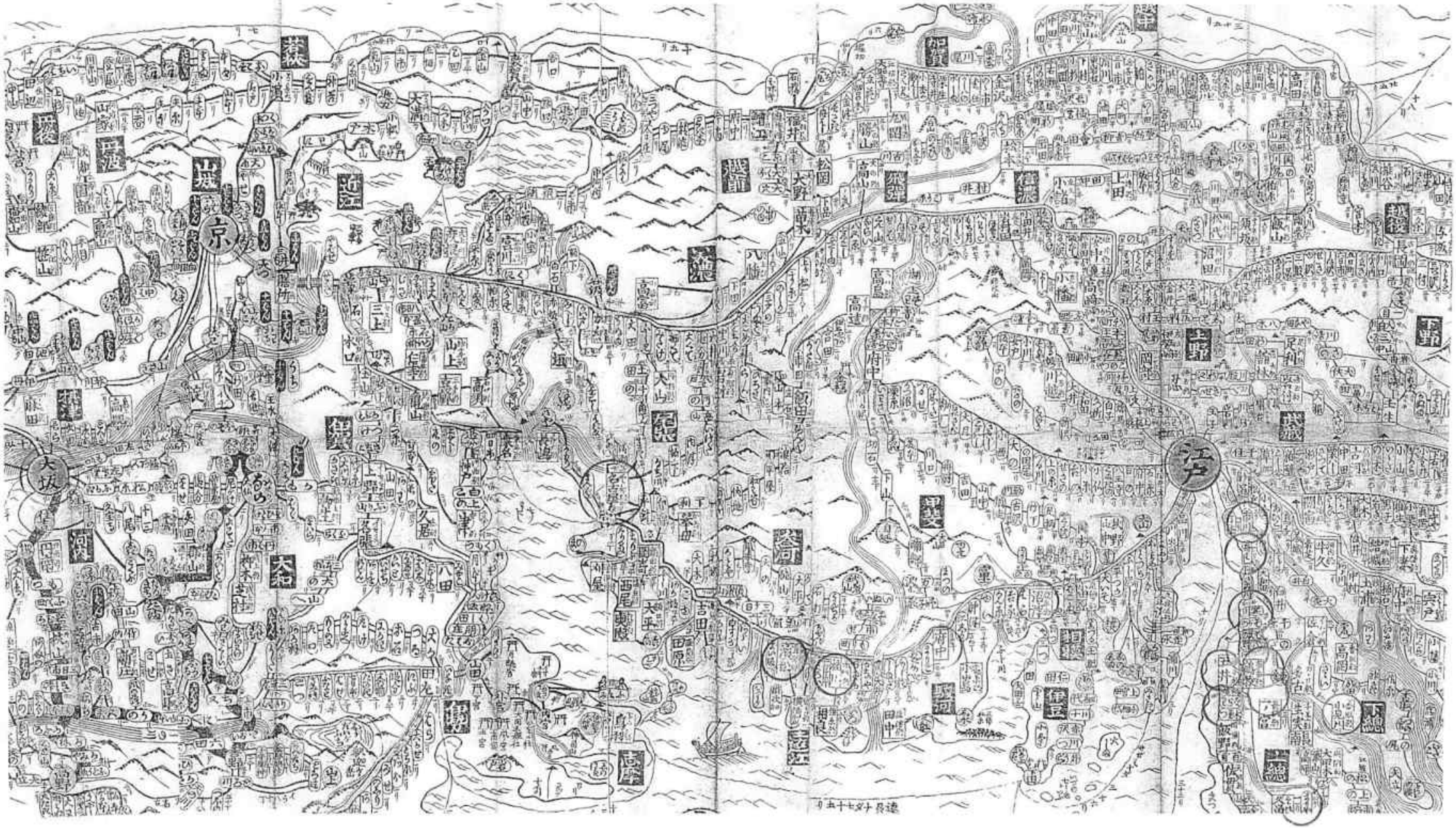
明治２年６月、明治新政府は諸藩主に働きかけて「版籍奉還」を、４年７月には「廃藩置県」を断行した。菊間、鶴舞、鶴牧の３藩が県となり、11 月「府県統合」が実施されて木更津県、６年６月木更津県は印旛県と合併して千葉県が誕生した。日本は廃藩置県をスタート台に封建的藩体制から脱却、本格的中央集権国家としてスタートを切ったのである。郷土史は日本の歴史の縮図でもある。市原を襲った「義軍戦争」や、一瞬の夢ものがたりに終わった「房総新藩」もまた、まぎれもない「動乱維新期の日本史」そのものであった。

以上

鶴舞藩庁跡
現保育園庭

松尾藩庁舎跡
現江田小校舎所

藩主邸跡
小学校



「大日本 早引細見絵図」に加筆 （天保13年）

37

研究発表 Ⅱ

1. 日　時　二月一八日（土）午後一時三〇分
2. 会　場　木更津市立図書館　二階　大会議室
3. 演題

木更津船の航路　上総澪（かずさみお）について

4. 講師　宮本 敬一氏（木更津市 大寺在住）
奈良国立文化財研究所・市原市文化財センター
など歴任　君津市文化財審議会 委員

5. 講演概要

(1) 幸田露伴の「上総澪」

「東京はその地勢河を帯にして海を枕せる都」と道破した幸田露伴の『水の東京』（岩波文庫『一国の首都』一九九三年所収、初出一九〇二年）は、隅田川（大川）をたて糸に、そこに注ぐ大小無数の堀川をよこ糸にして水の都東京（実は江戸の気分）を活写している。そこでは上流の荒川から海に至るまで談り尽くした最後に大川口から南にのびる二筋の澪について次のように紹介している。

「一は築地に沿ひて西南に流れ、一は越中島に沿ひて東南に流る。西南に流るゝは即ち本流にして本澪と呼ばる。本澪は水深くして大船海舶の来り泊するもの甚だ多し。〈中略〉大川の水のおのづからに土砂を流出するもの、極めて自然の状態をなして遠浅の海底を形づくるが中に、佃島の東の本澪の遠く南品川の沖に達すると、佃島西の上総澪の月島下流に至るとの二線がやゝ深き水路をなすあるのみ、岩礁の伏在するもなく、特別の潮路の去来するもなし。けだし東京前面の海の遠浅なるは、隅田川中川及び江戸川の流出する土砂の自然に堆積せるが為なれば、その砂洲の意外に広大にして、前に挙げたる二条の澪の外に大船巨艦を往来せしめがたきの観あるも怪しむに足らずと言ふべし。本澪は第五第二の砲台の間を南へ通ずるなるが、其深さ大抵二尋以上、上総澪はその深さにおいて及ばざること遠し。」と。これによって両者の位置を明治二十三年測量の「東京海湾」図に表

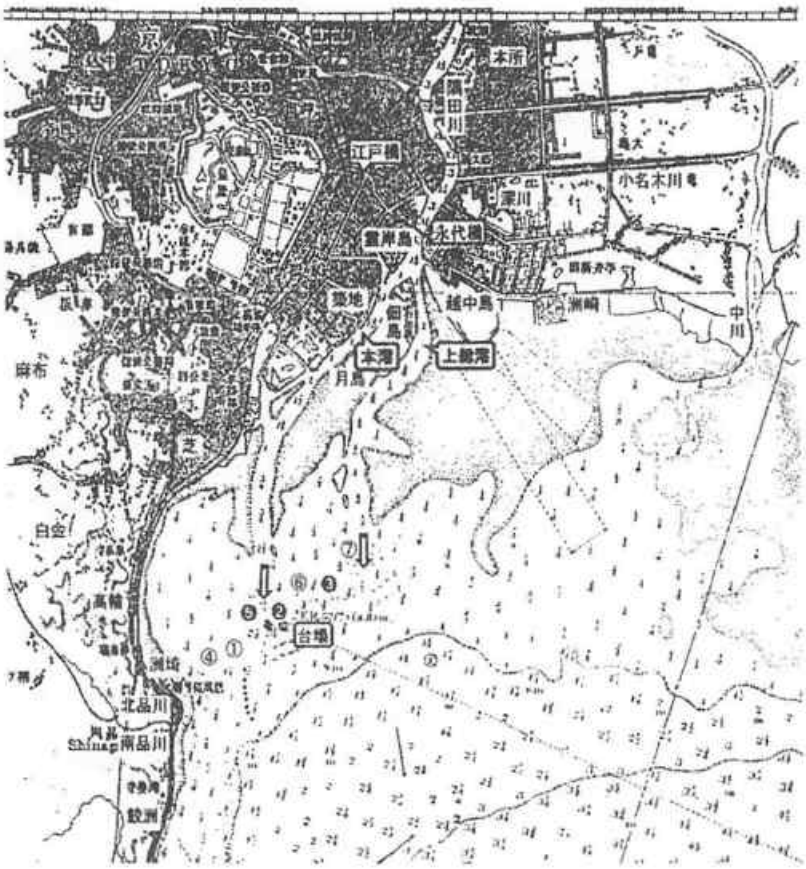


図１　明治23年（1890）の本澪と上総澪の位置

八幡史学館 平成29年第2回　　2017年7月11日(火)
於八幡公民館

江戸湊と八幡浦
―澪から考える

宮本敬一

こんなことをお話しします

Ⅰ 江戸湊と上総澪
- 江戸絵図に描かれた江戸湊
- 上総澪ってなに？
- 木更津河岸と木更津船

Ⅱ 西上総の浦々（湊）
- 船掛り場のない西上総の「港」
- 江戸初期に澪が整備された八幡浦

広重「芝うらの風景」（名所江戸百景）に描かれた木流筋の澪つくし（航路標識）

「慶応2年海面除絵図」（飯香岡八幡宮蔵）に描かれた八幡浦の澪筋

〔新規澪堀割〕拝借地証文差上帳（表紙）

八幡宮
御除地　見通四百八拾間
上巾口　拾弐間
地底尻　八　間
山岸南北　三拾間
同　東西　拾八間
此ノ度御運送澪地書面之通
相借用申処実正也　右為冥加
金壱両宛年々相納可申候
右向後ため証文差上申候　以上
村役人惣代
慶長十九庚寅年五月　善　六（印）
同　利兵衛（印）
同断　羽右衛門（印）
運送蔵地守　善左衛門（印）
八幡宮
御役所

（永井豊前守・永井式部少輔・浦井兵部少輔）
右三給地頭方御蔵造立ヲ所御蔵米重送新規澪堀割
地所当社表海面御除地之内別紙證文通貸地致為其
加金一両宛年々上納致有也其文左ヲ

慶長 19 年（1614）5 月〔新規澪堀割〕拝借地証文差上帳（飯香岡八幡宮蔵）
＼『上麻惣社飯香岡八幡宮由緒本記』（元禄 10 年）の左記文書に触れた部分

39

その後は上総澪通りに芥船が不法投棄をしないように昼夜番人をつけてきたというが、常に通行可能な状態が維持されていたかどうかわからない。本澪筋の話しではあるが、廻船人のなかには「惣体澪は付け替え申すものにて御座候。浚い候ても又元のごとくに埋まり申すべく候」という見方もあった（享保十八年五月「品川沖澪浚之儀申上候書付」）。塵埃投棄とは別に、元禄九年（一六九六）三月の町触で「永代島上総澪通」と呼ばれているように、隅田川東岸のウオーターフロント深川新地の南進につれ、上総澪筋も次第に南西方向、本澪寄りに移動したように見受けられる。

こうしたことから上総澪という名称の成立は江戸前期、十七世紀にさかのぼり、元禄年間には通行不能となり、澪浚いが課題になっていたことがわかる。したがって上総澪が江戸湊や内海の海運上重要な役割を担っていたのは、主に江戸前期のことではなかろうか。

江戸後期にいたっても永代橋を描いた絵画には、房総方面から佃島と深川の間を通って永代橋に向かってくる小形帆船の列が描き込まれるのが常であった。しかしながら、今のところ木更津船が上総澪を通行したことを明記した記録は寡聞にして知らない。たとえば寛政二年（一七九〇）六月、高山彦九郎が乗った木更津船は「永代橋・佃島を左にみて東海道大森沖に及んで夜明けたり」（北行日記）というので、本澪を通ったようだ。今後こうした道中記の類を丹念に博捜し、その時々の航路を注意深く再確認していく必要がある。ここではその前提となる江戸湊と木更津船についてみておきたい。

(3) 江戸湊と木更津河岸

隅田川河口の二つの澪筋（航路）の合わさるところが江戸湊であった。狭義の江戸湊は現在の亀島川の河口付近（湊A）で、狭い水道を挟んで鉄砲洲側（西）の本湊町と霊岸島側（東）の東湊町が向かい合い、本湊町の方に湊稲荷が祀られていた。霊岸島の南端には幕府御船手向井将監支配の船番所（川船役所）があり、川船扱いであった五大力船・木更津船はその管轄下にあった。

元禄から宝暦にかけての江戸絵図には、湊Aに相当する霊岸島の南端から築地と佃島の間に「諸国廻船入湊是也」「此所諸国集船之湊」「廻船ノ泊湊」などと注記されている（図2・3）。さらに隅田

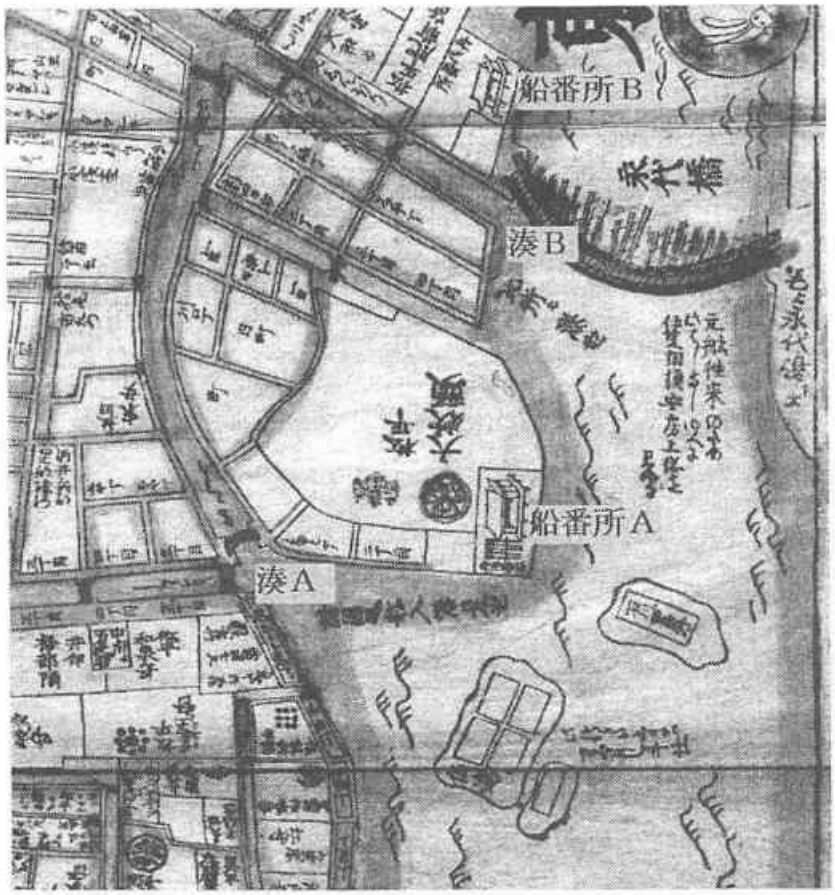


図3　正徳2年（1712）分道江戸大絵図の二つ湊

示したのが（図1）である。露伴の文章では佃島との位置関係が逆になっているが、上総澪の位置は正徳三年（一七一三）『分間江戸大絵図』等に注記されているので間違いない（図2）。両者の位置関係は、文久三年五月、軍艦頭取小野友五郎等から提出された復命書「海岸御備之儀ニ付申上候書付」によっても確認できる。そこでは本澪のことを中澪とするが、本の草体を中と誤読したのではなかろうか。また宝永二年（一七〇五）十一月の町触に見える「下総澪川口本澪両浚」の下総澪も上総澪の誤植ではないかと思われる。

本澪という名称は中川河口にもあって（「品川沖釣場図」）普通名詞に等しいが、地名を冠する上総澪にはしかるべきいわれがあったと考えられる。釣り好きで話好きだった露伴は、釣りの往き帰りの舟中で徳利を傾けながら、船頭から隅田川筋のことはつぶさに聞き知っていたはずだが、上総澪の由来についてはまったく触れていない。江戸・明治の都人士にとって、上総澪のいわれは自明のことだったのではなかろうか。とりわけ祖母が久留里藩士の娘であった露伴は上総とのゆかりが深かった。彼自身若いころ、祖母の縁者がいた横田周辺をたびたび訪れていたことは周知のとおりで、時にはバイオリンを携えた音楽家の妹延（のぶ）を伴うこともあったという。

(2) 江戸時代の上総澪

上総澪も江戸湊にいたる通船の航路であったことは、元禄・享保以降の澪浚いや澪杭（みおつくし）設置に関する文書に見えることから明らかである。とりわけ寛政四年（一七九二）五月、永代築地芥（ごみ）改役から提出された「［芥改めについて］御尋に付申上候」という文書には上総澪についての興味深い記述がある。

すなわち永代築地芥改役秋田利右衛門等の先祖によって芥改めが行なわれるようになる元禄一〇年（一六九七）以前は、「芥船ども上総澪を埋め、一向通船あい成り申さず」という有様であったという。そこで二か年のうちに横幅二〇〇間、長さ二〇町余りの所を浚い取り、「滞りなく通船あい成り」、以来上総澪通りは「芥澪」と異名されるようになったというのである。

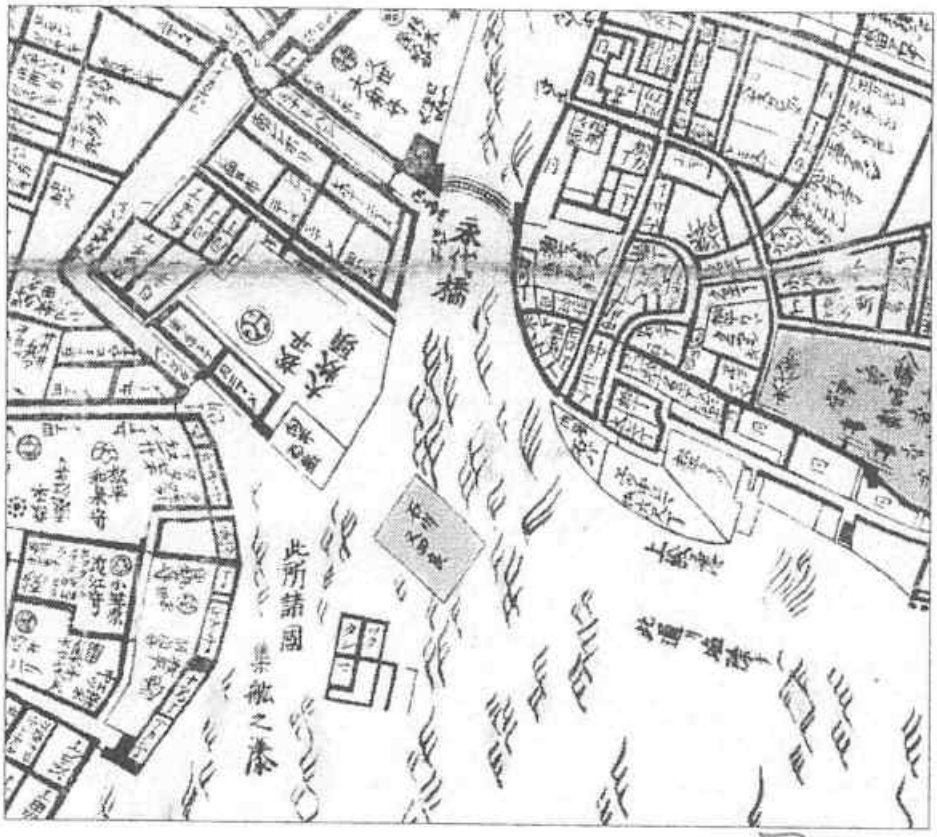


図2　正徳3年（1713）分間江戸大江図
「エツ中ジマ御六尺丁」の海岸沿に「上総澪」という注記がある

41

ていたが、上総へは木更津船だけだったようだ。逆に文政頃の房総から江戸への便船を十返舎一九『房総ひざ久利毛（方言修行金草鞋十七編）』（一八二七）から拾ってみると以下のとおりである。

木更津「朝と昼と江戸へゆく船出る。江戸は四日市の江戸橋へ着く船なり。」

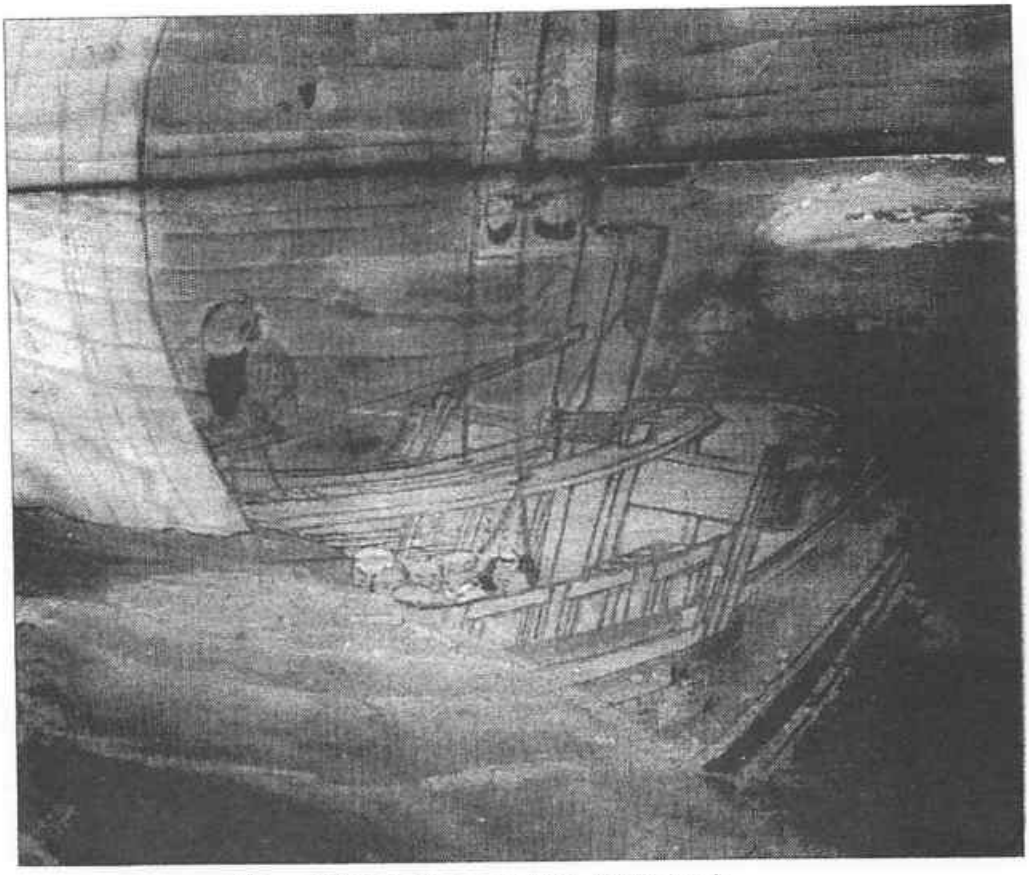


図5　乗客を乗せた五大力船（善通丸？）

八釼八幡神社絵馬「八幡神の加護により嵐を押して進む五太力船」（部分）

登戸「朝昼船出る。江戸の小網町思案橋へゆくなり。」

浜野「江戸小網町へゆく船出る。」

五井「毎日押送船出る。天気悪しく風激しき時は乗るべからず。」

姉ヶ崎「押送船出る。」

天神山（湊村）「押送船多く出るなり。」

百首「相模の浦賀へ渡る船出る。…天気悪しき時は乗るべから」

東京湾の潮流の関係で、江戸を発つ船は常に夜船で、江戸へ向かう房総の船は昼間発船した。

この合巻は一種の旅行案内記であったから、ここに見える江戸への便船は単なる荷船ではなく旅客便とみられる。西上総で木更津に次ぐ湊だった八幡が抜けているように、網羅的な情報とはいえないが、登戸や木更津から朝昼二便出たことがわかるのは貴重だ。木更津からは江戸へ日に四艘出たこともあるようなので（『広重日記』嘉永五年三月六日条）、朝・昼二便というのもあながち誇張とはいいきれない。また五井・姉崎のように五大力船が運航しているにもかかわらず旅客を乗せたのは押送船で、荒天時にはリスクがあると認識されながら、五大力船を利用できなかったところにある種の規制が感じられる。こうした木更津船の独占的ともいえる旅客輸送がいわゆる木更津船の特権の一つ「安房・上総への渡船」にもとづくものと考えられるので、最後にそのことについて見ておきたい。

(5)木更津船の特権

いわゆる木更津船の特権といわれるものは、元禄六年の舟町荷揚場をめぐる訴訟において既得権を確認するために主張されたもので、その由緒書の内容には問題がないわけではない。こうした出入関係

川をやや遡った永代橋の手前（新堀口？）にも「此所諸国集船湊」（元禄二年、まだ永代橋はない）、「此所モ湊也」（正徳二年・図3）、「是ヨリ川下諸国廻船ノ泊」（享保二年）などと注記されている（湊B）。この永代橋際にも船番所があり、日本橋川にいたる新堀には湊橋が架かっていた。房総への帰り船はこの船番所を通り、永代橋付近で風待ちをすることがあり、後にその危険性が問題となっている。江戸絵図には永代橋に「元船往来のため此はし高し。ゆへに伊豆相模安房上総迄見ゆる」と注記されたものがある（図3）。

このA・B二つの湊の注記がある霊岸島周辺には、かって海賊衆と呼ばれた大名や御船手の屋敷が配され、内海に開いた江戸城前面の護りという意味でも枢要な地域であった。

こうした狭義の江戸湊の経済活動を支えていたバックヤードはさらに広範囲に及んでいた。品川沖や佃島付近に停泊する諸国廻船の荷受け問屋やその積荷の積み下ろしを請負った瀬取宿仲間、奥川筋の川船の積荷を取り扱った艀下宿仲間、内海の五大力船の受宿などは霊岸島周辺、亀島川・日本橋川沿いを中心に、東は隅田川東岸の本所・深川、西南は築地にまで広がっていた（図4）。木更津船の荷揚場は、当初の舟町にしろ、元禄六年（一六九三）替地に定められた四日市の木更津河岸にしろ、この広義の江戸湊の最奥部に位置していた。その位置の選定は城米運送と関係があったのかもしれない。

地図は「文久2年（1862）分間江戸大絵図」

図4　江戸湾の範囲

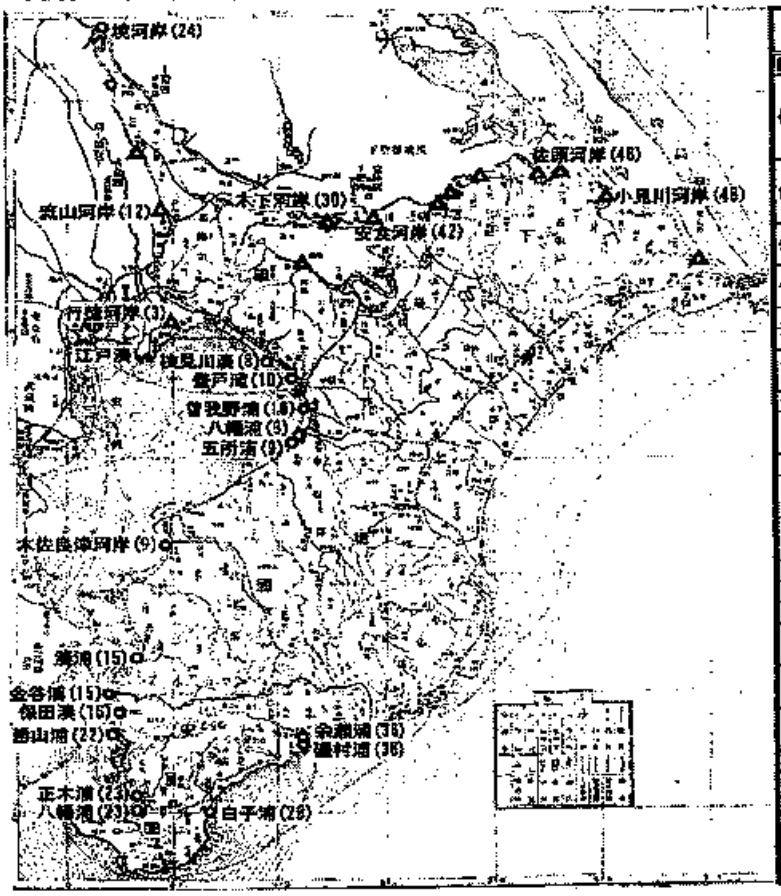
(4)人も乗せた木更津船

木更津船に代表される内海の五大力船は元来荷船であった。それも房総丘陵の薪炭を江戸に運んだ薪船であったことは「上総槙　鋸山をひき出して　船につみ来る木更津の河岸」（『狂歌江都名所図会初篇』安政三年）という狂歌が端的に物語っている。これまで城米や年貢米の回漕という領主経済の側面が強調されすぎたきらいがあるが、それらは収穫期の三、四ヶ月にすぎず、年間を通じて運ばれていた主要な積荷は商品としての薪炭とみられる。

その木更津船について、鹿島万兵衛『江戸の夕栄』（中公文庫一九七七刊、一九二二年初出）が「江戸橋土手倉脇より毎夕発船、荷客を運送す。大形五大力船なり。」と簡潔に述べているように、人も乗せたことに特色があった。他に旅客を乗せた五大力船としては、下総登戸・曽我野（浜野？）行きが小網町鎧の渡し付近から毎夜出

図7　房総三国の廻米津出湊・河岸の分布と道法・運賃

元禄3年4月「関八州伊豆駿河国廻米津出湊浦々河岸之通道法并運賃書付」に見える湊・河岸・津



国・川通	湊・浦・河岸名	道法(里)		運賃/100石
駿河国	塩久津浦	海上	76	4.70
伊豆国	三津浦	海上	59～73	4.50
	手久須浦			4.30
	松崎浦			4.20
	子浦浦			4.10
伊豆国	長津呂浦	海上	55～58	4.10
	手石浦			4.00
	下田浦			4.00
伊豆国	伊東浦	海上	38～39	3.40
	宇佐見浦			
伊豆国	網代浦	海上	36～38	3.30
	熱海浦			
上総国	木佐良津河岸	海上	9	1.10
下総国	検見川湊	海上	8	1.00
下総国	曽我野浦	海上	10	1.10
	登戸浦			
武蔵国	神戸河岸	海上	10	1.30
武蔵国	野毛浦	海上	10	1.30
	本牧浦			
武蔵国	神奈川湊	海上	10	1.30
上総国	八幡浦	海上	9	1.30
	五所浦			
上総国	金谷浦	海上	15	1.90
	浦浦			
安房国	保田湊	海上	16	2.00
相模国	浦賀湊	海上	15	1.90
相模国	秋谷浦	海上	21	2.70
相模国	永井浦	海上	16～20	2.80
	上宮田浦			2.10
安房国	八幡浦	海上	23	2.90
	正木浦			
相模国	江島浦	海上	28	3.60
	小坪浦			3.40
相模国	須賀浦	海上	31	4.00
安房国	白子浦	海上	28	3.50
安房国	勝山浦	海上	22	2.30
安房国	磯村浦	海上	36	4.50
	金瀬浦			
下総国江戸川	行徳河岸	川通	3	0.30

これが木更津船による城米運送の独占体制に照応するものなら、その範囲は西上総のほぼ全域、市原・望陀・周淮三郡にまたがっていたのではなかろうか。あるいは八幡・五所も東上総の廻米の津出湊としてあげられているのかもしれない。そうすると元禄三年の木更津の廻米運賃（一石一斗）に比べて木更津船の城米船賃（三石）が著しく高いのは、木更津までの回漕費を含んでいるためかもしれない。

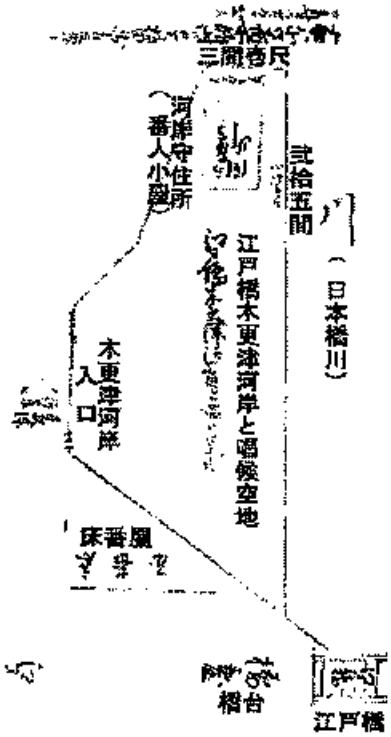
こうしてみてくると、木更津船の特権とされる木更津近所二万石余りの城米運送と安房・上総への渡船が元禄六年段階に実際に行われていた可能性は高い。それが由緒書きのとおり江戸初期以来のことで、上総澪が上総の通船に由来するとしたら、その第一番に木更津船をあげることに異存はないであろう。

江戸湊にいたる二条の澪（航路）のうち、本澪は佃島付近を泊地とした中型廻船と内海西岸（伊豆・相模・武蔵）の小形廻船・押送船等の航路であったことは間違いないだろう。これに対して上総澪は、主に日本橋川の河岸を目指した内海東岸（安房・上総・下総）の小形廻船、押送船の航路で、その中心が上総の五大力船（その代表が木更津船）であったために上総澪と呼ばれたのではないか。今後近世史の専門家によって、そうした視点で資料が読み直され、実証されることに期待したい。

講演概要といいながら、当日とは話の順序や内容を入れ替え、史料の出典などは最小限にとどめました。断定的な演題とは裏腹に憶測を重ね、竜頭蛇尾に終わりましたが、歴史のとばりの陰に埋もれた上総澪をいささかなりとも浚いえたとしたら幸いです。

『西上総文化会報』第77号（二〇一七・三）

『江戸名所図会』「四日市」に描かれた木更津河岸　西と北に入口・番人小屋



木更津河岸絵図面（文化２年）
坪数：143坪７合５勺

図６　元禄6年（1693）舟町の替地として付与された四日市の木更津河岸

文書の常として木更津側と江戸町方に残された文書の文言に微妙なニュアンスの違いがあるのは当然として、明らかな矛盾があることも周知の事実である。ここではそうした問題はさておき、由緒書の特権の内容は元禄六年当時の実態を反映したものではないかという立場で少し考えてみたい。

その特権は、大坂の陣に夫役として動員された木更津村の水主二十四名のうち半数の十二名が陣没し、その遺族の救済という名目で付与されたという。その主なものは①木更津近所二万石余りの城米運送、②舟町河岸の荷揚場、③安房・上総への渡船の三点である。このうち②がこの時の最大の争点であったが、結果的には替地が対岸四日市の江戸橋際に定められ、後に木更津河岸と呼ばれることになった。訴状が舟町の「荷揚場三間」とする意味は不明であるが、替地の間口は最終的に二十五間で決着した（図６）。そいう意味では木更津村のほぼ完勝といってよい。その他の二点がこの機会に再確認された意義も少なくなかったであろう。

このうち③については前項において触れたので、ここでは①について、その直前の元禄三年の幕府の廻米津出に関する書付と比べてみたい。由緒書では「木更津近所二万石余の御城米」の船賃を三分に決め、二十四名に「永々運送」をおこなわせるというものであった。船賃三分が百石当り三石を意味するなら、船賃の合計は六百石、一人当り平均二十五石となる。城米が天領からの年貢米を指しているなら、二万石を確保するには「木更津近所」はかなり広域とならざるをえないだろう。そこで元禄三年の廻米書付で西上総の津出湊の分布状況を見ると、八幡・五所から上総湊の間は木更津（なぜか木佐良津河岸）のみで、その南北は広く空白となっている（図７）。

平成29-8-8「八幡史学館」④ 飯香岡八幡宮御神輿神事」平澤版

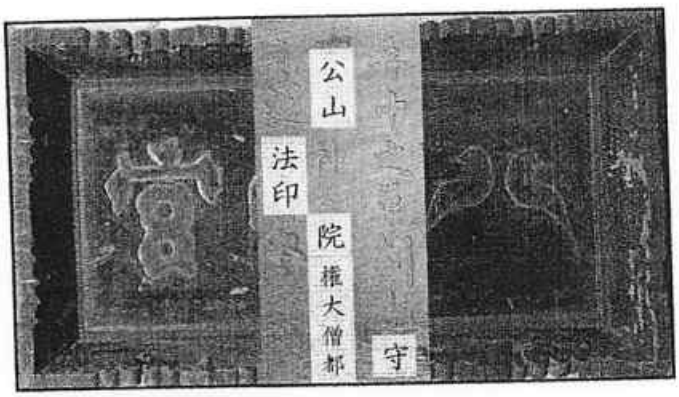
御神輿の渡御（第二日）③

一の宮の宮内で御神輿が飯香岡八幡宮に舁けられる。

この後、参列員と共に御神輿も抗いを受け本殿へと運ばれて、一の宮の神輿の前に供えられ大祭が始まる。

御神輿の渡御（第二日）④

大祭の後、御神輿は神輿と一緒に町内を渡御する。渡御が終わると御神輿は本殿に納められて、翌年一月十四日の頭火祭で御焼き上げされる。



御神輿の起源　御神輿の伝承

黒き所に方三尺の粭石あり、毎朝に紫雲の異人此石の上に座せり。行基此を御覧あり、「何国より御来たり候と問はせ給へば、是は八幡大神なり。菩薩の御説法聞のため、且又和泉の本宮に方を弔へんが故に、毎朝此石上に来るとのたまへり。行基聞こゝろし喜悦の思ひにて是の宮に御神事と見たりけり。それより此子共八幡宮の祭礼には、神のたてと名付け八幡へ献げ奉り、鉄の石を彫刻が石と号し、誠にあらたなる霊石と方民是を貴み給ふなり。

其上、「御神輿を求世の尊者相伝として私仏事なり、「光善寺縁起」の二寺を合号して光善寺と号け、結城村主の為に三十三年に一度御開帳更ある者なり。

『光善寺縁起和泉縁起』

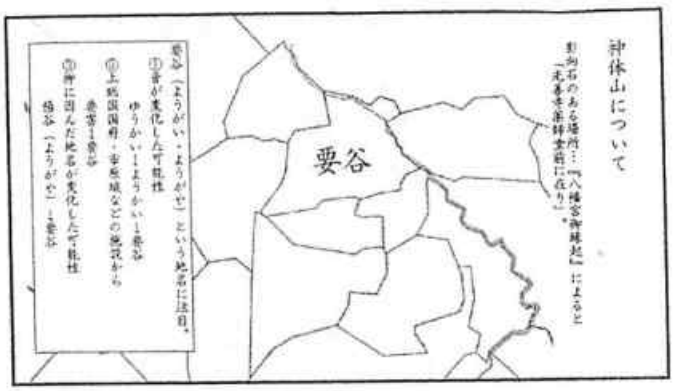
『八幡宮御縁記』とはほぼ同じ記述となっている。恐らく、吉原・屋井周辺では八幡行基伝説を踏まえた由緒で伝承していたのであろう。

『御縁起』では、御輿の渡いを行って武神である八幡神に献せたという伝承であったが、『第縁和泉縁起』では更に御輿に御著を送えて八幡神に奉る伝承になっている。

『御縁起』『第縁和泉縁起』など、吉原地区に伝えられる伝承には、いずれも彫刻石の伝承が語られていることから、神体山的な信仰を御輿伝説に言えよう。

神体山について

彫刻石のある場所…『八幡宮御縁起』によると「光善寺縁縁宮前に在り」。



要谷（ようがい・ようがや）という地名に注目。

①音が変化しやすい性
　ゆうかい・ようかい→要谷

②上総国周辺・吉原城などの説話から
　要答→要谷

③神に因んだ地名が変化したやすい性
　姫谷（ようがや）→要谷

御神輿の渡御に関する古記録

人皇百一代後小松天皇御宇至徳元甲子年九月大社大宮伝来大行事浦朝臣義満公御社厚御信仰に就為御新鎮形成就に依て御笑殿為新宮造社御神輿四社新造工事著述者也

（中略）

御神輿幸行之時者其伝降伏之剣に依て一番に神次太鼓社第一人為乗次強田面獅子為次神輿役人次神輿役人警固次御神輿四社全て

（中略）

御輿役人氏子中惣村へ申附役接務に依立同村役人警固に氏子当番へ渡り当役月当惣村役人警固役の者へ神酒為就頂戴

又為役之儀氏子当惣村御当番月当惣村役人警固役の者へ神酒為就頂戴

右之通御作化御定大御名御附附保保之年八月十四日より十六日迄大祭可為執行（以下略）

『飯香岡八幡宮由緒本記』

御輿の渡御に関する一番古い記録

至徳元年（一三八四）に足利義満により御輿四社が奉納された。

その際、渡御の次第が「降伏之剣」に基づいて定められ、その中に御鎧が含まれている。

神輿以前の祭礼の姿であるかについては、記録上は詳らかではないが、御輿の姿形からは古式である可能性も窺える。

御神輿の起源　筏説を伝える伝承

中郡・麻野・苫寸嶋三人共に……因御宮郡宮崎の八幡宮に詣て……因の後に御神輿を舁ぎ明神を舁ぎ給へ」と言て御神輿を舁ぎ給へ」と言て御神輿を舁ぎ給へ」と言て御神輿

人スライドショー抄出

柳楯の柔製①

柳の枝の下葉をとりのぞく。

柳楯神事

1、柳楯神事について知る

2、柳楯神事を深める

柳楯の柔製⑤

縄と縄の間は、約15㎝間隔。全部で五段。

最上段で楯を60㎝ぐらいにして、下に向かって3㎝ずつ広げてゆく。

柳の木

柳とは杏のき（ユノキ）

垂れ下がる姿態から、神降臨の霊木として信じられている。

山梨県で行われている道祖神祭のヤナギ

道祖神の憑り代（よりしろ）として柳の形に似せた物を作り、飾り付ける。

御神宝（御宝代）来安する入れ物に柳を用いる＝柳笊（やないばこ）

田の神が憑る霊木

香取神宮御田植祭

以前は稲苗ではなく柳葉を用いていた。

苗床に柳葉を挿す風習

柳楯の柔製⑪

出来上がった柳楯は、司家の神棚に飾り、祭礼を待つ。

柳楯の渡御（第一日）⑤

田圃の中の道を通って五所へと進む。この通り道を「ナカミチ・オオミチ」等と呼ぶ。古代官道とされている道である。

市原地区について

- 上総国府最有力候補地
- 市原八幡宮鎮座伝承地
- 北川・新田川・能満川などの水脈の交叉する場所

柳楯の渡御（第一日）⑦

五所町民館に到着。かつては、五所の若宮八幡神社にお参りして、五所御三家の家に入った。

五所御三家

浅野家・中村家・中島家（新絶）

柳楯について

古来からの信仰に基づいて考えると、楯の形に柳で作った神の憑り代と考えられる。

神の座であるために、柳楯が到着するまで祭礼が始められない。

二十五本の柳で調製される。

二十五本の意味

①市原の二十五郡族説。

②一年を十二ヶ月、閏年を十三ヶ月として、その合計数。

柳楯司家について

森五兵衛

立石左次兵衛（現在は山越藤右衛門）

柳を採取する場所

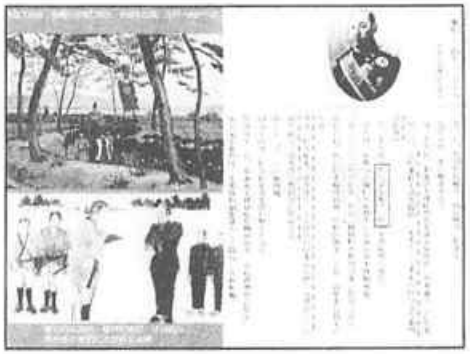
湧海山慧宇柳澤

五所・八幡の水源地

激動の明治維新

慶応4年（1868年明治元年）浜松藩は上総国鶴舞へ転封、来年平成30年は150周年の年

講座資料・②



薄主・井上正直

長南仮藩庁門前家

伏谷如水墓所　市原市池和田岩井戸地先

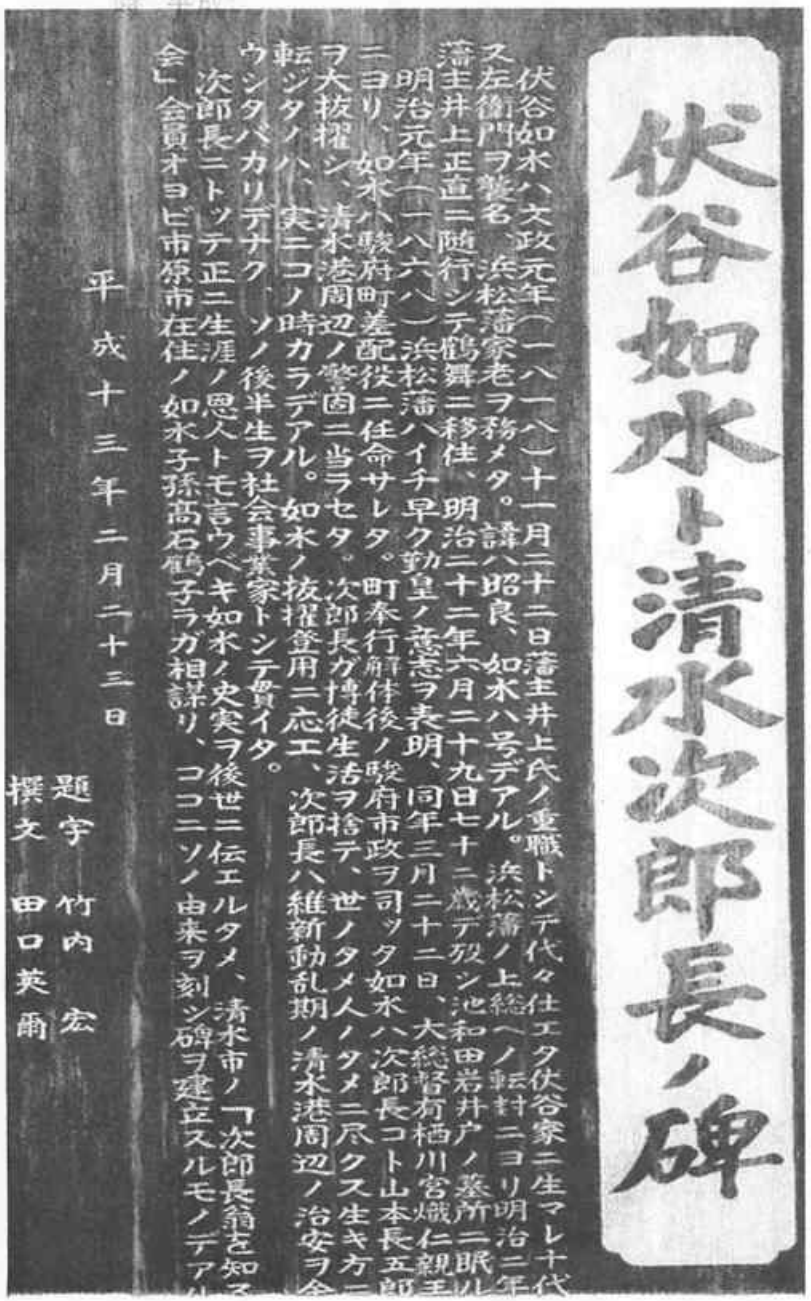
次代に遺した石碑の建立

「鶴舞藩の歴史と伏谷如水」

市原市立八幡公民館主催事業「八幡史学館」
時　平成29年9月12日(火)9;30～11;30

2018年は如水生誕200年

鶴舞藩を知る会　塚原茂　　講座資料・①



伏谷如水ト清水次郎長ノ碑

伏谷如水ハ、文政元年(一八一八)十一月二十二日藩主井上氏ノ重職トシテ代々仕エタ伏谷家ニ生マレ十代又左衛門ヲ襲名、浜松藩家老ヲ務メタ。諱ハ昭良、如水ハ号デアル。浜松藩ノ上総への転封ニヨリ明治二年藩主井上正直ニ随行シテ鶴舞ニ移住、明治二十二年六月二十九日七十二歳デ歿シ池和田岩井戸ノ墓所ニ眠ル

明治元年(一八六八)浜松藩ハイチ早ク勤皇ノ意志ヲ表明、同年三月二十二日、大総督有栖川宮熾仁親王ニヨリ、如水ハ駿府町差配役ニ任命サレタ。町奉行解体後ノ駿府市政ヲ司ッタ如水ハ次郎長コト山本長五郎ヲ大抜擢シ、清水港周辺ノ警固ニ当ラセタ。次郎長ガ博徒生活ヲ捨テ、世ノタメ人ノタメニ尽クス生キ方ニ転ジタノハ、実ニコノ時カラデアル。如水ノ抜擢登用ニ応エ、次郎長ハ維新動乱期ノ清水港周辺ノ治安ヲ全ウシタバカリデナク、ソノ後半生ヲ社会事業家トシテ貫イタ。

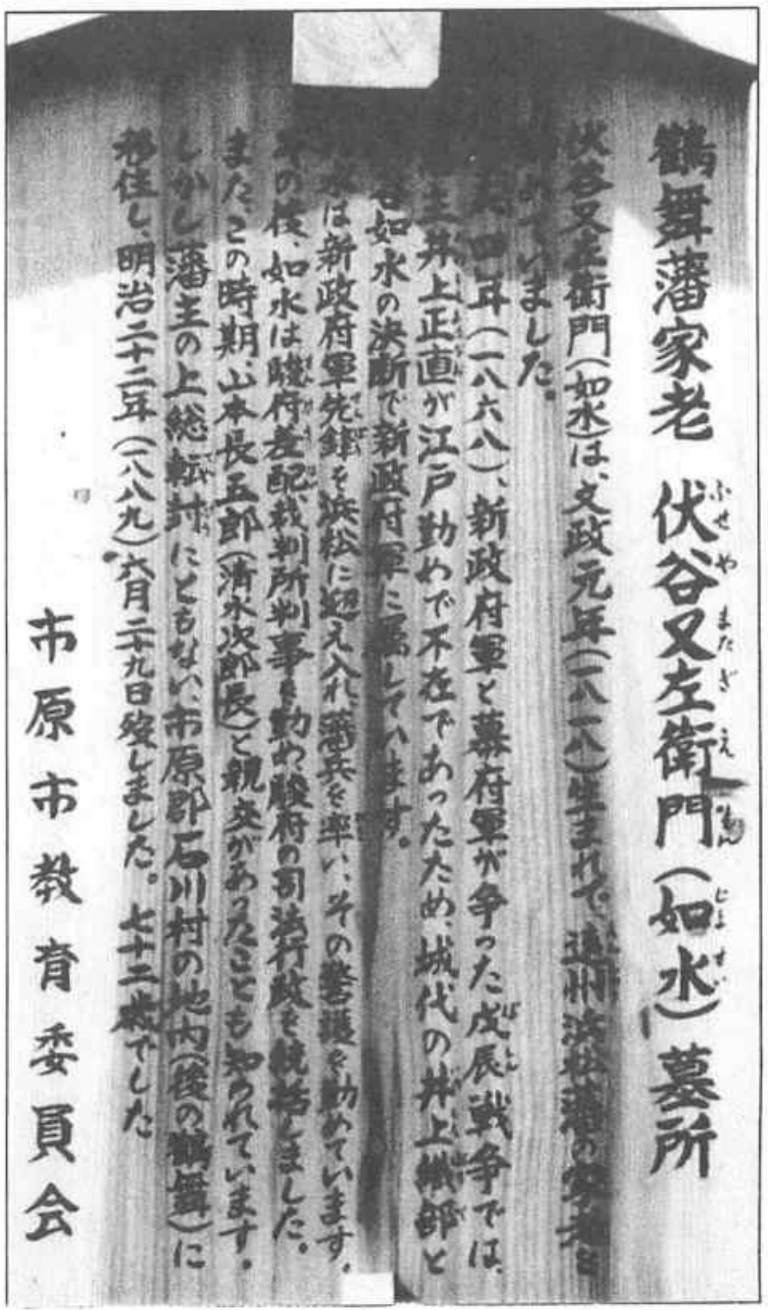
次郎長ニトッテ正ニ生涯ノ恩人トモ言ウベキ如水ノ史実ヲ後世ニ伝エルタメ、清水市ノ「次郎長翁を知る会」会員オヨビ市原市在住ノ如水子孫高石鶴子ラガ相謀リ、ココニソノ由来ヲ刻シ碑ヲ建立スルモノデアル

平成十三年二月二十三日

題字　竹内宏
撰文　田口英爾

鶴舞藩家老・伏谷如水

如水五代・高石鶴子さん
大正11年生まれ
平成29年3月11日没　95才



鶴舞藩家老　伏谷又左衛門(如水)墓所

伏谷又左衛門(如水)は、文政元年(一八一八)生まれで、遠州浜松藩の家老をしていました。

天保四年(一八六八)、新政府軍と幕府軍が争った戊辰戦争では、藩主井上正直が江戸勤めで不在であった為、城代の井上織部と伏谷如水の決断で新政府軍に属しています。

如水は新政府軍先鋒を浜松に迎え入れ、藩兵を率い、その警護を勤めています。

その後、如水は駿府差配裁判所判事を勤め駿府の司法行政を統轄しました。

また、この時期、山本長五郎(清水次郎長)と親交があったことも知られています。

しかし藩主の上総転封にともない、市原郡石川村の地内(後の鶴舞)に移住し、明治二十二年(一八八九)六月二十九日没しました。七十二歳でした

市原市教育委員会

清水次郎長を「真人間」にした人物 市原に眠る

小藩家老、維新の悲哀

ない謎さえも「清水次郎長」の名は聞いたことがあるだろう。江戸末期、駿河国清水（今の静岡市清水区）に生まれ、東海道で勇力を誇った博徒の大親分だ。明治期に渡世人から足を洗い、数々の社会貢献をなしたことはあまり知られていない。この次郎長を真人間に戻した人物が、実は明治中期に市原市で没し、市内に墓がある――。そんな話を耳にした研究員は、さっそく現地へ。この人物は徳川家を支えてきた藩の家老で、調べるうちに、維新の動乱に翻弄された小藩の悲哀をしみじみ知ることになった。

【研究員・井上英介】

能舞藩主
井上正直

能舞藩家老
伏谷如水

清水次郎長

博徒を「警察署長」に

静岡県の旧町（清水）から連想するものと言えば、今や「清水エスパルス」かもしれないが、中部では江戸詰めの関東海道を攻め上ってきた官軍に、浜松で防守を守る如水ら幕臣たちはいち早く恭順を誓う。その直後、官軍は如水を「能舞藩」（静岡市）を治める「藩配役」に任じる。官軍の進駐時、町は無法地帯だったようだ。

着任した如水は、次郎長を「探索役」に抜てきする。1868年、藩主井上正直が東京・上野の戦争に加担したとの理由で、能舞藩は新政府軍に攻められ、藩主は別項。「にわか民政長官」「警察署長」コンビ誕生だ。49歳の次郎長はこうまちに若く、一番は標高100メートルほどの福寿山で、周囲の低地に水田が広がる。地名もそこを左から「賢盤の目」状の碁盤割りが実に美しい。でも、なぜこんな田園の片隅に？

「ここに、主君の正直や如水らが移ってきたのです」。地元在住の郷土史家、塚原俊さん（74）が解説する。幕末以降700人超の家臣、城下の商人らが家族を伴い、数千人規模でやってきた。

家臣団の大移動を伴う江戸時代の国替えは、今の感覚からは理解が難しい。井上家の場合、初代正俊（1579～1628）から十代目正直まで、遠州掛川（静岡県掛川市）を振り出しに、笠間（茨城）→郡上（岐阜）→亀山（京都）→下館（茨城）→笠間→磐城平（福島）→棚倉（福島）→館林（群馬）→浜松――と10回も動いた。それでも、移住先には城や町の造り酒屋を家の側臣とし、各地へ物資を合地へ押し上げ、まちの建設を進める。幕末、城などを構えべくもない。明治3年4月、藩庁と藩校、武家の屋敷町や商人町からなる小さな「能舞藩」（6万石）が生まれ、正直らは合地へ移り住んだ。

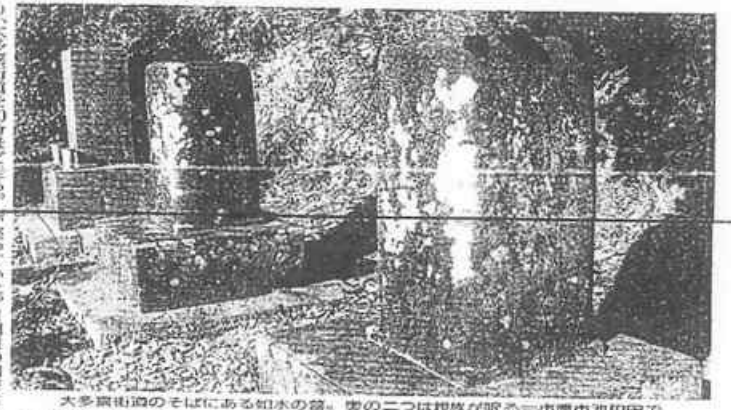
塚原さんの案内で藩の面影を探した。「武家の家も細い柱に粗末な屋根を乗せたような造りだったようです」。如水の屋敷も残っている。小さな建売住宅程度で、家老屋敷の風情はない。

忘却の歴史に再び光

そして明治4年7月、廃藩置県。藩庁は1年3カ月で消滅し、正直らの努力は水泡に帰す。「7軒ほどの家があるばかりの原野」（塚原さん）だった。ゼロからまちを作る。想像を絶する困難だったはずだが、悲しいことは無い。長谷を引き払った正直は明治6年2月、所べの長南町に移住。明治22年、今の能舞藩は「本里藩」にのみ込まれ、やがて千葉県となる。それでも塚原さんは言う。「正直は短い治世でも新しい時代に貢献した」。

藩校は、日本最学の剣術家、石川食次（1859～1944）を招聘している。

如水が能舞でその後、何を思いどんな役割を担ったのか。水の苦労が身内のことのように感じられた。こうした先人の骨折りの結晶で、今の県は作られているのだろう。



大多喜街道のそばにある如水の墓。奥の二つは親族が眠る＝市原市池和田で

藩庁があった場所に立つ塚原さん。藩の歴史を精力的に調べてきた＝市原市能舞で

研究所長の感想

「三百諸侯」が興亡していた江戸時代。各藩では独自の文化が育まれ、気質にも特徴があった。では、千葉は……。ある調査では千葉県には15の藩があったというが、日ごろ感じることは少ない。千葉の県民気質を考えるうえでも、各藩の歴史をもっと知りたい。

【前田恵記】

◇参考文献　田口英爾「侠客の幕末」（10年11月、非売品）▽内藤新聞10年10月25日号掲載「次郎長を知る会」会報▽永嶋まつ子「上川義次物語」（文朝舎、10年1月）

◇名コンビは4カ月間◇

清水次郎長が「探索役」に抜てきされた経緯は、「次郎長翁を知る会」の中心メンバー、田口英爾氏の著書「侠客伏谷如水」に詳しい。それによると次郎長は如水から呼び出しを受けた際、女房おちょうに「罪多い身だ。二度とお前の顔をみることはできないだろう」と別れを告げて出頭した。如水は次郎長の予想に反し、「墓世に乗じて武士の名をかたり、悪事を働く者が横行している。街道筋の探索役として、これまでの所業を改め、御奉公に務めよ」と命じた。次郎長が「自分は卑しい無頼の徒だ」と固辞すると、如水は過去の罪状を書記に読み上げさせた。次郎長は「恐れ入りました」と、役目を引き受けることに同意。帯刀も許された。同書によると2人の関係は、如水が差配役として着任した慶応4年4月6日から浜松へ戻る同年7月2日までの、わずか4カ月間だったという。

房総半島を探求する

ちばみなと研究所

設立趣旨

毎日新聞千葉支局に設立された仮想シンクタンク（ちばみなと研究所）は、県内の毎日記者が研究員を務め、房総半島の謎や不思議に迫ります。想像力が時にとっぴな結論を導くとしてもどうかご容赦を。テーマ提案や情報提供も歓迎します。あて先は〒260－0026千葉市中央区千葉港7の3毎日新聞千葉支局内「ちばみなと研究所」。電子メールはchiba@mainichi.co.jp

【県内青果市況】

（単位円）

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

市況

14日

（○は卸売税込み◇は別）

○千葉青果（市況青果）

やまといも4キロA　3465

◇船橋花生（船橋花生協会調べ）

ナカテユタカ8800（2等、30キロ）　1100

ナカテユタカ5250（2等、60キロ）　1110

ナカテユタカ2300（2等、60キロ）　642

◇ムキ実（2等、60キロ）　1800

◇ムキ実（2等、30キロ）　1100

八幡公民館「八幡史学館」プラス１企画

600年の伝統を守る飯香岡八幡宮「柳楯神事」の作成と巡行を見学しよう

八幡史学館有志、参加自由（家族、友だち同伴自由です）

主管＝「八幡史学館」講師・山岸弘明、八幡史学館名所100選チーム
参加無料、出欠チェックはありません。任意の時間に見学、自由に退出してください。保険はありません。すべて自己責任です。

10月7日（土曜日）午前＝柳楯の調整、午後＝出振る舞いと柳楯の巡行

集合場所（午前＝柳楯を作成する所）＝柳楯司家・旧森家（市原市市原90番地）
〃　（午後＝出振る舞いと柳楯が出発する所）＝光善寺（市原市市原196―1番地）
小湊バス＝八幡宿駅西口始発、山倉こどもの国行き◎7時25分、◎58分、9時00分、10時21分、◎12時50分、◎14時10分、15時10分。市原坂下停留所降車、徒歩3分
〃　＝八幡宿駅東口始発、労災病院行き（若＝若宮経由）7時30分、8時00分若、26分、45分、9時05分若、41分若、58分（中略）13時18分、48分若、14時25分、50分若。山木下停留所降車、徒歩8分

おおよそのスケジュール

８時００分　お清め神事（司家、氏子総代、町内会役員、関係者）
８時００分～１２時ころ　柳楯の調整
１２時００分ころ　柳楯を司家に移す
１３時３０分ころ　柳楯を光善寺に移す
１３時３０分ころ～１５時３０分ころ　出振舞い（関係者、氏子30人出席）
１５時３０分ころ～１６時３０分ころ　柳楯巡行
（市原八幡宮、阿須波神社、中道、五所小学校＝出迎え、五所町民館）
１６時３０分ころ　五所町民館　出振舞い

翌日（10月8日＝日曜日）は飯香岡八幡宮秋季大祭です

五所町民館に一泊した柳楯は8時00分ころ五所を出発、8時30分ころ飯香岡八幡宮到着、柳楯神事。柳楯が到着しないかぎりみこし渡御は開始できません。

プラス１企画　連絡事項

①現地への交通＝八幡宿駅西口から小湊路線バス、自転車
②駐車場＝光善寺境内、光善寺下の空き地に15台程度
③参加申し込み不要。現地集合。調整、巡行は雨天決行だが、大嵐なら本企画は自然中止
④集合は朝だけ。原則自由見学。主管メンバーは「史学館」の名札をつけています。
⑤近くにガスト、コンビニ。弁当、トイレは光善寺
⑥資料＝当日持参ください。残部はありません。コピーしてください。
⑦問合わせ＝山岸弘明０８０―６６６８―２２３７、鷲津寛子０８０―５０８１―５１０１

千葉県無形民俗文化財

市原の柳楯神事

国府総社 飯香岡八幡宮

柳楯について

千葉県市原市八幡字飯香岡一〇五七番地に飯香岡八幡宮が鎮座する。この八幡宮は古文書にも上総州八幡宮とみえ一国一社の所謂国府八幡宮として崇敬を聚めて今日に至っている。

この八幡宮の秋季大祭は今でも旧暦八月十五日の仲秋に行われるが、この大祭に柳楯奉献の特殊神事が奉仕される。

柳楯とは柳の枝と青竹とを縄で結んで造ったもので、この柳楯が八幡宮の南方の後背地に当る市原台地（旧市原村）の氏子によって調製され、大祭前日に五所地区の氏子に申し送られ、大祭日早朝五所地区より八幡宮の神前に奉献されるのであるが、着し到着しなければ祭儀の開始はもとより神輿の出御も出来ないということは甚だ興味深いことである。

柳楯の構造

柳楯は長さ約一・四米の柳の枝の末端の葉を残して下部の皮を剥ぎ二十五本をそろえて縦に並べ之を長さ約〇・六米太さ径約六糎の青竹五本を横に五段に分けて並べ一段ごとに五ヶ所づつ藁縄で結び、柳の枝の上部は右に十二本と左に十三本とに分けてくくり、先端の葉の部分は横にたばねて結びつけたもので、この部分を鉾とよんでいる。

この柳楯の中央に青竹を通して前後を昇夫が担ぐ仕組みになっている。こうして完成した柳楯は武具としての楯の構造ではなく、一見して楯型化した桟とも鋤とも思われるのである。

柳楯の起源

柳楯は如何なる理由の下に調製され且つ奉献されるようになったのであろうか—

このことに関し八幡宮に二つの古記録が伝えられている。一部は旧称市原村府中（現在能満）釈蔵院の所蔵だったと伝える「市原邑光善寺薬師如来縁起」一巻と一部は「上総国市原郡市東庄八幡宮御縁起」一冊とである。

前者は巻頭に神亀元甲子年（七二四）と誌され文末に文治二年十一月（一一八五）と誌され、更に縁起の発見された釈蔵院の暮しかったため元禄十三年（一七〇〇）に書写した由が巻尾に誌されている。後者は寛文八年戊申二月日（一六六八）と奥書があるもので共にその文中に柳楯に関する个所がある。

薬師如来縁起より抜萃すれば

「……行基ぼさついよいよ感信の思ひを増し宮殿御堂を建立し師本尊安置し奉り端麗の御供養数日の説法貴賤利益に預かる者共其数知らず、然る処に不思議や山中に俄に方三尺の口石有、異冠の異人此の石上に座せり、行基之を御覧有て何国より来り給と問へば答て我は是八幡菩薩なり、御身の説法を聴聞の為且又知来の本誓に力を添へんが故茲朝此の石上に来るとの給へり、行基きこしめし感じ給ひて彼こそ実の鉾に柳の蕾添へて奉る、夫より所の氏子共八幡の祭礼には柳だてと名付八幡へ奉捧、彼の石をば影向石と将し誠に〱あらたかなる瑞石と万民是を貴び給ふなり……」

又八幡宮御縁起には

「聖武帝天平年中僧正行基衆生化度のため天下を巡行の時此の

千葉日報（日刊） 2016年（平成28年）9月18日（日曜日） （12）

統合地方版

新調「柳楯」担ぎ巡行

神輿渡御への重要神事

市原

柳楯とともに五所町民館を目指す一行＝17日、市原市市原

市原市八幡の飯香岡八幡宮の秋季大祭で中心的神事とされている柳楯（やなぎだて）神事が17日、同市市原地区で行われた。厳かな雰囲気の中、関係者が柳の枝と青竹で作った「柳楯」を担ぎ、市内各地を巡行。柳楯は今日18日、飯香岡八幡宮に到着し、勇壮な神輿（みこし）渡御が始まる。

柳楯を神への供え物とする2日がかりの神事で、現在の神輿の原型か神社の特殊な形態と考えられている。1990年、県の無形民俗文化財に指定された。

同地区の2軒の司家が1年交代で柳楯を新調しており、今年も見事な一品が完成。光善寺での出振る舞いの後、一行は市原八幡神社と阿須波神社を参拝し、五所の集落へ。17日は五所町民館で足を止め、柳楯は18日、飯香岡八幡宮に奉納される。

柳楯が到着しなければ神輿渡御は始まらず、極めて独特な神事としても知られる。所在地が特定されていない上総国府との関連性も指摘され、歴史ロマンを大きくかき立てている。

柳楯神事には、上総国府の推定地を巡る観光ボランティアガイド「かずさのくに国府探検会」が同行し、多くの参加者が神事の様子を見守った。前田隆穂会長(73)は「大変重要な神事だが、市民には意外と知られていない。今後も活動を通じて柳楯神事を広めていきたい」と意気込んだ。

読者からの情報をお待ちしております。
E-mail c-nipoo@chibanippo.co.jp
TEL 043(222)9215
FAX 043(224)7001
TEL 043(222)9211
FAX 043(227)2094
TEL 043(227)0077
FAX 043(225)8241

千葉市でパラスポ
イベント開催

リオデジャネイロ・パラリンピックが日本勢メダルラッシュで盛り上がる中、4年後の東京パラリンピックで車いすフェンシングなど4競技の会場となる千葉市で17日、パ

役パラ選手が指導役となって家族連れらに体験してもらい、車いすフェンシングなどの難しさや楽しさを紹介。車いすバスケットボール「千葉ホークス」の田中恒一選手ら

八幡史跡館ブラス1
平成29-10-6,7

月曜わいど

600年の伝統支える"司家"

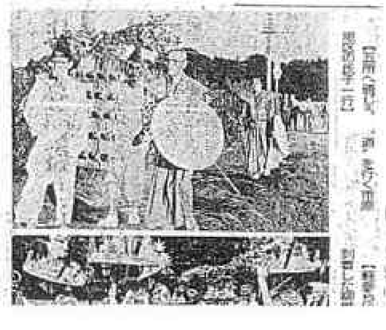
市原・飯香岡八幡宮の「柳楯」神事

[illegible]

二軒の森家交代で台風の日も休まず

千葉日報 平成元年10月2日

[illegible]



山崎国臣氏 取材記事

地を経歴し、偶茅の寺に説法し給ふ。道俗化を慕ひ蹤く。茅で礼拝聞す時に鹿冠の異人あり糸りて石上に座し給ふ。僧正驚みて君は何地より渡らせ給ふと問奉りけるに異人答へて曰我は此のわたりなる廻縁八幡庭宮也、師の説法の殊勝なるに感じ正に仏果の本誓に力を添へんが為也となん。

於此僧正驚かせ給ひ急に柳樹を削りて櫃の如く成し給ひ神の御後を慕ひ給へば異人変化と矣はせ給ひ須臾にかき消て失せ給へり土人崇敬し乃京奉勧請　干此掲持に流の飯を供す（今市原村に変飯面の畑あるは此の故也）

僧正の櫃櫃を作り献ぜしは大神の武を奉らせ給ふを以て也（本系茶紀に櫃櫃を献るを例とす（今鹿井村守公山櫃櫃寺神主院司之寺号口其義也）

大神の影向石今現に在市原村薬師堂前意に行基は本和尚国薬師寺僧也・故に後人安一置於薬師堂者乎）

とあるが共に神仏習合の所産である。試みに双方の関連した点を列挙すれば

一　行基の説法

二　鹿冠の異人即八幡神の顕現

三　影向石

四　変飯を奉る

異る点は「高師寺縁起」では変飯を奉る障柳の箱を添えたが為め後世八幡の祭礼に櫃櫃を奉るとあって箱と櫃との関係は別に説明されていない。「八幡宮御縁起」では八幡神と知れたが為めに急ぎ櫃櫃を作って御後へ立て奉ったがこは武神だから優としたのであると説明されている。

それでは何故に柳を用いたかということが問題になってくるが、仲　信友著神名帳考証之代に左の一編が掲載されている。

「往古隣村五所村ノ人部ニ至リ、アル神祠ニテ神像ヲ奪ヒ立退ケルガ追手ノ者ニ奪ラレテ捨ヲヤキヤマニ五所ノ浦ニ着給ヘト祈念シテ像ヲ海中ニ投入ケリ、サテ其人国ニ帰ラヌサキニ五所ノ浦中ニ船在光ル物アリ怪国ノ後其ノ由ヲ聞テ認ラオロスニ聖シテ像ヲ得タリ。即其地ニ祭ル（此地ヲ今ハ元八幡ト称ス）其後一百年二年ト云）今ノ地ニ移ス、今ニ至ルマデ五所ノ人イタラザレバ神輿ヲ出スコト能ハズ、此地国分寺ニ近キ故ニシバシバ官使往来ノ便ニ随テ大社トナルト云、今鹿栄印地ナリ」

この記事にはないが五所の古老の伝承として船中に像を投じた際、水辺の柳を伐採し之に乗せたということであるが、これなら祭神と柳との由縁も一応納得出来るのである。

次に「八幡宮縁起」によれば統行より遡って後神像を海中より網にて上げたのが三人の猟老で、これが中島・中村・浅野の五所の櫃櫃の御三家の祖先であるという。

さらに市原の古老の言として聞き得た範囲では、

往古市原五所の人が部に上るため船路に就き途中で海上を流るる御神体を拾い上げたが一同罰れ多いこととて協議の末郷土の汚え無事奉き給えと念じ海中に投じて都えの旅を続けた。さて御神体は流れ流れて五所の北川の川尻に着いたのを種国後これを奉迎したが途中で石上に一旦安置してから神崎を渡り奉祀した。その時の石が今日御鎮座石、変飯石とよばれているものであるという。

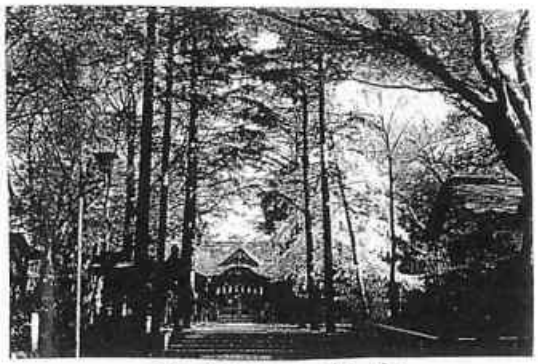
又五所の古老の言として、或夜の霊夢に今の地は狭隘であるから方八町の地を造営せよと告げられたため御遷座申し上げたのが現在の社地であるという。但しここには祭神と柳との関連には全々触れていない。

尚御神像を海中に投じた際柳の木に乗せたと五所の古老の伝承にあるが柳櫃の構造が一見筏の如き感を抱かせ安置するに格好の座となることを考え合わせると興味深いものがある。なお海中より御神像の上ったとする伝承は海路を通じて勧請されたことの神話化されたものであろうか。

櫃及び櫃の意義と用途

恰ここに櫃について考えてみよう。

先ず柳の語源から説いてみるに「弥長木」「鼠木」「矢の木」の三説がある。第一説は柳の枝の形容から生じ、第二説は櫃は水



飯香岡八幡宮

国指定
総社
飯香岡八幡宮の栞

千葉県市原市八幡鎮座

鹿島山
神のみてにし　浜香岡
ひかしをかけて
里にひひけり
従一位　久我通通

市原の打櫃神事
絵巻
（部分）
作）石井青鬼画伯

辺に多く生育する木でありこの枝は蹄（屋敷）を造るに格好であり、これを川瀬に掛けて魚を捕えるために用いられたのである。柳の枝が頭に使われたのは新石器時代のスイスの湖上生活の住居跡の遺物の中から植物の繊維や柳の枝で編んだ籠が発見されているから、柳と蹄との古い関係を知ることが出来よう。

第三説の「矢の木」であるがこの枝で矢をつくったので矢の木という説の三通りになっている。

柳が霊木として用いられるといふのもその姿がやさしく特に風情があり人の心を引き、その枝垂るる姿から霊降臨の恐代などに見なされ霊にまつわる物語りなどと結びついて多分に霊的な面を有するためであろうか――

山梨県地方の新年の民俗行事にまん中に高い柱を立て色のついた紙をつけ割竹を四方に柳の枝のように撓らしてこれを「やなぎ」と呼び小正月の行事で道祖神を祭るときに用いるというが柳を神降臨の恐代とする一例である。又佛教では柳塔婆と称して柳の霊付きの木や柱を塔婆にして三十三年忌を修することが行われるというが矢張り霊木の意味が多分に含まれているといえよう。

次に標について考えてみると標・庖・干とも書き、その意は「立て」或は「隔て」の約とも説かれている。

標の用途は先づ武具として戦陣においてこれを樹て矢を防ぐために用いられたがこの外に即位式、大嘗祭等に儀柱として用いられ又標識として用いられ或は神前の威儀装飾として用いられ或は神幣として用いられ或は坐具として用いられ更に神輿の神幸のときは儀杖ともなった。

即神道名目類聚抄に「神代口訣書日輪は必神社にありて神幸の時以て囲とす……」として用いられ、又標識としては日本紀成務天皇五年に「国郡に造長を立てて鄙邑に稲置を置き並びに標示を建て以て表と為す」という一条がある。

造長即国造である。国造は国県からなる地方行政組織が大和朝廷によって作り上げられたその地方官吏であり、それ以前から地方で部民又私領を有した土豪の豪族を任じた世官であるが孝徳天皇大化の改新とこれに続く律令制支配機構の成立にともない廃止され中央より遣官として国司が任命されるようになり、国造は郡司として優先的に充てられるようになったが、標識として標示を建ったことは注目すべきことである。

国府八幡宮

国府八幡宮とは制度上一定した名称ではないが一国一社の八幡宮で、諸国の国府所在地の近くには国分寺・総社が在ると同じく大底八幡宮があるのが通例であるがこれを国府八幡宮と称するようになった。

では諸国の国府附近に何故八幡宮があるのかーそれは天平十三年（七四一）に計画された東大寺の建立は二年後大仏の鋳造が難渋を極め二回も失敗に帰した。そこで時に宇佐八幡宮に祈請して神助を仰いだ結果成功したので総国分寺である東大寺では御分霊を勧請し守護神となすに至った。これが現在の手向山八幡宮であるが諸国に於いても国分寺建立に際しては東大寺に倣い八幡神を勧請するようになり佛徒により八幡信仰が全国的に浸透して行くことになった。

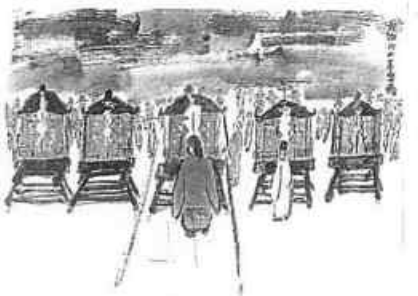
それでは、諸国の国府八幡宮に於ける行事は如何であったであろうかというに国分寺との関係もあり読経や法会も行われたということである。

国府八幡宮と放生会

八幡信仰の起源は欽明天皇三十二年卯年二月初卯日（五七一）に豊前国宇佐の菱形池の辺に初めて鷹八幡神として神明の徳を現し給うたとあってこれが宇佐八幡宮であり、全国八幡宮の本社である。現在八幡宮で行われる卯の日祭はこの日を奉斎するために行われて来たものである。

さてこの八幡信仰は佛教と早く習合した関係上佛教色が濃く八幡宮の最大の神事と目されたものに放生会があった。

放生とは佛法の行事である。日本紀天武天皇五年（六七七）に八月・十一月の両度に亘って諸国に詔して放生せしめたとあ



るが詳細は分らない。では何のためにする法会かというと、すでに捕えられている鳥獣魚介類を買い求め河海山野に法を修して放ちやることで殺生を止め放生を作善とする思想によるものである。

法会として明確なのは元明天皇養老四年（七二〇）大隅日向に於ける蝦人の乱に際し宇佐の八幡宮に祈願して神助を仰ぎ征討の目的を果したものの多数の犠牲者を生じたため八幡神の託宣により慰霊安鎮のために放生会を修することとなった。明治維新までは宇佐放生会と称して毎年八月十四・十五両日に亘って同宮で行われてきたがその儀は宇佐に近い和間浜の御宮に大神を奉遷して法会を行い、翌十五日汐半満のとき買い求めおいた魚介類を海中に放つのである。八月十四・十五日が用いられたのは汐の干満と望月とが必要なためであるという。

この法会は貞観二年（八六〇）宇佐より勧請された京都の石清水八幡宮に於いても法々さかんに行われるようになり、これを准節会として扱われ更に行幸の儀に准ぜられるほどの盛儀となったのである。

類聚三代格によれば元慶六年六月（八八二）の太政官符に大要左の如くある。

一、天平宝字三年（七五九）勅命により全国に放生の地を定めて国司監督の下に符を郡司に下して放生会を行わしめた。

二、郡司は百姓等と共に放生の鳥獣魚介類を予め一定の場所に買い集め飼いて国司の監視に供して後に行った。

三、特に放生すべき生類は鳥獣は山に向って放ち魚介は河海池沼が近くにあればそこに放ち、なければ放生池を設けてそこに放生せしめた。

四、右の費用は国毎に放生田を置いて般舟の稲を以って節死の料に充てた。

という内容であるが、当時放生会が国家にとって如何に重要な儀式であったかが分るのである。

このようにして放生会は宇佐八幡宮で行われた後国毎の八幡宮でも行われたものの如く本宮に於ても秋季大祭が今日でも旧暦八月十五日即神秋名月の日に行われるのも放生会と関連のあることの証しといえるのである。

柳板と放生会との関係

それでは放生会であった秋季大祭を行うのに何故柳板が旧市原村内で刷製されて八幡宮に奉献されるのであろうか―

「市原邑光善寺縁師如来縁起」や「上総国市原郡市東庄八幡宮御縁起」にみえる由緒とは別の角度をもって考えてみよう。

先ず柳は前に記した通り

一　国造（後の郡司）の標識とした。

二　座として用いられた。

三　神幣（神への献物）として供えた。

四　祭のとき儀材とした。

五　神輿の神幸のとき用いた。

など様々な面をもっているが、これらが綜合的に採り入れられて、神の憑代として霊木の信仰のある柳で刷製されたのが柳板であると思われる。

即郡司の監督により郡司が放生会を行うため八幡宮に参向するに当り標識の意を含めたもの。

市原の茶師芳間近の石上に八幡神が降臨されたので八幡宮に神迎りするため神座―憑代として用いた。

祭儀のとき特に神幸に際し威儀を整える儀杖としての意を含めたもの。

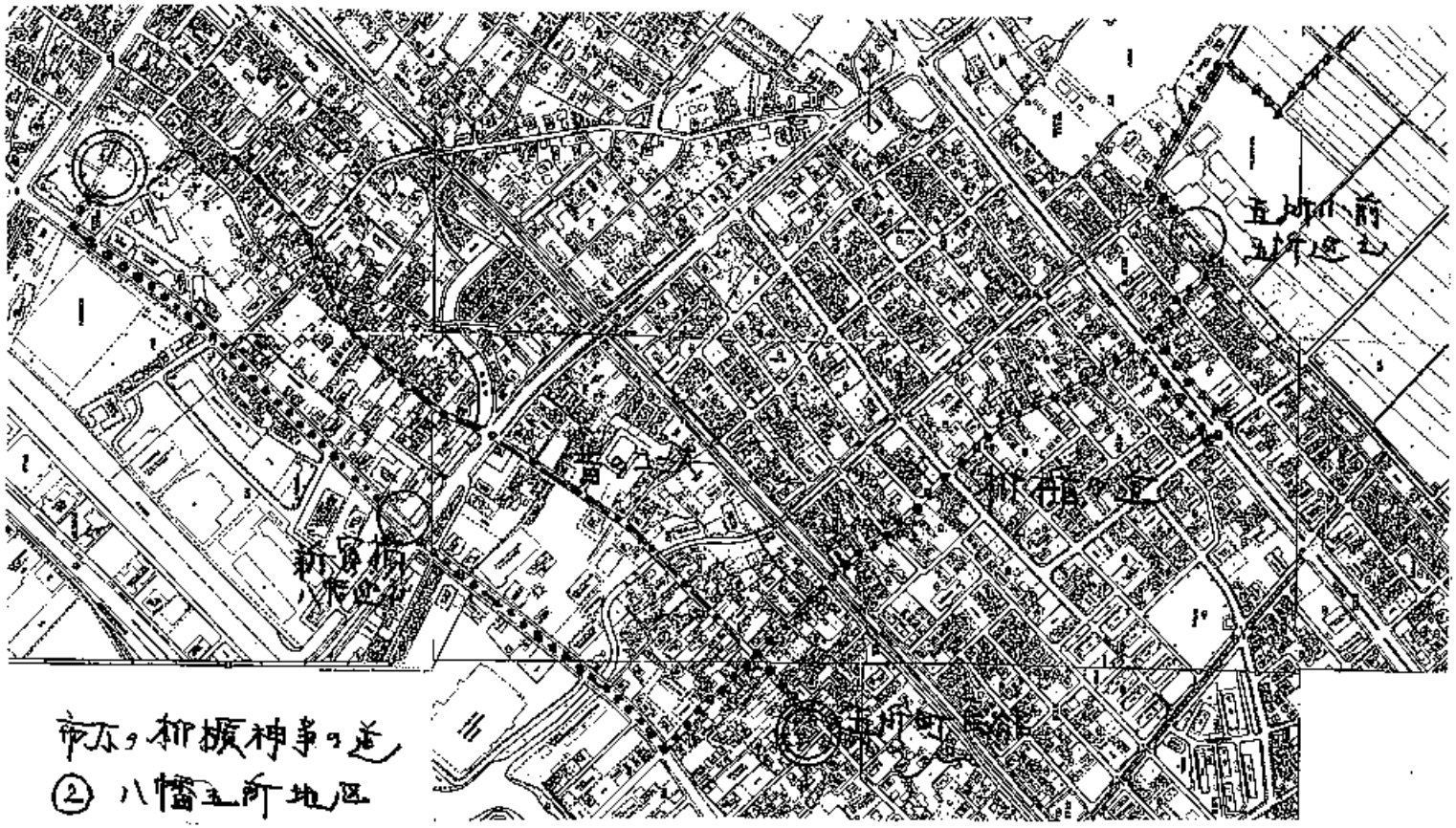
八幡神に幣帛として献ずるため。

などの意を含めて刷製し奉献するに至ったものであろう―

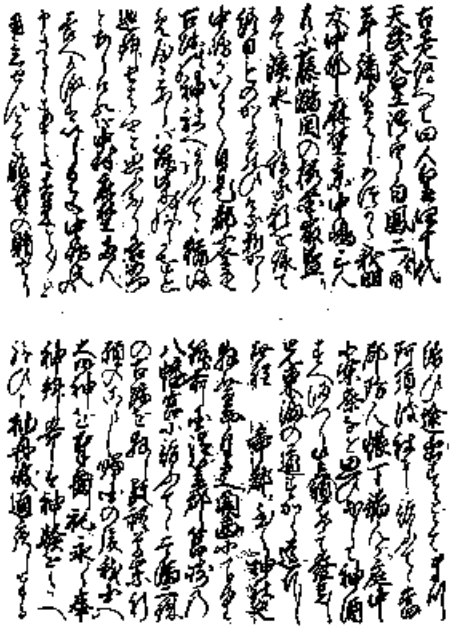
又類の形をしているので放魚と相通じることも考えられ興味ふかいものがあるが、この風習も時代の変遷と共に政治的色彩は漸次うすれて行き特殊神事として現代に伝承されるに至ったのである。

柳板の刷製と摩擦の仕儀

鎌倉に元禄十年八月（一六九七）とある「上総国社版音図八



市内の柳板神事の道
② 八幡五所地区



いかだ説を伝える「上総八幡町八幡宮伝記」（巻頭部分）

幡宮由諸本記」によれば至徳元年足利義満が神剣を奉献された際の祭礼式次第の中に

「但柳橋役供者氏子市原村江申付伐採樵ヲ盛立　同村村役人惣団ヨリ氏子富番役ハ渡利富役ヲ市原村役人惣団ヨリ富神前ハ差上ル社家受取御神興ハ屋ヲ奉献　右惣団役乃者神酒為致戴之

又馬役之儀氏子市原村御馬谷ヲ八郷ヨリ勤之」

とあり、又天正十九年（一五九一）徳川家康が本宮を折願所と定め社領百五十石を安堵した際の祭礼格式の中に

「柳橋之儀先例之通市原村ヨリ造立村役人惣団五所村富番ハ菅右役人市原村役人一同惣団ヨリ富社ハ献上社家受取御神興ハ奉儲御神輿御幸之時者市原村役人惣団馬役者市原村并八郷村々ヨリ取之」

とある。市原村氏子戸数は天保年間で二千八戸といい、これに対し八幡村は三百三十五戸の氏子数であったが柳橋調製並びに惣団に関する市原村氏子の権威が顕として存したことが判る。

更に文政二年八月（一八一九）と奥書にある「富社年祭行事」の中の八月十四日の条に

「社家刑部五所村年番ハ出役之上柳橋の行事終て同村柳橋掛中村源四郎浅野清治郎内出弥惣八惣団宰領として神前迄来る右柳橋御神酒壱荷一之宮ハ奉備次ニ　神納之行事刑部勤役

此柳橋之儀者氏子市原村ヨリ組建いたし夫より行道の行事古例有之候　後者愛に略す」

又同真の祖要には

「柳橋者氏子市東庄市原村定役五兵衛左次兵衛両人勤役游海山義宰柳澤ニ而荷取右を組建藤井村社宮惣団数五所村富番ハ十三日ヨリ渡右行道之古例有之候ニ略す……」

とある。しかもこの文に続いて柳橋は十四日に八幡宮に到着して一の宮神輿に奉られるとあって現在より一日早く行われていたのであるが何時ごろから現行のようになったか定かでない。又馬役の儀であるがこれは駒引きを行いその役を市原村、御馬谷（大厩）並びに八郷に受持たせたのであるが、この八郷とは一体どの範囲の地域を指したのであろうか―

天正十八年五月（一五九〇）小田原城攻撃のため豊臣秀吉が関東に進攻した際本宮に禁制証文を附しているがその文中に

上総国市原庄

禁制

八幡郷　そう志や
きくま　村上
屋ま紀　ごい
府中　ご志よ

一、軍勢甲乙人乱妨狼藉事

一、……

と誌され拾壱八郷に当るから恐はこの八郷中で馬役を受持ったのであろう。昭和二十三年頃八幡中学校長をなさっておられた森　操先生は前宮司内田半之助氏より行道の古記録を一覧させてもらったそうだが、それによると駒引きに各村の受持つ頭数が非常に多く誌され市原より五所までその列が続いたであろうと話されたことがあった。

この駒引きについては京都東山の新日吉神社の五月二日に行われる例祭を小五月会と称して駒引きが行われるが府中日吉神社が能満に鎮座しているのも何か関連があるのではなかろうか

又市原より五所へ送る時藤井村社官が同道することになっているが郡本八幡神社とも関連を有しておったことが判る。

ただ残念なことは現在行道の古例の記録の散逸していることである。

さて柳の所在地が游海山（ゆかいざん）字柳瀬となっているが現在市原村内には右の地名は見当らない、最近までは要ヶ谷（かなめがやつ）の地の自生の柳を用いたが国瀬と要ヶ谷とは音読の上から相通じるものがあり又要ヶ谷は光善寺薬師堂に隣接していることを附記しておく。

この要ヶ谷の一帯は往昔の城址ではなかろうかといわれているが附近に堀畑・内堀・水門・番重橋など城に関連したと思われる地名の残っているのも興味深いことである。

しかしこの要ヶ谷の地も現在は開発の民家に埋まり櫛はなくなり、隣接する字飯島の一劃を定めそこの櫛を用いるようになり、民俗行事本来の姿を維持していく事の困難さを痛感している。

次に市原の定役は五兵衛、左次兵衛の親人となっているが五兵衛は現在の森敬一家で俗称でへいどんと呼ばれ、五所の古老は御幣殿の転読したものだといっている。左次兵衛は絶家し藤右衛門家が後を継い現在は森　源家が後継者となり両森　家が司家として奉仕している。五所の櫛櫛御三家として中村・浅野・内出の三家がなっているがこの中で内出家は現在中島と称し内出は屋号になっている。

次に藤井村守公山橋柳寺神主院であるが明治初年頃は建物もあり府中（能満）の釋源院の経蔵寺であったが廃仏毀釋により廃寺となり藤井の畑地に「しゅんじゅいん」の地名のみが残っているという。寺号も柳櫛を司ったために附せられたと云う。

次に藤井の社宮は中島氏であったが明治維新後離村して現住しないという。さらに影向石であるが現在光蓮寺薬師堂の境内にあって俗称鎮座石または麦飯石とよんでいる。

きて現在この柳櫛が市原村浜山裏に自生する柳で調製され岡森家の守護の下に町会長宅に送られ出御祭の後市原台地の八幡神社に奉告し更に風祭集会二十に上花国防人　若麻績部諸人の作としてみえる

庭中の阿須波の神に小柴さし
吾は斎はむ帰り来までに

の短歌で知られる岡台地の阿須波神社に参って道中の安全を祈ってから下って桑黒制の畦の中の大道を通って五所地区に向い途中の旧村境に五所の御三家の出迎えを受けて年番家に到着しここで受渡しをすませて直会があって櫛櫛は一泊する。明ければ旧暦八月十五日大祭である年番家には早朝より御三家を始め氏子総代・町会長・祭典掛・青団・経参・氏子青年達が集り出振舞の上、本宮に向う。五所と八幡の境には一の宮の氏子総代町会長・青団・経参が出迎え八幡宮の境内に到着すると祭礼子が始まり、拝殿で号鼓が打たれると櫛櫛は拝殿に昇殿して祭員の手に渡され一の宮の神輿の前に奉納されてこれより祭儀が開始されるのである。神前の儀が終了すると渡御が始まる。先づ殿内より太鼓・真榊・櫛櫛の順に出て次に四神旗が進み金々殿内の号鼓を合図に一の宮神輿の宮出しである。表参道鳥居先に集結した舁夫は拝殿階下に殺到し祭典掛より神輿を受取ると担み上げるのである。

こうして五の宮まで順次に宮出しを終え、櫛櫛の先行の下に町内を一巡し参道鳥居先の御旅所に遷御して櫛櫛は本殿に納められ、五社の神輿は幕幣の儀が奉仕されてから再び舁かれて夕刻宮入りを終るのであるが本殿の櫛櫛は翌年正月十四日のお飾焚き（どんど）の神事に焼かれるのである。

結　び

飯香岡八幡宮の勧請される以前は六所神を奉祀する諏訪神社が鎮座していたが、現在は摂社として本殿の後背に奉置されている。後に勧請された八幡宮は八幡三神を正殿に、祖殿に七柱の御祭神を奉祀していて此の中の一柱に天穂日命の神名がみえる。

この御祭神は上海上国造と葦間国造の祖神に当るわけで、此の両国造の祖神の奉祀されてる八幡宮に於いて櫛櫛神事が行われているのは古代祭祀の一面をみる思いがするのである。

櫛といっても武具としての櫛とは類を異にする此の古雅に富んだ櫛櫛については神歌以前の祭の姿を伝えるものともいわれているが、いづれにしても未解の部分が多くな原究明すべき帝地の広いことを痛感しておる次第である。（完）

昭和58年7月　宮司　市川教生
著書から引用させて

㉘ 飯香岡八幡宮

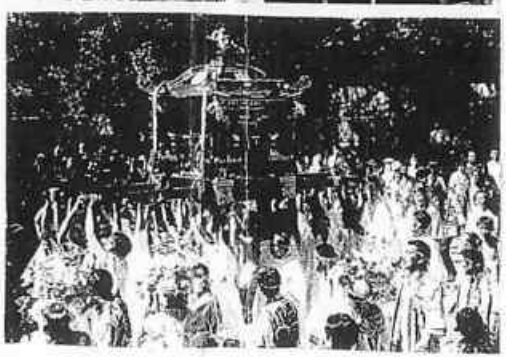
㉕ 市内五所を出発

㉗ 神宮の出迎え

㉖ 旧道を進む

㉚ 櫛櫛神事

㉗ 八幡宮の出迎え



至徳元年銘
一の宮みこし

人皇百一代後小松院御宇至徳元甲子年九月
大政大臣従三大将足利義満公長治元年御修行で
根岸左衛門尉経清殿然る後と御宮勧請奉建立
御神輿四社初造立奉安置者也

御神輿四社新造立之記
長行　上杉治憲公直筆の
社家執行者国
大宮司門新平三

右於鎮守浅間宮至徳元甲子年九月
吉日
右御神輿四社新造立奉安置
上杉治憲公直筆の
社家執行者国
大宮司門新平三

右御神輿四社新造立奉安置
上杉治憲公直筆の
社家執行者国
大宮司門新平三

「飯香岡八幡宮　由緒本記」にある足利義満の
「みこし寄進」と「櫛櫛神事」の記載

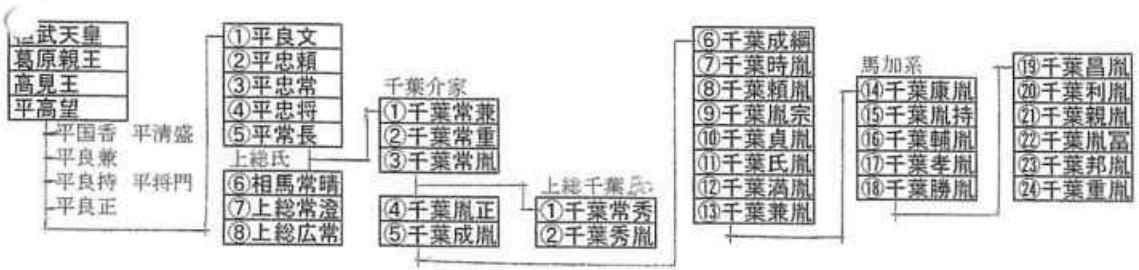
広常なくして頼朝挙兵はならず、広常がいては頼朝の政権は確立できない～惣領上総氏の悲劇

頼朝をして「父」と呼ばしめた、誇り高き東国武者・常胤～下総千葉氏の栄光

～中世前期（鎌倉時代）「房総平氏」ものがたり

山岸弘明

房総平氏（上総氏、千葉氏）略系図　　注意＝千葉氏の系図は多数存在し、出典により内容が異なります



きょうの講座の主役たち

①桓武平氏と清和源氏

高望王（平高望）（？～？）＝桓武天皇のひ孫。上総介として下向

平良文（886～952）　＝房総平氏祖

平忠常（967～1030）＝良文３代、「忠常の乱」を起こす

平清盛（1118～1181）＝平家にあらずんば人にあらず。初代武家政権を誕生

源頼朝（1147～1199）＝上総、千葉氏の加勢で鎌倉幕府を創設

②上総国の支配者

上総広常（？～1183）＝上総介（大柳館）２万騎→謀反の疑いで頼朝に誅殺

千葉常秀（？～1247）＝〃　　（　〃　）→三浦氏与党として北条氏に誅殺

足利氏　　＝上総国ほか守護職→鎌倉北条幕府を倒し、室町幕府を創設

鎌倉府執権上杉氏＝〃　→飯香岡八幡宮への足利氏社殿、みこし寄進を奉行

③下総国の支配者

千葉常胤（1118～1201）＝千葉権介。下総守護職（千葉館）３００騎→全国に勢力拡大、宗家は衰退しながらも「小田原征伐」滅亡まで700年続く

「八幡史学館」第13シリーズ（平成30年度）の計画（未決定＝変更があります）

①八幡公民館創立７０周年「菅野儀作と八幡公民館～７０年の黎明」山岸弘明

②市原の歴史（内容調整中）　宮本敬一

③八幡と飯香岡八幡宮　平沢牧人

④⑴八幡の海苔養殖　佐倉東雄

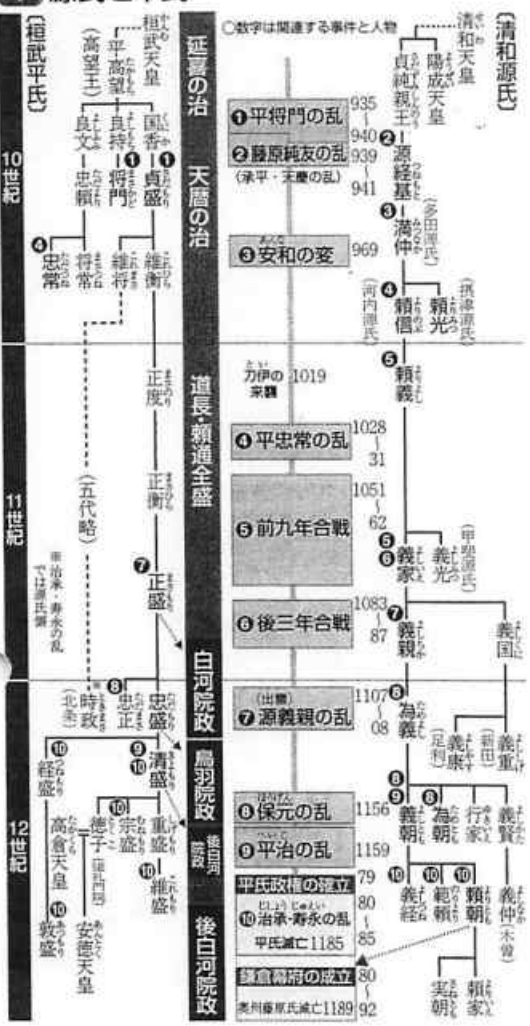
⑵八幡のむかし　　お願いできる方を探しています（自薦歓迎）

⑤菊間藩入封１５０年「菊間藩の成立から千葉県誕生へ～明治維新の市原地区」山岸弘明

特別企画　　希望教えてください

御願い＝八幡公民館の昭和時代の資料や写真（行事やサークル等）をお持ちの方、また、むかし話も教えてください

1 源氏と平氏



3-② 平将門の乱（935～940）

一族の内紛からはじまった将門の乱は、常陸国府襲撃により国家への反逆となった。関東一円を制圧した将門は、自らを「新皇」とする東国国家の樹立を企てるが、藤原秀郷・平貞盛に倒された。

桓武天皇--高望王┬国香──貞盛
　　良兼
　　良持（良将）-将門
　　良正
　　良文

◀平将門像　下総国豊田郡・猿島郡を本拠に広大な私営田を経営。

一族の内紛

931～ 父良持（良将）の遺領をめぐり伯父国香たちと争う。

935　国香を殺害。

❶ 国家への反逆

939　常陸国司の追捕を受けた藤原玄明を保護→常陸国府を占拠、下野・上野国府を制圧。

❷「東国国家」樹立へ

939　上野国府で「新皇」に即位。関東諸国の受領を任命。

❸ 乱の鎮圧

940　下総猿島で押領使藤原秀郷・平貞盛に敗れ、討死。

2 平忠常の乱（1028～31）

▲解説　1028（万寿5）年、上総国の在庁官人平忠常が土豪らを率いて安房・上総の受領館を襲撃。乱は房総半島に広がったが、源頼信が追討使になると、これに降伏した。頼信はこれを契機に東国武士とのあいだに主従関係を築いていく。

▶将門の首塚　首塚は、東京駅の近く、高層ビルが建ち並ぶ一角の樹木に囲まれたなかにある。東京都

歴史探偵局

流されてラッキー!? 頼朝を育てた蛭ヶ小島

そもそも平治の乱で父・義朝を亡くした頼朝は、「謀反人の息子」として死刑となるはずだった。その頼朝の命を救ったのは平清盛の義母・池禅尼である。頼朝少年の姿かたちが早くして失った自分の息子（清盛の異母弟）に似ていると、禅尼は清盛に対して命乞いをした。一度は断った清盛であったが、「亡き夫（清盛の父・忠盛）が生きていたら、こうもすげなくあしらうこともないのに」と泣き叫び、湯水を断って命がけで助命嘆願をする義母を断れない。清盛は渋々折れ、この少年を伊豆蛭ヶ小島（現・静岡県伊豆韮山の辺り）へ流すことにした。

頼朝は14歳から34歳までの間、20年も流罪人として蛭ヶ小島で過ごした。禍福はあざなえる縄のごとし。この地に流されたことは、かえって頼朝にとって躍進の種となった。1つには地方在住の「武士」というものについて学べたことが挙げられる。直情径行、都人とは異なり、おのが力を頼んで素直に人に従わない坂東武者という人種について、また彼らの不満や求めているものがなんであるかを理解したことは、「武門の棟梁」としての資質となった。

もう1つは、この蛭ヶ小島のすぐ近くにいた北条一族である。頼朝が30歳をすぎたあたりであろうか、彼は北条の娘・政子と恋におちた。いくら恋愛のこととはいえ、娘を「大罪人」に嫁がせるなど下手をすれば一族が滅びる。しかし北条の頭目・時政は頼朝に政子を嫁がせ、北条一族は頼朝の重要なパトロンとなった。後の鎌倉時代にあっては、幕府の要職に人材を輩出し続けた北条一族。この優秀な一族を味方に付けたことは、頼朝にとってこの地で得た何よりのものであったに違いない。

現在の蛭ヶ小島に建つ碑。小島といっても当時は川の中州であり、絶海の孤島ではなかった。北条氏の館は目と鼻の先であった。

神奈川県鎌倉市源氏山に建つ源頼朝銅像。北条時政は平家滅亡を見越してか、鹿ヶ谷の陰謀（未遂に終わった反平氏のクーデター）の翌年、1178年（治承2年）、頼朝という源氏の貴種に娘を嫁がせた。

1）「皇族賜姓」で生まれた「桓武平氏」～房総平氏の源流

①平安時代の後期＝中央集権国家の体制が整えられた平安時代は貴族の時代であった。藤原氏は長年にわたって天皇と姻戚関係を結ぶことで権力を握った。「この世をばわが世とぞ思う……」藤原氏が栄華を極めた「摂関政治」は上級貴族に冨が集中する一方で「政治不在」が続いた。農民たちが土地を離れ、公領の私有化が始まる。やがて国司と開発領主（荘園）との対立や地方政治の混乱の中に豪族の武装化し、職業武士が誕生していった。その武士団の代表が桓武平氏であり、清和源氏であった。

＊平氏＝平安初期に皇族賜姓によって生まれた姓氏。桓武、仁名、文徳、光孝の４平氏のうち桓武天皇の孫高見王から始まる桓武平氏がもっとも栄えた。房総平氏の源流で、平清盛も一門・伊勢平氏だがとくに「平家」という

＊源氏＝嵯峨天皇以下９天皇から生まれた。清和天皇から始まる清和源氏は関東を基盤に勢力を拡大、頼朝が鎌倉幕府を開き、足利尊氏は室町幕府を興した。

②寛平元年（889）桓武天皇から平氏の姓を授けられたひ孫の高望王が上総介として着任、桓武平氏の祖となる。

③開発領主としての武士団の形成＝高望の子良文、良将、国香とその子孫は、地元に定着して房総の地で勢力を拡大する。田畑を広げ、鉄を作り、馬を育てた。このころ国家の力が弱まり、領地や資産をめぐる争いが各地で続発していた。房総の武士たちはより強力な武士団と主従関係を求めて平氏と結んだ。

＊関東に広がった桓武平氏を坂東平氏、房総地方を本拠とした良文流を「房総平氏」という

④承平５年（935）、下総猿島（茨城県）を本拠とした良将の子・平将門は国司の無道ぶりを訴えた常陸の豪族とともに「将門の乱」を起す。常陸国府を焼き払い、下野、上野の国府を占領して関東の大半を支配、「新皇」を称したが、平貞盛に本拠を襲われて滅ぼされた。

⑤長元元年（1028）、房総平氏の祖・良文の３代忠常が国司と対立して「忠常の乱」を起こす。上総・安房の国衙を占領、国人たちは忠常に加担して反乱は房総全体に広がった。朝廷の追討軍も撃退したが、信頼する源頼信が追討使に派遣されると戦うことなく降伏。京都へ連行される途中病死するが、頼信の穏便な扱いに感謝して源氏との絆が生まれた。この結果、源氏は東国に基盤を築き、「前九年の役」、「後三年の役」で安倍氏を破った源義家のころ房総武士団の多くを掌握していた。

東国武士が敗れた頼朝についたワケ

１１８０年（治承４年）８月、石橋山の合戦で壊滅した頼朝軍であったが、その後短期間で陣容は復活し、以前にも増して勢力を拡大していった。なぜ負けた頼朝に東国武士たちはついたのだろう。

平安時代の中期頃から、日本は武士と呼ばれる武装農民の国となっていた。天皇・公家を中心とした律令体制からの変換が求められたこの時代、平家のクーデター政権は武士による政権ではあったが、武士のための政権ではなかった。武士たちは、同じ武士でありながら貴族化し、権力をかざして威圧的に東国諸国に入り込もうとしていた平家を疎ましんじており、平家方の山木兼隆（やまきかねたか）を討った頼朝に賛同した。もちろんそこには頼朝の計画のうまさや呼びかけも功を奏したであろうが、うまく反平家の感情とマッチしたのだといえよう。

1180年 源頼朝の挙兵から鎌倉入りまでの動き

8月17日	挙兵。山木館（韮山町）を攻める
20日	伊豆を発し、土肥（湯河原町）へ向かう
23日	石橋山の戦いに敗れ潜走
28日	真鶴崎より船に乗る
29日	漁島（千葉県鋸南町）に上陸
10月4日	安西景益（館山市）を頼り、6日鎌倉に入る。
16日	鎌倉を出発。相模国（大磯町）へ
18日	黄瀬川（沼津市）へ至る
20日	富士川で平家と対陣する
21日	黄瀬川の陣に来た義経と対面
27日	佐竹氏を討つため常陸へ向かう
11月4日	常陸国府（石岡市）に入る
5日	金砂城（金砂郷村）攻略
17日	侍所を置き和田義盛を別当とする

2）始めての「武家政権」誕生～平清盛の権勢と源頼朝の挙兵

①栄華を誇った藤原氏が弱体化すると、白河院（上皇）、鳥羽院、後鳥羽院と続く「院政時代」となる。幼少の天皇に譲位し、上皇として後見する仕組みで100年間続いた。

＊院政は世界に類をみない特殊な政治形態である。「院庁」から出される「院宣」には天皇も逆らうことはできない。院の力の背景に直属の平氏と源氏の武力があった

②院の後ろ盾をもった武士団は確実にその勢力を伸ばしていった。崇徳上皇と後白河天皇兄弟の権力争いに端を発した「保元・平治の乱」は、代理戦争としてそれぞれの所有軍隊であった源義朝と平清盛が戦った。

③後白河天皇を勝利に導いた清盛はその論功行賞で、仁安２年（1167）太政大臣に昇進、鎌倉、室町、豊臣、徳川時代と700年間続く「武家政権」を誕生させる。清盛は娘を高倉天皇の后とし、子の安徳天皇が即位すると外戚として権勢をふるった。

＊敗れた源氏の義朝と嫡男・義平が殺害され、義朝の側室・常盤御前は３人の息子を伴って清盛に出頭、その美しさに心を奪われた清盛は息子たちを許し、側室にしてしまう

④「平家にあらずんば、人にあらず」清盛の「独裁政治」は「平家」一族以外の武士たちの反感を買った。

＊清盛は全国500か所の荘園を所有、国司となった一門や家人を通じて公有地を私有化し、「平家物語」は「平家知行の国半国を越えたり」と記した

⑤治承４年（1180）後白河天皇の第３皇子以仁王（もちひとおう）が「平家追討の令旨」を発するが、清盛に討ち取られる。

⑥しかし伊豆に流されていた義朝の子・頼朝はこれに呼応して挙兵した。
緒戦の「石橋山の戦い」こそ敗れて安房に逃れたが、房総には源氏に心を寄せる武士団が多い。ただちに体制を立て直して進軍を開始した。途中、上総氏と千葉氏を中心に関東の武士団が加わり大軍となって鎌倉に入った。

＊鎌倉は頼朝の父義朝も居城したゆかり地。南面に海、三方を小高い山に囲まれた天然の要害、都の城の地形を備えていた

⑦頼朝軍と平家軍が最初に激突したのは「富士川」であったがあっけなく終わる。戦意のない平維盛は水鳥の飛び立つ羽音をびびって退却、緒戦で平家の運命が決まった。

⑧治承５年、清盛は敗報の中、当時流行したマラリアで急逝する。武士として始めて政治の実権を握り、「傲岸不遜の敵役」として暗いイメージに包まれた「稀代の名将・政治家」の遺言は「頼朝の首をわが墓前にそなえよ」であったが、実現することはなかった

⑨大黒柱を失った平家は源氏の兵士に都を追われて西へ西へと敗走した。元暦２年（1185）壇の浦で義経率いる源氏と最後の戦いを挑んで敗れた。

後白河法皇

安徳天皇

源頼朝

平清盛

鎌倉

3）上総氏と千葉氏の分離～房総平氏

①房総平氏は平高望の３男良文に始まる。仁和２年（886）京都生まれ、庶子のため父の東国下向は外されたが、「平将門の乱」は鎮守府将軍、陸奥守として出羽国内などの鎮圧にあたった。上総、下総、常陸介を兼務、下総海上郡、阿玉郡に本拠に村岡五郎を称した。

②３代忠常は前出「忠常の乱」で敗れたが、降伏したことで嫡男常将の相続が許された。常将は白河法皇「院政」の直属武士団として貢献、上総、下総介で上総、下総、常陸守護職を兼ねた。本拠は上総国夷隅郡で香取郡東圧町の大友館にいた。舌状台地先端、標高およそ60mの連郭式山城であった。

③６代常晴ははじめ相馬郡にいて相馬五郎を称したが、甥の常重にこれを譲り、上総に本拠を定めた。ここに房総平氏家は２家に分離、上総氏を惣領家に千葉氏が独立した。

④上総氏をついだ常澄は国内開発を進め、在地領主を支配下に置いて積極的に勢力の拡大、上総国一帯と下総国の一部を支配した。

⑤一方、千葉氏祖を常重の父常兼とする考え方もある。本拠を大友館から上総国大椎（現在千葉市緑区）に移して大椎氏を名乗る。村田川上流域、標高およそ80mの舌状台地上に立地、土塁、空堀が現存するが、個人私有地のため立ち入りできない。

⑥大治元年（1126）次の常重が本拠を千葉館に移して名実ともに千葉氏となった。

＊菊間・若宮八幡宮旧蔵文書「千葉氏族臼井氏系図」は、大治元年常兼の終りに臨んで、２男常家を惣領家として上総介に、長男（庶子か）常重を下総介に、３男常康を臼井、４男常広を匝瑳、５男を海上、６男胤光を椎名に配した。これを常兼の六党としている

4）源頼朝をして父と呼ばしめた男～千葉常胤

①常重の嫡男常胤は元永元年（1118）大椎城（館）時代に生まれ、千葉城（館）に移った後18才で家督を相続したが、保元の乱、平治元年の乱で源義朝に与して敗れた。平清盛の時代、千葉氏は相馬御厨と橘庄などの所領を失い、ひたすら息を潜めた。

②治承４年頼朝挙兵のとき、常胤は齢63才を数えたが、待ちに待った瞬間だった。300騎を率いて市川の下総国府に駆けつけた。また市原の君塚で常胤軍を見た頼朝が「喜びを見たり」といったとする地名伝承や、千葉氏の案内で飯香岡八幡宮に戦勝祈願、千葉城に立ち寄った頼朝をお茶の水で接待した等の伝承がある。

③鎌倉を本拠とした頼朝の平家追討が始まる。常胤は源範頼に属して「一の谷の合戦」に加わり、その後豊後などで軍功を上げた。宿老代表として幕府創設に尽力、頼朝から「第２の父」と慕われた。毎年正月は必ず常胤の屋敷で新年を祝うなど、主従をこえた公私にわたる深い結び付きがあった。建仁元年（1201）没、長生きの82才であった。

⑤下総国守護職。その所領は下総、上総をはじめ、東北から九州まで20数か所といわれる広大な所領を獲得、鎌倉幕府屈指の御家人となった。常胤の子孫は「千葉六党」と呼ばれる６人の子供たちに引き継がれ、分家を繰り返して全国各地に広がっていった。

千葉城

千葉常胤

5）上総介は奉公深かりきも悪きことありて御勘当～広常謀反人として抹殺

①上総家は常晴、常澄の後に広常が出た。
房総平氏嫡流として代々上総権介（通称＝上総介）に任じた。一の宮玉崎を本拠に大柳館に居住、武士の精神的イデオロギーの結集の場である玉前神社の神的権威を背景に、上総国一帯と下総国一部を支配した在地領主として君臨した。

＊常晴の本領は相馬郷で、のち玉崎庄に移して武士団を形成した。玉前神社は景行天皇東巡の際に創建されたと伝わる古社で延喜式内社、古来から朝廷の崇拝が篤かった

②広常は保元、平治の乱は源氏に属したが、敗走する義朝から分かれて帰国、被害を最小限にとどめ、その後上総最有力在地領主、房総平氏惣領家として大武士団を組織した。
頼朝の挙兵では上総全域の武士団と下総の白井、匝瑳（そうさ）、印東氏など２万余騎を率いて参陣し頼朝の関東制圧を決定的なものとした。広常は頼朝政権における最大の軍事的実力者として重用されたが、頼朝に対して「下馬の礼」をとらないなど不遜の振る舞いが多く、また坂東の独立を主張して幕府内で孤立した。寿永２年頼朝は謀反の疑いを口実に殺害し、永久に史上から抹殺した。

＊吾妻鏡（治承４年９月）＝上総権介広常、当国周東、周西、伊南、伊北、庁南、庁北の輩等を催し具し、２万騎を率いて隅田川のほとりに参上す

②広常には、煮え切らない態度で隅田川まで進んだ頼朝にようやく追いつき、一喝されたこと、高慢で頼朝無視の言動など、悪いイメージが伝わる。広常の不評はのち謀反の疑いで暗殺され、幕府が編纂した「吾妻鏡」がその業績を抹消したことによる。広常は一族や上総の豪族をまとめるのに手間取り参陣が遅れたとはいえ、内戦状態であった上総の国人をまとめ、２万の大軍を動員した功績は揺るぐことはない。

③「広常なくして頼朝の挙兵は成らず、広常がいては頼朝の政権は確立されない」広常は幕府創設期の不安定な時にこそ重要な人材であったが、頼朝を無視するような傲慢なところ態度がめだち、また坂東の独立を主張して、うとまれる存在となった。

④寿永２年（1183）双六に興じていた広常と嫡子良常は、相手をしていた梶原景時、天野遠景、佐々木経高・高綱に不意をつかれて殺害された。

⑤祐筆平盛時「頼朝教書」＝上総介は奉公深かりきも、悪きことありて御勘当ありき。かように御計りあることこそ御本位なれ

⑥広常の遺領は悉く没収された。家臣団は解体され、頼朝直属の御家人として再編された。

上総広常

6）三浦与党として北条軍に攻め滅ばされる～上総介千葉秀胤の悲劇

①鎌倉武士の特徴に「御恩と奉公」がある。御家人は将軍に奉公する代わりに将軍が土地の所有権を保証した。

＊御家人＝鎌倉、室町時代、将軍譜代の家臣をいう

②鎌倉幕府は諸国に守護職、公領や荘園に御家人の地頭を配置した。当初守護の権限は大犯に限られたが、次第に権力を拡大して領主化、朝廷任命の国司と対立した。

＊地頭＝もとは公領や荘園の土地管理のための役人で、のち在地領主となる

＊国司＝朝廷が地方に任命した地方官。守、介、じょう、目の４等官が置かれ、役所を国衙、土地を国府と呼んだ。上総は「親王任国」（天皇兄弟、皇子領）で親王が守となった。介（権介）がトップで現地へ目代を派遣した

③後期の国府は「府中」と呼ばれ、権限は国衙領に限定された。上総府中は能満にあった。

＊飯香岡八幡宮の天正 18 年「豊臣秀吉禁制」は市原荘を「八幡郷、惣社、菊間、村上、山木、五井、府中、五所」と記している

④源頼朝の正統はわずか３代で断絶、妻政子の実家・北条氏が実権を握る。

＊猜疑心の強い頼朝は弟の範頼と義経を殺害、２代頼家は幽閉された伊豆で暗殺され、３代実朝も犯人頼家の子もろとも殺害されて源家は途絶えた

⑤広常の膨大な所領は和田義成、千葉常秀などに与えられた。常秀は千葉介３代胤正の２男で、広常の大柳館を本拠に上総権介となる。終生官位を固辞したが、その子秀胤は幕府創設の功臣・三浦氏の娘を妻とし、従五位上、評定衆に列するなど幕府内に勢力を振るった。この時点で千葉氏は下総、上総の両国を抑えた。

⑥しかし宝治元年（1247）北条氏の「三浦討伐」に連座し、大柳館は追討軍に包囲された。上総の御家人も雲霞のごとく集まったという。覚悟をきめた秀胤は館の周りに薪を積み上げて火をかけて自害、一族郎党 163 人が後を追った。

7）鎌倉中期から続いた足利氏との深いつながり～室町幕府と飯香岡八幡宮

①上総守護職は、鎌倉中期正嘉３年（1259）から鎌倉幕府の滅亡まで、のち室町幕府・将軍家の足利氏であった。

②足利氏は清和源氏嫡流、源義家の孫義康が下野足利に定着したことに始まる。義康は源

足利尊氏

足利義満

義満のみこし寄進を伝える
飯香岡八幡宮由緒本記

柳楯神事

氏一族の内乱「承久の乱」の戦功で上総、三河守護に補任され、本拠を三河に移す。次の義兼が執権・北条氏と姻戚関係を結び、以後鎌倉幕府に重きをなした。

＊年不詳、永仁ころ「足利氏所領番文」は下野国足利庄の本領のほか、上総国市東西両郡など諸国に散在する 34 か所の所領を記している。足利氏は上総国守護職としての支配拠点を国衙周辺に置き、足利氏の被官が奉行として統括した

③鎌倉幕府内での北条氏の威勢は次第に高まり、5代時頼、6代時宗、7代貞時のころ「独裁政治」となった。このころ幕府の要職や諸国の守護、地頭は北条氏が独占した。一族は政治を顧みず、遊興にふけりわいろや不正が横行した。

④足利氏8代高氏（尊氏）は密かに北条氏からの「政権奪取」を誓う。北条氏の命で「元弘の乱」討伐のため京都に上った機会に叛旗を翻し、幕府の京都本庁にあたる「六波羅探題」を攻略した。同じころ上野国新田郡を本拠とする新田義貞も鎌倉を落とし入れ、北条高時が自害して頼朝以来の「鎌倉幕府」が滅びた。元弘3年のことであった。

⑤尊氏はいったん「建武の中興」を目指す後醍醐天皇に従うが、武士政権をめざす尊氏には不満で、新田義貞、楠木正成軍を破って天皇を京都から追い出した。暦応元年（1338）自ら据えた光明天皇のもと征夷大将軍に就任して「室町幕府」を開いた。

⑥しかし吉野に下った後醍醐天皇は「南朝」を名乗って最後まで抵抗した。この戦いは3代義満の時代にようやく終息した。

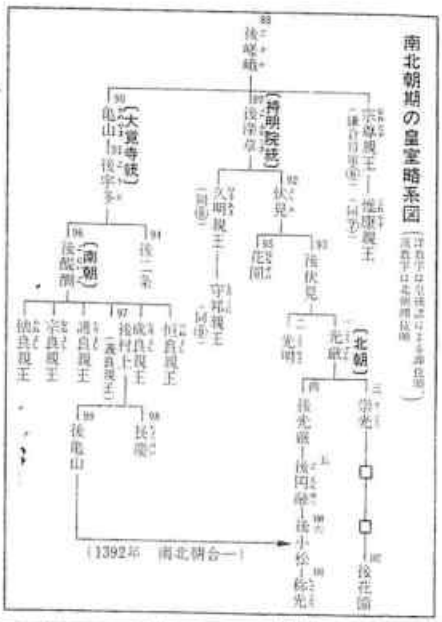
＊南北朝時代＝延元元年（1336）後醍醐天皇が神器を奉じて京都から大和国吉野に入ってから明徳3年（1392）までの57年間をいう

⑦室町時代の上総守護職は不分明の部分が多いが、少なくとも義満代は足利氏一門で鎌倉府関東管領職の上杉氏であった。

＊上杉氏＝鎌倉から戦国時代にかけて関東に覇をとなえた名族で、謙信、景勝とつないだ「米沢上杉氏 15 万石」藩主として明治維新に及ぶ。朝宗の名前は犬懸上杉氏の「関東管領」にみえる

⑧足利氏は鎌倉時代以来のゆかり地に所在した「市原八幡宮（飯香岡八幡宮の前身）」に源氏の氏神として帰依し、保護下にあった京都醍醐寺三宝院を別当寺として社様の発展に

後醍醐天皇



新田義貞

稲村が崎

東勝寺腹切りやぐら

尽くした。

⑨「飯香岡八幡宮由緒本記」には、足利氏が社殿やみこしを寄進している。
応安２年（1339）３代将軍義満＝宮殿を造営。造営奉行・上杉朝宗
至徳元年（1384）〃　　＝みこし４社を寄進。奉行・上杉朝宗、「柳楯神事」記載
嘉慶元年（1787）〃　　＝みこし幸行水ごり場に１の大鳥居造立。上杉朝宗幣帛
長禄３年（1459）８代将軍義政＝幣殿、拝殿を造立、本殿を修復

＊伝義満寄進みこし４社は数次の修復をへて現存、学術調査で室町中期建造が確認された

⑩応安８年（1375）「市原八幡宮国役庄役注進状」（三宝院文書）は上総国の郡ごとに造営料を賦課している。

＊注進。上総国市原八幡宮国役庄役事。国役分。御宝殿一宇、御神輿宿一宇、左右六所宮二宇、御宮殿三宇、内廻廊三十六間、正面鳥居、中門一宇、左右屏屋二宇、大門一宇（以下省略）

⑪一の宮に相当する権限の行使は、足利氏から鎌倉府執権として派遣された上杉氏が足利将軍家の氏神という経緯を忖度したことも考えられる。

８）「坂東８平氏」から「守護大名」「戦国大名」へ～名門千葉氏の盛衰

①頼朝の幕府創設に貢献した常胤は鎌倉御家人の中でもことのほか重く用いられた。嫡流は代々下総国守護職に任じられた。常胤の子は「千葉六党」と称された。長男胤正は宗家を継いで千葉介に、２男師常は相馬氏に、以下下総各地に点在して一族が結束した。鎌倉幕府創設にかかわった有力御家人の多くが北条氏によって討伐されたが、千葉氏は平安以来の名門家として室町時代につないだ。

＊千葉六党＝相馬（師常）、武石（胤盛）、大須賀（胤信）、国分（胤通）、東（胤頼）氏

＊鎌倉初期の所領＝千葉庄、千田庄、萱田郷（八千代）、吉橋郷（〃）、埴生庄（成田）、印東庄。上総は玉前庄、伊北庄、伊南庄、望東郡金田保、長南郡多名気、武射郡南郷、同戸田郷、長生郡米満、同角田、大椎郷、時田。ほかに肥前、豊前、薩摩、陸奥国など

②文永、弘安の「蒙古襲来」に際し、11代頼胤が出陣したが戦病死、弘安の役は嫡男宗胤が出兵した。宗胤の長男胤貞は幼少であり、守護職は宗胤の弟・胤宗が代行して次の貞胤に引き継がれた。ここで騒動が起こった。

③建武２年（1335）おりしも足利尊氏、新田義貞の挙兵で鎌倉幕府が倒れた。南北朝の戦いは千葉氏の両派が足利、新田軍に分かれて直接戦った。千葉と千田の戦いは北朝・足利方の胤貞軍が勝利したが、その胤貞が急死し、敗れた貞胤も北朝に寝返った。

④足利幕府が成立、幕府は貞胤の守護職継続を認めた。しかし、すでに昔日の権勢はなく在地勢力が台頭していく。また惣領家の地位を失った胤貞の子孫も家臣の扱いで衰退した。肥前に残った宗胤の子孫・九州千葉氏も鍋島氏によって滅ぼされた。

⑤室町中期の康正元年（1455）関東動乱の時代ともいえる「享徳の乱」が起こる。
この年、一族の馬加康胤が千葉宗家を千葉城に襲い、胤直とその子胤宣は敗れて千田（多古周辺）で自害した。自らは市原・村田川で幕府軍に追討されるが、子孫は本佐倉城で宗家を名乗り、一方胤直弟の子実胤、自胤は市川城にあって馬加系宗家と対立した。

⑥房総の地は戦国の様相となった。勝胤の時安房の里見氏の勢力に押され、小田原北条氏に従って属下になる。後期は部下も統率できない。邦胤は家臣に殺され、重胤は幼少で、母の実家・小田原城で生活した。天正18年（1690）豊臣秀吉の「小田原征伐」で小田原城に籠城、後北条氏とともに滅亡した。

⑦今回は「中世前期」まで。室町時代から戦国時代、織豊秀吉時代の房総史は機会を改めて紹介します。

以上

千葉氏族
臼井氏系圖

人王五十代
桓武天皇

高望王 一品式部卿
第五皇子
文德天皇勅賜筆重仁書
三年八月四日薨
御歳六十八

高棟 大納言 正三位
天長二年閏七月賜平姓子
孫為公卿畧之

高見王
無位無官早世然後為王卿
相列侍神宴
從五位下 上総介

高望 正親正
宇多天皇寛平元年始月始
賜平姓

良文 鎮守府將軍
陸奥守
醍醐天皇御宇奉
勅命下向東列討逆賊勇戦
誉從是為武臣
同宇敦上列與同族有相戰是
時有 [illegible]見大人吾藤擁護
子孫世々尊崇以為頼守神也
東國八幡氏祖所後事[illegible]

忠頼 初名經明 陸奥守
上総介 千葉常胤等父

忠常 上総介 武蔵押領使
長元年中依浮説而為朝敵
對征討使相闘有年既而服源
頼信之言赴汝途中罹病而死
于濃州門嫡子常將家 [illegible]

常將 從五位下 上総權介

常長 從五位下 下総權介
源頼義同義家討奥賊之時勲
海道大手大將進發后
常兼 從五位下 上総下総介
寛治年中有功而補上総介兼常
陸守護職任上下総列代民号富豪
大治元年佐常重為継嗣補下総
介城于千葉庄使常家補上総介
以下之男子等各授領所城于其地
[illegible]武諸曰欲有違背言約之旨勿
不守節義至永々世々屬于宗家
須臾以違背矣于世稚之常兼之
六黨同二月十日拝 下総介

常重 從五位下
号千葉大介
居城于上総國千葉庄兼預當國
検非違所之務也

常家 上総介
居城于上総國長柄郡一之宮

常明 上総權介

常胤 千葉介
千葉祖
治承年中録倉草創時源頼
朝卿依恃之如父母退東列之
讐討四海之敵其勲功許多
殊厚賞之補下総國守護職
氏族亦悉仕幕府所顕庸矣
臼井六郎

常康 臼井元祖
居城于下総國印幡郡臼井此地
堅固高峰雖言之要害故築平城
防當時西北之衆敵矣久安二年
六月二日卒歳四十八

常義 通瑳八郎
居城于下総國通瑳郡子孫繁栄

常衡 海上與市
居城于下総國海上郡

胤光
居城于下総國千葉郡椎名郷
後号帝昌 臼井太郎

常中 [illegible]
與千葉介共仕于頼朝卿屢盡
軍功就中文治五年秋奥州征
伐之時常胤為海道大將軍
擁具氏族後向為常世屬之
勇功依頼朝卿娶伊東祐親
入道女

康胤 臼井餘一
仕于頼朝卿三代將軍家

昌胤 臼井六郎 九郎將監
母大多和義成女
承久年中屬千葉八胤親在東
軍列[illegible]

高胤 臼井七郎入道
高成剃
建長三年於佐倉自作造閑院
殿上重故被命其材於鋪國之
時高胤在其中進之

家胤 臼井九郎

定胤 臼井太郎
寛治元年上総介秀胤為選
後於居城自殺定胤兄弟
屬秀胤於彼城中自盡

友胤 臼井次郎

女 千葉介時胤妻

信胤 臼井四郎

弘胤 臼井六郎

通胤 臼井四郎

頼胤 臼井四郎

清胤 臼井太郎

光胤 臼井四郎

祐胤 臼井四郎
正和三年八月十日死

胤氏 志津次郎

興胤 臼井太郎 從五位下左近將監
初行胤 童名竹若丸

臼井氏族千葉氏族系図 旧蔵 八幡神社

12

67

以下省略

(第3種郵便物認可)　東京新聞(千葉版) 2017-8-31

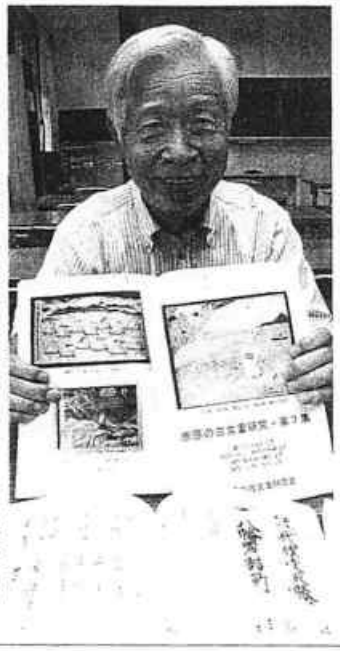
「八幡港」の繁栄 はっきり

市原の研究会、記録集を出版

明治期の帆船運航史料を解読

明治初期、海運で栄えた「八幡港」（現・市原市八幡）の帆船の運航記録をまとめた冊子「市原の古文書研究　第七集」を、県内の有志でつくる「市原の古文書研究会」が自費出版した。同会のメンバーが専門家の協力を得ながら史料約八百点を解読。八幡港から米や炭を東京へ運んだ当時の様子が分かる貴重な記録集となっている。（中山岳）

八幡港は、江戸時代から昭和初期まで市原市の飯香岡八幡宮の近くにあり、木更津港と並び上総地方を代表する港だった。「五大力船」と呼ばれる三～五人乗りの中型の帆船が行き交い、江戸・東京などへ物資を運んでいた。



明治初期の「八幡港」の海運の実態についてまとめた冊子「市原の古文書研究　第7集」を持つ山岸弘明さん＝市原市で

八幡港に関する史料は、一八七三（明治六）年から一年間、八幡港を含めた地域一帯の行政を仕切る戸長を務めた市川家に保管されていた。当時、船主が船を出すために戸長に提出した「出帆届」や、積み荷の明細などを記した「出帆免状台帳」などがあった。

冊子によると、七三年十月から約一年で、八幡港から五大力船が出港したのは五百四十七件。運んだ積み荷は、米が一万二千三百俵余、炭が二十万一千四百俵余。他に薪十二万一千九百束余を運んでいた。出帆届などの史料の写真や、五大力船の絵図なども掲載している。

市原の古文書研究会の山岸弘明代表(七九)＝市原市八幡北町＝らメンバー八人が約四年前、市川家から史料を借り、八幡公民館で大学教授や博物館学芸員らと協力して解読を進め、冊子にまとめた。

山岸さんは「東京湾の五大力船についてまとまった史料が見つかったのは、これまで例がない。八幡港の記録から、当時の海上輸送の一端が明らかになった」と話している。

冊子はB5判、三百四ページで約百五十部作成。市販していないが、同会は希望者に二千円（送料別）で提供する。問い合わせは、山岸さん＝電080（6668）2237＝へ。

市原中央・八幡図書館蔵書をご利用ください

平成29年度　千葉市史研究講座

千葉市域や近隣地域の歴史を学ぶ

第1回　原始古代・中世　6/24（Sat.）

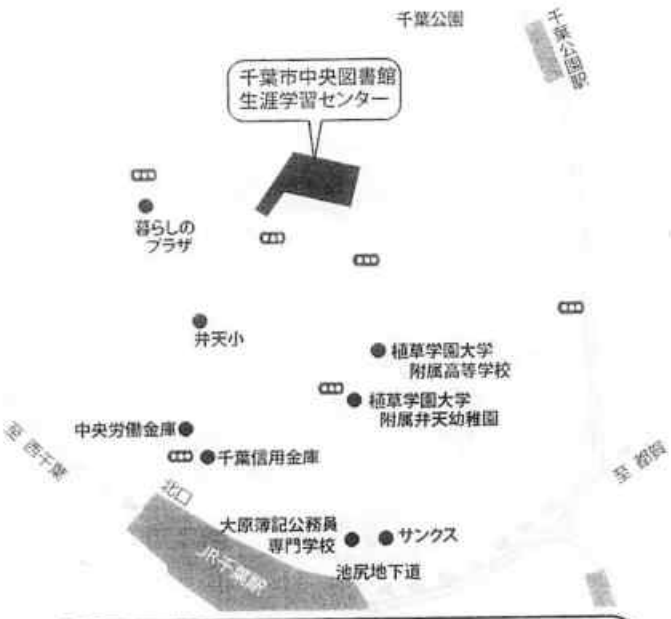
講演1　13:30 ～ 14:50
房総の古代鉄器文化をさぐる ―― 千葉市域の発掘調査成果を中心に ――
神野　信 先生（千葉県教育庁文化財課）

講演2　15:10 ～ 16:30
戦国後期の本佐倉城と交通
遠山 成一先生（千葉県立佐倉東高等学校教諭）

第2回　近世・近現代　7/22（Sat.）

講演1　13:30 ～ 14:50
上総八幡湊と五大力船 ～市川本店、飯香岡八幡宮文書を中心に～
山岸 弘明先生（市原の古文書研究会代表）

講演2　15:10 ～ 16:30
埋立てはじまる ―― 日立航空機から川崎製鉄へ ――
池田　順 先生（千葉市史編集委員会委員長）



JR千葉駅・京成千葉駅から徒歩約8分
千葉モノレール　千葉公園駅から徒歩5分
お車でのご来場はお控えください。

会場：千葉市生涯学習センター
2階ホール　　定員：200名

◇◆お申し込み方法◆◇

往復はがきでのお申し込み（**電子申請**もご利用可能）。
はがきに
住所・氏名（ふりがな）・電話番号・返信用の宛先
を明記のうえ、千葉市史編さん担当までお申し込みください（下記問い合せ先参照）。
応募多数の場合、抽選となります。予めご了承ください。
千葉市立郷土博物館のHPもご覧ください。

千葉市立郷土博物館　検索　CLICK!

応募期間　5/15～5/26（必着）

＊一回のご応募で二日とも受講できます!!

問い合せ先：千葉市史編さん担当
〒260-0856　千葉市中央区亥鼻1-6-1
千葉市立郷土博物館
℡ 043-222-8231

千葉市史研究講座

上総八幡湊と五大力船

～市川本店、飯香岡八幡宮文書を中心に～

千葉市生涯学習センター２階ホール

平成 29 年 7 月 22 日

市原の古文書研究会代表　山岸弘明

目の前に真っ青な大海原が広がり、富士のすそ野が雄大な姿を見せました。
遠く近く白い帆をふくらませた「五大力船」が行き来しました。
かつて八幡は、上総の水陸交通要衝に立地、
「五大力船」を中心に「市原地区最大の港町」として発展しました。

飯香岡八幡宮

市川本店

飯香岡八幡宮　大絵馬
八幡村五大力船船掛え図（宝蔵庫常設展示大絵馬＝横１５４、立て９３cm）
奉納、海上安全、寛政六甲寅三月十五日
上総国八幡村五大力船江戸間屋角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門
初代登亭北寿画。ピカソに影響を与えたとされる葛飾北斎の門人で、北斎の洋風版画を引きついで個性的な作品を残した。八幡宮の祭礼での船掛えを描いている。船名や帆印、乗組員や積荷、手信号など細かく描写されている。

史料提供
千葉市稲荷町内会
（五田保湊文書）

八幡・市川本店文書②
明治６、７年、千葉県船改め所八幡宿戸長文書群
市原市八幡１０３７

市川本店は飯香岡八幡宮創建にさかのぼる旧社家で、江戸時代後期から醤油醸造と酒類元卸を兼ねた。代々三太夫を名乗ったが、江戸時代までの系図は不明確で明治時代以降
①大造（藤原常忠＝大和、大和正、松太郎長男＝肖像画）文化８年～明治１４年
②甚太郎（藤原常正、大造長男）天保７年～明治１９年
③栄太郎（三太夫、甚太郎長男）万延元年～明治２９年
④石三（石蔵、甚太郎３男）慶応元年～昭和３３年
⑤得三（石三４男）明治４０年～平成６年
と続き、現在は恵三、信三の両氏が江戸後期からの現存住宅に居住されている。

当家『明治５壬申正月吉日、諸用留め』には、「県庁御達しにつき副戸長広瀬徳治方まで出生年月書き出し候」と、次の家族名簿を挙げている。これが明治（壬申戸籍）の届け出で、今集（港内船改め所）を担当した八幡宿戸長市川甚太郎の家族構成であった。

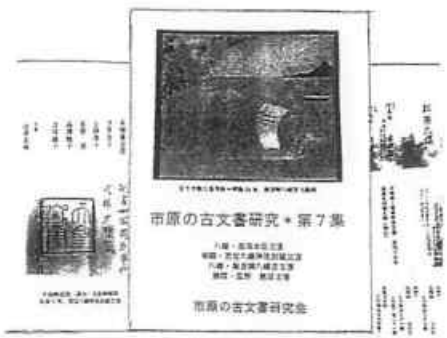
文化８辛未年１０月１５日出生　市川大造　当申６２才
天保７丙申年９月１１日出生　父　甚太郎　当申３７才
天保１４癸卯年９月２３日出生　嫁　たき　当申３０才
嘉永６癸丑年４月２７日出生　娘　いし　当申２９才
万延元庚申年６月２日出生　孫　栄太郎　当申１３才
元治元甲子年９月１０日出生　孫　よし　当申９才
慶応元乙丑年１１月２９日出生　孫　石蔵　当申８才
また、同６年『八幡社元境内除地上知地割り帳』は第４２番宇南町、居住人市川大造、屋敷（醤油醸造所）２反１９歩、横１８間、長さ３４間４尺８寸
同番宇南町、同人、屋敷１畝１３歩
明治４年９月菊間県御庁あて「御管轄所・八幡宿書き上げ」は
「当未年醤油作り込み高」御免許高３７５石の内
一、造り高２２０石　市川甚松
「当未年醤油作り込み高」御免許高２０石、
一、造り高３０石　市川甚松　を記している。

当家では数万点におよぶ古文書類などを所蔵、その構成は
①旧八幡村基本文書（村鑑明細帳、絵屏、旗本領、菊間藩関係資料）
②八幡宿戸長役場文書（戸籍、地租改正など千葉県初期の原史料）
③醤油醸造、酒類販売関係資料
④飯香岡八幡宮関係資料（由緒本記撮影写真＝原本は散逸）
⑤戦前期八幡地区撮影１６㎜フィルム、戦後期八幡地区撮影写真
⑥市川家の個人的文書
に大別される。前集は①の旧幕時代資料を掲載、今集は②の八幡宿戸長役場関係資料から「船改め所文書群」を紹介する。

「広辞苑」による戸長は「明治初期、町村制施行以前に、町村において町村の行政をつかさどらせた吏官」、戸長役場は「戸長の事務を取り扱った所」としている。のちの町村長とその役場にあたる。

明治新政府は明治４年７月「廃藩置県」を断行、八幡村（宿）は菊間警察署から菊間県となったが、１１月には上総、安房１５県が合

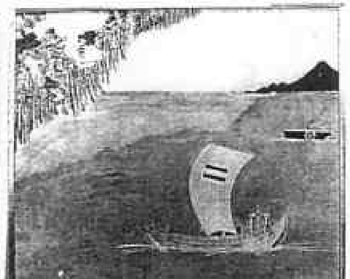
市川大造（藤原常忠）



市原の古文書研究＊第７集
八幡・市川本店文書
菊間・若宮八幡神社旧蔵文書
八幡・飯香岡八幡宮文書
勝間・佐野　彫家文書
部分抜き刷り

飯香岡八幡宮

嵐の中をつき進む五大力船
明治24年＝大絵馬



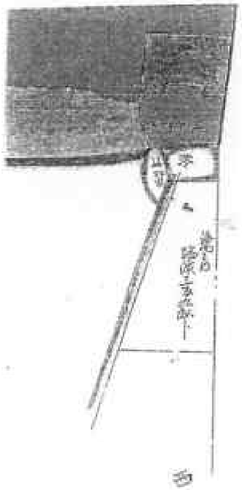
五大力船と蒸気船
明治36年＝大絵馬

67みお拝借地証文（慶長19年＝小竪帳）

当時八幡村を所領した本多正信、本多正純、永井尚政3家の蔵屋敷年貢米津出しみおの借用証文。発行者は村役人総代（名主）の善六、利兵衛と津出しを担当する蔵地守善右衛門の3人であて先は八幡宮役所。後の南町みお、当時海面干潟地、現在白金通りから市原看護専門学校、高等職業訓練所から市原海岸通りの埋め立て工場地帯にかけて長さ480間、上幅12間、底幅8間のみお筋（人工運河）と白金通り八幡保育園、市原支所前あたり、当時小字山岸、南北30間、東西18間のみお（津出し港）で、冥加金（使用料）は年間1両となっている。

南町みお拝借地証文　（慶長19年）

「飯香岡八幡宮由緒本記」（元禄10年）にみる八幡湊南町みお創設記録



南町みお周辺図
明治7年＝八幡宮あら絵図

併して木更津県が誕生した。翌5年3月「大小区画制」移行にともない「第33区4画」となり、4月、初の「戸長選挙」が実施され、八幡宿の初代戸長に松田嘉一郎が選出された。

明治6年6月木更津県と印旛県が合併して千葉県が発足。区画は第5大区2小区に変わった。区長は官選で松田嘉一郎が繰り上がり、新たに行われた戸長選挙で市川甚太郎が当選。翌7年7月、戸長の選出方法が官選に変わったことで退任した。

市川本店の「戸長文書」は甚太郎が戸長を勤めたわずか1年間分だけであったが、この間、「壬申戸籍」、「地租改正」、「徴兵制度」、「学制公布」と小学校の開設、「税制改革」などの大変革が矢継ぎばやに実施された。中でも注目史料は八幡と東京を結んだ小回り廻船「五大力船」の「千葉県船改め所文書群」で、運航記録や積み荷明細などを記録した「出帆免状台帳」は1か年365日にわずか17日たりない348日分を数えた。

明治維新直後、東京湾内の通船を含む「川船行政」は変遷が激しくほとんど解明されていない。明治4年太政官は税収確保のための「税制改革」を実施。同6年1月の「布告第8号」「港内取締り規則」は、商船の出入港に際して「積み荷目録」「船免状」「船税鑑札」を検査し、「停泊税」を徴収するもので、各府県に「府県船改め所」が設置され、事務実務は主要港湾を持つ宿村の戸長に移管された。

出帆と積み荷、書類と物の流れを参考図に示した。八幡港からの出帆手続きは、

①届出人（船主）は「港内船改め所」業務を担当する戸長にあて、船名、積み石、船主氏名、乗り組み人、船頭名、積み荷明細、船客数、目的地などを記した「出帆届け」を提出する。

②届出人はまた、戸長（役場）は手続き内容を確認した上、「出帆免状控え」に記載すると割り印、許可印を付した「出帆免状」を交付する。

③船頭は積み荷とともに「出帆免状」を持参、目的地の「港内船改め所」に提出する。

④船税は停泊税、出帆免状代金で戸長役場が徴収した。

川船行政は明治8年2月「国内回漕規則」の制定とともに「内務省駅逓寮」所管となり、港付き戸長はその任を解かれた。

実は明治6、7年の1年間だけ存在したこの制度は、村（戸長役場）が「五大力船」を管理した唯一の期間でもあった。該当する「港内船改め所」は五大力船が活躍した東京周辺だけでも数十港に達したが史料は極端に少なく、これまで五大力船の「運航状況」や「積み荷」などの詳細は不明であった。「文書群」は八幡港という限られた範囲とはいえ、ほぼ1年間に及ぶこれらのデータが完全な形で現存していることで、貴重な郷土史料といえよう。

社家職名家筋書き上げ（明治4年＝飯香岡八幡宮文書複写資料）

最初に市川家の家系を顕わす明治4年飯香岡八幡宮文書「職名、家筋書き上げ」から解き進める。2年後、全国の「社家衆」は解職されるので最後の社人名簿といえる。神主の市川三郎家は「当社長（おさ）職家筋」、社家の市川一学家と市川大進家をそれぞれ「神主家2男分家」「3男分家」とする。同社伝承によれば3家は第10代崇神天皇の後胤で、創建以来連綿と神職を相伝されたという。長職家はのち絶家となり、現在の神主は2男分家子孫、市川本店は3男分家子孫にあたる。

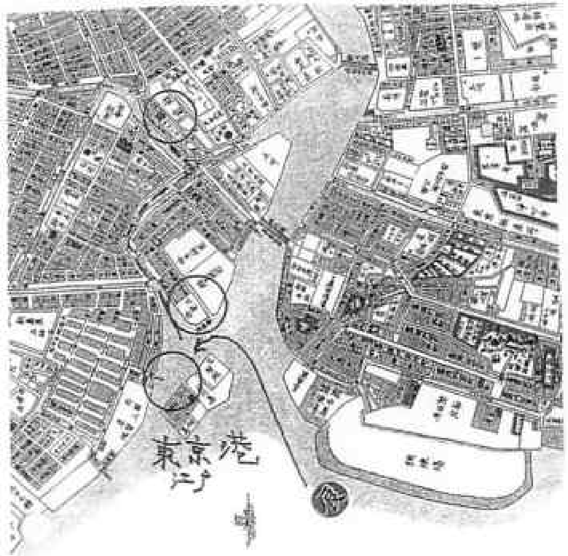
市川甚太郎、戸長、副戸長辞令（明治6年、8年＝小紙）

明治6年7月、8年11月、千葉県創設期の八幡宿戸長、副戸長辞令。小型厚紙に「上総国市原郡八幡宿戸長申し付け候こと」、「第5大区2小区副戸長申し付け候こと」ついで年月と千葉県を記し、公印はない。

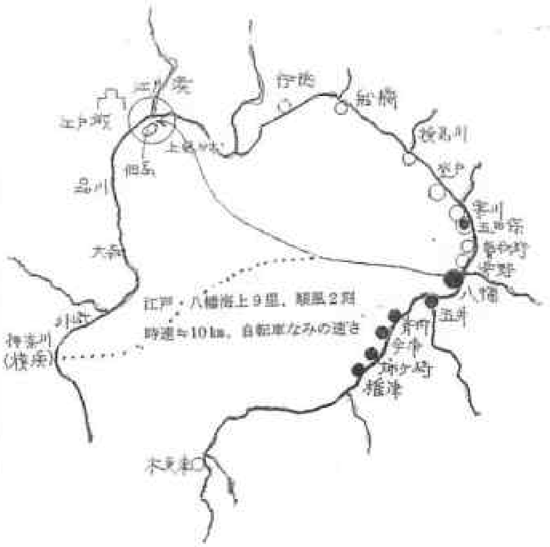
木更津県庁、八幡宿の五大力船台帳（明治6年＝竪帳）

表紙は「明治6歳第4月、木更津御県庁船印鑑連名帳、33区八幡宿」とある。この年1月、「港内規則」が制定され、戸長（役場）に「港内船改め所」の実務が委任された。台帳は木更津県庁時代に作成され、千葉県庁時代の朱書き後筆がある。明治6年4月現在の五大力船は

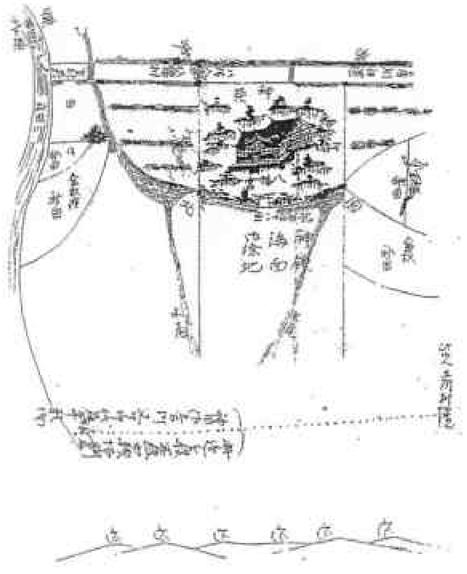
船名	積み石	乗り組み	船主	（船頭、はしけ船数）
①高砂丸	140石	5人	松田喜三次	（岩田万蔵ほか、1）
②八幡丸	80石	3人	木村善助	（直乗り、なし）
③長寿丸	120石	4人	宮原六郎平	（直乗り、1）
④明王丸	60石	2人	大宮常太郎	（直乗り、なし）
⑤海世丸	80石	3人	白鳥留次郎	（直乗り、1）
⑥住吉丸	100石	3人	丸長次郎	（白鳥半次郎、1）
⑦大神丸	100石	4人	永野善五郎	（永野丑太郎、2）
⑧稲荷丸	120石	5人	松田豊吉	（渡辺伝十郎、3）
⑨神力丸	120石	4人	石井仲蔵	（直乗り、1）
⑩栄徳丸	80石	3人	小林七次郎	（直乗り、なし）
⑪明宝丸	90石	4人	藤本五郎治	（直乗り、なし）
⑫千年丸	100石	3人	伊藤久次郎	（直乗り、なし）
⑬永生丸	100石	4人	白鳥喜八	（直乗り、1）
⑭神在丸	115石4斗	3人	城谷伴蔵	（直乗り、1）
⑮神徳丸	100石	4人	石橋清次郎	（直乗り、1）
⑯文久丸	100石	3人	白鳥喜一郎	（石井栄吉、1）

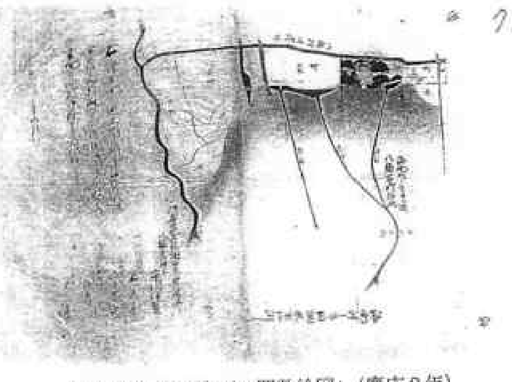


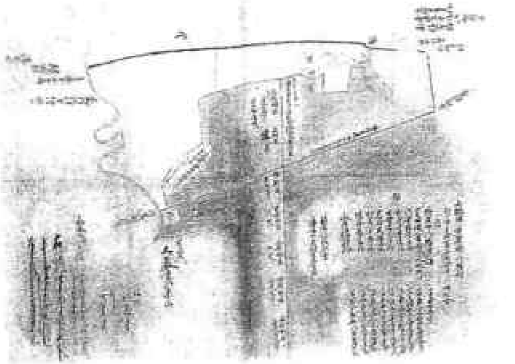
明治４年「東京大絵図」の江戸東京湊



市原、千葉周辺の主要湊と江戸航路のイメージ


開発一件「留め記」（慶応元年）にみる船溜り


「八幡宮御除地海面の間数絵図」（慶応２年）
にみる八幡湊のみお筋


「八幡村八給入会海面絵図」（嘉永２年）
にみる満潮時の海の深さ

小網町

日本橋川

江戸湊のターミナル

みお筋跡

浜本町船溜り跡

浜本町の町並み

⑰住吉丸　９０石　３人　豊本権次郎　（直乗り、なし）
⑱平寿丸　８１石　３人　北嶋巳之吉　（直乗り、なし）
の１８艘で、ほかに「５０石以下船」として、栄徳丸（茶船、鈴木与平次）、神明丸（茶船、荻原文三）、仙元丸（茶船、松田喜三次）、押し送り船（北嶋巳之吉）、茶船（岡野喜蔵）を記載している

参考＝（　）内に後出「出帆台帳」「はしけ船所持の者」から船頭名とはしけ船数を付した

五大力船の積み石（積載量）は最大１４０石、最小６０石、平均は９８・７石、船主の所有船数はそれぞれ１艘、複数艘を持つ大船主はない。乗り組み人は１４０石クラスが５人、１００石クラスはおおむね４人、８０石クラスはおおむね３人となっている。大型船は沖船頭に頼み、中型は船主が船頭を兼ねる直乗りが多い。

後出「出帆免状」では明治７年６月以降に「明治丸」が登場する。船名から新造船と考えられ、本来はこの台帳に追加登録されるべきものであった。

⑲明治丸　５６石　２人　小川亀吉　（直乗り、なし）

はしけ船所持の者書き上げ（明治６年＝竪帳）

「艀（はしけ）船」は艀と停泊中の本船の間を乗客や貨物を載せて運ぶ小舟のことをいう。八幡港（湊）は遠浅のため港内での荷役作業ができず、海上ではしけ船が中継した。記載された２２艘の内訳は底平の「平田船」が１１艘、小型荷物船「茶船」が６艘などであった。五大力船船主の所有分があわせて１２艘、永野豊太郎と松田豊吉が２艘、松田喜三次、白鳥留治郎ほか各１艘であった。

八幡宿戸長あて「出帆届け」（明治６年＝中紙）

船主から提出された届け書の原本。届け出日は出帆前日で一部が当日または前々日であった。書式は

「出帆届け　　　届け出者氏名
日本形
一船名
積み石
乗り組み人、沖船頭氏名または直乗りの別。外何人
積み荷（明細スペース）
ただし送り状何通
船客
右の荷物どこそこまで積み送り候につき免状願い上げ候。
明治六年何月何日
氏名（印）
戸長
市川喜太郎殿　　」

明治６年３０件、明治７年１５４件の合計１８４件を保管、紙面の都合で一部を紹介した。

八幡宿「出帆免状」（明治６年＝中紙）

八幡宿「港内船改め所」が発行した「出帆免状」。積み荷とともに目的地に持参されたので本来は地元に残らない。現存の３件は

①明治７年３月２日、横浜吉田町近藤清蔵船、仙元丸。武州久良岐郡横浜船改め所あて　大きく×印、出帆日を変更、書き直しか

②〃　３月９日、松田喜三次船、高砂丸。東京府船改め所あて＝この分風シケのため書き直し候

③〃　３月１６日、豊本権次郎船、住吉丸。東京府船改め所あて＝この分２２日出帆に書き替え候こと

また、市川本店文書Ｂ３―１７５に反古紙として裏面を再利用した明治６年１２月２６日付け「出帆免状」は「丸長治郎船、住吉丸、積み荷、笠２４本、輪１２本、あて先神奈川県船改め所」を記す。「出帆台帳」によれば、本製品は同日東京府宛てに出荷されており、あて先変更で取り消されたものといえる。

木版削り用紙に加筆、書式は

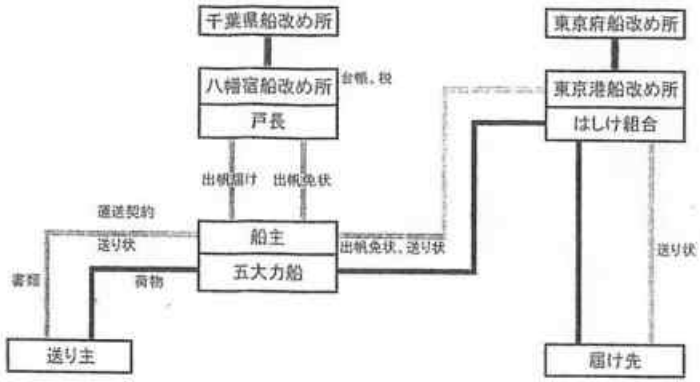
「　　出帆免状
（船名スペース）
一　積み石
乗り組み人
積み荷（明細スペース）
ただし送り状
船客
右は本日当所出帆、その港へまかり越し候段届け出で、候あいだ免状相渡し候なり。
上総国市原郡八幡宿
明治　年　月　日
（あて先スペース）船改め所　　」であった。

東京府船改め所「出帆免状」（明治６年＝中紙）

東京府船改め所が発行した「出帆免状」は八幡港への「帰帆免状」といえる。東京港への「出帆免状」と同数発行されたが、４０％にあたる明治６年分１０２通、明治７年分１１９通の合計２２１通が現存している。出帆免状台帳の出帆日と帰帆日を比較することで船ごとの運航状況がわかる。後出の考察にまとめた。

東京府の「出帆免状」は前半が手書きで、届け出内容、船名、積み石、船主、乗り組み人などを記す。事務処理の標準化対策か、積み荷はすべて「これなし」となっている。後半は１２・５cm×８・５cmの朱判で

五大力船の荷物運送フロー



明治６年１月布告第８号「港内取締り規則」による荷物と書類の流れ

各府県に「府県船改め所」を設置、港内の実務は主要港湾を持つ宿村戸長が担当した。港内船改め所では、船の出入港に際して「積み荷目録」「船免状」「船税鑑札」を検査し、「停泊税」を徴収した。明治８年２月、「国内回漕規則」制定とともに「内務省駅逓寮」所管となり、戸長はその任を解かれた

戸長辞令（明治６年）

稲荷神社
虫干し神事

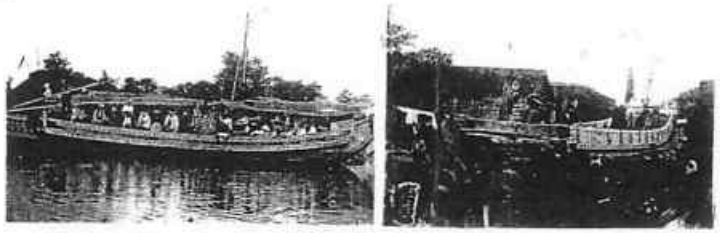
稲荷神社、町有文書の虫干し

木更津御県庁船印鑑連名帳（五大力船台帳）

五大力船譲渡届け　　御書上げ（はしけ船台帳）

五田保湊船鑑札控え

帆を上げ下げするてび（滑車）



棒木立て役（大正５年）と進水式（大正11年）＝五大力船子孫宅

出帆免状

右書面のとおり当港出帆、その港へまかり越し候段、届け出で候あいだ免状相渡し候なり。

明治何年何月何日　東京府船改め所（担当印）
（千葉県）船改め所　」

となっている。

神奈川県船改め所「出帆免状」（明治６年＝中紙）

横浜は幕末、ペリー来航によって開港し、日本最大の貿易港へと発展した。八幡との取引も活発で「五大力船」が行き来した。横浜港からの「出帆免状」７通が現存しているが、残念ながらここでも積み荷は省略されている。横浜船改め所の「出帆免状」は木版刷り用紙で、前半に届け出内容を記し

「右は本日当港出帆、その港へまかり越し候段
届け出で候あいだ免状相渡し候なり。
明治何年何月何日　神奈川県
上総国八幡宿船改め所　」

とある。とくに興味を引くのは印鑑で、ローマ字の「YOKOHAMA」を刻んでいる。

東京納め船税取り立ての帳（明治６年＝竪帳）

船税金上納願い（明治７年＝竪帳）

明治５年分と６年分「船税」。５年は「東京納め取り立て」で、６年は「上納願い」。また、１両＝１円と改まった４年５月の「新貨条例」の過渡期で、５年の旧制（永）が、６年には新しい「円」になる。「明治７年、上納願い」による「船税」は１００石につき１円。寄砂丸、長寿丸など１３艘は明治５年５月に新免許に更新、同年神在丸、６年住吉丸、文久丸、７年平寿丸が免許を取得している。所らたに造船したか譲り請けたものと考えられる。

出帆免状代価受取り帳（明治７年＝横帳）

１月から３月初めまでの停泊税、免状代価の受け取り帳。八幡宿船は北嶋巳之吉船など１５艘、１件の出帆免状代が２銭で２か月分をまとめている。八幡以外の船は２艘、木更津の鈴木平八船は停泊税、免状とも２４銭５厘、横浜吉田町・近藤清蔵船は１０銭７厘。明細はなく詳細は不明である。

船客名前留め（明治７年＝横帳）

江戸時代、内房地方で「船客」が認められたのは木更津と船橋、行徳の３港で、寛政元年に浜野が加えられた。参勤交代の「大名行列」は船橋、市川、板橋を経由して江戸日本橋をめざしたが、一般の旅人は船橋か行徳から船に乗る人が多かった。明治維新で制度は解禁され、八幡港も乗船が認められた。明治７年１月の「船客名前留め」が現存する。

１月１７日善五郎船　船客３人
〃　丸長船　船客５人
１月１８日石井仲蔵こと寅吉船　船客１人
１月１９日夜松田喜三次船　船客４人
１月２０日十兵衛船　船橋より出帆、２０日午前７時ごろ帰帆
乗船人なし

１月２１日午後１時ごろ、雪本横次郎船　乗船２人（以下省略）
１５日間の合計は５０人、１日あたり３・３人、但菊間藩士、八幡、五井、茂原が多く、東京からの商用などがめだった。

出帆免状台帳第１番（明治６年１０月２３日～１１月２７日＝竪帳）
出帆免状台帳第２番（〃　１１月２８日～１２月１８日＝竪帳）
出帆免状台帳第３番（〃　１２月１９日～７年１月２１日＝竪帳）
出帆免状台帳第４番（７年１月２１日～３月１６日＝竪帳）
出帆免状台帳第５番（〃　３月１５日～４月２８日＝竪帳）
出帆免状台帳第６番（〃　４月２８日～７月２１日＝竪帳）
出帆免状台帳第７番（７年７月２１日～１０月４日＝竪帳）

明治６年１０月２３日から翌７年１０月４日までの３４３日間、全５４７件の「出帆免状」受付原簿。船主（船頭）は戸長役場に「出帆届け」を提出するとともにこの台帳に届け出内容を記載し、役場は割り印を付した「出帆免状」を交付した。台帳には「八幡宿船改め所」が受け付けた五大力船の全出航記録と「積み荷明細」が記録された。本集ではその一部を翻刻し、全体をパソコンで作表して解析し、後出五大力船「積み荷の考察」に継めた。

船類諸願い届け（明治７年＝竪帳）

八幡宿戸長役場文書の五大力船関係願い書、届け書綴り。廃藩関係の届け出が多く、３つ道具付き五大力船１艘代価５０円、捕印付き茶船１艘買い代金３６両、押し送り船代金５０円、肥え薄取り船１艘代金２円５０銭など売買価格や船大工の新規肥え薄船造立などが含まれている。

八幡宿届住者干支年月調べ下書き（明治６年＝綴り）

八幡宿罫紙にメモ形式で綴められた明治初年の住民名簿。当時の屋敷番号順に

①第１（綴り）＝１番（屋敷）より９４番（屋敷）まで
②第２＝９５番より２２６番まで
③干支年月調べ、第３写し＝２２７番より３２７番まで
④第４＝３２８番より（４１０番まで）

の４綴りで構成。第１ページの書き出しは

嘉永２年己酉５月３日生まれ、農、２番屋敷、戸主宇田川辛七、

表3＝明治6、7年　月別、船別件数と積み荷総括表

2船別積み荷表

	船名	積石	船主	母港	出帆数	米（俵）	炭（俵）	薪（束）	その他積み荷
1	神徳丸	100	石橋清次郎	八幡	48	50	24,340	8,900	醤油、竹材
2	神力丸	120	石井仲蔵	八幡	44	2,551	29,107	10,810	綿実、椽、竹材
3	太神丸	100	永野善五郎一壹太郎	八幡	43	685	17,850	35,750	竹材、板材
4	神在丸	115	城谷伴蔵	八幡	38	1,404	24,960	9,950	莚、種粕、竹材
5	住吉丸	100	丸長次郎	八幡	32	4	3,486	1,600	莚、笠
6	住吉丸	90	曽本権次郎	八幡	31	45	8,635	0	秣、わら
7	平野丸	81	北嶋巳之吉	八幡	31	1,438	4,040	1,500	椽、醤油
8	明宝丸	90	藤本五郎治	八幡	31	1,560	13,753	1,000	材木、莚
9	八幡丸	80	木村善吉	八幡	31	1,120	11,260	6,621	椽、竹材
10	稲荷丸	120	松田豊吉	八幡	30	0	5,334	1,000	莚、種、魚粕
11	泉徳丸	80	小林七次郎	八幡	28	308	6,960	3,900	わら、竹材
12	高砂丸	140	松田喜三次	八幡	26	0	7,145	900	魚粕、田作、材木
13	文久丸	130	白鳥喜一郎	八幡	26	387	16,699	4,000	材木
14	長寿丸	120	宮原六郎平	八幡	24	55	3,020	8,110	材木、瓦、莚
15	海世丸	80	白鳥留次郎	八幡	22	495	10,950	9,720	
16	千年丸	100	伊藤久次郎	八幡	19	15	4,575	13,800	竹材、瓦
17	水生丸	100	白鳥喜八	八幡	11	230	3,300	1,700	大豆、笠、莚
18	明王丸	60	大宮常太郎	八幡	1	0	694	0	材木、莚
	明治丸	58	小川亀吉	八幡新規	8	39	4,200	1,000	6月から
	山王丸	50	板倉久八	八幡茶船	2	32	450	500	
	仙元丸	50	松田喜三次	八幡茶船	1	0	0	1,200	
	稲荷丸	79	久保寺金左衛門	野島浦	10	1,193	0	0	
	伝合丸	80	石橋伝吉	村田	3	190	250	0	
	朝日丸	80	高田徳兵衛	横須賀	2	0	440	0	
	神力丸	150	鈴木平七	木更津	2	450	0	0	
	取方丸	140	成島甚左衛門	荏原	2	0	0	0	干草
	浅間丸	58	近藤清蔵	横浜	1	85	0	0	
	合計				547	12,336	201,448	121,961	

1月別積み荷表

		出帆数	米（俵）	炭（俵）	薪（束）	備考
明治6年10月	23日から	13	517	5,391	2,800	
〃　11月		51	1,251	15,429	10,400	
〃　12月		58	1,739	23,916	13,750	
明治7年1月		59	1,768	21,613	18,604	
〃　2月		52	2,241	21,498	11,200	
〃　3月		54	1,003	16,150	15,100	
〃　4月		56	727	20,400	14,180	
〃　5月		43	309	15,674	11,500	
〃　6月		27	0	7,862	6,910	
〃　7月		35	30	12,216	8,550	
〃　8月		46	132	24,012	3,860	
〃　9月		45	2,186	14,969	5,107	
〃　10月	4日まで	8	433	2,318	0	
合計		547	12,336	201,448	121,961	

船主が八幡宿戸長に提出した「出帆届」

7冊の「出帆免状」台帳

「出帆免状」台帳の本文ページ

五田保湊の「出帆免状記」

④～⑥ページの原文資料は明治6、7年

23才10か月
天保6年乙未11月10日、農、3番屋敷、戸主中嶋治八、37才4か月

以下、八幡宿旧町丁の南町、南新田、本町、浜本町地区全域におよぶが、明治9年地租改正の地番である現在番地と対応することはできない。五大力船の港町であった浜本町では雑船問屋、船主、船乗り、船大工、荷役の人たちのほか、問屋倉庫や商店が立ち並んだ。本稿では、浜本地区の船関係者部分を解読掲載させていただきました。個人情報にかかわるが、八幡の五大力船研究に欠かせない重要基礎資料としてお許しを頂ければ幸いである。

米1万2千俵、炭20万俵、薪12万束

五大力船の「積み荷」を考察

明治元年の「明治維新」と同4年の「廃藩置県」はわが国の歴史を大きく塗り替えた。このころ小学校や郵便、電信制度が生まれ、新橋、横浜間に蒸気機関車が走り、銀座煉瓦街が出現した。いわゆる「文明開化」の中、断髪、廃刀令、洋装、牛鍋、ガス灯、人力車、馬車鉄道が登場し、社会様式が大きく変化しようとしていた。

廃藩置県は農民＝百姓にとっても大変換の年となった。江戸時代の「税制」は米の生産「石高」を課税対象とした「村請け制」で、領主は村高に税率を掛けて割り付け、村は年貢や諸役を請け負って全村民で負担した。新制度は「金高」の「個別納税制」で、それぞれの資産（土地）に応じて課税された。農家は納税のためにも米の現金化が必要であった。これまで村役人によって行われた年貢米の津出し作業に代わり、個別に米穀業者に米を売り、業者が東京へ出荷するという新しいスタイルが誕生した。

また、厳しい財政難からのスタートとなった明治新政府は新たな税制を制定して改定を繰り返した。明治4年には「新貨条例」が公布された。しばらくは従来の両や朱が通用したが、7年ころ新しい円が定着していった。八幡宿に「船改め所」が置かれた明治6、7年はこうした社会情勢の中にあった。

「出帆免状台帳」の集計

「出帆免状台帳」に記載された明治6年10月23日から翌7年10月4日、348日分の「出帆免状」「積み荷明細」と、帰帆日を記した目的港船改め所の「帰帆免状」を表1～6に編めた。

表1＝明治6、7年月別総積み荷表
表2＝〃　船別積み荷表
表3＝〃　月別、船別件数と積み荷総括表
表4＝〃　米、炭、薪積み荷3製品の月別出荷数量表
表5＝〃　農産漁業関係製品の月別出荷数量表
表6＝〃　雑村その他の月別出荷数量表

月別、船別「出帆免状」による「出帆、帰帆データ」の考察

①出帆免状の総数と船別出帆数

348日間の「出帆免状」総数は547通、1日平均は1・6通であった。うち八幡宿籍五大力船18艘の船別出帆数（365日換算値）と月平均出帆数は

①神徳船48通（365日換算50・4件）月平均4・2件
②神力丸44通（〃　46・2件）〃　3・9件
③太神丸43通（〃　45・3件）〃　3・9件
（中略）
⑭千年丸19通（〃　20・0件）〃　1・7件
⑮水生丸11通（〃　11・5件）〃　0・9件
⑯明王丸　1通（〃　1・1件）〃　0・1件

また6月に新造された明治丸は4か月で8通、ほかに茶船の山王丸2通、仙元丸は1通であった。茶船は50石以下の小型荷物船で、五大力船に交じって東京へ荷物を運んだ。

一方八幡以外の船の出帆数も合計20通、うち野島浦（現在・横浜市金沢区）の稲荷丸が10通、村田（千葉市中央区）の伝合丸3通、横須賀・朝日丸、木更津・神力丸2通などであった。

②月別の出帆数

月別では11月から4月、冬から春がピークで、最大は1月の59件、底は夏場で6月の27件、7月の35件がどん底になった。冬場が多いのは、積み荷の主力3製品である米の出荷期と炭、薪の需要期が重なることによった。

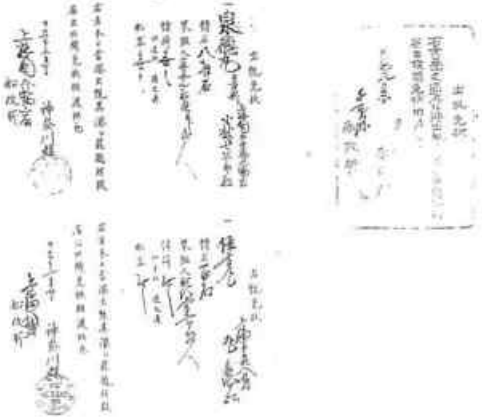
③船別の積み荷と出荷元

船別に積み荷をみると、神徳丸は炭と醤油、太神丸は薪と竹材、神力丸は米と炭、神在丸は炭、薪、莚、住吉丸2艘はわら製品、平寿丸は椽、明宝丸は薪と木材などと分かれる。「廻船問屋」や「船主仲間」（組合）の存在は未詳だが、船ごとに特定の得意先を持っていたことが窺われる。

④東京港での滞在日数と積み荷の仕組み

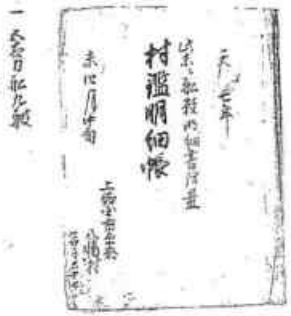
八幡港の出帆免状日と東京府からの出帆免状（八幡の帰帆免状）日の差は、本来、東京港での滞在日数だが、出帆前日に積み荷を詰えて免状をいただくケースも多く微妙に変わった。今回、出帆と帰

東京府船改め所はしけ宿行事が発行した「出帆免状」



神奈川県船改め所が発行した「出帆免状」

船税の受け取り帳



八幡村村鑑明細帳（天明７年）

千葉市・稲荷町有文書の「出帆免状」

八幡宿戸長が発行した「出帆免状」

帆が整合できた214件の滞在日数は、ゼロ日3件、1日65件、2日57件、3日39件、4日22件などで平均2・7日、11日も1件あったが、船の故障や急病といったアクシデントが考えられる。荒天が続くなどのことがなければせいぜい1、2日、この間、乗り組み人は日本橋小網町の「はしけ宿」に逗留、トンボ返りに八幡に帰帆したものとみられる。

『江戸東京問屋史料諸問屋沿革誌』の明治22年、東京川船荷物回漕組合「維新以前商業の慣行および組合機関、上申書」によれば、「右荷物、舟便によって曾するものはすべて一度当業者の手を へ、諸問屋向け へ至るものにして、当業者は出荷者の指定に応じ、書面ただちに送致するあり、あるいは河岸場へ入りをなし報告するあり、適宜に取り扱いし、なれども売買にはいささかも関係せざりし」。

また「荷物には必ず「送り状」を添え、送り状にはそのはしけ業問屋揚げ某行きなどの文言あるものなれば、船主は送り状面記載のはしけ問屋に着船を報告し、はしけ問屋は送り状に照合し、荷物を伝馬船に移し取り、または河岸場をなし、送り状に照らし、それぞれ配達す」と詳細を記している。

東京港での積み下ろしと積み荷は「はしけ組合」が独占、多くは佃島前で行われた。五大力船は帆を下げ、亀島川を経由して日本橋川に入り、小網町河岸の船繋ぎ杭に停泊したものと考えられるが詳細は解明されていない。

「出帆免状台帳」による「積み荷データ」の考察

免状台帳の積み荷をデータ化して別表（表4―6）にまとめた。届け出資料は品名や単位などまちまち、数字は単純集計であることを予めお断りしたい。

八幡港からの積み荷の主力は米、炭、薪の3製品で、ほかに材木や竹材、瓦、わら製品、油、肥料などがあった。

表4―1「米」の出荷

①「積み荷明細」による「米」の「品名、月別推移」を別表にまとめた。品名は単に米としたものが大半で、ほかは白米、新米、古米、町米、蔵米などまちまちであった。これらを合わせた348日分総数は1万2336俵で、うち搗（餅）米は111俵、およそ1％であった。

②米1俵を4斗として石に換算すると348日分の総数1万2336俵はおよそ5000石、740トンになる。これに欠落する10月の18日分を6年10月、7年10月実績で日割り計算して365日に換算するとおよそ5500石であった。市原郡高およそ5万5000石の10％で、地元消費分を差し引いた出荷量とほぼ整合している。

③安政3年江戸名主が幕府に提出した「重宝録」による「船運送入津、陸付着荷高」は浅草蔵前払い米、御武家様方御収納米とも248万石ほど、下り売り米11万石ほど、地回り典籍売り米40万石とあり、八幡宿からの出荷は、売り米のおよそ1％であった。

④米出荷は9月から3月まで、ピークは12、1、2月の3か月。江戸時代の年貢米搬出は皆済期日の12月に集中したが、明治維新を境に遅くなっている。米穀商が八幡に米蔵を置き、江戸の米相場を見ながら積み出したことなどが影響したものとみられる。

⑤八幡港を積み出し港とした地区は市原郡の北東部から中部、南部にかけての一帯で、菊間や五所、能満、勝間、大成、大作、喜多、中野、米原、古敷谷、川在村など。馬の背や大八車、一部は村田川の水路を使って八幡港に集荷された。

表4―2「炭」の出荷

①「炭」の「品名、月別推移」を別表にした。348日間の出荷量は20万1448俵で、うち「土釜炭」や単に炭、4貫炭、5貫炭、6貫炭を含めた一般家庭汎用が大半を占めた。土釜は「土窯」で炭焼き窯の一種、出入り口の外は全部を土で塗き、炭材が炭化し終わると密閉して火を消す。土窯炭はもろく火付きがよい。

②材質は松が多く、樫、雑木の順。鍛冶炭は鍛冶専用で火力がつよい、松楽炭はラクダ炭であろうか。品質はさほどよくない。

③「重宝録」によると、江戸の集荷量は1か年247万5千俵で「海手川辺炭薪屋共引き受け、売り捌き申し候」とある。八幡港はそのおよそ8％を供給したことになる。

④炭は八幡の中奥部各地で焼かれ、米とほぼ同じルートで八幡に出荷された。

表4―3「薪」の出荷

①『広辞苑』によると薪は「燃料にする木、雑木を適宜の大きさに切り割って乾燥させたもの。たきぎ。わりき」。同試みの真木、槙は「（純粋な木の意）。①スギの古名。②イヌマキ、ラカンヤキ、コウヤマキなどの汎称。③建築材料の最上の木の意」とする。本来は意味が異なるが、地元伝承などから薪の当て字として「薪」に区分した。

②「薪」の出荷量は12万1961束であった。内訳の大半は「槙、真木」で中身はみえない。一方松真木、松5本ど束、樹槙、雑木など具体的なものもある。

③「重宝録」は1か年の集荷量を1837万900束ほどとする。八幡宿の出荷量は東京のおよそ0・07％にあたった。

③薪も八幡近郷、中奥の農村部で生産された。

表4＝明治6、7年　米、炭、薪積み荷3製品の月別出荷数量表

1米

項目	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計	備考
米	602	338	1,489	1,341	2,016	948	497	293	0	20	67	1,656	323	10,349	玄米含む
新米	16	160	0	0	0	0	0	0	0	0	0	389	110	656	
白米	0	63	60	183	30	30	0	0	0	0	10	0	0	396	
[illegible]	0	0	0	64	130	0	0	0	0	0	0	0	0	194	
[illegible]	0	120	180	170	50	0	30	10	0	0	49	148	0	718	
[illegible]	0	0	40	10	15	35	0	8	0	0	15	0	0	111	[illegible]
合計	817	1,281	1,739	1,768	2,241	1,093	727	309	0	30	132	2,186	433	12,338	

2炭

項目	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計	備考
炭	0	460	2,300	900	1,400	1,810	2,500	1,220	900	1,150	2,426	1,450	500	17,066	
十五貫炭	3,339	8,438	11,314	12,333	12,698	8,897	11,930	11,056	6,752	7,930	14,760	9,029	1,350	117,674	
4貫炭	1,711	8,690	8,814	8,000	5,900	3,870	7,700	7,460	1,150	3,060	6,385	4,140	400	61,960	
6貫炭	0	0	0	0	0	0	690	0	0	0	700	300	0	1,690	
8貫炭	100	220	505	628	480	375	150	350	50	85	142	220	0	3,628	
[illegible]	0	0	333	350	450	420	0	320	0	0	0	0	0	1,933	
[illegible]	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	100	
長尺炭	0	0	0	0	0	78	40	70	0	0	0	0	0	192	
[illegible]	230	640	603	483	200	372	1,294	0	0	0	460	0	0	4,207	
上等炭	0	133	150	719	350	610	30	419	0	0	140	350	63	3,422	
合計	5,391	15,429	23,914	21,513	21,498	16,160	25,420	18,874	7,882	12,218	24,023	14,969	2,318	201,448	

3薪

項目	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計	備考
薪	0	600	4,400	3,850	2,200	3,900	3,750	1,000	700	2,000	1,110	2,100	0	25,620	雑木、1束結
5束ノ俵	0	0	0	0	2,800	1,300	1,100	0	200	0	400	0	0	6,300	
[illegible]	0	0	1,200	0	0	0	450	0	300	0	0	0	0	1,950	[illegible]
[illegible]	0	0	0	1,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000	
[illegible]	0	0	0	0	0	0	0	0	350	0	0	0	0	350	
[illegible]	2,600	6,600	3,150	9,164	4,100	3,400	4,800	3,950	3,000	6,300	450	1,877	0	58,461	
[illegible]	0	3,200	0	4,600	2,000	0	3,170	1,600	2,300	250	1,900	1,320	0	20,320	
松10束	0	0	0	0	0	0	800	0	50	0	0	0	0	850	
割木	0	0	0	0	0	0	400	0	0	0	0	0	0	400	
合計	2,800	10,400	13,750	18,604	11,300	10,100	14,180	11,500	6,910	8,550	3,880	5,197	0	121,981	

表5＝農産漁業関係製品の月別出荷数量表

1穀産物

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
小麦	俵	0	60	0	0	0	0	0	0	0	60	
豆	俵	0	0	0	0	0	0	0	11	10	21	
大豆	俵	0	51	77	0	24	124	99	0	22	576	
小豆	俵	0	0	0	0	0	18	0	0	0	18	
芋粉	[illegible]	0	0	0	30	0	0	0	0	0	30	
玉子	箱	0	7	0	15	4	8	4	0	8	48	
みかん	籠	0	40	0	0	0	0	0	0	0	40	
柿	[illegible]	0	38	0	0	0	0	0	0	0	38	
栗	俵、本	0	13	0	0	0	0	0	0	0	13	
柴胡	俵	0	0	0	0	26	0	0	0	0	26	
漬物	樽	0	0	0	0	0	0	0	0		60	
田作り	俵	0	40	457	0	0	0	0	0	0	497	
糠、小糠	俵	0	224	55	42	248	710	437	152	69	2,580	[illegible]
[illegible]	俵	0	0	34	57	123	60	37	0	0	325	
菜種	叺、俵	0	0	0	0	0	0	20	0	195	215	
荏種	叺	0	0	0	0	0	0	0	200	0	200	

2わら製品

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
わら	束、把	0	8500	0	0	0	0	0	9990	11900	78,390	
秣、飼葉	貫	2500	3320	2500	2623	0	1300	950	0	0	13,969	
むしろ	こ、丸	0	110	0	640	1180	1076	1397	510	297	6,010	
三六むしろ	こ、丸	200	180	634	967	916	1463	1290	1060	309	7,315	
箱むしろ	丸	0	178	128	27	0	0	0	195	40	536	
寝むしろ	こ、丸	0	0	0	94	100	0	200	0	0	394	
ほしかむしろ	丸	0	0	0	0	100	0	0	0	0	100	
灰かます	こ	0	0	0	0	165	0	5	0	0	170	
[illegible]	こ	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	
縄	丸	0	0	0	0	16	8	0	0	0	24	
菅笠	本、こ	0	57	25	315	47	397	118	144	36	954	
笠輪	こ、本	0	30	12	35	10	50	31	14	8	195	
網	こ	0	0	0	4	4	0	2	0	0	10	
[illegible]	こ	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
苫	丸	0	0	112	135	0	0	0	0	0	242	一部5枚ノ
[illegible]	こ	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4	
ござ	こ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
[illegible]竹	こ	0	120	0	0	24	0	14	0	8	166	
臼	[illegible]	0	0	0	0	30	0	0	37	0	67	
ならし	[illegible]	0	11	0	0	0	0	0	0	0	11	
[illegible]	叺、俵	0	300	0	800	800	500	0	0	1000	6,300	灰

3醸造製品

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
酒	樽	0	0	20	0	0	0	0	0	0	20	
醤油	樽	60	0	166	60	0	0	35	0	0	476	
みそ	樽	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	
酢	本	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6	瓶

4油と粕

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
魚油	樽、本	10	105	5	50	0	0	0	0	0	185	内種油
水油	本	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5	
干鰯	俵	0	0	0	0	0	0	0	0	0	350	
魚粕	俵	0	730	1500	400	440	438	1030	1370	180	6,226	内種粕
種粕	袋、俵	0	454	346	100	37	230	190	100	0	1,486	
ノ粕	俵	0	57	225	3	0	0	163	9	120	869	

表6＝建材その他の月別出荷数量表

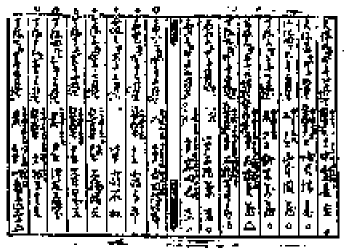
1建材

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
材木	本	0	0	800	100	218	0	0	0	0	1,467	
古材木	本	0	0	300	300	0	300	500	0	0	9,500	
古板	本	0	0	0	130	0	0	300	300	0	700	
杉柱	本	0	0	0	0	0	232	0	0	0	232	
松4寸角	本	0	0	0	227	84	140	0	0	0	451	13、10、8尺
松丸太	本	0	0	0	0	140	0	0	0	700	840	
松角	本	0	0	0	0	0	0	0	0	654	654	
松2寸角	本	0	0	50	0	0	0	30	0	0	80	6本ノ
松木	本	0	0	0	0	0	0	0	0	250	250	
敷居	丁、束	0	0	0	0	0	97	45	0	0	202	松1間敷居
小割板	束	0	62	0	83	204	0	100	0	0	449	
松小割物	束	0	0	0	110	150	36	200	220	42	858	
中貫	束	0	0	0	20	0	0	0	0	0	20	5本ノ
松6分板	束	0	150	0	162	312	135	0	0	160	1,290	6本ノ
杉板	束、こ	0	16	0	0	70	38	0	0	40	272	
杉4分板	束、枚	0	0	200	0	0	0	0	0	0	200	

2竹材その他

	単位	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	合計	備考
間渡竹	束	1000	7270	3810	7200	3860	1100	800	3800	500	39,030	
唐竹	束	0	874	152	420	227	888	350	600	410	5,546	
男竹	束	0	148	0	200	0	0	130	350	0	1,730	
女竹	束	0	300	500	0	0	0	2000	200	600	4,300	
瓦	枚	0	0	0	0	0	8700	6600	0	9800	53,150	
古瓦	枚	0	0	0	0	0	3000	1800	0	0	4,800	
角石	本	0	0	0	28	0	0	0	0	0	28	
[illegible]	こ	0	6	0	5	0	0	0	0	0	41	
びた銭	こ、俵	100	68	0	4	0	100	220	0	160	718	古銭

表―5、6は7～10月分を省略



八幡宿居住者（船持ち、船乗り渡世）名簿（明治6年）

表5―1「穀産物」の出荷

①穀物では米以外にこれといった穀物はない。大豆576俵、小麦60俵、豆21俵、ほかに芋粉、小豆などがあった。大豆はみそ、醤油、豆腐原料、馬牛飼料などに使用された。小麦は粉にして麺類や菓子などの食用にした。

②玉子は48箱、果物はみかん、柿、栗でいずれも少量だった。新年祝い膳用の田作り（ごまめ）が497俵、漢方の生薬である柴胡（さいこ）も26俵あった。

③糠（ぬか）は2580俵で飼料、肥料とされた。糠に似た「麹」も誤記として「糠」と解読した。菜種は油にして食用や灯火とした。荏種はえごまであろうか、食用や荏油をとった。

表5―2「わら製品」の出荷

①「わら」は7万8390束（把）、まぐさ1万3969貫、わらは俵やむしろ、縄などの原料で、秣は馬や牛の飼料となった。

②むしろ、かます製品は単に「むしろ」としたもの6019こ（丸）、36むしろ7315こ（丸）、用途別に箱むしろ、寝むしろ、ほしかむしろ、灰かますなどがあった。

③あみものは菅笠954こ、笠輪195こが目立ち、ほかに網、ござ、とま、すだけなど。菅笠は菅で編んだ笠、笠輪は菅笠と頭を結ぶ輪、すだけはすだれで、とまは茅や菅を編んだ小屋の覆いで五大力船でも使われた。

表5―3「醸造品」の出荷

④醤油476樽。銚子、野田、佐倉、木更津は房総の「地回り醤油」として知られたが、当時の八幡産は生産高も少なく、大半が地元で消費された。八幡で醤油産業が発達するのは明治後期から大正、昭和戦前期のことである。

表5―4「油と粕」の出荷

①魚粕6226袋、種粕1486袋、ノ粕869袋、ほしか350袋は肥料、魚油186樽は家庭用照明に使用した。

表6「建材」「竹材」、その他の出荷

①建材では材木、竹材、瓦などを出荷した。古材の再利用がめだち大火が繰り返された江戸の住宅事情を反映している

②新材では単に材木としたもの1467本、材質は杉、松が多く、柱、角材、敷居、小割板、中貫、板材などに加工して出荷された。材木は表記もまちまちで統計的にまとめることは難しい。

③竹材は間渡し竹3万9030束、唐竹5546束、男竹1730束、女竹4300束などであった。間渡し竹は壁下地に使うやや太い竹、「重宝録」による江戸入津量13万2189束でおよそ30％を占める。唐竹は中国伝来の竹で笛などに使う。江戸入津量は大31万、中24万、小12万束でおよそ1％、男竹はマタケの大竹、女竹は節がめだたない小竹で、垣、押、かご、きせるなどに用いた。

④瓦5万3150枚、古瓦4600枚を出荷、産地は主に葛飾、久々留周辺と考えられるが詳細は未詳である。

⑤鐚（びた）銭は粗悪な銭のこと、「えり銭」が進み、江戸時代後期には通貨として流通しなくなったという。梵鐘などに鋳込まれたのであろうか。

⑥古道具、引っ越し荷物、袋荷など、その他の積み荷は集計から外した。

「送り状」にみる帰り船と積み荷

「千葉県八幡宿船改め所文書群」に江東京府と神奈川県からの「出帆免状」が現存するが、残念ながら積み荷を記録していない。一方、市川本店文書の「醤油醸造、酒類販売関係資料群」には江戸時代後期、文久3年、慶応4年と、明治7年、15年、16年、17年の6か年分、各年およそ200点の「送り状」を保管している。解読は第8集以降掲載の予定だが、関係資料として明治7年分を表6にまとめた。

明治7年181件の内訳は、東京港積み出しが158件、行徳3件、ほかに検見川、曽我野、五井、姉崎、茂原、一の宮などがあった。東京や行徳便は当然「五大力船」が運んだが、茂原や一の宮など九十九里沿岸や内陸部は馬方による陸送で、五井、曽我野といった近距離は重量などから舟運と陸送を使い分けた。東京便は主に酒、みりん、酢、鰹節の仕入れで、近郷からは焼酎や塩、大豆、小麦、胡麻など醤油原料や容器であった。

届け先の吉田屋は市川本店の屋号で東京南新川に支店を構えて仕入れなどを担当した。船名は指定船で、特記のない場合、帰り船の「番船」が運んだ。徳次郎船の「神徳丸」が39件と群を抜くが、この年船主として経営参加したことによる。船名は船主の屋号や通称名が多く、今後の研究課題としたい。

八幡港と五大力船 ～まとめにかえて～

江戸時代から明治、大正、昭和戦前期にかけて、市原には八幡、五井、姉崎、青柳、今津、椎津の6港があった。市原の内陸部や外房方面から運ばれた年貢米や薪炭、材木、わら製品などを五大力船で江戸に運び、帰り船で衣類や酒、油、日用雑貨などの生活物資と

表1＝明治6、7年　月別積み荷表（はじめの部分）

明治6年10月

出帆	帰帆	船名	積石	船主	行き先	米	(俵)	炭	(俵)	薪	(束)	製塩漁業製品	建材その他	備考
1023		初宮丸	79	久保寺	神奈川	米	100							野島浦船
1025	1027	平野丸	81	北嶋巳	東京府	新白米	15	土器炭	600			[illegible]50帖		
1025	1028	住吉丸	90	宮本	東京府			土器炭	100			芋1000貫		
1025	1029	神力丸	120	石井	東京府	米	62	土器炭	650			大豆20俵		
								椎炭	230					
1026	1028	八幡丸	80	木村	東京府			4貫炭	200	松薪	2,000			
1027		初宮丸	79	久保寺	神奈川	米	100							野島浦船
1027	1029	明石丸	120	鈴田屋	東京府			4貫炭	170			海苔200こ	ロゲ二鉄100こ	
								8貫炭	100			海苔10帖		
102	1102	高砂丸	140	鈴田屋	東京府			土器炭	500			蕨草1200貫		
1029	1102	千早丸	100	伊勢	東京府			4貫炭	441	松薪	800		間渡竹1000束	
1029	1102	住吉丸	90	宮本	東京府			土器炭	800					
1029	1107	[illegible]丸	30	小林	神奈川	米	150							
1029	1102	明宝丸	90	橋本	東京府	米	70	4貫炭	900					
1031		永宝丸	100	白島屋	東京府			土器炭	900			大豆100俵		
		10月		13件			517		5,391		2,800			

明治6年11月

出帆	帰帆	船名	積石	船主	行き先	米	(俵)	炭	(俵)	薪	(束)	製塩漁業製品	建材その他	備考
1101	1104	高砂丸	120	宮島	東京府			土器炭	250			[illegible]、[illegible]200[illegible]		
1102	1104	平野丸	81	北嶋巳	東京府	新米	60					海苔10帖		
1102		住吉丸	100	丸	東京府			土器炭	250			[illegible]50丸、[illegible]50丸		
								松炭	90					
1102	1105	神宝丸	100	石渡	東京府			4貫炭	500				間渡竹700束、背竹30束	
1104	1105	大神丸	100	永野屋	東京府	米	20	土器炭	600	松薪	900		松6分板150枚	月日なし
	1107	神力丸		石井	東京府	米	45	土器炭	870			鯖20俵、玉子4箱		
								松炭	250					
11		高砂丸	140	鈴田屋	東京府			土器炭	750			海苔80帖		日なし
1107	1108	八幡丸	80	木村	東京府	白米	23	4貫炭	400	松真木	300	から草13箱		
								松炭	300					
1107	1110	[illegible]丸	120	鈴田屋	東京府			炭	50			海苔50俵、鰹50こ、柱200		
1108	1110	千早丸	100	伊勢	東京府			4貫炭	300	松真木	600		間渡竹1500束	
1108		住吉丸	100	丸						松真木	600	[illegible]37本、桶2こ		
1108	1112	住吉丸	80	宮本	東京府							[illegible]8500束		
1109	1110	神宝丸	100	石渡	東京府			4貫炭	460				間渡竹500束、背竹100束	
1108	1115	大神丸	100	永野屋	東京府			土器炭	500	松薪	1,000		安竹200束	
		永宝丸	100	白島屋	東京府	米	30	4貫炭	400	松薪	1,000			月日なし
1110	1111	明宝丸	90	橋本	東京府			4貫炭	700					
1114	1115	高砂丸	120	鈴田屋	東京府			4貫炭	60			足袋[illegible]こ、鰹節100、[illegible]100本		
1114	1116	大神丸	100	永野屋	東京府			土器炭	300	松薪	1,000		男竹140束	
1114	1116	東徳丸	80	小林	東京府			土器炭	450			[illegible]炭350俵		
1115	1114	八幡丸	80	木村	東京府	白米	37	松薪炭	130			藁縄10本、[illegible]	杉板16枚、小割[illegible]52束	
111	1118	神力丸	120	石井	東京府	米	30	土器炭	610	松真木	300		違竹24束	日欠あり
1115	1117	平野丸	81	北嶋巳	東京府	新米	100	土器炭	100					
1116	1117	住吉丸	80	宮本	東京府			土器炭	800					
1117	1118	千早丸	100	伊勢	東京府			4貫炭	350	松薪	600		間渡竹1200束	
1117	1117	神宝丸	100	石渡	東京府			4貫炭	400				間渡竹800束、背竹100束	
1117	1116	住吉丸	100	丸	東京府			土器炭	270			鯖44俵、30石100丸、蕪30本、[illegible]		
												ならし11俵、玉子3箱、[illegible]3こ		
1118	1119	[illegible]宝丸	90	橋本	東京府	米	40	4貫炭	150					
								8貫炭	20					
								土器炭	200			海苔60帖、鯖150俵		
1119	1120	高砂丸	140	鈴田屋	東京府			土器炭	500	松真木	1,000	海苔80帖	安竹100束	
1119	1122	大神丸	100	永野屋	東京府							芋1500貫		
1120		[illegible]丸	140	石嶋	神奈川									[illegible]
1120	1122	神力丸	120	石井	東京府	米	55	土器炭	350				違竹180束	

表2＝明治6、7年　船別積み荷表（はじめの部分）

出帆	帰帆	船名	積石	行き先	米(俵)	炭(俵)	薪(束)	他積み荷
1102	1105	神宝丸	100	東京府		500		間渡竹
1109	1110	神宝丸	100	東京府		450		間渡竹
1117	1117	神宝丸	100	東京府		400		間渡竹
1123	1124	神宝丸	100	東京府		300	700	背竹
1129	1205	神宝丸	100	東京府		200		間渡竹
1208	1210	神宝丸	100	東京府		750		間渡竹
1214	1216	神宝丸	100	東京府		550		[illegible]
1220	1221	神宝丸	100	東京府		600		[illegible]
1226	1227	神宝丸	100	東京府		500		[illegible]、竹材
106		神宝丸	100	東京府		850		[illegible]、竹材
110		神宝丸	100	東京府		600	300	間渡竹
117		神宝丸	100	東京府		450		間渡竹
124		神宝丸	100	東京府		350	800	
201	203	神宝丸	100	東京府		400		間渡竹
207	208	神宝丸	100	東京府		400	500	
213	217	神宝丸	100	東京府		800	500	
222	223	神宝丸	100	東京府		600		違竹
227		神宝丸	100	東京府	50	500		違竹
309	308	神宝丸	100	東京府		400		違竹
314	316	神宝丸	100	東京府		500		間渡竹
320	321	神宝丸	100	東京府		500		違竹
326	329	神宝丸	100	東京府		400		間渡竹
403	409	神宝丸	100	東京府		500	300	違竹
408	409	神宝丸	100	東京府		500	500	

出帆	帰帆	船名	積石	行き先	米(俵)	炭(俵)	薪(束)	他積み荷
1121		朝日丸	80	神奈川		160		
104		朝日丸	80	東京府		280		松板
		2件		横浜	0	440	0	
302		松山丸	60	横浜	85			小豆
		1件		横浜	85	0	0	
1023		初宮丸	79	神奈川	100			
1027		初宮丸	79	神奈川	100			
1126		初宮丸	79	東京府	100			
1209		初宮丸	79	神奈川	161			
121		初宮丸	79	野島浦	150			
220		初宮丸	79	東京府	123			
318		初宮丸	79	神奈川	115			
412		初宮丸	79	神奈川	130			
925		初宮丸	79	神奈川	100			
1003		初宮丸	79	神奈川	114			
		10件		野島浦	1,193	0	0	
1027	1029	明石丸	120	東京府		270		炭、塩鮭
1107	1110	明石丸	120	東京府		50		鯖、鮭
1114	1116	明石丸	120	東京府		50		鯖[illegible]
1120	1124	明石丸	120	東京府		400		鯖、ひだ鉄
1202	1206	明石丸	120	東京府		300		苫、竹材
	1218	明石丸	120	東京府		400		田作
1221	1224	明石丸	120	東京府		300		[illegible]

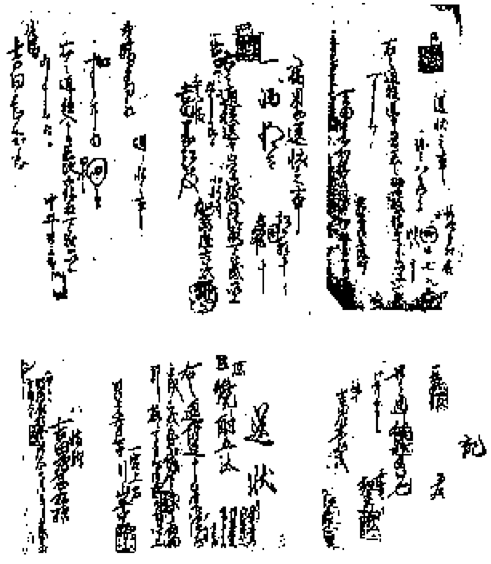
①出帆日、船名、船主、行き先および積み荷明細は「出帆台帳」によった。帰帆日は対応する東京府船改め所「出帆免状」の発行日とした。

②積み荷は「米、炭、薪」3製品と「製塩漁業製品」「建材その他」にわけて作表した。品種名はおおむね3字に統一した。表記違いでも同一と判断できるものはまとめ、誤字は正した。

船便名別

船名		東京	行徳
明石丸	（松田屋）	1	
岩吉船		4	
栄吉船		1	
西徳船	文久丸	8	
北嶋船	平野丸	1	
勇八船	永宝丸	1	
清正丸		1	
仁太郎船		1	
清次郎船	神徳丸	39	
吾兵衛船		2	

高砂丸	（松田屋）	1	
[illegible]船		8	
西宮船	神力丸（	4	
伊勢船	神宝丸	1	1
文吉船	妙宝丸	1	
丸長船	住吉丸	5	
喜助船		8	
六郎兵衛船	長寿丸	6	
新船	当番船	13	
記載なし	番船	65	2
合計		168	3



仕入れ製品の五大力船送り状

表7＝明治7年　仕入れ製品船別送り状積み荷表（はじめの部分）

月日	積送船名	積り元	住所	届け先	酒	焼酎	みりん	醤油	酢	[illegible]	備考
1208	明石丸	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	八幡宿田島[illegible]	10						
1010	岩吉船	[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	20						
1216	岩吉船	[illegible]	[illegible]川	上総八幡宿吉田[illegible]	8						
1216	岩吉船	吉田[illegible]	[illegible]川	上総八幡宿吉田[illegible]	10						
1213	岩吉船	[illegible]	[illegible]町	上総八幡宿吉田[illegible]	5						
123	栄吉船	[illegible]	[illegible]川	上総八幡宿吉田[illegible]							酢か
502	西徳船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	上総八幡宿吉田[illegible]	5						
509	西徳船	伊勢屋[illegible]	[illegible]町	上総八幡宿吉田[illegible]	5						
517	西徳船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	上総八幡宿吉田[illegible]	5						
602	西徳船	[illegible]	[illegible]川	上総八幡宿吉田[illegible]	5						
606	西徳船	[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	7.5						
105	西徳船	中井半三郎	（東京）	吉田[illegible]					20		
1014	西徳船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	吉田[illegible]	5						
517	北嶋船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	上総八幡宿吉田[illegible]	4						
619	勇八船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	八幡宿田島[illegible]	5						
1216	清正丸	高井[illegible]三郎	（東京）	吉田[illegible]	12.5						
1207	仁太郎船	記載なし	（東京）	記載なし	10						
112	清次郎船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	吉田[illegible]	3.5		6				
112	清次郎船	中井半三郎	（東京）	八幡宿吉田[illegible]					15		
117	清次郎船	[illegible]	[illegible]	八幡宿[illegible]				18			
117	清次郎船	伊勢屋[illegible]	[illegible]町	吉田[illegible]			12.5				
516	清次郎船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	吉田[illegible]	8						
512	清次郎船	中井半三郎	（東京）	吉田[illegible]					12		
617	清次郎船	伊勢屋太郎兵衛	霊岸島[illegible]町	八幡宿吉田[illegible]	10.0						
509	清次郎船	[illegible]	（東京）	上総八幡宿吉田[illegible]	18						
625	清次郎船	高井[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	10						
606	清次郎船	[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	10						
712	清次郎船	[illegible]	[illegible]	上総八幡宿吉田[illegible]			8				
712	清次郎船	[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	18.5						
712	清次郎船	[illegible]	（東京）	吉田[illegible]	5						

房総地区

月日	積送船名	積り元	住所	届け先	酒	焼酎	みりん	醤油	酢	[illegible]	備考
1219	[illegible]船	[illegible]	[illegible]	上総八幡宿吉田[illegible]	20						
1201	記載なし	[illegible]	[illegible]	上総八幡宿吉田[illegible]	10						
[illegible]	記載なし	[illegible]	[illegible]	上総八幡宿吉田[illegible]	20						
1129	記載なし	[illegible]	[illegible]	上総八幡宿吉田[illegible]							小麦
119	記載なし	[illegible]三右衛門	[illegible]	八幡宿吉田[illegible]							塩200俵
1028	記載なし	[illegible]三右衛門	[illegible]	八幡宿吉田[illegible]							大豆
1209	大村丸	[illegible]大村[illegible]三[illegible]	五井	八幡宿吉田[illegible]							大豆
222	記載なし	[illegible]	南五井	八幡宿吉田[illegible]	5						
724	記載なし	大和田[illegible]五郎	[illegible]村	八幡宿吉田[illegible]							明樽40樽
425	記載なし	[illegible]		八幡宿吉田[illegible]		2					
430	記載なし	[illegible]	上総[illegible]	八幡宿吉田[illegible]		2					
825	記載なし	[illegible]	[illegible]	八幡宿吉田三[illegible]		2					
903	馬方	[illegible]	[illegible]	八幡宿吉田[illegible]					2		
817	（馬方か）	松本[illegible]	[illegible]村	吉田[illegible]		2					
820	（馬方か）	松本[illegible]	[illegible]村	八幡宿吉田[illegible]		4					
825	（馬方か）	松本[illegible]	[illegible]村	八幡宿吉田[illegible]		2					
626	一の宮馬方	[illegible]	一の宮上[illegible]	八幡宿吉田[illegible]		1					
624	一の宮馬方	[illegible]	一の宮上[illegible]	八幡宿吉田[illegible]		5					
					1,164	120	112	320	194	32	

「江戸文化」を持ち帰った。上総の玄関口、海陸交通要衝に立地し、市原郡最大の港町でもあった「八幡宿」の繁栄は五大力船とともにあったといえよう。

五大力船は一大消費都市であった江戸、東京を中心に発達した海川両用の「小回し廻船」で、全長が10から20m、積載量50石から200石、江戸、東京市内の堀割に乗り入れるため一般廻船より喫水が浅く、川筋での棹使いのため、舷の外側に「棹走り」を設けた。わずか3、4人で100石もの物資を運んだ、その力強さを「五大力菩薩」に例えた。

本誌前号で紹介した市川本店の天明7年（1787）「八幡村村諸明細帳」は五大力船船数を「本株（権利者）30艘、当時（実働）12艘」と記し、飯香岡八幡宮の大絵馬「八幡村五大力船船揃え図」は湊内に帆を膨らませた13艘を画いている。また本資料の明治6年「木更津県庁五大力船台帳」は八幡宿籍が18艘、大正初めころ30艘程度と伝承されている。

八幡湊は当時、飯香岡八幡宮境内であった「南町澪（みお）」と「浜本町（はもと）みお」の2か所にあった。南町みおの創設は「飯香岡八幡宮文書」に詳しい。慶長19年（1614）、当時八幡村領主であった本多正信、正純、永井尚政3家の年貢米積出し港として、長さ480間の人工みおと船付き場、荷揚げ場、船番所を築いた。浜本町の開設は不詳だが、同じころ民間船舶用として築港されたものといえよう。八幡宿から江戸、東京まで海上10里、順風およそ4時間、時速はおよそ10kmであった。

八幡の中心街区・浜本町には廻送宿と船主、船乗り、荷役・はしけ作業の人や船大工職人のほか、穀物商、薪炭商、反物屋などの問屋や倉庫が並び、風呂や旅籠、飲食店など、町の人たちの多くが港にかかわった。江戸時代の船だまりは、草刈堰を水源とする灌漑用水路が八幡港に流れ出る[illegible]川河口周辺に置かれたが、明治時代に望みおと横みおを広げて浜本町に接した。現在もペイシア裏手と八幡運河周辺が当時の面影を残している。

明治45年八幡宿駅開業、その後自動車の普及につれ、一大消費地・東京への物流は海運から陸送へと移行する。大正終わりから昭和初めにかけて五大力船の廃業が相次ぐ。およそ300年間に亘って江戸・東京市民の生活を支え、上総の経済と文化の担い手となった五大力船はその役割を終えて静かに姿を消した。（山岸弘明）

市原の古文書研究会メンバー

秋葉　平、今井公子、上田祥子、佐野　彪、高澤恒子、吉川綾子、山岸弘明

ご協力いただいた方々

市原市立八幡公民館、市川本店文書調査会、八幡史学館名所100選チーム、市川本店、飯香岡八幡宮、千葉市稲荷町内会、宮本致一様

1

八幡村五大力船船揃え図＝飯香岡八幡宮大絵馬

2

上総八幡湊と五大力船

～市川本店、飯香岡八幡宮
文書を中心に～

3

市原の古文書研究会

市川本店文書調査会、八幡史学館名所100選チーム　後援＝房総史料調査会

4

五大力船資料を特集した「市原の古文書研究」第７集

5

八幡宿駅ギャラリーで五大力船展
平成26年

県文化財保護功労者受賞
平成25年

6

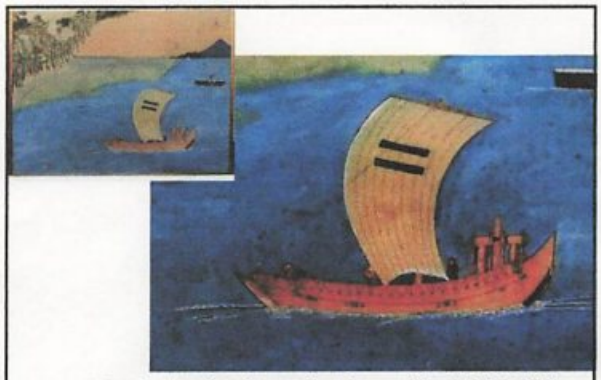
飯香岡八幡宮＝伝白鳳4年創立。本殿・国指定重要文化財

7

伝足利義満寄進
室町中期みこし4基

600年の伝統守る
柳橋神事

8



「五大力船と蒸気船」(明治24年)＝八幡・北嶋豊吉奉納
同図絵馬裏から発見。状態が優れる。蒸気船は「聚沢丸」か

9

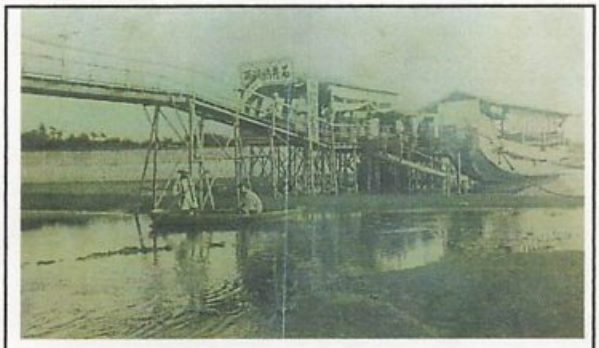
嵐の中を突き進む五大力船(明治36年)＝浜本町根本吉太郎ほか
嵐にあい、「身命限り」奮闘、神の加護を念じる

10

五大力船の進水(大正11年)
八幡最後の新造船第2栄宝丸

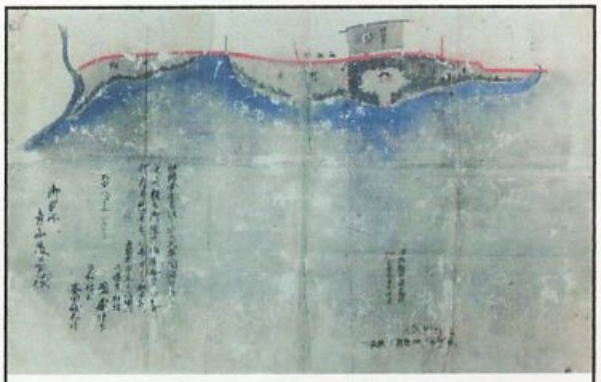
棒木立て役番(大正5年)　船主子孫宅所蔵

11



五大力船の時代が終わり、観光船に転用(昭和はじめ)
海の家子孫宅所蔵

12

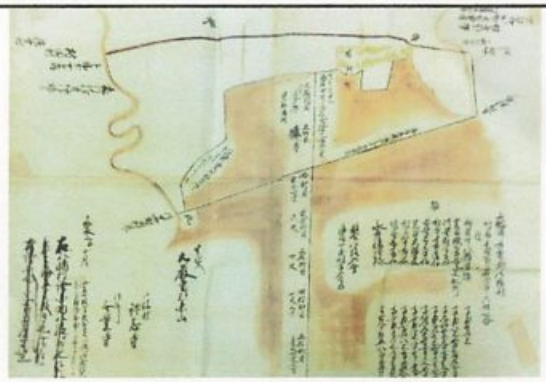


天正18年の八幡海岸＝八幡宮→家康「神領図」 湊は確認できない

13

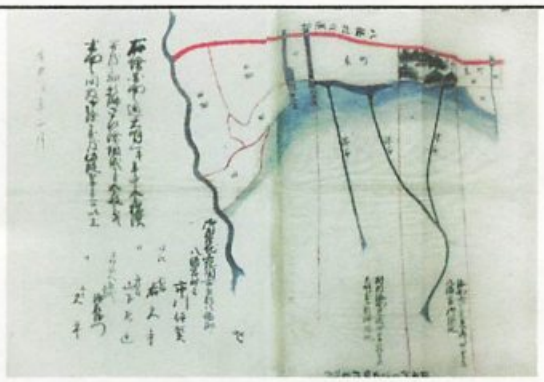
江戸中期の八幡村＝湊町として整備され、発展している様子が窺える

14



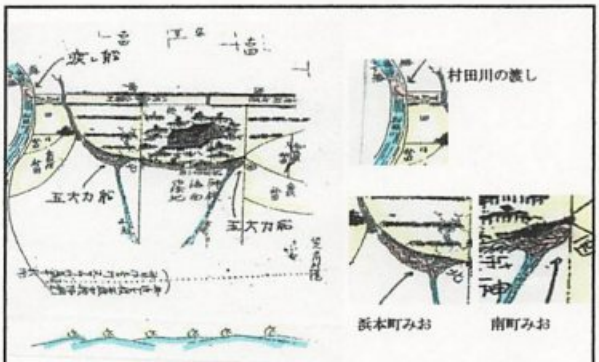
海岸深さの図（嘉永2年）＝4町で7尺、干潟地の正確な記録

15



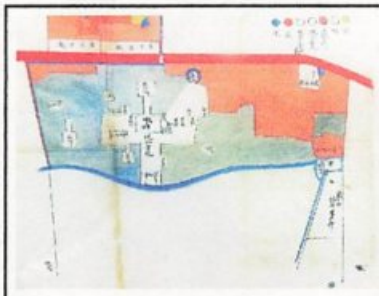
みお筋図（慶応2年）＝みお筋は運河。航路を開く。みおつくし

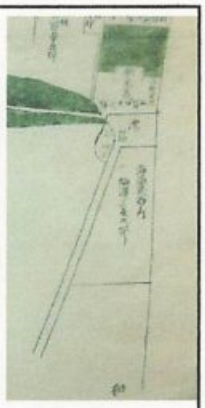
16



八幡村略図（慶応元年）＝みおの船溜りに五大力船が停泊

17

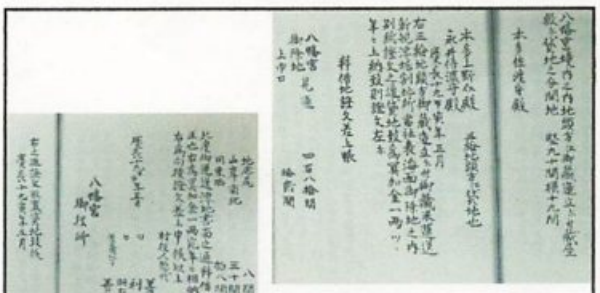


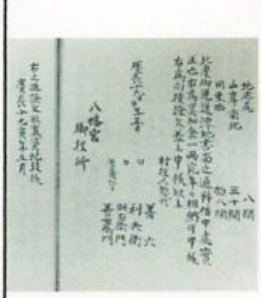


南町みお図（明治6年）＝貴重湊図

蔵地、河岸荷揚げ場、みお（湊）、みお筋
汐浜（塩場）＝金杉浜の製塩場（一部）

18





八幡宮由緒本記（元禄10年再編）

慶長19年　蔵と南町新規みお地　貸し地

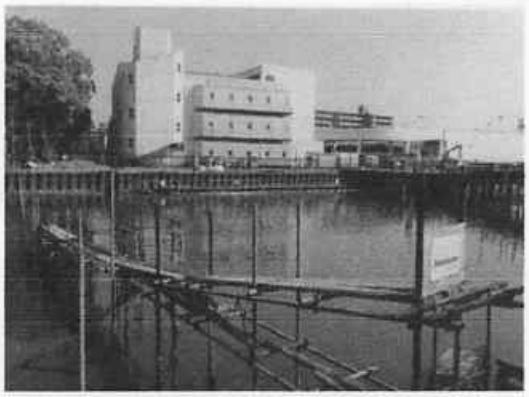
19

南町みお拝借地証文（慶長19年）
村役人総代（3給名主）、輸送人、蔵地守（廻船問屋、五大力船？）善左衛門
→八幡宮御役所

20

南町みお跡(支所前周辺)みお筋（看護専門学校周辺）

21



南町みお筋跡＝八幡運河から埋め立て工場街　古河電工、昭和電工へ

22

浜本町の町並み

浜本町のみお跡

23

年貢米請取り

年貢津出し証文

浜本町廻船問屋
の津出し契約書

24

職業付き住民名簿（明治6年）
＝船持ち渡世、船乗り渡世

25

浜本町のイメージ＝明治の番地付き字訳図に加筆

26

戦前の絵葉書・浜本町みお＝のり採り舟の後方に五大力船も

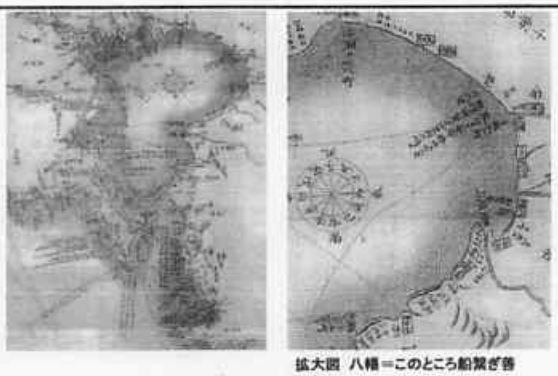
27

浜本町みお筋跡(八幡運河)

28

浜本町みお跡(雁田川)

29



拡大図 八幡＝このところ船繋ぎ善

江戸後期の江戸湾図

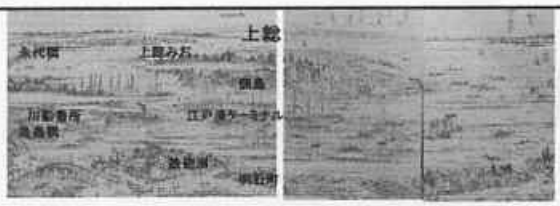
30

市原、千葉周辺の主要港と江戸への航路(イメージ)

31

明治4年の東京湾

32



江戸名所絵図

江戸湾ターミナル跡

江戸・東京湾のターミナル
霊巌島と佃島

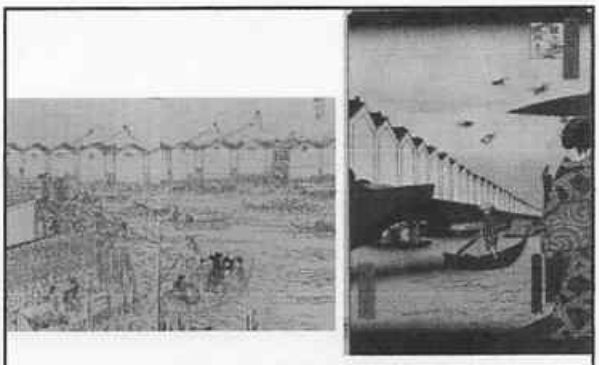
33

日本橋川の玄関口・亀島川

34

現在の日本橋川

35



八幡の五大力船がめざした日本橋小網町河岸

36

日本橋小網町の現況

37

千葉県船改め所
八幡宿戸長文書群の発見

市原市八幡・市川本店

①飯香岡八幡宮創設に遡る旧社家
②江戸後期から醤油醸造、酒類問屋経営
③明治廃藩置県期八幡宿戸長
④明治、大正、昭和期に八幡町長など
⑤数万点規模の古文書を所蔵

38

市川本店＝江戸、明治の面影を伝える
黒板塀、門、帳場、母屋、蔵

39

帳場は映画セットを連想させる
太い柱、壁、土間、帳場机、箱階段、ひばち、明治のガラス戸、 昔の酒看板

40

庭の若葉のころと紅葉
（内部は非公開）

海岸埋め立て以降、池水は枯れる
醤油工場跡は更地

41

明治中期「千葉県博覧図」の市川本店
醤油工場と私邸、広い庭。働く人たち、八幡海岸に五大力船。南町みおから出荷

42

市川本店所蔵の「八幡村村鑑明細帳」（天明7年）
この末に船数明細付けおく

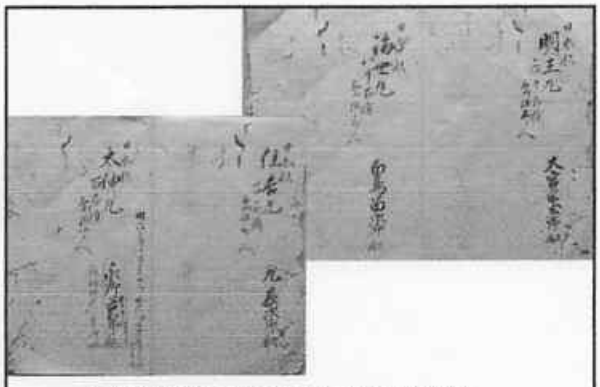
43

本株30艘（権利者）、当時12艘（稼働）、船主名など

44

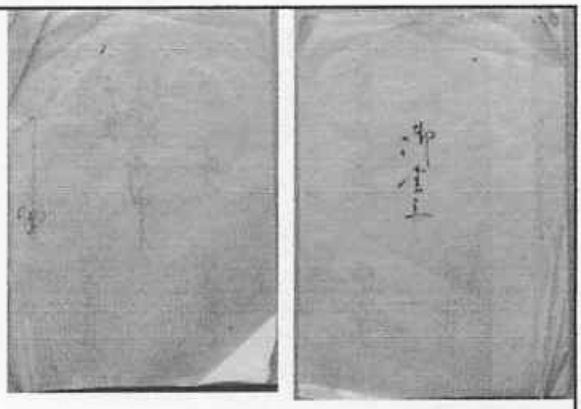
木更津県庁　船印鑑連名帳（明治6年）＝五大力船台帳
木更津県＝明治4-11～、6-6千葉県に。区画制。取締規則で名簿作成

45



五大力船18艘、50石以下の茶船4艘、押送1艘

46



御書上（明治7年）＝はしけ船台帳

47

船持総代→戸長　はしけ茶船、平田船、肥え藻取り船合計22艘
はしけ船＝瀬取り船。陸と停泊の中の本船の間で荷物を運ぶ小船。五大力船が湊で直接荷揚げ、荷降ろしできなかったことを示している　茶船＝10石積み程度の運送用川船

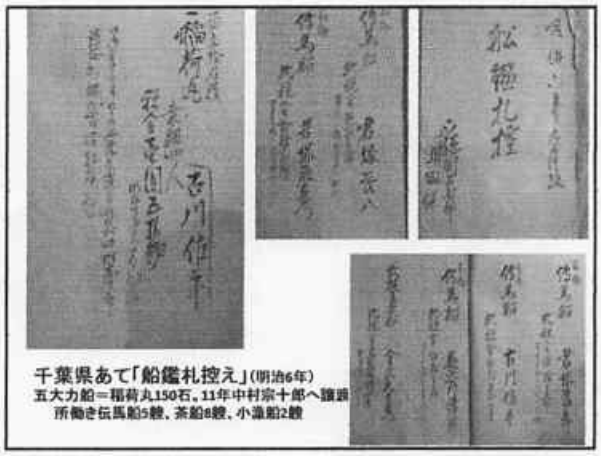
48

千葉市稲荷神社（稲荷町有文書＝五田保波）の虫干し神事
現在に続いていることは大変貴重

49

佐倉県あて 五田保湊「船数書き上げ」(明治4年)
五大力船＝稲荷丸120石千葉寺村五田保・古川佐兵衛。押送り1艘、小漁船4艘

50



千葉県あて「船鑑札控え」(明治6年)
五大力船＝稲荷丸150石。11年中村宗十郎へ譲渡
所働き伝馬船5艘、茶船8艘、小漁船2艘

51

東京港船税(停泊税)取立帳(明治6年＝前年分)

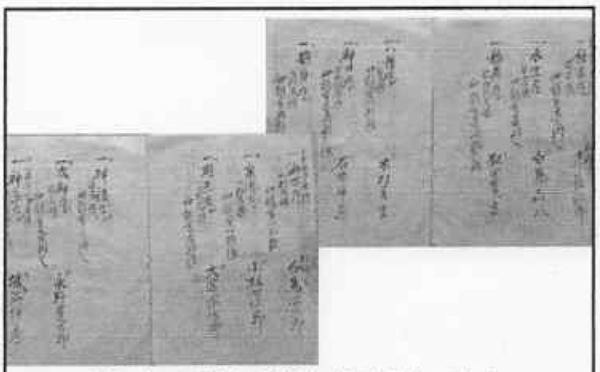
52

松田喜三次・永2貫584文(2両2分と823文)＝永立て

53

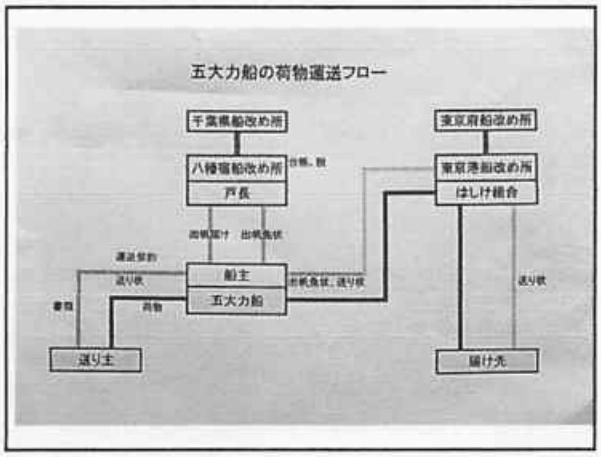
八幡宿船税上納願い(明治7年＝前年分)

54

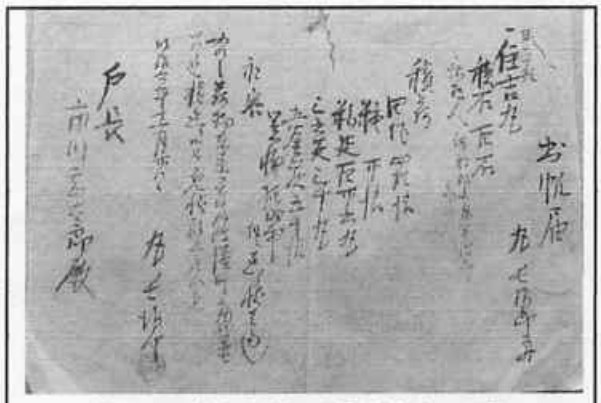


住吉丸・この税金一円なり＝新円に変わっている

55



56

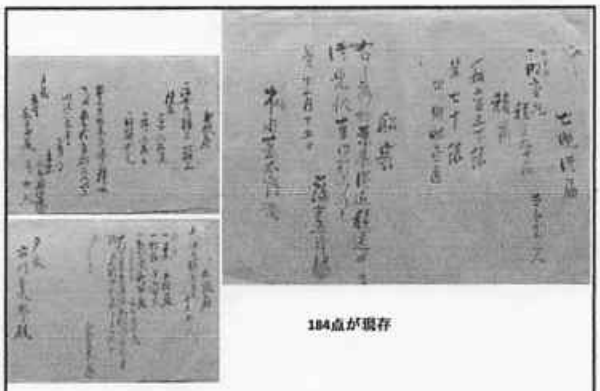


出帆届け（明治6年） 船主→戸長 住吉丸100石積み

57

太神丸115石4斗、直乗り外2人、土釜炭900俵、間渡竹310束、米30俵

58



184点が現存

明宝丸 ﾒ粕150俵、米70俵、東京港まで積み送り、免状願上げ候

59

出帆台帳＝明治6年10月からおよそ1年間発行した出帆免状を記録

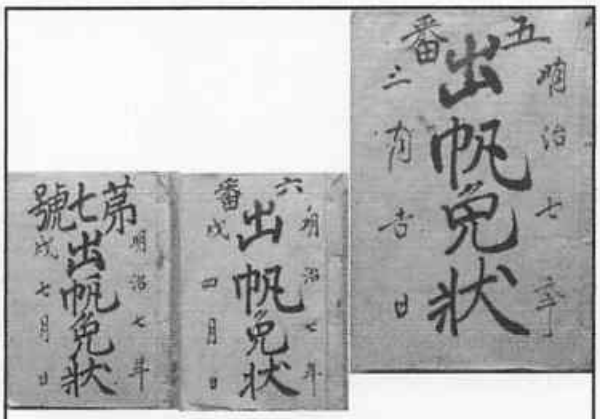
60

出帆免状台帳 免状出帆控一番 八幡宿詰所＝千葉県船改所

61

出帆免状 第二番

62



出帆免状 五番、六番、七番

63

船名、積石、船主、乗組人、日付、行先、積荷。本日当港出帆、免状相渡し候

64

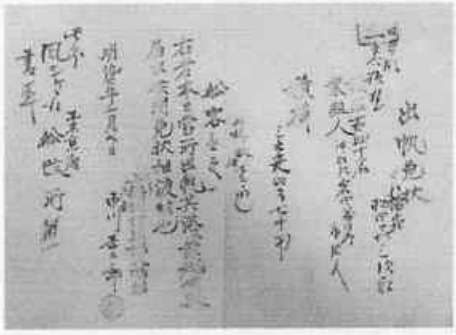
最後のページ

348日分 547件を記載

65

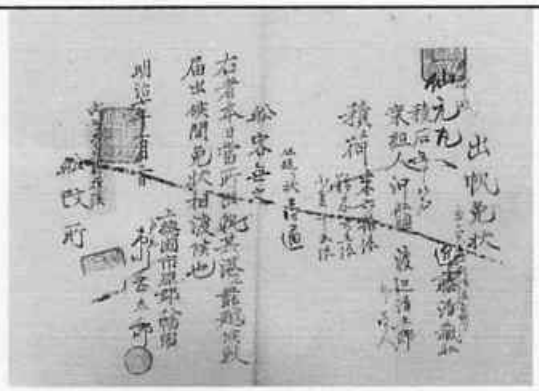
五田保湊の「出帆免状記」(明治6年)
明治6年10月～7年1月29件。千薬船8件、ほか21件
茶船80石＝寒川湊 日暮幸次郎船、直乗船頭外2人、真木・材木、横浜
不動丸85石＝房州長さ村、芋100俵　積荷＝①芋、②藺、〆粕、魚油

66



八幡宿港内船改め所が発行した出帆免状
台帳と割り印、本来は行き先船改め所へ。シケ書き替えのため残る

67



大きな×印＝横浜あて→取り消し変更

68

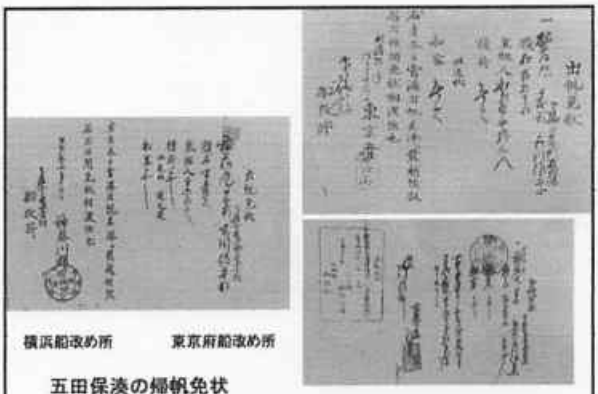
東京府船改所の出帆免状
明30日八幡宿に向け出帆。八幡にとっては帰帆免状でもある

69

221点が現存

出帆免状と整合することで出航サイクルがわかる

70



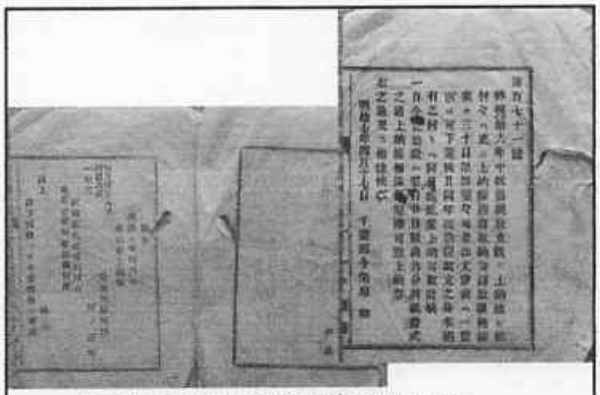
横浜船改め所　　東京府船改め所

五田保湊の帰帆免状

71

横浜船改め所の「出帆免状」（明治6年）＝泉徳丸。ローマ字判

72



「停泊税」の取り立てを指示する千葉県令布告

73

古五大力船譲渡休業願い(明治7年)＝平寿丸
八幡宿北嶋巳之吉→村田村岩田万之助へ譲渡

74

五大力船譲渡届け　千歳丸100石三道具鑑札付50円　八幡宿→村田村

75

盗難届(明治7年)＝五大力船12反掛け帆

76

後半はお手元の資料をご覧下さい

89

平成２９年８月３日

山岸　弘明　様

市原市立八幡中学校
校 長　齋藤和夫

「ようこそ先輩授業」の講師について（依頼）

炎暑の候、貴台におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃より本校の教育活動に御理解と御協力を賜りまして厚く御礼申し上げます。

本校ではキャリア教育・郷土学習の一環として、将来の夢や希望を持つ大切さ、人生の生き方を学ぶために『ようこそ先輩授業』を、下記の通り計画いたしました。

つきましては、お忙しいところ誠に恐縮ですが、第一部の講師として本校生徒にご指導いただきたくお願い申し上げます。

記

1．日　　時　　平成２９年１０月１４日（土）　**※9時４０分までにお越しください。**

第1部　１０：１０～１１：００　《学年・学級別授業》各教室など

①開会の言葉
②講師紹介
③講　　話（約３５分間）
④質　　問
⑤お礼の言葉
⑥閉会の言葉

第2部　１１：２０～１２：３０　《全校一斉授業》　体育館

※本校卒業生によるエイサーの講演と演舞

2．場　　所　　市原市立八幡中学校　　各教室・武道場・体育館

3．内 容 例　　・八幡地区および八幡中の歴史に関わるもの
・中学校時代にがんばっておいてほしいこと
・社会人になるために必要なこと　　など

4．授業対象　　１年生の１クラス　（授業参観のため、保護者もおります）

5．そ の 他　　①同封の「講師自己紹介カード」にご記入いただき、返信用封筒にて８月３１日までに、八幡中学校（教頭 鎗田）へご返送願います。また、当日準備する物等がございましたら、備考欄にご記入ください。
②図書室を控え室といたします。
③**当日、印鑑をご持参ください**。

※ご不明な点などございましたら、八幡中（教頭鎗田・担当蒲谷）までご連絡ください。
電話番号：０４３６－４１－０７７２　　ＦＡＸ：０４３６－４２－２６６８

※授業を行っていただくクラスなど、９月に改めてご案内されていただきます。

平成29年 9月 20日

ようこそ先輩授業講師各位

市原市立八幡中学校
校長　齋藤 和夫

「ようこそ先輩授業」の開催について

初秋の候、皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。また、この度は、本校の教育活動「ようこそ先輩授業」にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、間近に控えました「ようこそ先輩授業」につきまして、下記の内容にて実施させていただきます。お忙しい中とは存じますが、ご確認のほどよろしくお願いいたします。

記

1．日　　時　　平成２９年１０月１４日（土）　　１０時１０分～１２時３０分

2．場　　所　　市原市立八幡中学校　　各教室・体育館

3．内　　容

◆第１部　１０：１０～１１：００　《学年・学級別授業》各教室および体育館

講　　師	学年学級	お話していただける内容　・　演題
清水あき子 様	１年１組	昔の八幡
石井　　勇 様	１年２組	八幡の海と工場
佐倉　東雄 様	１年３組	八幡、出会を大切に
山岸　弘明 様	１年４組	五大力船から潮干狩りへ～八幡は昔、海の町だった～
時田　光夫 様	１年５組	八幡中の昔と今
石井　宗則 様	２年１組	仕事と人の繋がりについて
松尾　三枝 様	２年２組	花を愛でる心（フラワーアレンジメント作成）
石井　清之 様	２年３組	人とのコミュニケーションの大切さ
青木　宏介 様	２年４組	目標達成・夢の実現のために
池田　宏嗣 様	２年５組	好きな事はとにかく継続！
鈴木　彩音 様	３年	◇今、自分自身が将来なりたい職業に向けて考えている事
立花　　唯 様	３年	◇中学校生活の大切さ、進路決定の理由・アドバイス、高校生活について
阿部紗理菜 様	３年	◇進路決定に向けて取り組んだこと、高校に入学してからも頑張ってほしいこと

※１・２年生は各教室、３年生は体育館での授業になります。別紙を参照ください。

◆第２部　１１：２０～１２：３０　《全校一斉授業》　　体育館

講師：本校卒業生によるエイサーの講演と演舞

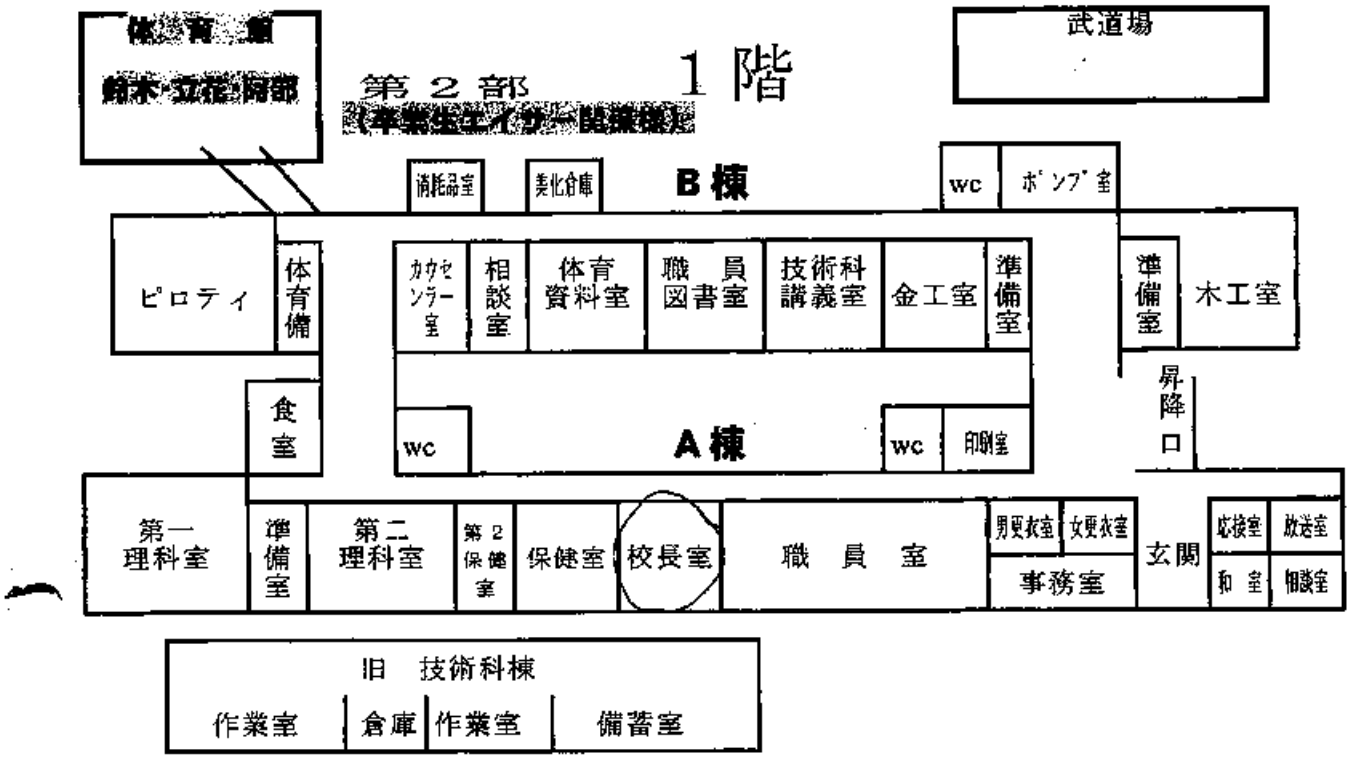
演題：「八幡中エイサー魂」

4．そ の 他

・９時４０分までにお越しください。
・駐車場は、職員駐車場（正門から入り左側）をご利用ください。
・校長室を控室といたします。
・印鑑をご持参ください。

※ご不明な点などございましたら、八幡中（教頭鎗田・担当蒲谷）までご連絡ください。
電話番号：０４３６－４１－０７７２　　ＦＡＸ：０４３６－４２－２６６８

平成２９年度　ようこそ先輩授業会場図（第１部）

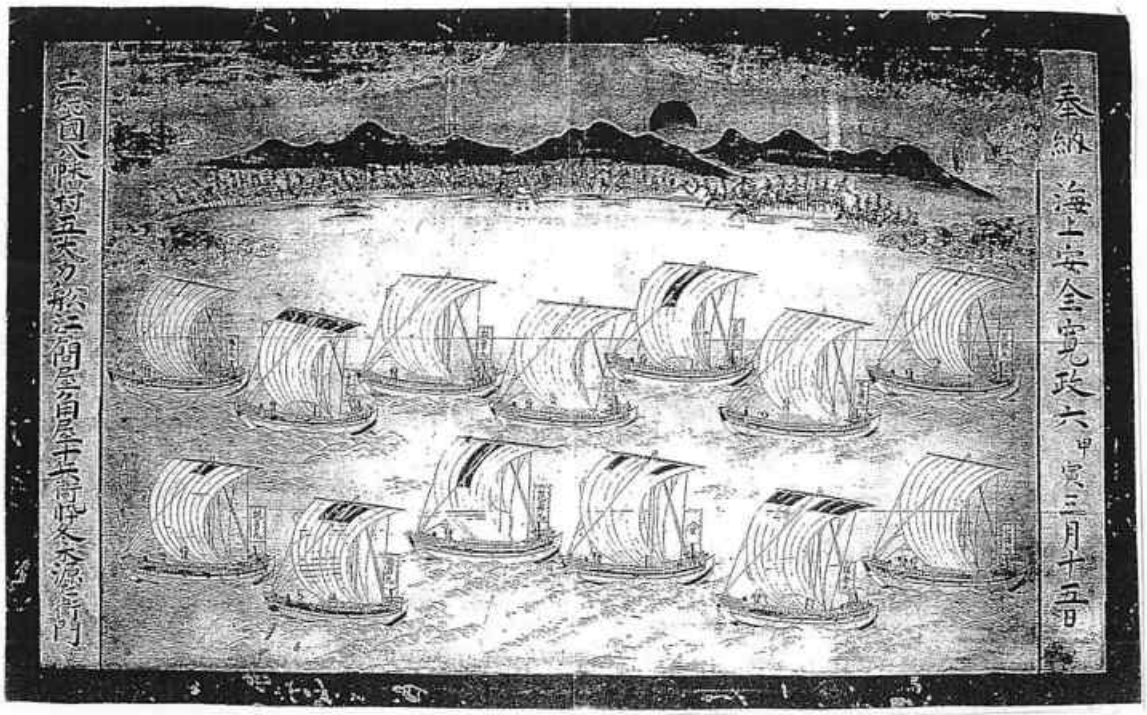


92

八幡中学校「ようこそ先輩授業」

五大力船から潮干狩りへ ～八幡はむかし海の町だった

みなさんはむかし八幡が「海の町」だったことを知っていますか。
目の前に真っ青な大海原が広がり、富士の裾野が雄大な姿を見せました。
遠く近く白い帆をふくらませた「五大力船」が行き来しました。
かつて「上総（千葉県）海陸交通の中心地」として発展した八幡の歴史は
「八幡さま」と海なくして語ることはできません。



飯香岡八幡宮五大力船　　大絵馬
八幡村五大力船船揃い図（宝蔵庫常設展示大絵馬＝横１５４、立て９３㎝）
奉納、海上安全、寛政六甲寅三月十五日
上総国八幡村五大力船江戸問屋角屋十兵衛せがれ冬木源左衛門
初代登亭北寿画。ピカソに影響を与えたとされる葛飾北斎の門人で、北斎の洋風版画を引きついで個性的な作品を残した。八幡宮の祭礼での船揃いを描いている。船名や帆印、乗組員や積荷、手信号など細かく描写されている。

平成２９年１０月１４日

1)はじめに「八幡さま」ありき～プロローグは「町名の由来」から

①「やわた」の地名は飯香岡八幡宮から
飯香岡八幡宮は白鳳時代（7世紀後半）勧請（かんじょう）と伝わる古社です。
はじめ国府近く産土神（うぶすながみ＝土地の守り神）として誕生、室町時代の中ごろ（14世紀後半か）市原台地から現在地に移転したと考えられるが詳細は不明です。

②当時の八幡はまだ海岸砂浜で、民家や寺が散在する寒村でした。
古くから上総国府と下総国府を結ぶ「古代東海道」として整備され、この間「更級日記」菅原高標のむすめが京都へ旅立ち、源平の時代・源頼朝が鎌倉をめざし、戦国時代は関東の覇権をかけた北条氏、里見氏の軍馬がはせる軍用道路となりました。

③八幡の街並みは、飯香岡八幡宮が八幡に移転し、小田原北条氏領、千葉一族の原氏が領主だった天正9年（1581）の門前町「保護政策」から。人々が集まり、江戸時代「水陸交通要衝」の「物流拠点」として木更津と並ぶ上総最大の「商業都市」になりました。

④飯香岡八幡宮は家康以下の徳川歴代将軍から「朱印150石」を拝領、15万石の格式が与えられて明治維新に及びました。

2)駅名の「八幡宿」ってなーに？～参勤交代の大名行列も通った「宿通り」

①八幡の町を南北に縦断するバス通りは「房総往還」と呼ばれた昔からの幹線道路でした。
江戸時代、久留里黒田2万石、五井有馬1万石、鶴牧水野1万5千石、佐貫阿部1万6千石など房総諸大名の参勤交代路となり、100人ほどの供揃いで江戸をめざしました。

②当時の八幡は宿場町として発展、町まん中、現在八幡武道館前の交差点が「高札場」で、周辺に継ぎ立て人馬を常備した「伝馬（てんま）所」が置かれました。「本陣」は村名主が年番で勤めたが、先をいそぐ大名行列が休泊することはありませんでした。

③八幡の通称は「上総八幡宿」でしたが房総往還が脇往還のため宿名は名乗れません。「宿名乗り」は村の悲願で、明治維新の時「八幡宿」が認められました。

④八幡宿は明治22年まで。この年五所金杉村、山木村と合併して八幡町となり、八幡宿の名は大字名としてしばらく使われました。

⑤明治45年（大正元年＝1912）国鉄木更津線が開通、「八幡宿」が駅名になります。古くさそうな駅名は、当時の住民にとって「勲章」でもあったのです。

町名になった「飯香岡八幡宮」

房総往還の面影を残す「宿通り」

3)五大力船が江戸を結んだ～首都・江戸を支えた物流拠点

①江戸時代から明治時代にかけての八幡は市原郡最大の港町として発展しました。

②その中心は「五大力船」と呼ばれた「中型帆船」でした。首都・江戸と江戸湾の各港を結ぶ「地回り廻船」で、全長10～20メートル、積載量60石(8トン)～200石(24トン)、海上は風力を利用、江戸市中は棹を使いました。わずか3、4人で100石もの荷物を運んだ力強さを「五大力菩薩」に例えました。

③八幡港は「南町澪(みお)」と「浜本町(はもと)みお」からなり、南町は慶長19年(1614)、当時の名主と船主が飯香岡八幡宮の干潟地を堀割り(みお筋)して「船だまり」と蔵地を築き、「年貢米津出し港」としたことに始まります。また、浜本町もそれと前後して民間船用に築かれたと考えられます。

④浜本町には船宿、船主、船乗り、荷役を担当する艀(はしけ)人、船大工のほか、穀物商、薪炭商、太物(反物)商などの問屋倉庫が並び、風呂屋、旅籠、飲食店など、ほぼすべての人たちが船とかかわりました。

⑤五大力船は船だまりを母港としたが、浅瀬のため積み荷の上げ下ろしはできず、いったん海上に船を出して「はしけ船」が陸地と船を中継しました。

⑥八幡から江戸まで「海路8里(32キロ)」順風なら3～4時間で到着、時速8キロ、早さは自転車なみでした。

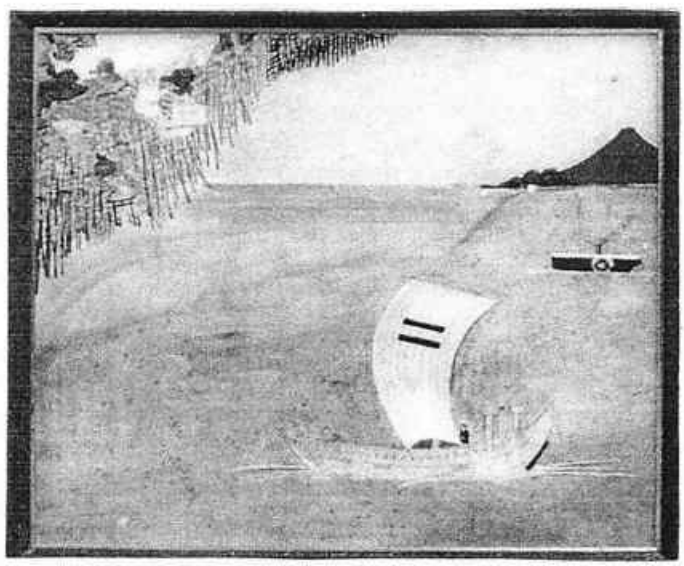
⑦「江戸(東京)港」は隅田川河口一帯をいいます。船はいったん佃島前のターミナルで帆を降ろし、日本橋川を上って「小網町河岸」に停泊しました。

⑧江戸への積み荷は米、材木、薪炭、ぬか、肥料、わら製品などで、帰り船に衣類や雑貨などの生活物資と「江戸文化」を持ち込みました。

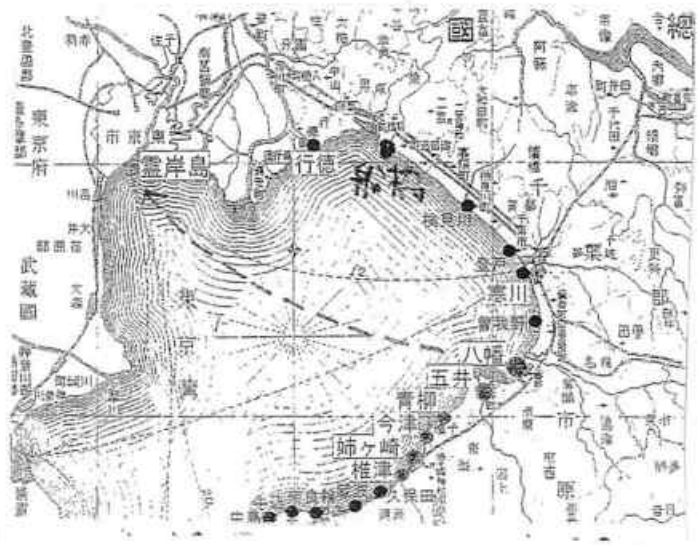
⑨江戸中期天明7年(1787)の五大力船は「本株(権利者)30艘、当時(実動)12艘」(八幡村村鑑明細帳)で、飯香岡八幡宮絵馬(前出)は13艘が画かれています。五大力船数は江戸時代を通じ10艘代でした。明治6年「木更津県八幡宿船改め所台帳」は17艘で、最盛期の大正はじめはおよそ30艘と伝えられています。

⑪明治45年八幡宿駅開業、その後自動車の普及につれ、一大消費地・東京への物流は海送から陸送へと移行します。大正、昭和はじめにかけて廃業が相次ぎます。昭和10年ころ、八幡港は海苔取りの舟だまりと代わり、レジャーボートが風を切りました。

⑫およそ300年に渡って江戸・東京市民の生活を支え、上総の経済と文化の担い手となった五大力船はその役割を終えて静かに姿を消します。



飯香岡八幡宮の大絵馬「五大力船と蒸気船



八幡周辺の港と江戸への航路

4)「市原海苔」は色つやもよくおいしい～全国に轟いた名声

①八幡の海運業が低迷を迎えたころ、救世主として登場したのが「海苔の養殖」でした。
②江戸後期、浅草の海苔商人・近江屋甚兵衛が品川、大森が独占した海苔養殖を君津の小見川河口・人見海岸で成功、近在の村々に普及します。
③明治 40 年代に市原も生産にかかわり、八幡海岸は大正はじめから。「市原の海苔」は色つやがよくおいしいと評判が良かった。生産高も上昇、昭和 15 年千葉県は東京「浅草海苔」をおさえ全国第 1 位になりました。
③八幡海岸に大きな「海苔養殖場」が築かれました。「竹柱（ヒビ）」を並べ、この柱に網をくくりつけて菌を植え付けました。養殖場は毎年抽選で決まり、「海苔取り舟」はかつての五大力船の母港を埋め尽くしました。厳冬期、各家庭での「ナマ海苔加工」と海岸一面に広がった「海苔干し場」は八幡の冬の「風物詩」でした。
④戦後の「高度成長時代」、社会の急激な発展は自然環境も変えます。海は汚れ、流失した原油が海苔場を襲ったりもしました。それは海苔養殖地の「レッドカード」を意味しました。昭和 33 年「八幡五所漁業協同組合」最後の会員数は 2389 戸でした。

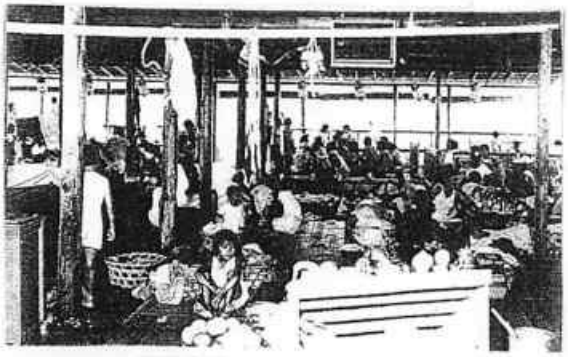
5)旧八幡中学校グランドを埋め尽くした観光バス～潮干狩りまっさかり

①昭和はじめ八幡海岸に海水浴、潮干狩り、すだてなどのマリーン産業が開花します。
②戦後の昭和 20 年代後半から 30 年代はじめにかけて、国は「高度成長」にわき返り、八幡海岸は最盛期を迎えます。
③夏の海水浴、潮干狩りシーズンには東京から児童、生徒を満載した貸し切りバスが 50 台以上もやってきて、現在八幡公民館前の「八幡中学校」グランドが臨時駐車場となりました。バックネット横のコンクリート岸壁から突き出すように「海の家」が並びました。
④海岸は波静かで遠浅、満潮時はその岸壁まで波が押し寄せて「海水浴場」となり、干潮時は 4 キロメートルもの干潟地が「潮干狩り場」になりました。
⑤「海の家」は風呂付き脱衣場が 30 円、入場料が 30 円、あさり取り道具が 15 円、網が 5 円、売店はかき氷とアイスキャンデー、サイダー、ラムネが飛ぶように売れました。

冬の風物詩だった海苔干し

潮干狩りでにぎわった八幡海岸

海の家の案内ちらし



「海の家」の内部

八幡中校庭を埋めた観光バス

96

6)明日への飛翔～近代産業プラントが林立する工場の町に一新

①昭和 31 年、「京葉臨海工業地帯」計画にともない、千葉県が「八幡五所漁業協同組合」に「漁業権の買収」を提示しました。浦安から船橋、千葉、市原、袖ヶ浦、木更津、君津におよぶ内湾干潟地を埋め立てるという、膨大な造成計画に町の人たちは驚きます。

②年寄りたちは「先祖からの海を潰してはいけない」と反対、一方、若者たちは、海苔や貝に頼る生活に見切りをつけ、雇用拡大による新しい「町造り」にかけたのです。昭和 32 年 10 月「漁業権」を放棄して県と調印、五井や姉崎地区もこれにならいました。

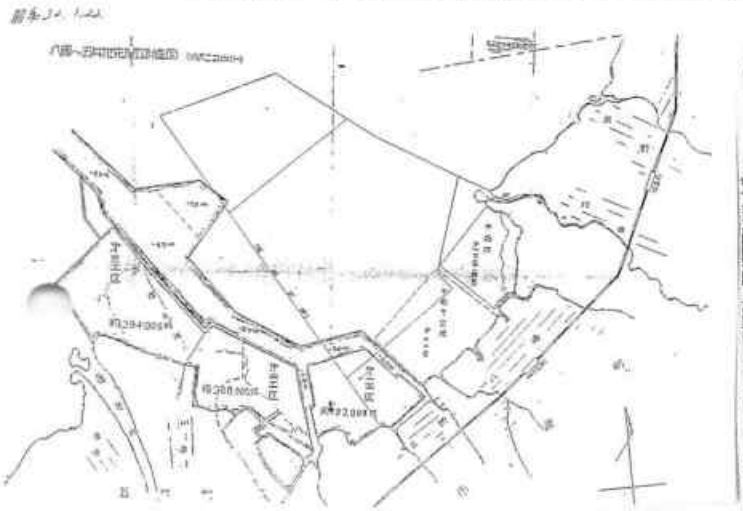
③八幡海岸はアッという間に埋め立てられ、工場の巨大プラントが建設されました。
昭和 35 年、八幡地区には造船や電機、ガラス工場などが操業を開始、日本有数の工業都市へと成長しました。

7)八幡の「歴史文化」を語り継ごう～フィナーレは皆さんです

①八幡から海がなくなって間もなく 60 年、つい半世紀前まで東京湾に面した小さな港町に、いまはもう潮の香り一つ漂うことはありません。歴史や文化など海岸埋め立てで失った代償も決して小さくありません。しかし今日、工業都市としての町の発展と私たちの生活は、「先祖伝来」の海を手放した先人たちの苦渋の決断にあったといえます。

②八幡港も、五大力船も、海苔場も、海水浴も、潮干狩りも、とうの昔に忘れられ、すでに「死語」といってもいいでしょう。そしていま、残された町の「歩み」そのものが貴重な「歴史遺産」となりました。私たちの世代から皆さんの世代へ、そして皆さんから次の世代へ、「八幡町の歴史文化」が永遠に語り繋がれることを願ってやみません。

山岸弘明（八幡公民館主催事業「八幡史学館」講師。市原の古文書研究会代表）

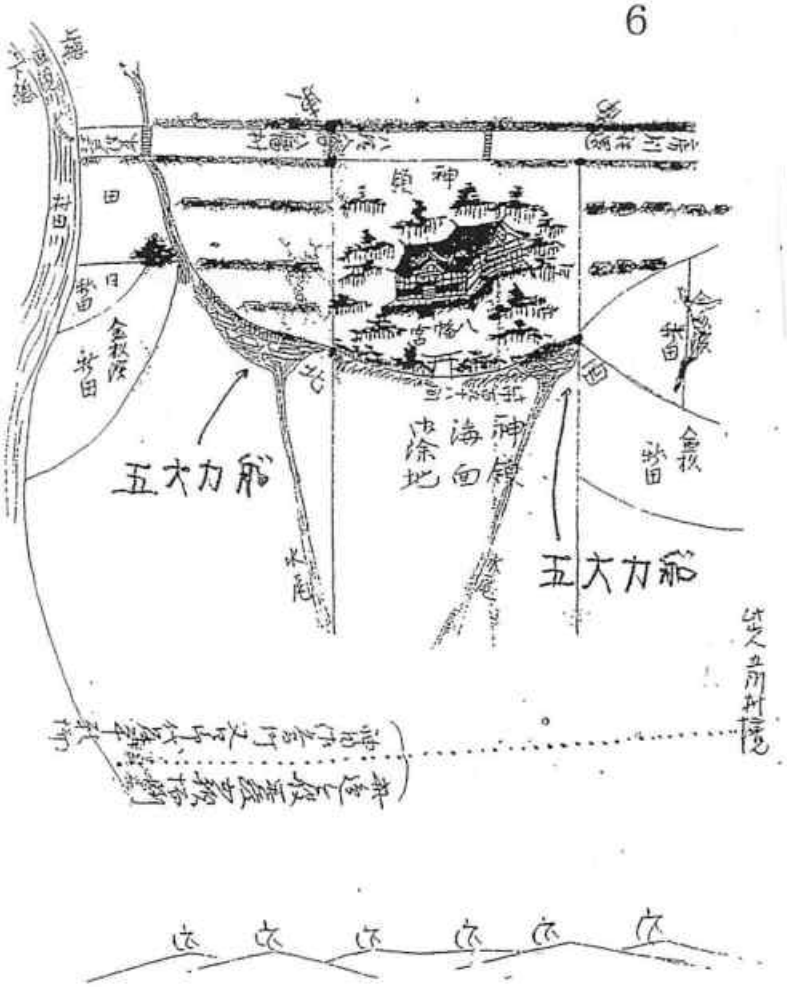


説明会で使用された八幡海岸の造成計画図

八幡海岸は埋め立てられて工業地帯に

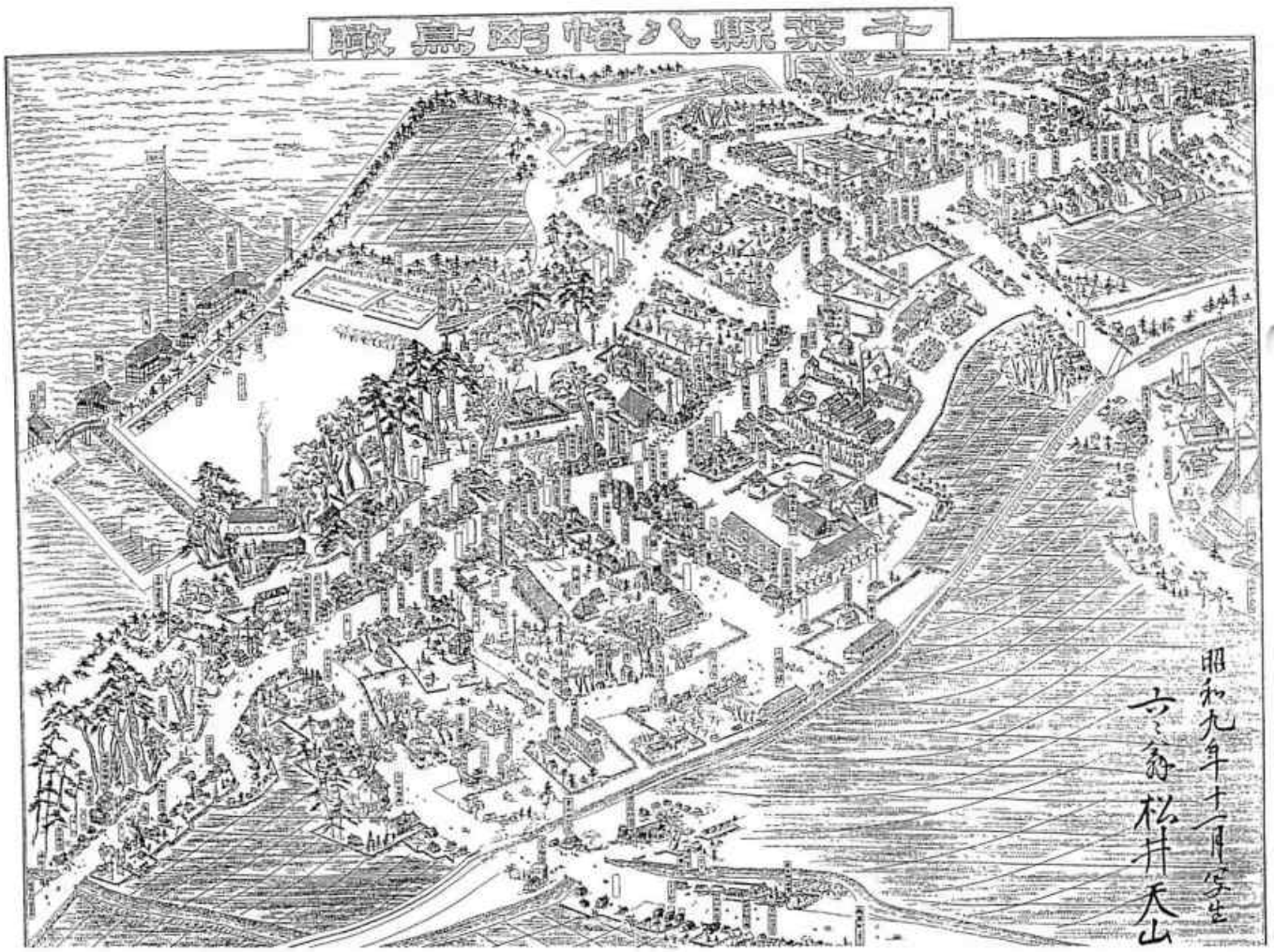
去年 1 月八幡宿駅ギャラリーで開催した「五大力船展」

干潟地の一部は航路になっている



ベイシア裏に残る浜本町みお「船だまり」

慶応元年(1865)「八幡村略図」の八幡港



昭和9年(1934)「八幡町鳥かん図」、戦前の八幡海岸を空から見下ろす

千葉日報（日刊）

2017年（平成29年）10月21日（土曜日）

「先輩授業」で夢意識

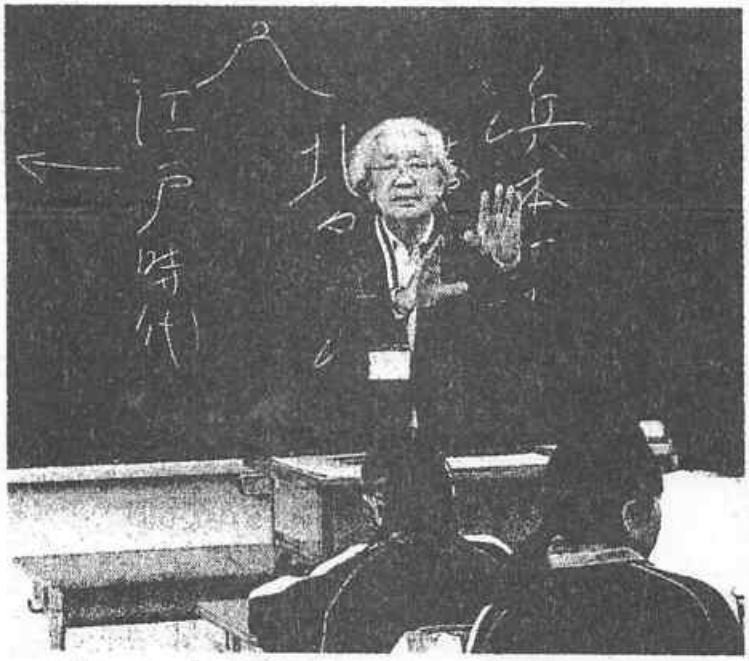
八幡中生徒が職業学習

市原

市原市八幡の市立八幡中学校（斎藤和夫校長、生徒578人）で、卒業生らを招いて話を聞く「ようこそ先輩授業」が開かれた。全校生徒は多方面で活躍する講師の授業に耳を澄ませ、夢を持つことの大切さなどを学んだ＝写真。

キャリア教育や郷土学習の一環で、同校が2014年度に始めた取り組み。仕事の内容ややりがい、地域の歴史を紹介するため、今回は25人が講師として協力した。

第1部は学年別での授業で、八幡地区の今昔を知る地域住民が1年生を、さまざまな業界で活躍するOB・OGが2年生をそれぞれ担当。3年生は身近な先輩に当たる地元の高校生が受け持ち、進路決定のアドバイスを送ったり高校生活を紹介したりした。



第2部では、在校時に沖縄舞踊のエイサーに打ち込んだ卒業生が、全校生徒に演舞を披露。現在も体育祭などでエイサーの披露を続ける在校生とのコラボレーションも実現し、大盛り上がりで幕を閉じた。

平成２９年１０月吉日

ようこそ先輩授業にお越しいただいた講師の皆様へ

謹　啓

秋冷の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。去る、１０月１４日に実施いたしました「ようこそ先輩授業」では講師として本校にお越しいただき、生徒たちのためにご尽力いただきまして誠にありがとうございました。

皆様からご指導いただいた生徒たちは、自分たちの先輩や地域の方から直接、世代を越えて学んだ経験が、脳裏に強く印象に残っているようです。

遅くなりましたが、授業を受けた生徒たちの感想用紙を同封させていただきました。お忙しい中とは存じますが、お手すきのときにでも読んでいただければ幸いです。日頃体験することのできないお話や映像に触れる機会を得られたことの喜びが、感想としてまとめられています。今回の経験は、生き方等について考える良いきっかけとなったことと思われます。

講師の皆様におかれましては、今後とも八幡中学校へのご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。これから寒さに向かう折、ご健康にご留意され、ご慈愛くださいますようお祈り申し上げます。

書状にて大変失礼と存じますが、お礼の挨拶とさせていただきます。

敬　具

市原市立八幡中学校
校　長　齋藤和夫

ようこそ先輩授業　感想用紙

講師の先生のお名前　山岸弘明　先生

◇講師の先生のお話から学んだこと、感じたことを書きましょう。

・ようこそ先輩という授業で僕たちのクラスには山岸弘明さんという方に来てもらい八幡の町は昔、海だったというテーマで話してくれました。八幡の町は、海だったということはとても想像ができないので僕は興味をもって講師の先生の話しを聞きました。八幡の海には五大力船という大きな船がたくさんあったそうです。でも、その船の中には3、4人ぐらいの人しかいなかったのに重い荷物などもたくさん持ったそうなので、その時代は大変なんだなと思いました。僕はその色々な話しも聞くまでは八幡にはそんな歴史はないと思っていました。しかし、八幡は昔、海だったということなどを聞いてとてもほこらしいと思いました。でも、その海はもう70年ぐらいになくなってしまったので残念ですが、これからの未来を大切にして新しい歴史をつくっていきたいです。

◇あなたの将来の夢や希望について考えていることを書いてみましょう。

僕は将来人に役に立てるような人になりたいので勉強を毎日、頑張っていきたいです。その理由は、親や友達などいろいろな人にけっこう迷わくをかけているのでいつかは恩返しをしたいと思ったからです。そして、学校の先生になって間違えた道を歩まないように、1人1人に厳しく指導をしていつかはみんなに感謝されるような人になりたいです。

ようこそ先輩授業　感想用紙

講師の先生のお名前　山岸 弘明 先生

◇講師の先生のお話から学んだこと、感じたことを書きましょう。

私の家族には、八幡出身の人は、いなかったので昔の八幡を知るとてもいいきかいになりました。

今はないけどこの八幡地区が海だったことは、私達の次の代、その次の代…などに伝えていけたらいいなと思いました。

海でのりや貝などを作っていたころとはまったくちがって、技じゅつなどが発てんしていったからこそ昔の事が調べられてわかり、今日の"ようこそ先輩"で私達が知ることができて、今まで語りついできた人達をすごいなーと思いました。

◇あなたの将来の夢や希望について考えていることを書いてみましょう。

私はまだはっきりとした夢はないけれど、色々なしかくをとって人々のやくにたつことをしたいと思っています。

また、今日教わった伝とうを受けつぐように何かを先輩方から受けついで成長していきたいです。

（第3種郵便物認可）　東京新聞　2017-8-31

「八幡港」の繁栄 はっきり

市原の研究会、記録集を出版

明治期の帆船運航史料を解読

明治初期、海運で栄えた「八幡港」（現・市原市八幡）の帆船の運航記録をまとめた冊子「市原の古文書研究　第七集」を、県内の有志でつくる「市原の古文書研究会」が自費出版した。同会のメンバーが専門家の協力を得ながら史料約八百点を解読。八幡港から米や炭を東京へ運んだ当時の様子が分かる貴重な記録集となっている。（中山岳）

明治初期の「八幡港」の海運の実態についてまとめた冊子「市原の古文書研究　第7集」を持つ山岸弘明さん＝市原市で

八幡港は、江戸時代から昭和初期まで市原市の繁街―同八幡宿の近くにあり、木更津港と並び上総地方を代表する港だった。「五大力船」と呼ばれる三十〜五十人乗りの中型の帆船が行き交い、江戸・東京などへ物資を運んでいた。

八幡港に関する史料は、一八七三（明治六）年から一年間、八幡港を含めた地域一帯の行政を仕切る戸長を務めた市川家に保管されていた。当時、船主が船を出すために戸長に提出した「出帆届」や、積み荷の明細などを記した「出帆免状台帳」などがあった。

冊子によると、七三年十月から約一年で、八幡港から五大力船が出港したのは五百四十七件。運んだ積み荷は、米が一万二千三百俵余、炭が二十万一千四百俵余。他に薪十二万一千九百束を運んでいた。出帆届などの史料の写真や、五大力船の絵図なども掲載している。

市原の古文書研究会の山岸弘明代表（もと）＝市原市八幡北町＝らメンバー八人が約四年前、市川家から史料を借り、八幡公民館で大学教授や博物館学芸員らと協力して解読を進め、冊子にまとめた。

山岸さんは「東京湾の五大力船についてまとまった史料が見つかったのは、これまで例がない。八幡港の記録から、当時の海上輸送の一端が明らかになった」と話している。

冊子はB5判、二百四十ページで約百五十部作成。市販していないが、同会は希望者に千円（送料別）で提供する。問い合わせは、山岸さん＝電080（6668）2237＝へ。

市原中央・八幡図書館 蔵書をご利用ください

明治６、７年　月別、船別件数と積み荷総括表

五大力船台帳

船別積み荷表

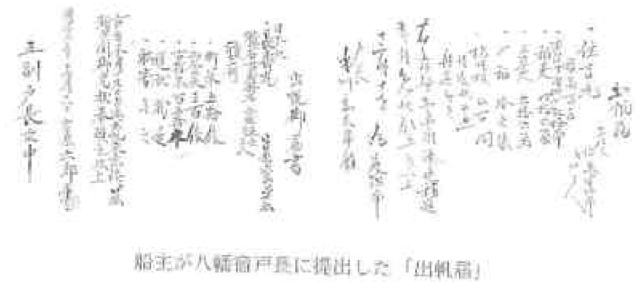
	船名	積石	船主	母港	出帆数	米（俵）	炭（俵）	薪（束）	その他積み荷
1	神徳丸	100	石橋清次郎	八幡	48	50	24,340	3,900	醤油、竹材
2	神力丸	120	石井伊蔵	八幡	44	2,551	29,107	10,210	錦案、麦、竹材
3	大神丸	100	水野啓五郎一健太郎	八幡	43	686	17,850	35,750	竹材、板材
4	神森丸	115	城谷伊蔵	八幡	38	1,464	24,960	9,950	莚、糟粕、竹材
5	住吉丸	100	丸長次郎	八幡	32	4	3,456	1,600	莚、笠
6	住吉丸	90	雪本梅次郎	八幡	31	45	8,635	0	糠、わら
7	平寿丸	81	北嶋巳之吉	八幡	31	1,438	4,040	1,500	糠、醤油
8	明宝丸	90	藤本五郎治	八幡	31	1,560	13,753	1,000	材木、莚
9	八幡丸	80	木村馨吉	八幡	31	1,120	11,260	6,621	麦、竹材
10	稲荷丸	120	松田豊吉	八幡	30	0	5,334	1,000	莚、麦、魚粕
11	栄徳丸	80	小林七次郎	八幡	28	308	6,960	3,900	わら、竹材
12	高砂丸	140	松田喜三次	八幡	28	0	7,145	900	魚粕、畑作、材木
13	文久丸	130	白鳥喜一郎	八幡	26	387	16,699	4,000	材木
14	長寿丸	120	宮原六郎平	八幡	24	55	3,020	8,110	材木、瓦、莚
15	満世丸	80	白鳥留次郎	八幡	22	495	10,950	9,720	
16	千年丸	160	伊藤久次郎	八幡	19	15	4,575	13,800	竹材、瓦
17	木宝丸	100	白鳥喜八	八幡	11	230	3,300	1,700	大豆、笠、莚
18	明玉丸	60	大宮常太郎	八幡	1	0	694	0	材木、莚
	明治丸	58	小川亀吉	八幡新規	8	39	4,200	1,000	6月から
	山王丸	50	板倉久八	八幡茶船	2	32	450	500	
	地元丸	50	松田喜三次	八幡茶船	1	0	0	1,200	
	稲荷丸	79	久保寺金左衛門	寄島浦	10	1,193	0	0	
	伝吉丸	80	石橋伝吉	村田	3	190	250	0	
	朝日丸	80	高田徳兵衛	横須賀	2	0	440	0	
	神力丸	150	鈴木平七	木更津	2	450	0	0	
	取方丸	140	成島甚左衛門	花原	2	0	0	0	干草
	吉明丸	58	近藤清蔵	横浜	1	85	0	0	
	合計				547	12,336	201,448	121,961	

7冊の「出帆免状」台帳

月別積み荷表

		出帆数	米（俵）	炭（俵）	薪（束）	備考
明治６年10月	23日から	13	517	5,391	2,300	
〃　１１月		51	1,251	15,429	10,400	
〃　１２月		58	1,739	23,916	13,750	
明治７年１月		59	1,768	21,613	18,604	
〃　２月		52	2,241	21,498	11,200	
〃　３月		54	1,003	16,150	15,100	
〃　４月		56	727	20,400	14,180	
〃　５月		43	369	15,674	11,500	
〃　６月		27	0	7,862	6,910	
〃　７月		35	30	12,216	8,550	
〃　８月		46	132	24,012	3,860	
〃　９月		45	2,186	14,969	5,107	
〃　１０月	4日まで	8	433	2,318	0	
合計		547	12,336	201,448	121,961	

市川本店



船主が八幡宿戸長に提出した「出帆届」

東京府船改め所が発行した「出帆免状」

八幡宿戸長が発行した「出帆免状」

103

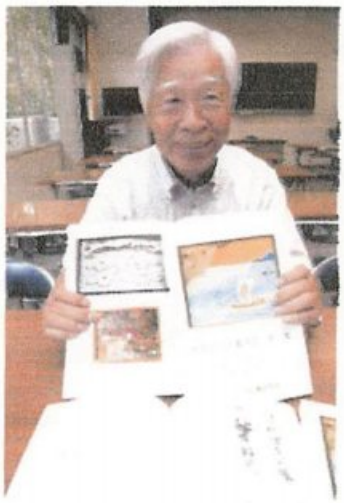
東京新聞 TOKYO Web

【千葉】

「八幡港」の繁栄はっきり　市原の研究会、記録集を出版

2017年8月31日

明治初期、海運で栄えた「八幡港（やわたみなと）」（現・市原市八幡）の帆船の運航記録をまとめた冊子「市原の古文書研究　第七集」を、県内の有志でつくる「市原の古文書研究会」が自費出版した。同会のメンバーが専門家の協力を得ながら史料約八百点を解読。八幡港から米や炭を東京へ運んだ当時の様子が分かる貴重な記録集となっている。（中山岳）



明治初期の「八幡港」の海運の実態についてまとめた冊子「市原の古文書研究第7集」を持つ山岸弘明さん＝市原市で

八幡港は、江戸時代から昭和初期まで市原市の飯香岡（いいがおか）八幡宮の近くにあり、木更津港と並び上総地方を代表する港だった。「五大力（ごだいりき）船」と呼ばれる三～五人乗りの中型の帆船が行き交い、江戸・東京などへ物資を運んでいた。

八幡港に関する史料は、一八七三（明治六）年から一年間、八幡港を含めた地域一帯の行政を仕切る戸長（こちょう）を務めた市川家に保管されていた。当時、船主が船を出すために戸長に提出した「出帆届」や、積み荷の明細などを記した「出帆免状台帳」などがあった。

冊子によると、七三年十月から約一年で、八幡港から五大力船が出港したのは五百四十七件。運んだ積み荷は、米が一万二千三百俵余、炭が二十万一千四百俵余。他に薪十二万一千九百束余を運んでいた。出帆届などの史料の写真や、五大力船の絵図なども掲載している。

市原の古文書研究会の山岸弘明代表（79）＝市原市八幡北町＝らメンバー八人が約四年前、市川家から史料を借り、八幡公民館で大学教授や博物館学芸員らと協力して解読を進め、冊子にまとめた。

山岸さんは「東京湾の五大力船についてまとまった史料が見つかったのは、これまで例がない。八幡港の記録から、当時の海上輸送の一端が明らかになった」と話している。

冊子はB5判、三百四ページで約百五十部作成。市販していないが、同会は希望者に二千円（送料別）で提供する。問い合わせは、山岸さん＝電080（6668）2237＝へ。

東京新聞の購読はこちら 【1週間ためしよみ】【電子版】

関連記事ピックアップ

Recommended by

写真で知る柏の競馬場　来月18日まで企画展
（2017年8月26日）

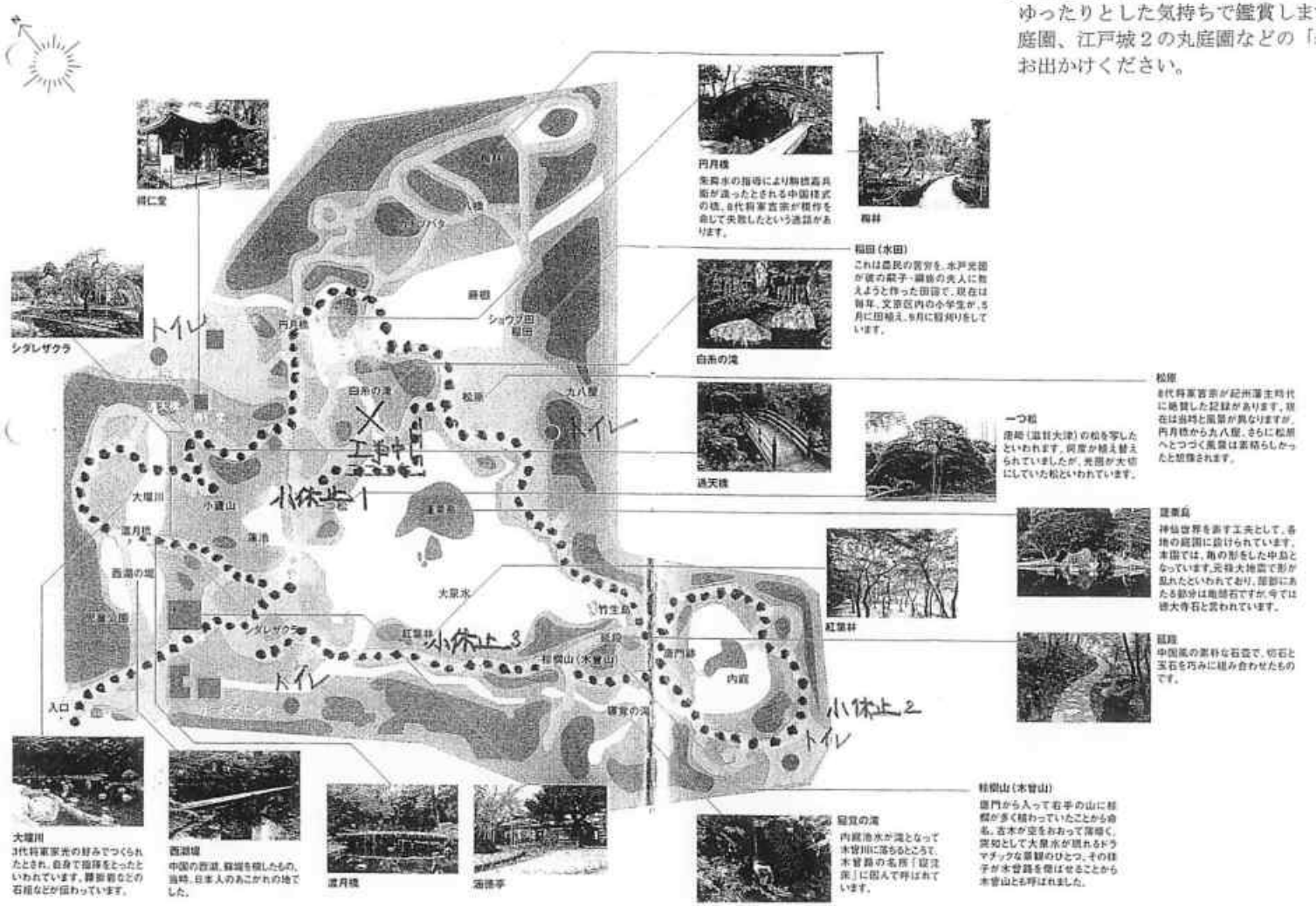
官民一体でいすみPR 「じあとん丼」で優勝狙う
26日のふるさと甲子園出場
（2017年8月24日）

「パソコン八幡」第２回親睦会「小石川後楽園、深川、門前仲町」

特別史跡・特別名勝「小石川後楽園」を歩く　平成２９年１１月１４日

天下の憂いに先だって憂い、
天下の楽しみに遅れて楽しむ（范仲淹（ぼんちゅうおん）「岳陽楼記」）

～水戸光圀ゆかりの江戸大名庭園～



きょうのみどころ

①江戸大名庭園＝
中世、戦国時代の庭園は質実剛健、「禅思想」に根拠した枯山水の「座観」が中心でしたが、江戸時代は絢爛華麗な「動観」庭園へと進化します。江戸は狭く山坂ばかり、加えて水不足です。大名庭園は「潮入り」など独特の「庭園文化」を産み出しながら「進化」を続けました。

②池泉回遊式庭園＝庭の中央に大きな池を築き、その池泉を回遊しながら移り変わる景観を楽しみます。（池水や木々の緑の変化、すすむ紅葉、池畔線や護岸、橋などに注目）
＊中島（ここでは蓬莱島）＝池に変化をつけるために作られた小島
＊うつし＝日本や中国の名勝を取り入れること
＊沢渡り、磯渡り＝渓谷や磯部をとび石を伝って渡ること
＊景点、景石＝景色が切り替わるポイント

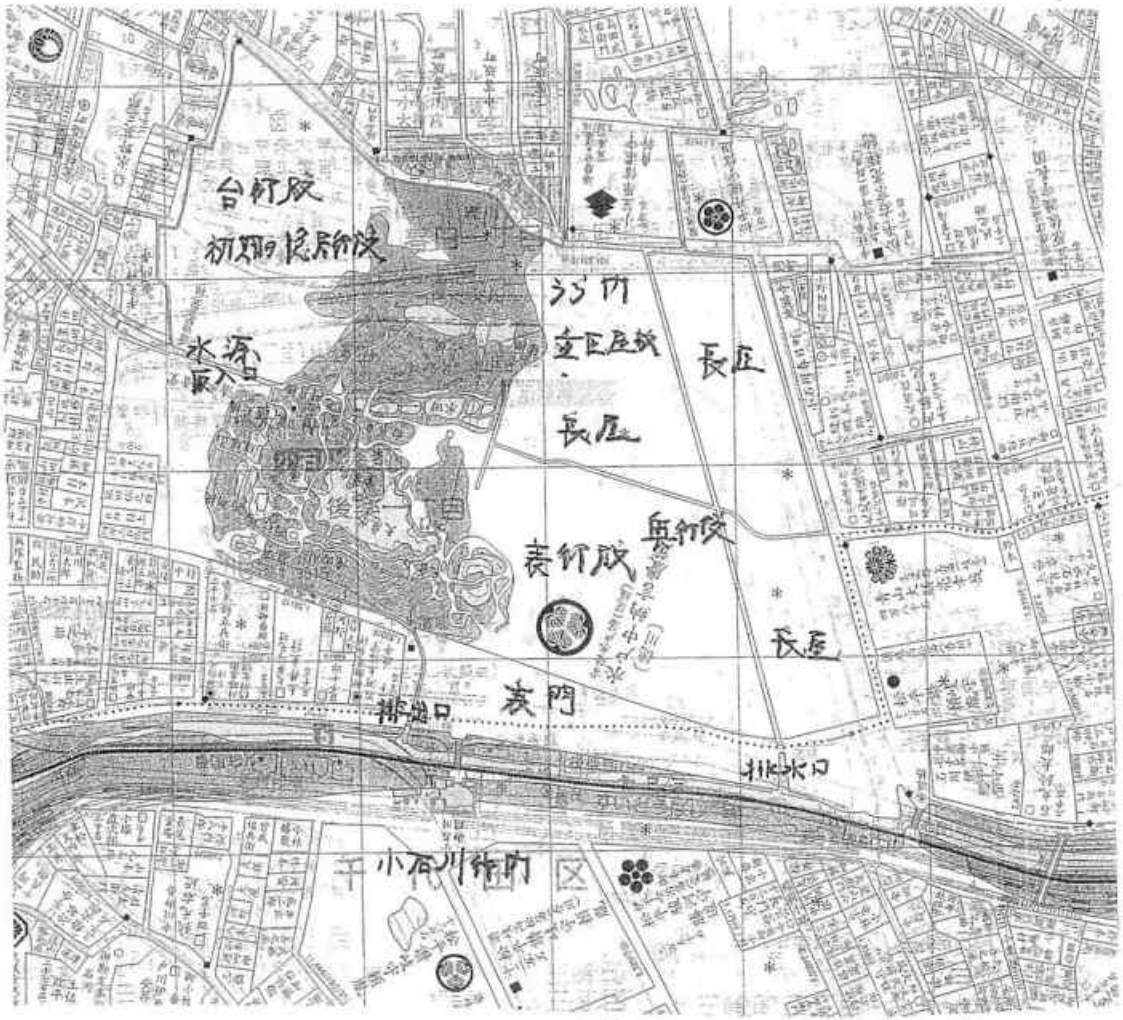
③大名庭園は四季折々に変化します。なんど訪ねても新しい発見があります。本来は静かにゆったりとした気持ちで鑑賞します。東京には、六義園、浜離宮庭園、芝離宮庭園、清澄庭園、江戸城２の丸庭園などの「名園」と言われる江戸大名庭園が現存しています。ぜひお出かけください。

大江戸＝東京に現存する深山幽谷

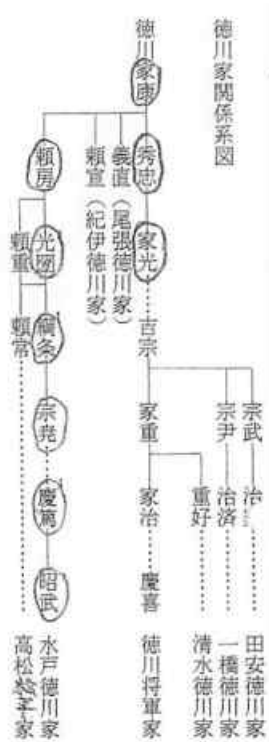
①小石川後楽園は江戸時代はじめの寛永６年、徳川水戸家の祖・頼房が上屋敷庭園を造り、２代藩主・光圀が完成させました。

②光圀は造成にあたり、民から亡命中だった朱舜水の意見を用いて円月橋、西湖堤など中国の名勝を取り入れ、園名も中国書に由来するなど中国趣味豊かな庭園としました。

③小石川後楽園は国の「特別史跡」「特別名勝」に指定されています。この重複指定は全国でも金閣寺や浜離宮庭園などごくわずか、大江戸、東京に現存する貴重な「文化遺産」です。



江戸後期と現在図の合成図



主な出来事	
1629（寛永6）年	2代将軍徳川秀忠より領地7万6,689坪を下される。水戸藩初代藩主・頼房が中屋敷（のちに上屋敷）を置き、作庭が始まる。
1661（寛文元）年	光圀、水戸藩2代藩主となる。この頃より庭園の整備を始める。
1665（寛文5）年	この年6月、亡命中の明朝遺臣の儒学者、朱舜水を招聘する。
1679（延宝7）年	光圀から光国に諱を改める。※1683（天和3）年ともいわれる。
1690（元禄3）年	光圀、隠居。権中納言となる。綱條、3代藩主となる。
1700（元禄13）年	光圀死去。5代将軍・綱吉より領地1万1,094坪を加増される。
1855（安政2）年	安政大地震。翌年に暴風雨が相次いで江戸周辺を襲い、大きな被害を受ける。
1868（明治元）年	明治維新により幕藩体制が崩壊。新政府ができる。翌年、徳川昭武が最後の水戸藩主となる。
1869（明治2）年	版籍奉還により藩主とともに領地を新政府に上地。兵部省の管轄となる。
1871（明治4）年	敷地の一部に造兵司が移される。
1873（明治6）年	以降、明治天皇の行幸、巡幸。海外賓客が多数来国する。
1879（明治12）年	米国前大統領グラントの午餐会が開かれる。
1880（明治13）年	園内を焼失。翌年再建される。
1923（大正12）年	国の史跡および名勝に指定される。同年、関東大震災により大きな被害を受ける。
1936（昭和11）年	文部省の所管となる。東京市長が管理者となる。
1938（昭和13）年	一般公開を始める。
1945（昭和20）年	5月25日（といわれる）、空襲による戦災を被る。
1952（昭和27）年	文化財保護法に基づく国の特別史跡および特別名勝に指定される。

[築山]

庭園内で山をあらわす人工または自然の山。園内に自然の山麓が利用できれば、それを積極的に取り入れるが、ない場合は一般に土石を用いて築山を造る。なかでも遠景に乏しい場合は遠くの山に見えるよう、築山の稜線がはっきりわかる芝生・苔・刈り込んだツツジなどを植えて「遠山」とする築山もある。江戸の大名庭園である小石川後楽園の小廬山、六義園の藤代峠などがその代表例である。

[池泉]

庭園に設けられた池の総称。泉の字がついているのは、古来、泉の湧き出る土地に池を造りやすかったからであろう。なかでも京都盆地には伏流水や湧水があり、数多くの沼沢池が存在していたため、それを利用して厳しい夏の納涼用に池造りが盛んになった。しかも池を作るために掘った残土で築山ができたため、周辺の借景とあわせて山水の景をもつ日本庭園の様式がこの地に大成されたといわれている。また「池泉」は庭園そのものを意味する場合もある。

[回遊式]

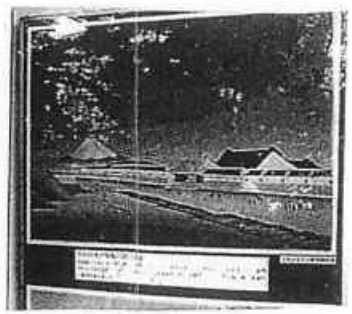
庭園内に設けられた景色を巡りながら鑑賞する形式をいう。江戸の大名庭園で発達した。一般に比較的大きな庭園では庭の中心に池を置き、その周囲にいくつかの鑑賞や休息する地点を配置し、それを園路で連結するのが普通である。

大名庭園とは

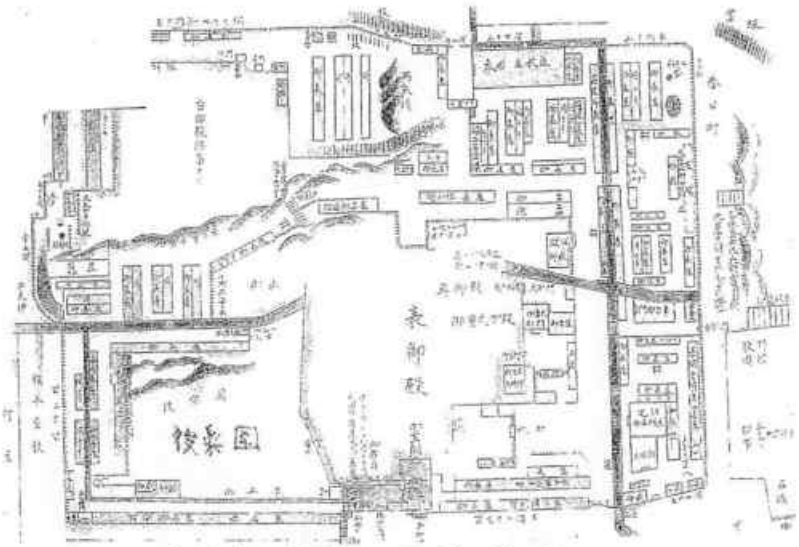
Daimyo Garden (Gardens of the Japanese Feudal Lords)

日本の風土の中で、自然崇拝や宗教観あるいは美意識を通して、ひとつの宇宙を表現する庭造りが行なわれてきました。大名庭園は、古来よりの歴史をたどりながら、江戸時代に諸大名が江戸や国元で築造した庭園の総称で、もっとも一般的な形式は、「回遊式庭園」と呼ばれるものです。

その特徴は、回遊式庭園の名の通り、池泉などの園路のまわりを回遊して観賞する造りになっていること。加えて、大きな池を中心に配し、築山、池中に設けた小島、橋、名石などで各地の景勝などが再現されています。また、園路の所々に散策中の休憩所や庭園展望所として、茶亭、四阿などが設けられます。また、美しさだけを求めるのではなく、大名間の政治の駆け引き、社交の場ともなりました。中には薬草園や新品種の有用植物の開発場所に利用されたこともありました。



上屋敷表門図



水戸徳川藩上屋敷絵図

3）目の前に広がる大泉水～はじめに大名庭園の全景をとらえる

①西門から入園（正門は閉鎖中）、一般 300 円、65 才以上（生年をいう）150 円
②まずは「大泉水」に進んで園の全景をとらえる。大きく広がる池泉は江戸大名庭園の象徴でもある。「回遊」は庭の大半をしめる池泉を静かに散策しながら鑑賞すること。池には中島を築き、入り江や護岸に変化をこらし、灯篭や自然石をおいて樹木や花を植える。池は角度や天候、時間で刻々と変化する。晴れならばなおよし、泉水と木々の緑が映えて舞台を盛り立てる。この景色をしっかりと脳裏に刻んでその後の変化を楽しむ。
③しだれ桜＝春は無数の花びらをつけて地につくばかりに咲き誇る。老木で 10 年ほど前の大風で大きく枝折れした。残念だが明治生まれの２代目で創建当時のものではない。
④目を左に転じると小廬山。中国の景勝地・廬山の写し。大名庭園は写しのオンパレードだがイメージ。廬山は江西省にそびえる世界遺産で、本来は奇岩秀峰が林立する深山だという。ここではおかめ笹に覆われた明るくおおらかな山景になっている。

4）大堰川の沢渡りと深山秘境～「河の景」から「山の景」、「野の景」へ

①大堰川と渡月橋＝古くから紅葉と桜の名勝として知られる京都嵐山の清流・大堰川と渡月橋の写し。橋名は月が渡るさまに似ていると亀山天皇が命名した。
②西湖の堤＝中国の代表的名勝、「天に極楽あり地に杭州あり」と称えられた風光明媚な西湖堤の写し。面積６㎢ 対岸まで３㎞、湖の真ん中を堤と橋が繋ぐ。ここでは切り石積みの石堤と中央にそり橋。川景が巧みに溶け込んでみごと。
③屏風岩と玉石の洲浜＝光圀と親しかった家光が自ら指揮したとされる腰かけ石もある。
④大堰川の沢渡り＝見上げる通天橋の真っ赤なそり橋が紅葉に映える（期待）。音羽の滝の水音に耳を傾けながら大堰川の沢渡りを楽しむ。雨だと丸石も心配、事故のないよう一歩一歩しっかりと。ケヤキやカエデがうっそうして、幽谷の雰囲気がただよう。
⑤おかめ笹の小道を分け入って「山の景」へ。しばらくは登ったり下ったり、途中大堰川や大池泉を俯瞰、園の全景を見渡す。
⑥山上に光圀ゆかりの得仁堂。昭和 20 年の東京大空襲も免れた後楽園最古の建物。
⑦円月橋＝半円に作った橋が水に映って円形にみえる。
⑧「野の景」は花しょうぶ、梅林、かたつばきなど。11 月は一休みか？
⑨たんぼ＝光圀は綱条の正室に、農民の苦労もわかるようにと稲の作り方を実習させた。
⑩酒亭「九八屋」＝光圀の戒め「昼は九分、夜は八分にすべし」から。昼は飲みすぎでは？（うらやましい輩の余計な心配）

小廬山

河の景の俯瞰

← 通天橋

大堰川の沢
↓ 渡り

→
西湖の堤

1）「深川不動」から「小石川後楽園」へ

①きょうの主な行程（注意＝前回の案内ちらしに一部変更があります）

＊八幡宿駅ホームエレベーター前集合、８時39分発乗車（各駅）千葉８時53分着、乗り換え（清水リーダー引率）西船橋乗り換え（東西線）門前仲町着

＊深川門前ご利益コース＝深川不動尊（護摩祈祷）、深川公園、富岡八幡宮、八幡橋、三十三間堂跡（地元ボランティアガイド）

＊昼食＝門前茶屋（深川めし）

＊移動＝門前仲町（東西線６駅11分165円）飯田橋（トイレ）、徒歩10分

＊午後の見学地＝小石川後楽園（90分＝代表的な池泉回遊式江戸大名庭園）

＊復路（一番わかりやすい電車）＝ＪＲ飯田橋（総武中央線各駅）千葉駅→八幡宿駅

②江戸城外郭から城外、小石川へ

ＪＲ中央線と飯田橋駅は旧江戸城と城外をわけた外堀に敷設された。

江戸城外堀、小石川御門

神田川＝江戸の上水道として引かれた人工の川。分岐して後楽園の水源とした

小石川（礫川）＝往古は沼地で、家康入府当時小石の多い谷川だったことによる

2）「小石川後楽園」へようこそ～プロローグ

①元御三家水戸徳川家上屋敷＝現在の東京ドーム、後楽園遊園地、小石川後楽園、中央大学、戦没者霊園、礫川公園一帯、およそ10万坪。寛永６年、３代将軍家光から初代頼房が拝領、華麗な桃山殿舎を連ねたが配置図や屋敷図面などはなく、詳細に不明の部分が多い。およそ５分の１にあたる庭園部分２万坪が現存、小石川後楽園として一般公開されている。

②小石川後楽園＝頼房が作り、２代光圀が完成させた江戸初期の「代表的池泉回遊式庭園」、園名は中国書「岳陽楼記」にある「士は天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに遅れて楽しむ」に由来し、光圀の文学趣味、中国趣味と各地の名勝を取り入れている。

③その構成は

中央部＝大きな池を中心とした回遊式庭園。ここでは「海の景」を兼ねる

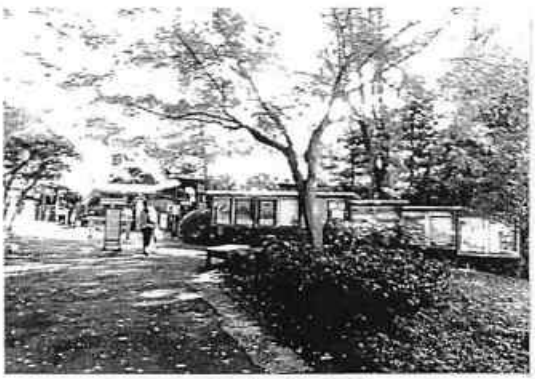
西側　＝大堰川や深山幽谷の景色をうつした「河の景」、「山の景」

北側　＝神田上水の流れもさわやかな「野の景」

からなり、これとは別に上屋敷書院の間内庭が現存している。

④みどころ（ご案内の途中で紹介します）

大泉水、小廬山、渡月橋、西湖堤、大堰川と沢渡り、通天橋、得仁堂、円月橋、逢らい島、白糸の滝と沢わたり（工事中）、船着き場、水源、内庭、寝覚めの滝と木曽川、徳大寺石、もみじ林（紅葉を期待）



小石川後楽園西門

水戸光圀

蓬莱島

5）大泉水に浮かぶ蓬莱島を眺めながら池畔をめぐる～大名気分を満喫

池泉庭園のあゆみ＝ミニミニ情報

＊池泉は平安時代の寝殿造り庭園など古くから取り入れられた。
　池泉舟遊式庭園＝貴族たちは池庭に舟を浮かべて詩歌管弦の宴を催した

＊鎌倉以降の庭園は静かに散策し、また庭に下りず鑑賞する思索的な庭園へと変わる。
　観賞式庭園の中の池泉
　枯れ山水＝室町時代、禅寺、戦国武将によって確立された座観式庭園。石組を主とし水は砂礫を用いた

＊池泉回遊式庭園＝近世城郭の誕生にともなって発展。散策するための庭で、その中心舞台として池泉が位置づけられた。

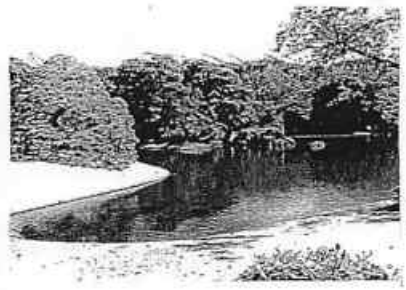
①再び大泉水に戻る。正面の池泉と中島を眺めながら一つ松前のベンチで一休み。
②中島を蓬莱島という。中国に古くから伝わる神仙島で、不老不死の霊薬があるといわれている。島を亀の形に作る。縁起を担いだ大名庭園の多くが取り入れた。
③白糸の滝（山の景＝工事中のため立ち入り？）
④船着き場＝歴代藩主は親しい友人を招き、また側室たちと船遊びに興じた。
⑤岩島の竹生島＝琵琶湖北部の名勝。
⑥神田上水からの水源＝頼房作庭の時、家光が神田上水を関口で分水させて庭水を引かせた。現在は水道水を利用、循環させている。

6）上屋敷書院の間内庭～もう一つの水戸家庭園

①書院の間内庭
　現在の小石川後楽園はかつての徳川水戸藩邸のおよそ５分の１にすぎない。隣接して豪壮な藩主御殿が連なった。正門玄関奥深い、藩主の私邸部分、書院の間に付属した内庭で、後楽園とは違う、もう一つの大名庭園である。その特徴は明るく開放感にあふれている。後出後楽園のプロローグ「木曽路」を引き立てる役割も担っている。
②まん中の大きな池泉、中島と定番。中島両側から石のそり橋がかかる。いろどりに枝ぶりの松が映える。典型的な回遊式大名庭園といえる。
③池泉を一周、正門（閉鎖中）、トイレ休憩
④内庭と後楽園を区切った唐門跡、焼失前の古写真で偲ぶ。

全景を俯瞰

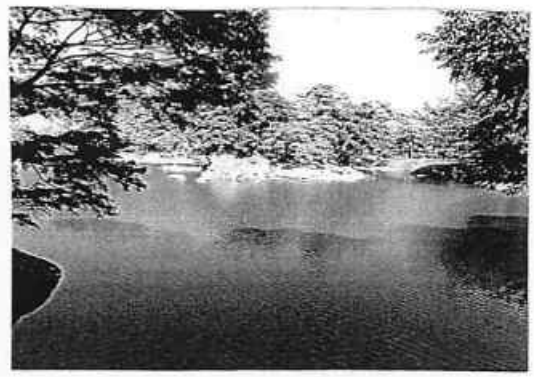
円月橋



← 船着き場

大泉水と蓬莱島

→ 野の景



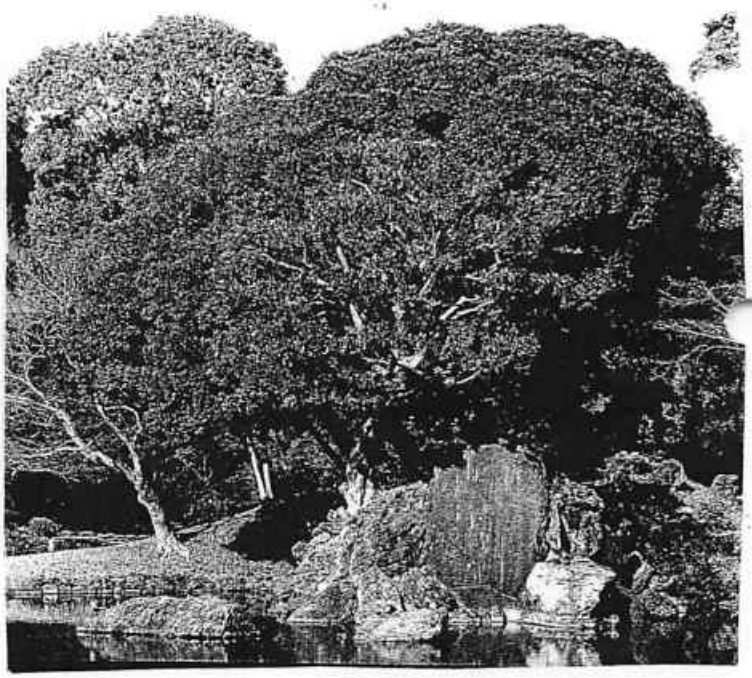
7）鬱蒼とした木曽路からフィナーレへ～紅葉のもみじ林と徳大寺石

①本来はここが小石川後楽園の入り口になる。
②深山に「ねざめの滝音」、内庭池泉をオーバーフローした川水が滝となって木曽川に落ちる。渓流のせせらぎが心地いい。右手は樹木の生い茂る木曽山。このプロローグはわざと暗い空間を通らせ、主役の第２幕を際立てる心憎い演出になっている。
③細い石で舗装された延段を進むと一転して広々とした大泉水が飛び込む。景色が切り替わるポイントを景点、境の石を景石という。目を見はる景観の変化が大名庭園の醍醐味である。
④改めて蓬莱島をみやる。こちら側が正面。先端の鑑石が亀の頭。庭を作った徳大寺左兵衛から徳大寺石という。
⑤ついでもみじ林。12月はじめは真っ赤にいろどるが、はたしてきょうは？
⑥周辺が小石川後楽園第一位の人気スポット。ベンチにゆったりと腰を下ろして大名庭園の楽しさを味わう。
⑦枯山水（ひっそりとたたずむ）
⑧受付に戻ったところで「小石川後楽園散策」を終了します。

「小石川後楽園」はいかがでしたか。回遊式庭園の魅力は池泉を回遊しながら移り変わる景色を鑑賞することでした。モミジ林はちょっと早すぎて残念でしたね。ぜひ見ごろの日に改めてお友だちと連れ添って訪ねてください。これを機会に大名庭園の魅力を少しでも感じていただければ幸いです。次回パソコンチームもがんばりましょう。

（山岸弘明）

昔境の町　内庭



↑徳大寺石

ねざめの滝

延べ段

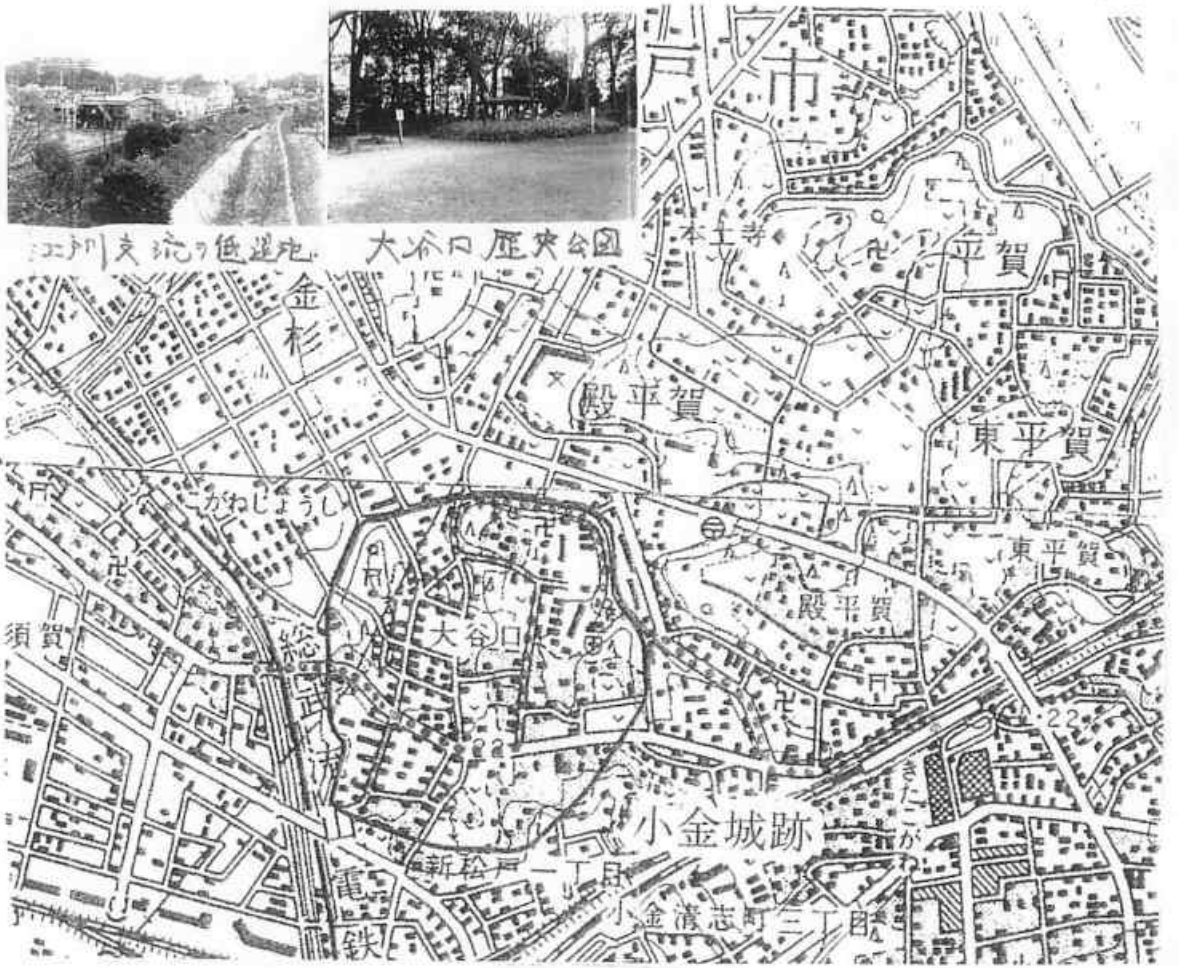
←もみじ林から蓬莱島をのぞむ

「城を歩く会」４月定例会

「中世の古城・小金城址と、一茶が愛した流山の町へ」

小田原征伐で落城した高城氏の「小金城跡」を歩く

平成２９年４月１４日　　山岸弘明



本日の主要行程

１０時００分	常磐線「北小金駅」北口集合、慶林寺前で開会式
１０時２０分～	小金城（大谷口歴史公園で１１時ころ早めの昼食）
１３時０４分	流山線「小金城跡」から「流山」まで３駅移動１３０円
	流山行き昼間時刻表、毎時０４分、２４分、４４分発
１[illegible]時２０分～	流山宿史跡見学
	市立流山博物館、江戸川矢河原の渡し跡、新撰組流山本陣跡
	一茶双樹記念館ほか
１６時３０分	「流山駅」解散
	流山線で常磐線「馬橋駅」または「幸谷駅」から新松戸駅に連絡

当面のスケジュール（詳細は「会報号外」を参照ください）

５月定例会（２４日＝水曜日）日帰りバス見学会「甲斐・武田氏の名城をめぐる」（新府城、躑躅が崎城、甲府城ほか）申し込み受付中、残席わずか
６月定例会（１９日＝月曜日）「ＡＮＡ羽田整備工場見学」満員締め切り
７月定例会（抽選結果待ち）　「夏季研修会」
９月定例会（１５日＝金曜日）「下町探検クルーズ」と中川船番所資料館見学
１０月定例会（１１日＝水曜日）日帰りバス見学会「掛川城と横須賀城を歩く」

流山駅

新松戸駅

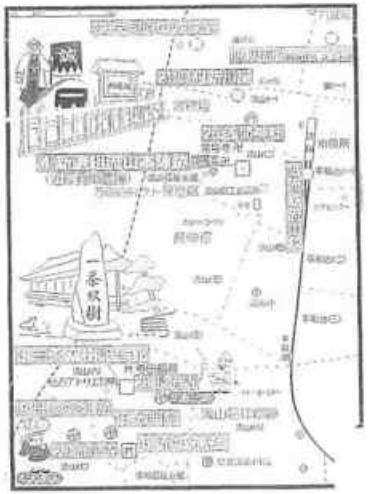
江戸川

近藤勇陣屋跡

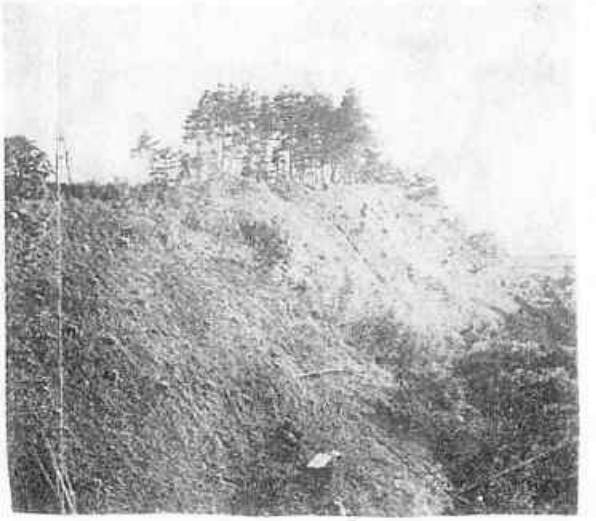
新撰組本陣跡

一茶双樹館

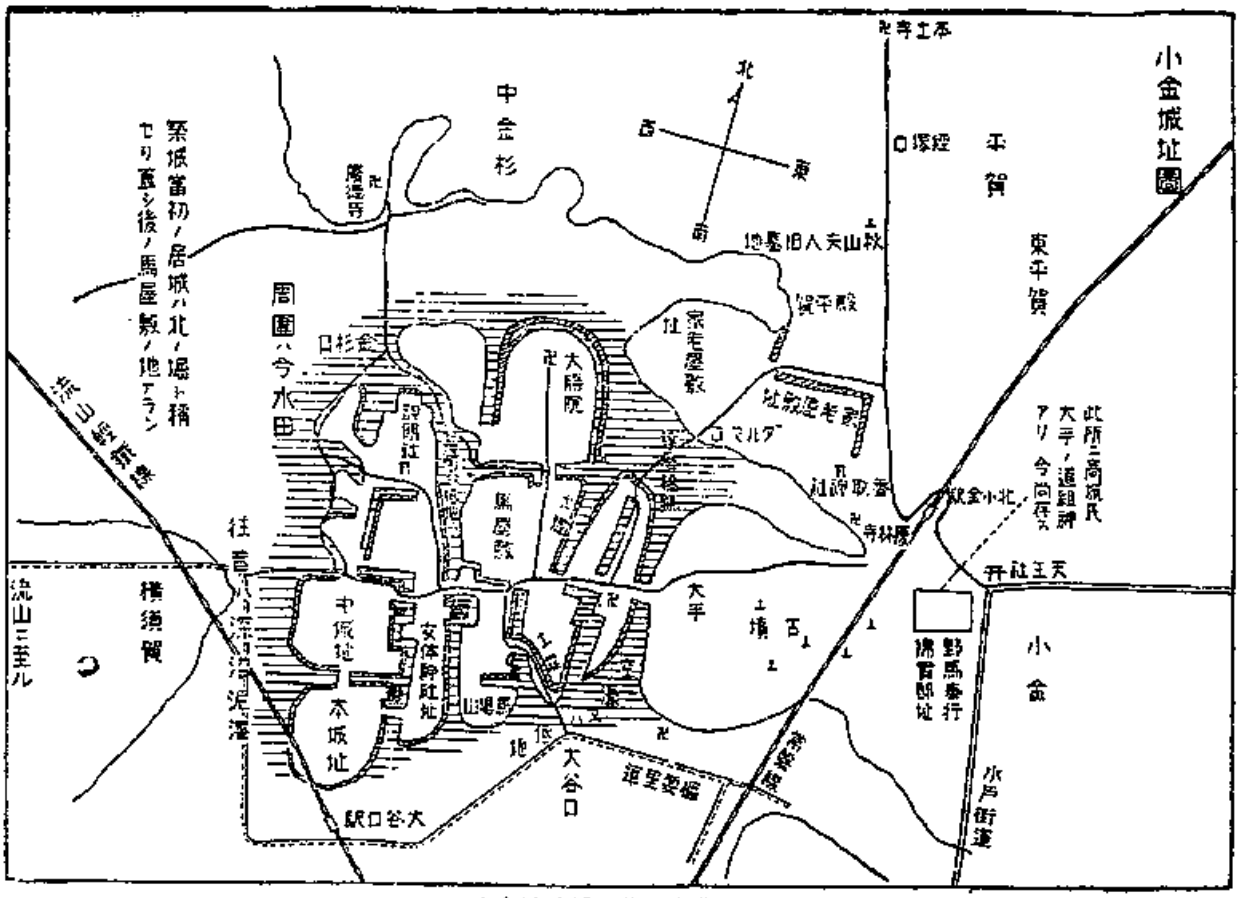
流山の案内



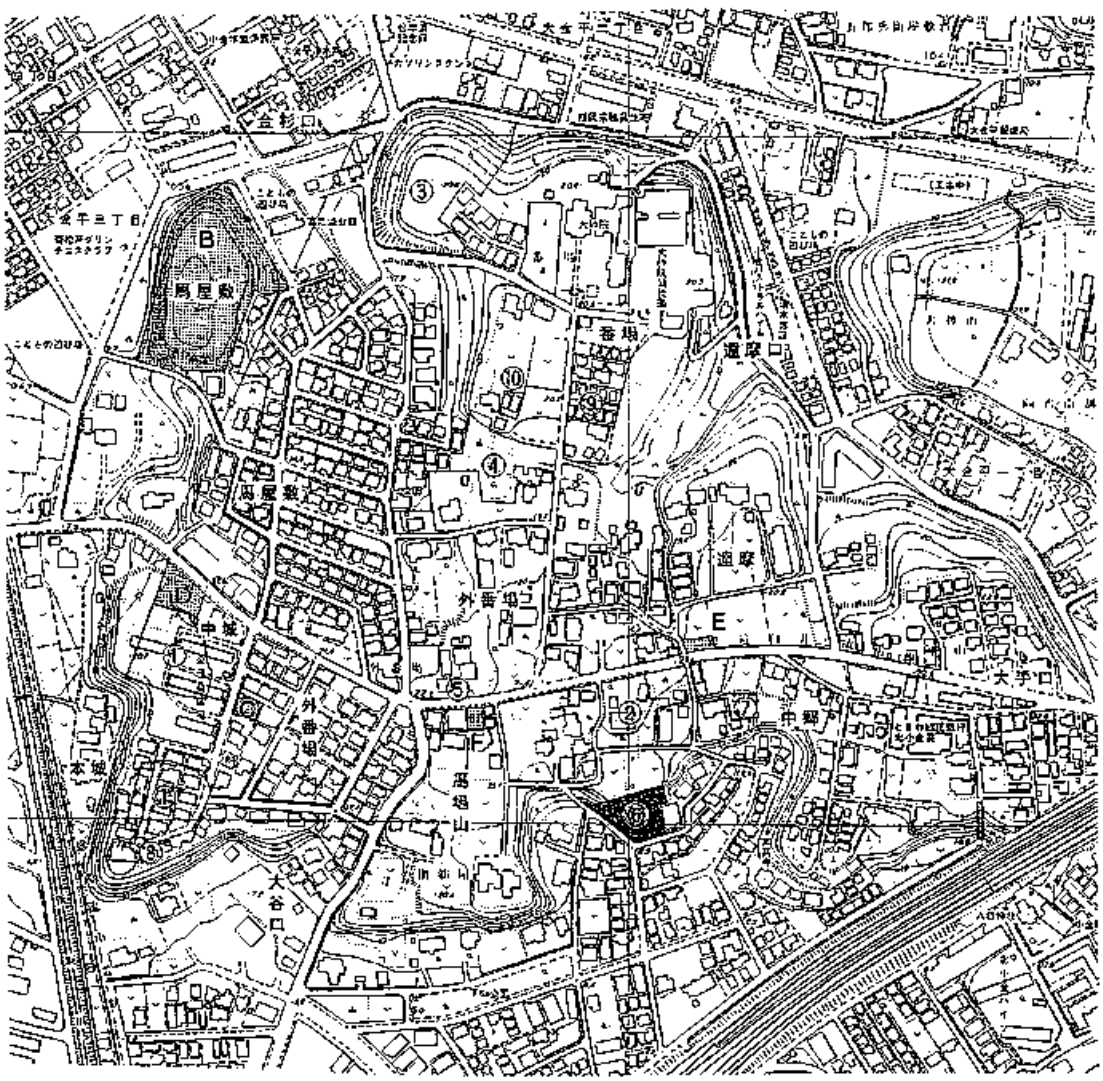
住宅用地造成工事
開発ラッシュ　小金城本城周辺



3



小金城跡(『千葉県東葛飾郡誌』より)



宅地開発で大半を破壊した東葛飾最大の「土の城」

1）千葉・原氏の重臣から小田原北条氏「他国衆」へ～高城氏の略歴

①高城氏は千葉氏の一族で北条氏「他国衆」、「千葉大系図」や「高城家由来」は千葉宗胤の孫・胤忠を祖とする。下総・小金城を本拠に、太日川（現在の江戸川）下流域の東葛飾地方を支配した。戦国時代は同じ千葉一族の原氏に属し、「第１次国府台合戦」後、独立して北条家の「他国衆」となった。「北条氏人数覚え書」による兵力は「高木、下総こかね井城７００騎」で、本佐倉の宗家・千葉介３０００騎、臼井（生実）原大炊介２０００騎に次ぐ下総の第３勢力であった。

②高城胤吉＝高城胤忠の嫡男。居城を根木内城から小金城に移し、第２次国府台の戦いは江戸衆とともに里見義弘を撃破した。

＊高城胤辰＝胤吉嫡男。北条氏の北、東関東進出の尖兵として各地を転戦した。また安房・里見氏との「境い目の城」としての戦線にも立たされた。

＊高城胤則＝胤辰嫡男。天正１０年父家督を相続。同１８年秀吉「小田原征伐」の時、北条氏の小田原城に籠城し、７月の開城後は浪人、のち蒲生氏郷、ついで佐久間安次に仕えて伏見城下に居住した。慶長８年没３２才、嫡男胤重は徳川秀忠の旗本４０００石、子孫が明治維新に繋いだ。

2）浅野長政に攻められて落城～天正１８年の小田原征伐

①北条氏照の命を受けた胤則がその子源次郎以下「５００騎、軽卒１０００人」を率いて小田原城に出陣、湯本口を守備したが叔父の胤政と胤知が討ち死にした。籠城が長引き劣勢が確実となると密使を送って、小金城の開城を指示したとされる。

②また、２００騎、軽卒３００人が籠城し、浅野長政、木村一に攻められ城内の建物はすべて焼失して落城した、ともいう。

3）徳川家康の江戸入りで５男・武田（松平）信吉の居城となる

①武田信吉＝天正１１年徳川家康５男として浜松城内で誕生。はじめ外戚に因んだ武田氏、のち松平七郎信吉を名乗る。かぞえ８才の天正１８年父家康の関東入府で小金城３万石を得るが、２年後の永禄元年佐倉城主４万石に栄進、のち１０万石、水戸城で２５万石に進む。しかし生来多病のため官位が授けられず、慶長８年水戸で没、わずか２１才、嗣子なく除封となる。

②生母は側室・下山の方、武田信玄の旧臣・秋山虎康のむすめで、信吉に付き添い小金城に居住、天正１９年没、城近い本土寺に水戸光圀建立の墓碑がある。

③小金城は武田信吉の佐倉移封にともない廃城となる。

4）小金城の立地と特徴

①古利根川、太日川（江戸川）を一望する、高さ２０ｍほどの丘陵舌状台地に所在、急ガケ高台、低湿地、谷の自然地形と大規模な切り岸土木工事で築き上げた平山・要害の「土の城」。

②太日川の水運の要衝地に立地、城下の金宿（のちの小金宿）は市が立ち並び、領主に保護された本土寺、東漸寺などが栄えた。

③城域は直径およそ７００ｍのほぼ円形、３面を深田、前面大手口を空堀、土塁で囲み、本城、中城を中核に１２の郭で固めた。弓鉄砲戦を意識した典型的な中世「関東の城」。

④昭和後期の乱開発で城域の大半が破壊された。きょうは地形とわずかに残された城遺構から、東葛飾最大の「北条氏支城」を探る。

→小金城古絵図

←明治36年内地形図

小田原合戦の舞台となった小金城を歩く

1）北小金駅から大手道を進む

①北小金駅近くの慶林寺入口で開会式

熊耳（ゆうじ）山慶林寺＝曹洞宗。高城氏菩提寺の一つ。高城氏正室の「桂林尼」の墓がある。

＊高城氏の本菩提寺は広徳寺という。小金城築城者・高城胤吉の開基で、江戸時代建立の墓碑がある。小金は水戸街道の宿場町で古刹が多い。鎌倉後期創建で「朗門三長三本の本山」と称されるあじさい寺の本土寺や「関東檀林」のひとつ東漸寺も駅に近い。

②正面高台に小金城を望みながらほぼ大手道（旧道は改変消滅）を進む

江戸川支流新坂川に向けて張り出した下総台地先端の尾根続き独立型台地という地形を想定しながら前進する。城は尾根部分を切断して大手口とし、３方は低湿地、とくに主郭部背後は「深沼泥沢」の「天然の要害」であったという。

③大手口手前で右折、達磨口、金杉口をめざす。

2）急ガケは小金城の切り岸大土塁～達磨口周辺の地形が往時を偲ばせる

①小金城４虎口の１つで南東の守り。天然の谷（やつ）地に作られた防御設備で、３面を切り岸、土塁で急ガケを作り、正面左奥に櫓門、左右に横矢射場を作ったと考えられるが、未発掘のため門形式などの詳細は未詳。

②達磨橋＝かつて低湿地池状対岸・天神山（家老屋敷地）との間に回転式の木橋（そろばん橋？）が架かっていたという。橋名のいわれは不明。

③正面に「大倉記念病院」、左崖上に院長大倉家、右崖上は大勝院と付属幼稚園、大倉記念講堂などがある。一帯を所有する大倉家は当地の有力者なのであろう。後出「歴史公園碑」に市長が謝辞を刻んでいる。崖＝巨大土塁上野の櫓台に昭和６２年「高城氏顕彰の碑」が建つとのことであったが確認できなかった。

④外周大土塁の堅固な守りを見上げる。かつて城地を急ガケ土塁が回った。「後北条流２重土塁」が想定される、さすればいま歩く道路は空堀、土塁跡ということになる。

3）北条流障子堀と畝堀、金杉口土塁を保存～かろうじて残った「大谷口歴史公園」

①昭和後期の乱開発、宅地造成のあと、行政が保存に乗り出したとき主郭部はすでに存在しなかった。発掘調査もそこそこに主郭、大手口など主要部分は壊滅、かろうじて残った金杉口に歴史公園が造られた。

北小金駅

だるま口

大谷口歴史公園

急ガケ大土塁

虎口

金杉口跡複原図（田中

②「大谷口歴史公園」碑＝松戸市長碑

ここは中世城郭跡で東葛地方最大の勢力を誇っていた高城氏の居城の一部が現在も残されている場所です。公園の創設にあたっては、大倉邦夫氏より寄付をいただき保存と公園として地域の還元に大いに役立てることができました。（後略）

③「金杉口跡」教育委員会史跡表示看板＝

ここは金杉口と呼ばれる小金城の虎口の一つです。小金城には大手口（東）、達磨口（北東）、金杉口（北）、大谷口（南）の４つの虎口があったとされています。西側の低地から城内に入ると正面と南側は高い急斜面にあたります。ここには３段の階段を持ち、最上段には門柱を立てたと思われる土壇（砂を突き固めた径約６０cmから１m、高さ約１０cm）が４か所見つかりましたが、その構造まではわかりません。奥に広がる広場は斜面部に土をもって人工的に作った広場です。さらに奥へ進むと空堀があります。堀の外側を進んで行き、大勝院の裏手から城内に入ったものと推定されています。

④「堀（障子堀）」教育委員会史跡表示看板＝

中世城郭の特徴は、自然地形を巧みに利用していることにありますが、金杉口では、さらに自然の斜面を削って急傾斜とし、その下部に幅４m以上、深さ２．５mの空堀が造られています。

この空堀は、虎口から約２０mほどの地点から掘られており、途中１か所に高さ２mの間仕切り（障子）が造られて堀底を侵入してきた敵をその壁で遮る構造になっています。このような構造のものを「障子堀」と呼んでいます。また、この空堀は砂地を掘り下げて造られているため底、壁ともに砂質で非常に水はけがよくなっています。

⑤「土塁」教育委員会史跡表示看板＝

土塁とは土を盛りあげて造った土手状の防御施設のことで通常は堀を掘った土を盛りあげて造ります。金杉口では西側から北側にかけてＬ字状にみられます。その構造は、城の内側を約５０cm掘り下げ、台地の縁辺部に土塁の底になる部分を幅約３mの帯状に残します。その上に粘土を盛り上げて高さ約1.5mの土塁としています。土塁としては低く見えますが、外側の身を隠す程度の機能であったろうと思われます。小金城では外に粘土や赤土をそれぞれ約１０cmくらいの厚さで突き固め、それを交互に高さ２m以上に積み上げた土塁も確認されています。

⑥小金城（別称大谷口城跡）碑、ライオンズクラブ＝

小金城の規模は南北約６００m、東西約８００mにおよぶ県下最大級の中世城郭です。下総台地西端の自然地形を（高低差が約１５m）を利用し、さらに大規模な土木工事（削平、掘削、盛り土）を施すことによって高さ２～３mの土塁、深さ１０m前後の空堀を縦横にめぐらせ、台地上を区画し本城、中城、番場等９～１０の曲輪を連続させる構造になっています。

小金城主の高城氏は千葉氏の一族、または千葉氏から分かれた原氏の一族といわれ、松土釜炭市域での活動は 15 世紀中ごろに栗が沢に館を築いたのに始まり、その後勢力を増すごとに根木内城、小金城と本拠地を移してきたといわれています。

歴史公園↓

大勝院

戦国時代の末には小金城を拠点として現在の松戸、市川、船橋、鎌ヶ谷、沼南、柏、安孫子などを支配し、東葛飾地方最大、下総国有数の領主、武将となりました。このころの高城氏は小田原北条氏関係の古文書に「金」あるいは「高」と書かれたものが残されていることから、北条氏の軍事的勢力に組み込まれていたことがわかります。第一次国府台合戦、第二次国府台合戦は北条方として戦い、相模国にも領地をえます。天正１８年豊臣秀吉の小田原攻めによって北条氏は滅亡、高城氏もまた運命をともにし小金領主としての役割も終わります。（中略）

当城跡は小金城、大谷口小金城、大谷口城、小金大谷城と４通りの名称があり、松戸市大谷口に所在することからとくに地元の人びとには大谷口城と呼ばれて親しまれています。

⑦「堀（畝、堀）」教育委員会史跡表示看板＝

ここで発見された堀は幅７ｍ、深さ約３ｍと規模は普通です。しかし、堀底に断面がかまぼこ形の畝が堀の方向と直角行する向きに連続して造られた全国的にも非常に珍しい構造をしています。この施設の利点は、侵入した敵が堀底の小溝に足をとられ、横への移動がしづらくなり、その敵を狙い討てることだといわれています。とくにこの畝堀は畝部分が粘土質を掘り込んでおり、非常にすべりやすく、効果的となっています。堀底に加工を施した堀は、関東地方では小田原北条氏の軍事的勢力下にあった城に多くみられるところから、小金城の戦国時代末の状況が、古文書だけでなく城の施設からも伺うことができそうです。

⑧マツモトキヨシ発祥の地、記念館、記念碑

４）虎口を守る「番場」と鬼門守護の「大勝院」

①金杉口坂はきょう最大の難所、５０ｍほど登り切るとそこは城内、近世の３の丸に相当する。

②「番場」＝番は見張り人、また交代で勤務することをいう。金杉口、達磨口の２つの虎口を守る上級番士屋敷、軽卒が詰める番所などが置かれた。一画に小金城鬼門守護の大勝院がある。

③大勝院の由緒

名称＝遠矢山普門寺、宗派＝真言宗豊山派、本山＝奈良県桜井市・総本山長谷寺

本尊＝十一面観世音菩薩。弘法大師（空海上人）興教大師（覚鑁上人）

この寺は古く根木内城の祈願寺として現在の柏市光ケ丘付近にあった。享禄３年高城下野守胤吉、胤辰は根木内城が手狭になったことから、江戸川氾濫（はんらん）源に屹（そば）り立った高台の地の利をえた下総国小金領大谷口村のこの地に自然の谷を利用しながら深濠、土塁を築き上げて移転し十余万坪の城郭を完功させた。城中には諸士の住居、城外殿平賀には下級家臣を配し、南方馬橋には出城を築き威風自ら四隣を圧し、天文６年９月護持僧栄秀法印によって開山されたのである。以後大谷口城主高城一族の祈願寺として大勝院□ロ不動尊に日夜、将兵、家臣の武運長久を祈願することから遠矢山大勝院という全国唯一の珍しい寺名が付けられた。爾来高城氏は勢力を得て北条氏の他国衆として武蔵、下総を指揮し、遠く神奈川県綾瀬の地にも威風を轟かすのであるが、北条、豊臣両氏の反目に及んで小田原戦に敗れ捕らわれたのである。そして大谷口城も天正１８年５月１８日浅野長政の軍門に焼亡し、大勝院も焼亡したのである。

④遠矢山大勝院書院、庫裏等再建記念碑＝

本寺は、古く享禄３年高城氏小金大谷口城建設により当城中３の丸のこの地に天文６年根本内城より移転す。護持僧栄秀法印開山して以来、大谷口城の祈願寺として武運長久を祈る。小田原北条氏滅亡とともに当城も焼亡し、大勝院も焼失し、徳川時代は寺運を旧に復すことをえず、近世には本寺格として４０か寺を擁し、いまなお松戸市内に１７か寺の旧門末寺を存し、新義真言宗の教学を宰り今にいたる。

⑤達磨口の守り

土塁

主な
引用資料
松戸市文化財調査報告書各種
大谷口、教育委員会史跡表示板

土塁

5）空堀や土塁を一掃して住宅街に変貌～大手、大谷口の外番場地区

①大手口＝北小金駅寄りの坂口に櫓門を構えたものと考えられるが未詳。小金城の縄張り図をみると中世の平山城らしく空堀、土塁で小区画に分断されている。昭和の宅地造成ですべての土塁、空堀が埋め戻されて当時の面影はない。城跡を東西に走り抜ける道路は江戸時代以後のもので、水戸街道の小金宿から流山宿に通じている。

②大谷口＝北側の虎口。大谷口村に由来

③外番場＝大谷口、本城方面を守る武士住居、番所

関東は「兵農分離」が遅れていた。職業武士団は少なく、軽卒は戦時に農民を徴発した。

④空堀や土塁を巡らせたが跡形もない

6）庭園付きの城主居館～城の中枢・本城と中城跡

①小金と流山線道路脇、住宅脇に自然石の「小金城跡碑」と「教育委員会看板」が立つ。広場はないが周辺道端で小休止。左折した「県営住宅」の廃マンションと分譲住宅街がかつての小金城本城と中城跡にあたる。東葛飾地方を支配した武将の庭園付き本城館跡だが、現況から盛時を偲ぶことはできない。住宅の明地急ガケから土塁下を見下ろす。

②「小金大谷口城跡碑」

③「小金城跡」教育委員会史跡表示看板＝

戦国時代の豪族で、東葛地方に勢力のあった高城氏の居城跡です。城の完成は天文６年とされています。自然地形を巧みに利用した、県下でも有数の規模をもつ城郭です。高城氏は天正１８年豊臣秀吉による小田原攻めの際、北条方に　加わったため小金城も秀吉方の武将浅野長政の軍に攻められ落城します。現在は城のある台地上も宅地化が進み、往時の姿を思い浮かべることも困難に成りましたが、大勝院の西側にある大谷口歴史公園内に土塁、空堀などの遺構を一部復元し、公開しています。

④中城跡＝住宅図は「北小金住宅」とする。もとは県営住宅であろうか、４階建てのコンクリートアパートが閉鎖されて廃屋になっている。中城は近世の２の丸であろうか、本城に次ぐ拠点で蔵や緊急時の兵士集合場とされることが多かった。

⑤本城跡＝現況宅地。昭和３７年、３９年発掘調査によれば「本城の郭内からは４棟の掘っ立て柱建物遺構として多数の柱穴や堀形が検出され、また柵、塀跡などの遺構も多く混在している」ことが報告された。庭園を備えた本格的本城居館が存在したと考えられるが解明されていない。地元の人によれば「かつて土塁、空堀がめぐっていた」とのことであった。

江戸川支流の新坂川沿いに「小金城跡駅」をめざし、次の見学地「流山駅」に移動する。

以上

宅地分譲時の計画図 ↓

本城急ガケ

小金城跡碑

造成前の発掘調査中の城から本城だと

「城を歩く会」５月日帰りバス見学会

「甲斐武田氏の名城をめぐる」

甲斐武田氏滅亡の歴史伝える勝頼の「新府城跡」を歩く

平成２９年５月２４日　　山岸弘明

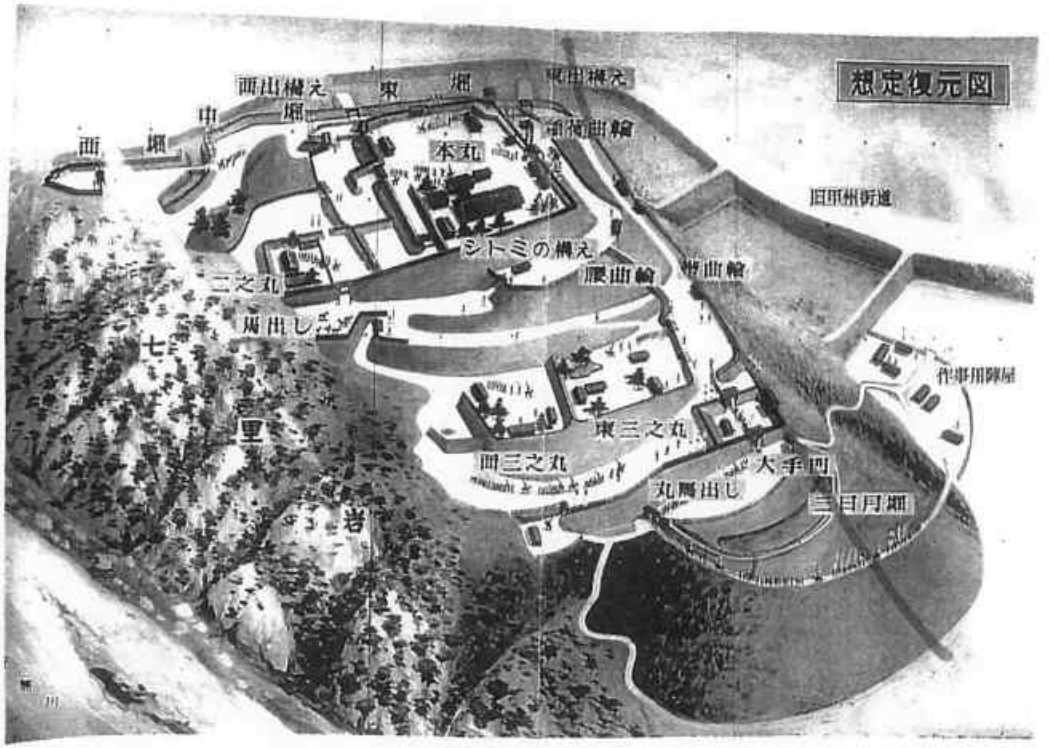
本日の主要行程

８時００分	新宿西口駅前道路集合、出発。首都高速
	中央自動車道、韮崎インター
１０時３０分～１２時２０分	新府城（武田勝頼居城）
	車中昼食
１３時００分～１３時４０分	甲府城（織豊期、徳川時代、関東押えの城）
１４時００分～１５時２０分	躑躅が崎武田館（武田信虎、信玄、勝頼居城）
１６時２０分～１７時００分	田野・景徳院（天目山の戦い、武田勝頼主従自害の地）
	大月インター、往路を逆走
１９時１５分～３０分	新宿駅着、解散

お断わり
中央道「南井ノ、八王子」間渋滞
工事迂回になり行程の一部を
変更することがあります

当面のスケジュール（詳細は「会報号外」を参照ください）

６月定例会（１９日＝月曜日）　「ＡＮＡ羽田整備工場見学」満員締め切り
７月定例会（２８日＝金曜日）　「夏季研修会」大森・入新井集会場
９月定例会（１５日＝金曜日）　「下町探検クルーズ」と中川船番所資料館見学
１０月定例会（１１日＝水曜日）日帰りバス見学会「掛川城と横須賀城を歩く」

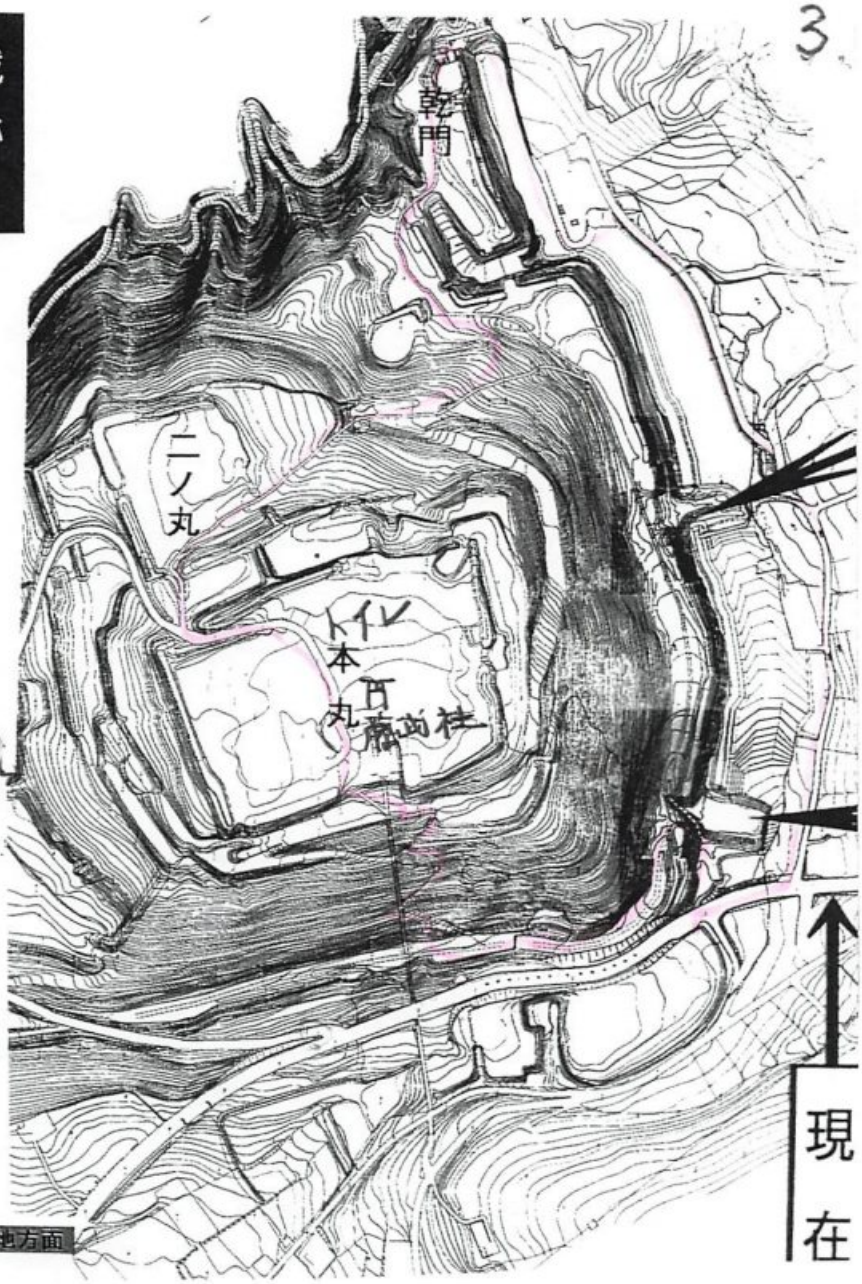


甲府城

つつじが崎武田館（武田神社）

景徳院

城跡



武田勝頼画像　高野山持明院蔵
高野山の一坊である持明院に伝わる勝頼像。なお、この画像下方には、夫人の北条氏と嫡子の信勝（のぶかつ）も描かれている。写真／高野山霊宝館

縄ばり

真田昌幸画像。第1次上田合戦に続き、再び徳川氏を退けて、真田の名声を天下に轟かせた。（上田市立博物館蔵）

新府城跡

新府城は、天正9(1581)年に武田勝頼によって築城された。城は未完成であったが、同年の9月頃には友好諸国に築城が報じられ、12月24日に躑躅ヶ崎館（武田氏館跡　山梨県甲府市）からの移転が行われた。しかし、天正10年3月3日、勝頼は織田軍侵攻を目前にして自ら城に火を放ち退去し、3月11日に田野（山梨県甲州市）において、夫人と息子信勝ともに自害し、武田氏は滅亡した。その後、同年に徳川氏と北条氏による甲斐国争奪をめぐる天正壬午の戦いがおこり、徳川家康は新府城を本陣として再利用した。

新府城が立地する七里岩は、八ヶ岳の山体崩壊にともなう岩屑流が、西と東側を流れる釜無川と塩川の侵食によって形成された台地で、西側の断崖絶壁は韮崎から長野県の富士見町）まで約30km続き、奇観を呈している。台地上には、100を越す「流れ山」と呼ばれる小高い丘・小山があり、新府城は七里岩台地南端の標高約524mの「西の森」と呼ばれた小山に築かれ、西側は釜無川をのぞむ急崖となっている。

城は土の切り盛りによって造成が行われ、山頂の本丸を中心に、西に二の丸、南に西三の丸・東三の丸の大きな郭が配され、北から東にかけての山裾には堀と土塁で防御された帯郭がめぐり、南端には大手桝形・丸馬出・三日月堀、北西端には搦手があり、全山にわたって諸施設が配置されている。搦手の郭は東西100m、南北25mの東西方向に細長い長方形をしており北側には水堀と土塁、東から南側にかけては空堀、西側は比高差90m程の七里岩の断崖となっている。城の北西隅につくられている乾門は、西側は七里岩の崖、東側が水堀でこの間を土橋でわたる構造で、大手と同様に内側が大きく、外側が小さい土塁によって囲まれたやや変則的な形の桝形虎口で、桝形内部空間は東西約13m、南北約12mの広さがあり、外側門（一の門）は北西角、内側門（二の門）は南東隅寄りに設けられている。

昭和22（1948）年の新府城跡（米軍撮影航空写真、一部改変）

平成19年3月　文化庁・山梨県教育委員会・韮崎市教育委員会

「関東３名城」急ガケの岩殿山城を遠望

１）勝頼主従の入城を拒んだ腹心・小山田氏の「岩殿山城」

①８時００分、新宿駅西口を出発、中央自動車道路をひた走る。

②車中、大月インター近くで岩殿山城跡を遠望。急ガケ岩山に立地、昨年１１月のバス見学会「岩櫃城」を髣髴させる。その山容はいまも峻嶮、中世山城の典型的な構造を伝えている。

③久能城、岩櫃城と並ぶ「関東３名城」（甲斐国誌）

④鎌倉時代、守護職・小山田行重築城といわれる。南北朝時代、甲斐武田氏と同盟関係を結び、２度にわたる北条氏の岩殿山攻撃をはねのけた。武田信虎、信玄、勝頼３代の親類衆「甲斐武田№２」として常に先陣を務めた。

⑤天正１０年「織田、徳川、（北条）連合軍」による「甲斐侵攻」では、
新府城に不安の武田勝頼が小山田信茂を頼り、岩殿山転進を決める。しかし信茂は逃げのびてきた勝頼主従の受け入りを拒否、進退に窮まった勝頼を自害に追いこんだ。

⑥信茂は武田家を裏切ることで保身をかけたが、武田家滅亡のあと織田方の手で処断され、「卑怯者」の汚名を残した。

⑦甲斐は徳川家の所領となり、岩殿山も家康の持ち城となったが、江戸時代はじめ廃城となった。

戦意を喪失した勝頼が築城３か月で自焼～新府城

１）「甲斐府中」から移住した「新しい府中」

①「府中」は室町時代のいい方で、国府またはその所在地をいう。
甲斐府中に対する「新しい府中」の意。当時は「新府、韮崎城」といった。

②「人は石垣、人は堀」と謳われた甲斐武田氏。信虎、信玄時代、「攻撃こそ最大の防御」の戦法を貫いて、甲斐国内に「城らしい城」を築かなかった。

③周囲を織田信長、徳川家康、北条氏康に囲まれ、いずれは甲斐への侵攻も覚悟した勝頼は、これを迎え撃つ絶好の要害地として、甲府の西北およそ２０㎞、その両面を釜無川の断崖に囲まれた韮崎・七里岩を選定して、去年の大河ドラマ「真田丸」の真田昌幸に築城を命じた。

④天正９年１月着工、工事は急ピッチで進み、１０月には九分通り完成した。

⑤城はおよそ１００ｍ楕円形の本丸を中心に２の丸、３の丸、大手などあわせて５万㎡、中世の山城としては大型である。

⑥山裾には幅５０ｍほどの堀をめぐらせ、出構えを設けた。

⑦勝頼の家族一族郎党が「躑躅が崎館」を引き払い、普請途中の「新府城」に移住したのはこの年１２月のことであった。

⑧年が明けた天正１０年、織田信忠を総大将とした織田信長軍が甲州めざして進撃を開始、織田の大軍を目前に戦意を喪失した勝頼は、３月３日城に火を放ち、一族郎党を引き連れて岩殿山城の小山田信茂を頼って落ち延びていった。

新府城から手口

勝頼を祀る藤武神社参道

「七里岩」断崖に立地した天然の要害「新府城」を歩く

1）文化庁、県市教育委員会「史跡看板」にそって「からめ手」から攻める

①１０時３０分ころ、最初の見学地「新府城」駐車場に到着。
トイレは本丸にしかない、あらかじめ直近の高速パーキングで用足し、帰りも要注意です。

②大看板「なわばり図」、とくに解説文はない。きょうは「からめ手、乾門コース」から本丸をめざす。一応は「山城」、多少の山坂は覚悟、元気に城攻めを開始。

③左手の小山が「新府城」。甲斐武田氏勝頼最後の居城で、縄張りは真田昌幸が勤めた。
見えないが正面２００ｍに七里岩の急ガケ、釜無川の断崖が落ちる。

④幅３０ｍほどの堀跡、北面の守り。当時は城側が水濠、外側はたんぼの低湿地、容易に敵兵を寄せ付けない。

⑤出構え＝正面から押し寄せる攻め手に横並びで銃弾を浴びせる防御設備。珍しいが応急的でなんとなく心もとない。

⑥土塁、帯郭

⑦「新府城跡東出構えと西出構えの間の堀」＝文化庁、県市教育委員会史跡看板
天正９年に築城された新府城は北から東の山裾に土塁と堀をめぐらし、とくに北側の堀中には２か所に「出構え」と呼ばれる土手状の張り出しを構築している。発掘調査以前では堀跡とされる一帯は近世の絵図によって堀の存在は想定できるものの範囲や形態は不明であった。東出構えと西出構えの間には堀の痕跡とみられる幅５～６ｍほどの細長い区画が部分的に存在し一部に水路が流れており、発掘調査の結果、耕作土の下から埋没した堀跡が発見された。

⑧「新府城北側の堀」＝文化庁、県市教育委員会史跡看板
新府城の北側山裾には北側に向かって帯曲輪、土塁、出構え、堀などの諸施設が設けられているが、西側（水濠）以外の堀跡は周囲の湧水を水田とした水田が開かれた。廃城後の土地利用による改変で、旧状は不明であった。環境整備事業にともなう発掘調査により、中堀では山際から埋もれていた深い堀跡が発見された。堀は断面が逆台形状となる箱堀と推定される。（中略）堀幅は６～７ｍ、深さは２．５ｍ前後で、深い堀とその北側は幅３０ｍ前後の湿地帯とセットになって城の北側を防御していたことが明らかになった。

出構え

からめ手の乾門跡

急ガケを見下ろす

低湿地中堀跡↑↓

二の丸虎口

馬出し跡

⑨「新府城跡」＝からめ手郭下、文化庁、県市教育委員会史跡看板

新府城は天正９年に武田勝頼によって築城された。城は未完成であったが、同年の９月頃には友好諸国に築城が報じられ、１２月２４日には躑躅が崎館からの移転が行われた。しかし天正１０年３月３日勝頼は織田軍侵攻を目前にして自ら城に火をはなち退去し、３月１１日に田野において、夫人、息子信勝ともに自刃し、武田家は滅亡した。その後同年に徳川氏と北条氏甲斐国争奪をめぐる「天正壬午の戦い」が起こり、徳川家康は新府城を本陣として再利用した。

新府城が立地する「七里岩」は八ヶ岳の山体崩壊にともなう岩屑流が西と東側を流れる釜無川と塩川の侵食によって形成された台地で西側の断崖絶壁は韮崎から長野県の蔦本まで３０km続き奇観を呈している。

城は土の切り盛りによって造成が行われ、山頂の本丸を中心に西に２の丸、南に西３の丸、東３の丸の大きな郭が配され、北から東にかけて山裾には堀と土塁で防御され、帯郭がめぐり、南端に大手枡形、丸馬出し、三日月堀、北西端にからめ手があり、全山に渡り諸施設が配置されている。からめ手の郭は東西１００ｍ、南北２５ｍの長方形で、北側には水濠と土塁、東側から南側にかけては空堀、西側は比高９０ｍの七里岩の断崖になっている。城北西隅に作られている乾門は西側は七里岩の崖、東側が水濠で、この間を土橋で渡る構造でやや変則的な形の枡形虎口になっている。

⑩「新府城の景観と遺構」文化庁、県市教育委員会史跡看板　　3541

天正９年に武田勝頼が新たな府中の中核として築城した新府城は韮崎市を貫通する釜無川と塩川の２大河川の開削によって造られた七里岩台地上にあり、その西ガケを活かした要害地に築城されている。主郭からは富士山、甲府盆地八ヶ岳が一望でき、佐久、駿河などへの交通網を掌握しやすい立地にある。

⑪新府城の現状遺構、神武城の主要遺構

新府城跡の位置付け

２）切り立つ断崖絶壁、釜無川「七里岩」に「天然の要害」を実感～からめ手の郭

①乾門＝土橋を経由してからめ手郭の乾門へ

②「新府城の枡形虎口」＝文化庁、県市教育委員会史跡看板　　3536

城の西方隅に作られたこの虎口は西側の七里岩のガケと東側に広がる水堀の土橋によって渡る構造で入口側が低く、奥側が高い土塁に囲まれた不等方形をした枡形虎口となっている。（中略）入口側の低い土塁に挟まれた１の門の北西角、２の門は南東隅よりに設けられている。枡形内部で折れをもって入る形態となっており、表面は土のままで石を敷きつめたような痕跡は認められない。

③「新府城西側」＝文化庁、県市教育委員会史跡看板　　3534

東側を塩川に、西側を釜無川に侵食された七里岩台地上に築かれた新府城跡は、急ガケを城壁に、その東西を南流する両河川を外堀とした天然の要害である。西側を流れる釜無川の右岸一帯は武川衆とよばれる地域武士団の根拠地「武川筋」である。平安時代末に甲斐武田氏の始祖である武田信義が館を構えた地であった。

本丸跡

本丸跡標示柱

供養塔が並ぶ

武神イナリ神社

④「井戸跡」＝文化庁、県市教育委員会史跡看板　　3527
本遺構は調査前の上端の直径が３２ｍあるすり鉢状の大きな窪地で、発掘では現状の地表面から４ｍの深さになっても底に到着しなかった。七里岩台地の堅い地盤を掘りくぼめ、滲みだした水や雨水を集める構造で井戸底までらせん状の通路が設けられたマイマイ井戸の可能性もあったが、その遺構を確認できていない。

３）登城道は大手門から～２の丸

①からめ手の郭の一段高台に２の丸がある。
②本丸前面に構えた郭で本丸に次ぐ主要郭。本丸の付属建物や蔵地、緊急時兵の集結場とすることが多いが、未発掘のため不明。
③土塁虎口
④大手道＝大手口からの登城道。本来の正式ルートだが、距離も長く、見どころも少ないので今回はからめ手コースを選んだ。
＊大手登城道＝三日月堀、大手門、東３の丸、西３の丸→２の丸、本丸

４）勝頼が自焼した最後の武田家居館跡～勝頼や重臣の墓が並ぶ「悲劇の城」

①本丸＝城の中心を本丸というが近世以降の呼称で、当時は根城、本城、実城などといい、発掘調査はＩ郭などとする。ここでは文化庁、県市の史跡看板の表記「本丸」とした。本来、庭園付きで、書院、対面所、金（こん）の間、数寄屋などの殿舎が立ち並ぶ公式の場であったが、築城３か月、未完成の新府城でどの程度整備されたかは不明である。
②「新府城大絵図」＝大型案内看板
③「国指定史跡・新府城跡」＝本丸、文化庁、県市教育委員会史跡看板
新府城は天正１０年３月織田軍の侵攻を前に、武田勝頼が自ら火を放って東方郡内領岩殿山城に落ちていった武田家滅亡の歴史を伝える悲劇の城跡である。本城は南北６００ｍ、東西５５０ｍ、外堀水準と本丸の標高差８０ｍ、型式は平山城で、近世城郭のような石垣は用いず、高さ約２．５ｍの土塁を巡らせている。最高所は本丸で、東西９０ｍ、南北１２０ｍ、本丸の西は「蔀（しとみ）の構え」を隔てて２の丸があり、馬出しに続く。本丸の東に稲荷曲輪、２の丸を北方に下れば横矢掛りの防塁があり、その外側に掘りをめぐらせている。（中略）蔀の構えと出構えは新府城の特色で防御のために工夫されたもので、とくに出構えは鉄砲のような新兵器をもって敵の攻撃に対抗するために工夫された構えといわれる。
④「史跡新府城跡」＝大型案内看板
新府城は武田勝頼によって天正９年２月に築城着手され、その完成したのは同年１２月であった。それまで甲府躑躅が崎の館城にあった勝頼は四囲の情勢から考えて、この天険を利用する以外に方策がなかったのである。しかし時すでに遅く、天正１０年３月３日織田軍の侵攻を前に自ら城を焼いて、東方、郡内領岩殿山城を指して落ちた悲劇の城跡である。（以下重複省略）
＊武田氏の系図
甲斐源氏の祖源義光の第３子義清は「市河荘司」として甲斐に土着した。その子清光は八ヶ岳山麓の大八幡、熱那、多古の３荘を掌握し、逸見一帯を甲斐源氏の本拠とした。
⑤「国指定史跡・新府城本丸」表示杭
⑥「石祠武田勝頼公霊社」氏子説明看板
＊武田勝頼供養塔、小山田昌輝、真田昌輝、山県昌景ほか重臣供養塔、長篠の戦い供養碑
⑦藤武稲荷神社＝江戸時代建立、武田勝頼を祀る
⑧急坂階段脇の「女坂」から「東出構え」をへて駐車場へ戻る。

以上

8

思い出アルバム

↑ 3月定例会（清泉寮）

小金城跡

高山新道組本陣跡

4月定例会 →

信玄亡き後の武田軍総司令官

武田勝頼

◆1546～82（享年37）◆甲斐

兄の死で後継者に

武田信玄の四男として生まれる。諏訪四郎勝頼という初名からわかるように、当初は生母諏訪御料人の実家である諏訪氏を継いでいる。諏訪御料人とは、信玄が滅ぼした諏訪家当主諏訪頼重の娘。つまり勝頼は、信玄の子であると同時に、信玄が切腹させた頼重の孫という因縁があった。

1565年（永禄8）、武田信玄の嫡子であった異母兄の義信が謀叛の疑いから廃嫡、自害に追い込まれたことから、勝頼が急遽信玄の後継者として浮上する。ただし仇敵諏訪氏の血を引くことなどから、武田信玄の重臣との確執が伝えられるなど、武田宗家との関係は微妙な面もあった。

ところで武田勝頼は、長篠で完敗し、武田家を滅亡に追いやったことから、凡庸・暗愚な武将と思われがちである。しかし史実の勝頼は、初陣の西上野出陣をはじめとして、北条氏の守る武蔵滝山城攻めや三増峠の戦い、今川氏を滅ぼした駿河攻めにおいて、幾度も武功を挙げている。1571年（元亀2）には、信玄の命により居城を高遠から躑躅ヶ崎館に移され、後継者としての地位を確立した。

1572年（元亀3）、武田信玄の遠江・三河攻めに従い、三方ヶ原の戦いで勝利を収めるなど、有利に戦いを運んだ。しかし途中信玄が病没したため、勝頼が家督を相続する。遺言により信玄の死は3年隠され、公式には病気による隠居としている。

勝頼は、その後も信玄の遺志を継いで、積極的に勢力拡大をはかった。武田家最大の版図は、信玄ではなく、勝頼の時代に実現している。

身内の離反相次ぐ

結局のところ、長篠での大敗が、勝頼の目論見をすべて狂わすことになった。長篠の戦いでは、山県昌景・内藤昌豊・馬場信春といった信玄時代からの宿老や多くの有力武将を失った。合戦後は、戦死した武将の子や親戚に家督を継承させるなど、家臣団再編成に心を砕いているが、量的にはともかく、質的にはかつての精強な武田軍団とはほど遠かった。

強大化した織田信長・徳川家康と対抗すべく、1577年（天正5）には、上杉謙信・北条氏政と同盟を結んだ。謙信急死後勃発した上杉家の家督争いには、越後まで兵を出して介入するなど、積極的な出兵策は末期まで継続している。

しかし、やがて北条氏との同盟が決裂すると、領国の駿河は北条・徳川両勢力の侵攻にさらされる結果となる。

1581年（天正9）、勝頼は、武田家累代の居館であった躑躅ヶ崎館に代えて、韮崎の要害の地に新府城の築城を開始している。そのために国人衆に膨大な軍資金や重い軍役を課すことになり、かえって反発を買ってしまった。さらに同時期、徳川家康に攻められ落城した高天神城に後詰の兵を送れなかったことも、離反を招く結果となった。

翌1582年（天正10）2月には、信玄の娘婿で外戚の木曽義昌が、織田信長の調略により寝返るという事件が発生する。ただちに勝頼は軍を差し向けたものの、討伐に失敗し、権威はまったく地に墜ちた。間髪を入れず、織田・徳川・北条の軍が国境から侵攻を開始。

最後は、小山田信茂や穴山信君ら重臣・一族までもが裏切りを重ね、ほとんど抵抗できないまま、かろうじて勝頼一行は新府城を脱出。わずかな手勢だけで落ちのびようとしたところで、天目山麓の田野（山梨県甲州市）で逃げ場を失い、一族もろとも自害している。

武田勝頼像　法泉寺蔵
菩提寺の法泉寺（甲府市）に伝わる勝頼の軍陣形。1830年（天保1）、勝頼の250年忌に際して描かれたもの。法泉寺の境内には勝頼の墓所が残る。

「城を歩く会」１１月バス研修会「東海地方の３名城を探る」

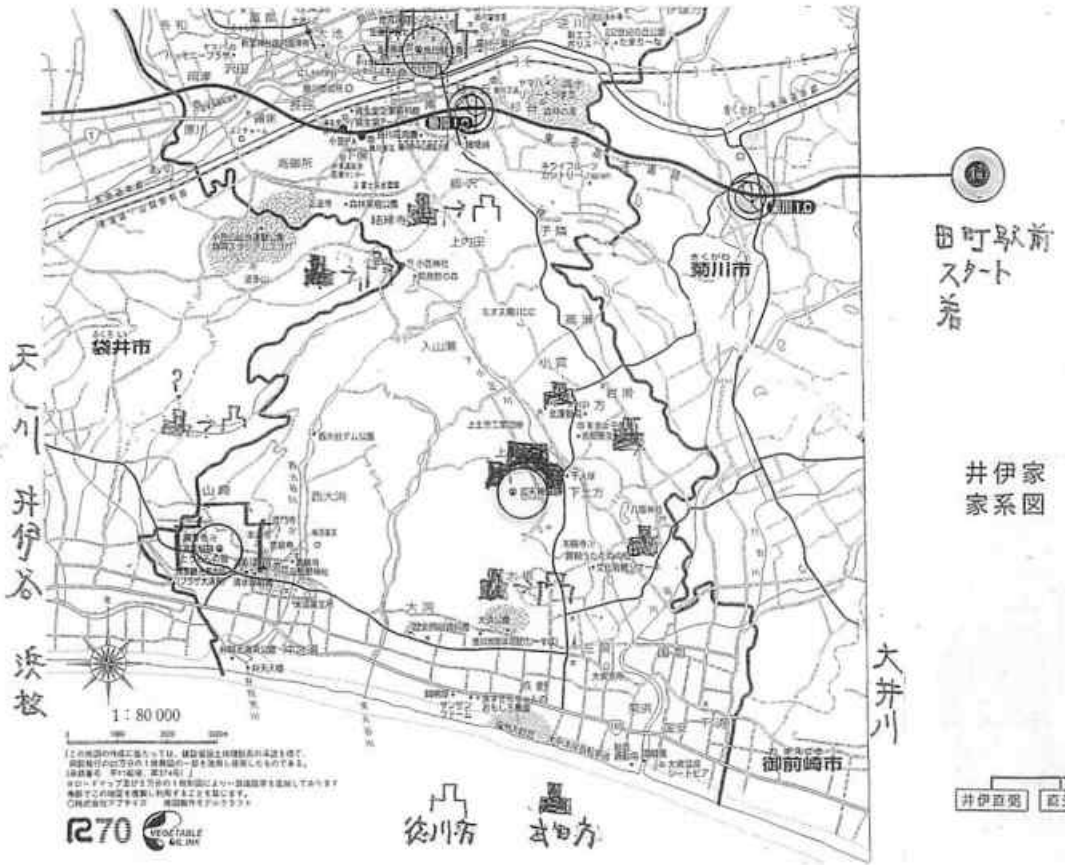
大河ドラマ「女城主直虎」井伊家ゆかり地を歩く

高天神城を制する者は遠州を制する

～今川・武田・徳川の攻防「東海一の決戦城」を行く

本日の主要行程（天候や進行状況などで変更することがあります）

８時００分	田町駅前スタート、東名自動車道
１１時３０分～１３時００分	掛川城（今川氏真が最後にこもった遠江の拠点城） 車中昼食
１３時３０分～１４時１５分	遠州横須賀城（家康が高天神城攻略のために築いた拠点城）
１４時４５分～１６時００分	高天神城（今川、武田、徳川争奪の山城）
２０時００分	田町駅着、解散



高天神城を制するものは遠州を制する」と謳われた要衝の城

国指定史跡

高天神城跡

「難攻不落の名城」と呼ばれた戦国のロマンを語る。

高天神城は、小笠山から南東にのびる尾根の先端、標高三三二mの鶴翁山を中心に造られた山城です。東側の田園地帯から南側の遠州灘まで見渡すことができ、小笠山の北を通る東海道を掌制できる立地条件にある重要な城であったため、徳川と武田が争奪戦を繰り広げました。

眼下には、下小笠川などの中小の河川が流れ、天然の堀を成し、鳥居は三方が断崖絶壁、一方が尾根続きという天然の要塞であり、「難攻不落の城」と呼ばれていました。

高天神城の築城は、室町時代、今川氏が守護大名から戦国大名に成長する過程で築かれたとする説が有力であると言われています。

今川氏の滅亡後、徳川家康の持ち城となり、小笠原長忠が引き続き城主となりました。

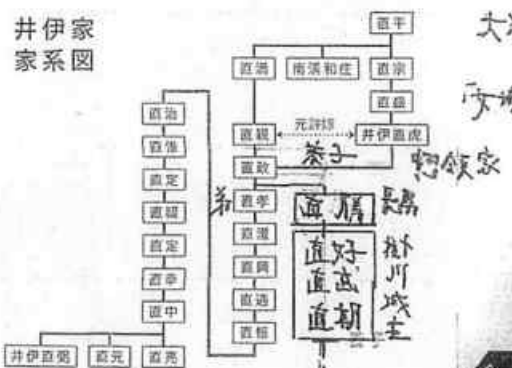
一五七二年（元亀三年）、武田信玄では攻め落とせず、一五七四年（天正二年）、信玄の息子・勝頼が二万の大軍で攻め、ついに開城させました。しかし、翌天正三年の「長篠の合戦」で、織田・徳川連合軍に大敗した武田勝頼は、その後、真田・横須賀城を拠点とした家康が高天神城の奪還に成功しました。

高天神社はかつて高天神城を守護する神社でした。この祭りは毎年三月最初の日曜日に神様が里帰りされる行事として行なわれています。当日は神楽の奉納や神輿渡御行列などの神事が厳かに執り行なわれ、桜の見頃と重なることから毎年多くの見物人でにぎわいます。

毎年3月に行なわれる例大祭は、多くの見物客で賑わいます。

徳川家康、武田信玄・勝頼が攻略を繰り広げた高天神城跡

井伊家家系図



大河ドラマ「女城主直虎」

南渓＝小林薫

今川義元＝俳優前田吟

直盛＝杉本哲太

許嫁

直親＝三浦春馬

養子

直虎＝柴咲コウ

平成２９年１１月１０日　山岸弘明　徳川・武田の両雄が攻防戦を繰り広げた決戦場

掛川城天守閣

男性肖像画

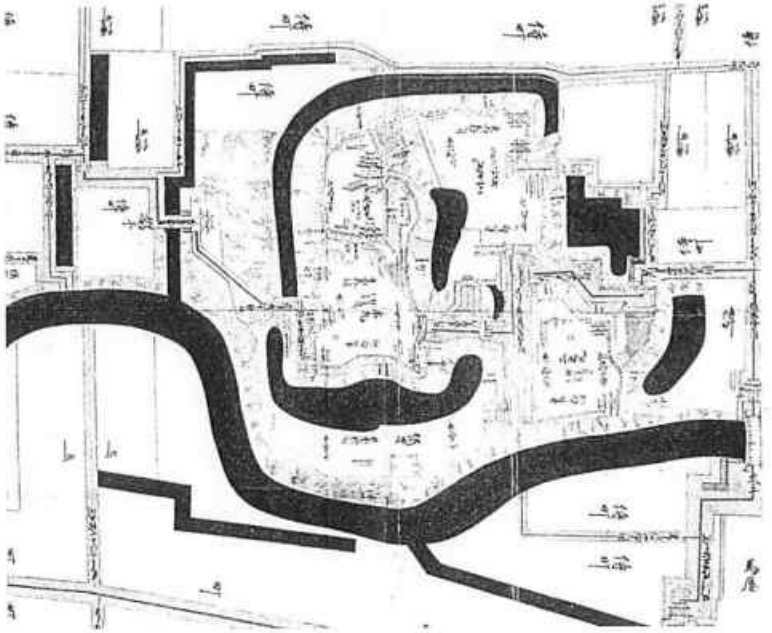
山内一豊肖像画「(府) 土佐山内家宝物資料館所蔵」

掛川城歴代城主

「沼田頼輔著『日本城郭史』」による作成

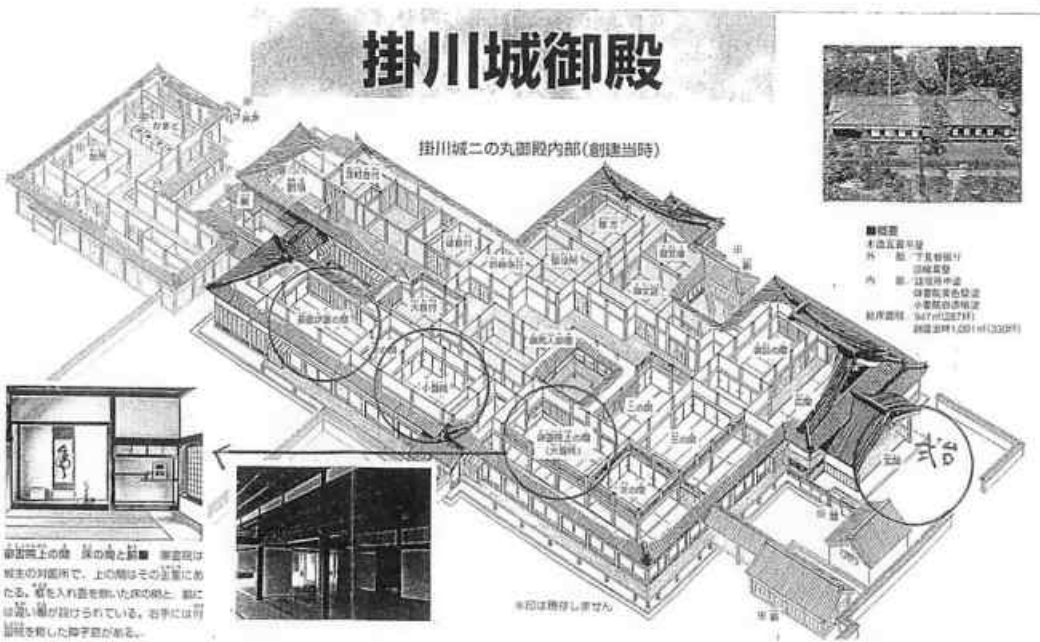
●城主名	●領高	●入城年	●西暦	●在城年数	●摘要
朝比奈泰景(やすひろ)		文明10年			今川氏方の命により掛城
同　泰朝(やすよし)		永正10年	1513	45	
同　泰朝(やすとも)		弘治3年	1557	12	今川氏滅亡時に小田原へ転居
石川家成(いしかわ)		永禄12年	1569	11	
同　康通(やすみち)		天正8年	1580	10	
山内一豊(かつとよ)	5万石	天正18年	1590	10	関ヶ原戦功の褒賞により土佐国へ転封
中　略					
井伊直好(なおよし)	3.5万石	万治2年	1659	13	
同　直武(なおたけ)	3.5万石	寛文12年	1672	22	
同　直朝(なおとも)	3.5万石	元禄7年	1694	11	病死、直子直英跡継
同　直英(なおひで)		宝永2年	1705	5	
松平(桜井)忠喬(ただたか)	4万石	宝永3年	1706	5	
小笠原長恭(ながひろ)	6万石	宝永8年	1711	28	
同　長煕(ながつね)	6万石	元文4年	1739	5	
同　長泰(ながやす)	6万石	寛延元年	1744	2	幼少ゆえ藩政不振により転封
太田資俊(すけとし)	5万石	延享3年	1746	17	寺社奉行
同　資愛(すけちか)	5万石	宝暦3年	1753	42	寺社奉行、若年寄、京都所司代、老中
同　資順(すけのぶ)	5万石	文化2年	1805	3	
同　資宗(すけとき)	5万石	文化5年	1808	3	
同　資始(すけもと)	5万石	文化7年	1810	31	養子、備後正弘3男、老中
同　資功(すけかつ)	5万石	天保12年	1841	21	寺社奉行
同　資善(すけよし)	5万石	文久2年	1862	6	明治2年、上総国市原へ移封

正保城絵図と掛川城



掛川城の
もに重要な
正保元(
城況を把握
を命じまし
もので、63
正保城絵
守丸と本丸
櫓などの
之丸などの
図を絵が図
され、また
部が鉛筆に
正保城絵
十分信頼な
絵に活かそ
城の南側
辺川の南側
っています
公家街道が
高札大名
道に面する
宿泊所とし
徳川家康
館に際し
います。第
年の上洛の
第3代将軍
の時に掛川
家光は、掛
内から建中

掛川城御殿



御型所上の座　床の間と脇■　御型所は城主の対面所で、上の間はその座敷にあたる。掛を入れ書を飾った床の間と、脇には違い棚が設けられている。お手には障子戸を飾った障子戸がある。

掛川城御殿の構造

掛川城御殿は、7棟よりなる御殿造で、御室はそれぞれの用途に応じ約20部屋に分かれています。

最も重要な対面儀式が行われる御殿棟は、主室の御型所上の間と、侍従等の控える次の間・三の間から成ります。藩主の公館の小御殿棟は、藩主の執務室である小書院と、藩主の居間として使われた黄金の間の間から成ります。東側は部屋をつかさどる諸役所の建物で、台所・奉行などの役職の部屋、警護の詰所、横断付けの障子、書類の倉庫である御文庫などがあります。小御殿棟の北側には、駕籠所がありましたが、明治時代に撤去されてしまいました。

江戸時代には身分によって入口が異なっており、藩主や家老は式台玄関から、その他の武士は玄関脇から、足軽は北側の土間から入りました。

カラー仕上げすこ
パンフレットは現地で
いただけます

3

山内一豊が大改修した「戦国のロマン」の名城～掛川城

1）今川氏真最後の拠点城～掛川城の歴史

①室町時代中期の文明年間（1469-1487）、駿河国守護職であった今川氏親が遠江攻略の拠点として重臣・朝比奈泰熙に命じて築城、当初の城は掛川城の北東丘陵で「掛川古城」と呼ばれている。

②朝比奈氏２代泰能の永正年間（1512 ころ）、城を 300m離れた現在地に移す。今川氏の勢力拡大にともなう城整備で、以後断続的に拡張工事が行われた。

③永禄３年（1560）今川義元が、織田信長との「桶狭間の戦い」で倒れると形勢は一転し、その所領は徐々に侵食されていく。東から武田信玄、西からはかつて今川氏に人質とされた徳川家康が独立して敵対していた。

④永禄 11 年、信玄と家康は同盟して今川氏真を攻めると氏真は本拠地の駿府館を捨てて、朝比奈３代泰朝のいる掛川城に逃れた。掛川城は家康が包囲し泰朝もよく持ちこたえたが、籠城 6 か月、氏真の無事を条件に開城を決意した。氏真と泰朝は後北条氏を頼って小田原城に退去し、掛川城は家康の手に落ちた。

⑤永禄 12 年、まもなく駿河に入った信玄と家康が手切れとなり、高天神城が激しい攻防の舞台となる。掛川城は豊臣秀吉の「小田原征伐」まで家康が抑えたが、小田原城の落城で関東移封を命じられた。

⑥天正 18 年代わって山内一豊が５万石で入城、「総構え城下」を整備するとともに、掛川城を「中世山城」から織豊期「近世城郭」へと変貌させた。一豊は長浜、安土、伏見城築城にも加わり、各地を従軍した知識を生かして実戦的な城造りを進める。天守の石垣構築、各曲輪の整備と拡張、櫓、城門、塀の瓦葺き、礎石建造物の建設などに及んだ。一豊は「関ヶ原の戦い」で東軍に与し、西上する家康に掛川城献上を申し出た話は有名で、戦後土佐 24 万石に栄進した。

⑦江戸時代は中小譜代大名が目まぐるしく変遷し、最後、太田氏５万石で明治維新となった。

⑧幕末の「安政大地震」で天守を含む大半の建物が倒壊、藩主居館「2 の丸御殿」は文久元年に再建されたが、江戸時代に天守の再建はなかった。現在の天守は平成６年、日本最初の「木造天守」として復元された。

2）東海道新幹線に正対する山内一豊の望楼型天守

①城の南側の逆川に向かって張り出した丘陵先端を大規模に造成した平山城。その最高所に本丸と天守曲輪を配し、２の丸、３の丸を繋ぐ。南側逆川の流れを外堀に、総堀を囲み、本丸虎口は三日月堀、松尾池、そろばん堀で守られた城内最大の防御空間を築いた。

②天守は望楼型３重４階、東海道新幹線から望む。絵図や発掘調査、山内一豊の転封先である高知城を参考に、鉄筋コンクリートを基礎とし、その外側に石垣を積んだ天守台の上に木造復元天守が上がっている。

3）大手門→２の丸御殿→天守～現地は地元ボランティアさんにご案内していただきます

①担当の保科講師は近親者急逝のため参加できなくなりました。
　急遽「地元ボランティアさん」にご案内をお願いしました
　見学資料＝「掛川城御殿、掛川城天守閣」（掛川城管理事務所）

②東京から掛川インターまで「東名高速」利用。所要時間はおよそ２時間 40 分（掛川市観光ガイドブック）インターから大手門駐車場まで５分、11 時 30 分ころ掛川城到着予定

③大手門＝渡り櫓門の復元。元位置は道路で 50m程移動して立つ

④２の丸御殿＝文久元年建造の国重要文化財。全国でも二条城、川越城、高知城しか現存しない

⑤太鼓門＝大太鼓を納め刻を知らせた。数少ない現存建造物の移築

⑥本丸御殿跡＝本丸跡には元御殿があり、将軍御成り御殿と考えられる

⑦霧吹き井戸＝天守丸の井戸。井戸から霧が噴き出して城を守ったという伝説がある

⑧天守＝天守台上に望楼型３重４階天守。嘉永７年地震で崩壊、平成６年に復元された

川原石で築いた「織豊系石垣の城」～遠州横須賀城

1）高天神城攻略の家康拠点城

①天正６年（1578）徳川家康が武田勝頼によって攻め落とされた高天神城を奪還するため大須賀康高に命じて築かせた前線基地。

②天正９年家康はこの城を拠点に高天神城を攻略した。康高は以後、城下町造りのため治水、港湾整備などを務めた。

③天正 18 年家康が関東に移封になると豊臣秀吉は榊原康政の子で康高の養子となった大須賀忠政を久留里城に移し、豊臣譜代の渡瀬、有馬氏を配した。

④慶長５年「関ヶ原の合戦」で江戸幕府が成立すると家康は再び大須賀氏を戻し、以後、能見松平、井上、本多氏と続いて西尾氏２万石で明治維新となった。

2）遠州灘に面した玉石垣の「海城」

①城は遠州灘の入り江に沿った低い丘陵先端部に立地、浜筋道と海上交通の押えとしての役割を持つ。縄張りは平山城、横一直線の連結式で水濠を回し、３重４階の望楼型天守を上げた。

②近年発掘調査が実施され、当時の姿を再現した丸い川原石を使った玉石垣が復元された。また出土瓦から石垣山一夜城や浜松城と同じ職人の作りであることが証明された。

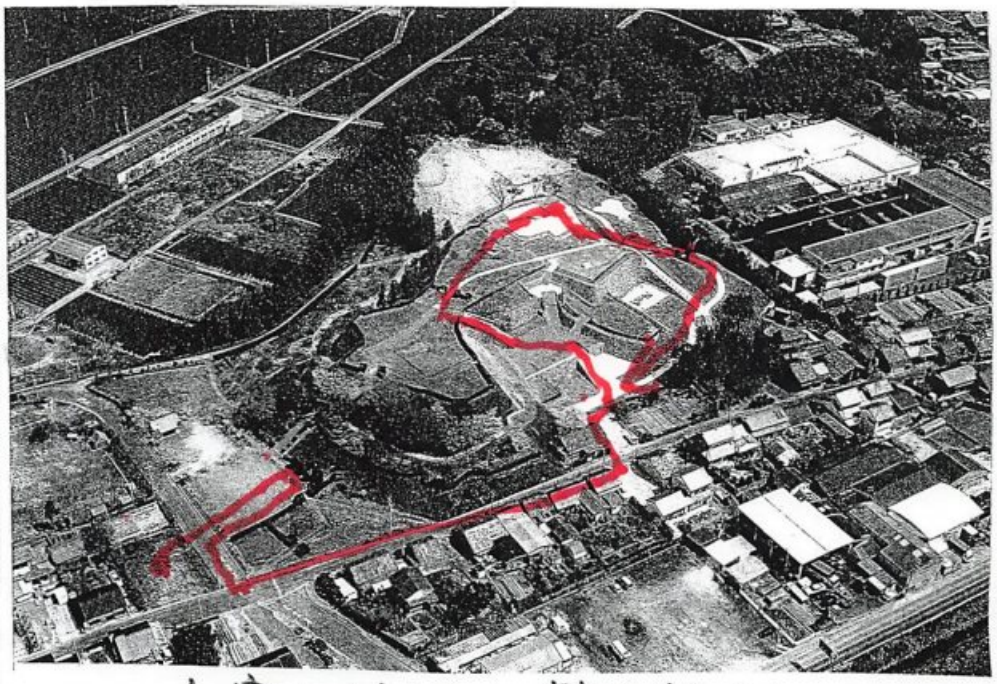
③近くの撰要寺は家康が高天神城攻めで横須賀城築城前に本陣とした。山門は横須賀城あかずの門の現存移築で、境内に大須賀氏２代の大きな宝篋印塔（墓）がある。

3）遠州横須賀城を歩く

①城内元２の丸の横須賀城駐車場に降車

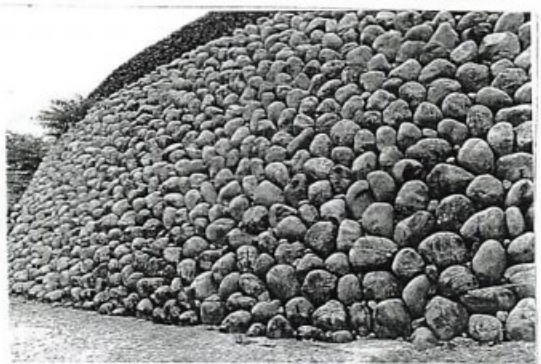
②掛川市の大看板「遠州横須賀城図」で案内コースを確認

（史跡看板）横須賀城の歴史＝横須賀城は戦国時代末期、天正６年から８年にかけて、徳川家康の家臣大須賀康高によって築かれた城であり、当初は約６㎞東に存在する武田方の高天神城を攻めるための軍事拠点として使用されました。天正９年に高天神城が落城すると、江戸時代にかけて城は近隣支配の拠点となりました。（城主は８家 20 代）明治２年の廃城後は、城に関する土地や建物等が民間に払い下げられ、横須賀城はその姿を消しましたが、昭和 56 年国の史跡に指定されています。横須賀城の特徴は中世城郭と近世城郭の２つの構造を持つ平山城であること、宝永地震までは城内に船着き場があったこと、川原石だけの石垣がみられることなどが上げられます。



上空からみた横須賀城

↑本丸斜塁 ↓玉石石垣



横須賀城跡

遠き想いを夢みて築き上げた珍しい平山城

国指定史跡

遠州制覇に夢をかけた徳川家康と武田信玄・勝頼。

横須賀城は、山城と平城を合わせ持った、平山城と呼ばれ、近世の政治の場としての面もあることから、二重の城郭要素を持っていると言われています。

横須賀城を築くきっかけは、徳川勢が守る高天神城への武田氏の襲来でした。

一五七一年(元亀二年)武田信玄は家康の家臣となった小笠原長忠が守る高天神城を攻撃しましたが、攻めきることができず兵を引き三河へ進軍していきました。これにより信玄も攻め落とせなかった難攻不落の城と言われるようになりました。しかし、この戦いから三年後、父・信玄の遺志を受け継いだ勝頼が高天神城を攻め、開城させました。一方、高天神城を失った家康は、一五七八年(天正六年)高天神城を奪還すべく、大須賀康高に命じて、横須賀城を築かせました。家康は、横須賀城を拠点とし、一五八一年(天正九年)、勝頼に奪われた高天神城を攻め、落城させました。この合戦で、初代城主となった大須賀康高を初め、その配下の者も大いに武功を挙げ、「横須賀党」と呼ばれたそうです。

西の丸西側斜面の石段と門跡検出状況

一五八二年、武田氏が滅び、織田信長が本能寺の変で命を落とすと、豊臣秀吉の手に天下が移る形勢となりました。家康は、秀吉と和睦して、一五八六年(天正十四年)浜松から駿府に居城を移し、一五九〇年(天正十八年)に関東に移り、天下人へと歩んでいきます。

横須賀城の歴史

横須賀城は、築城者大須賀康高が初代城主となりました。一五九〇年(天正十八年)の家康の関東移封に伴い、翌年、二代城主の大須賀忠政は上総国に移され、豊臣氏の家臣である渡瀬氏、有馬氏が城主になりました。

一六〇一年(慶長六年)、松平(大須賀)忠政が再び城主になり、以後譜代大名の居城になりました。江戸中期から一八六八年(明治元年)まで西尾氏八代の支配が続きました。

撰要寺には、横須賀城の初代と2代目城主大須賀氏の墓があります。

徳川家康
(「三河武士のやかた家康館」蔵)

歴史

1513年(永正10年)	これより以前、今川氏家臣が城に入る。
1568年(永禄11年)	徳川家康、今川氏真の領国遠江国に侵攻し、高天神城を属城とする。
1571年(元亀2年)	武田信玄、塩買坂に布陣し、内藤昌豊に高天神城を攻めさせるが失敗に終わる。
1572年(元亀3年)	徳川家康、三方ヶ原の戦いで武田信玄に大敗する。
1573年(天正元年)	信玄没す。
1574年(天正2年)	武田勝頼、小笠原長忠が守る高天神城を開城させる。
1575年(天正3年)	勝頼、長篠の戦いで織田信長・徳川家康連合軍に大敗する。
1578年(天正6年)	家康、高天神城奪還の拠点として、横須賀城を築く。
1581年(天正9年)	家康、高天神城を落城させ、廃城にする。
1591年(天正19年)	豊臣氏の家来、渡瀬氏が横須賀城主になる。
1682年(天和2年)	西尾忠成、信濃小諸城主から横須賀城主となり、以後西尾氏の支配となる。
1854年(安政元年)	安政東海地震により、横須賀城と城下町が大被害を受け、天守閣も傾く。
1868年(明治元年)	西尾氏は千葉に移され、横須賀藩の領地は静岡に移された徳川家の支配となる。
1873年(明治6年)	横須賀城の建物など、解体され払い下げとなる。

主郭部 橋内跡

← 天守跡

→ 三日月堀

③西の丸下斜面の石段

（史跡看板）遺構復元について＝遺構は砂などで埋め戻し地中に保存しています。この埋土の上に現在みられる復元遺構がつくられています。つまり現在みられる石の真下に写真に写っているような当時の石がそのままの状態で保存されています。本物の石は地元産の砂岩質の川原石です。

この遺構はふだん城主などが住む２の丸（現在西館幼稚園）方面から西の丸台地へ上がる時に通る登り口跡です

④城の正面はかつて海＝富士山の「宝永大噴火」で海面が隆起したため海は１kmほど後退、船着き場が使えなくなった。

⑤虎口は城両端に東大手門、西大手門が置かれたが、市街化のため消滅、見学コースは本丸下要害、櫓門前から本丸と天守台をめざす。

⑥圧倒する石垣群が一二三段を形成してみえる。近づいて石材と石積みを観察。石は天竜川から運んだ丸い川原石。源流から転がり流される過程で角がとれて丸くなるのだという。何万年にもわたる自然が作り出した芸術品ともいえる。石垣を含む現在の縄張りは秀吉時代の渡瀬、有馬氏と見られる。角石の確保が困難な中、あえて「織豊期石垣」に挑んだ子飼い大名の強い意思が窺える。丸石を野ヅラに積み上げるのは簡単ではない。現存ではないが、コーナーの「算木組」やかい石、中込め石などに注目したい。

⑦ゆるやかな登り坂石段。登り切った虎口は「渡り櫓門」で本丸の正門。両脇石垣上に白壁板塀を廻した四方を石垣で囲んだ空間は大型の枡形であろうか。

⑧西の丸＝城主の隠居所をいう。

⑨本丸＝城の中心。城主と家族が居住した。

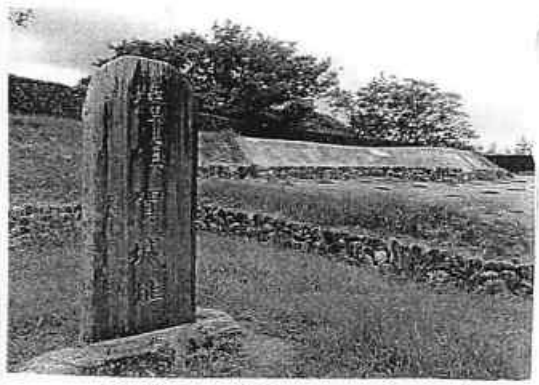
⑩天守＝発掘調査で礎石と縁石が出土、旧位置に表示している。望楼型３重４階。天守裏は急ガケになっている。

⑪本丸から３の丸への下り坂に城内最大の高石垣、石垣に囲まれた平坦部に玉砂利石遺構、さらに下がると三日月堀がある。

⑫天守台東下平坦面

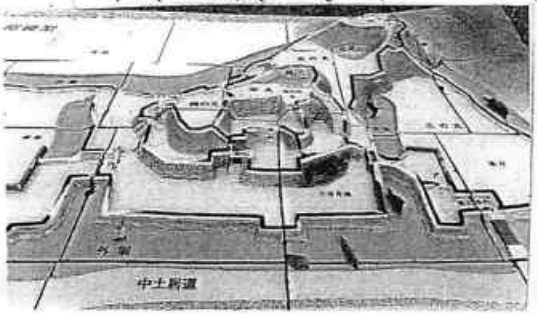
（史跡看板）この区域は天守台北側の北の丸から本丸南側区域へ続く通路のような細長い部分で、また北の丸との境界付近に井戸が示された絵図もあります

⑬３の丸、東大手門を遠望。北の丸を迂回して駐車場に戻る。



横須賀城址碑

↑横須賀城絵図　↓復元模型　↓北の丸



撰要寺

遠州制覇をかけた戦いの跡～高天神城

1）家康と信玄・勝頼が10年間に3度も戦った決戦場～城の歴史

①往古、相良から掛川をへて信州に至る「本街道」と、横須賀に通じる「浜街道」が交差する交通要衝に立地する。通説は応永23年（1416）九州探題の今川了俊が駿河と遠江半国守護になったときの築城だが、むしろ今川氏親時代とする考えが強い。氏親は伊勢宗瑞（北条早雲）をもって遠江に侵攻して今川の領国とした。

②永禄11年（1568）武田信玄に駿府を追われた氏親は掛川城に逃れたが、高天神城にあった小笠原氏興は今川氏から離反して家康に属した。

③元亀2年（1571）信玄は総勢2万の大軍で遠江に攻め込んだが、小笠原長忠は高天神城に籠城して城を死守する。高天神城は「信玄をもってしても攻め落せない難攻不落の城」として全国にその名を高めた。

④天正元年（1574）今度は信玄の子勝頼が来攻、長忠は2千の兵で立てこもるが兵糧、弾薬が尽き、家康の援軍もなく2か月の籠城で降伏、武田氏の城となる

⑤しかし同3年勝頼が「長篠の戦い」で織田信長、徳川家康の連合軍に大敗し、遠江国内の徳川勢力が拡大すると、家康は高天神城奪還のための行動を開始する。前進基地として横須賀城を築き、さらに高天神城の周囲に6つの砦を構築、また奪取して完全包囲した。

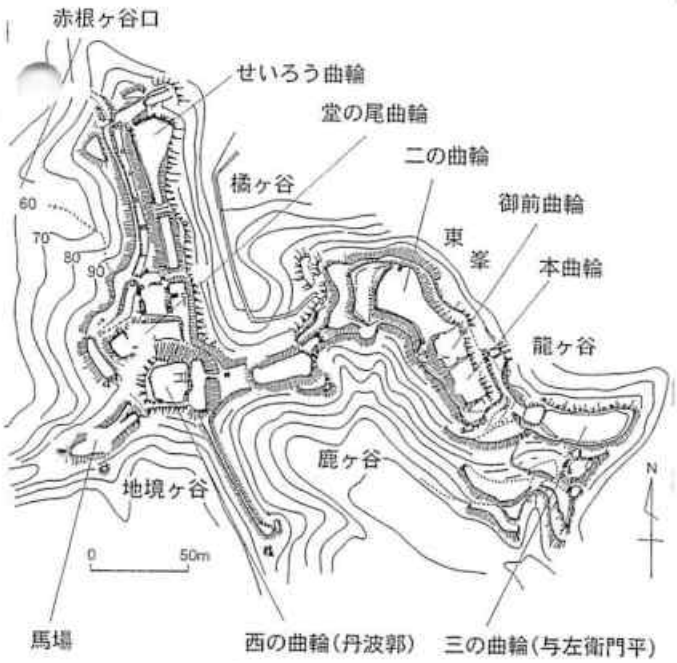
⑥「もはやこれまで」と覚悟を決めた城番岡部長教以下城兵800人は城から打って出て、激しい戦いの後玉砕した。高天神城は家康が焼き払い廃城とした。以後高天神城の「陣城」であった横須賀城がこの地の政治的中心として明治に続いた。

⑦城地は江戸時代「忌み城」となり、その遺構はほぼ完全に保存された。

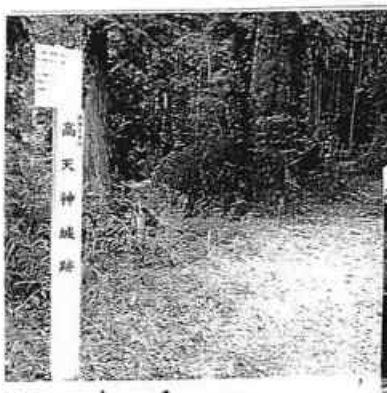
⑧昭和50年「主郭部が遺存し、中世山城としての遺構に秀でたものがある」として「国指定史跡」となった。

2）尾根と谷地を巧みに利用した「難攻不落」の城

①遠州灘に近い、牧の原台地と小笠山稜に挟まれた独立丘陵に立地、標高132m、比高



高天神城



大手口

100mの鶴翁山を中心に放射状に伸びる尾根と谷地を巧みに利用した山城。東峯と西峯の２つの城から成る。城山は四方を急ガケに囲まれ、攻め手は谷地を分け入ったゆるやかな斜面を登るしかない。守る側にとってはゆっくり引きつけて、両側斜面上から強烈な横矢を浴びせることができる。まさに「難攻不落」の名城であった。

3）手ごわいぞ。比高 100mの山城～元気組で高天神城を歩く

①お断り＝高天神城は「ハイキングコース」になっているが、比高 100mの山城で、高齢者の多い当会メンバーにとってはてごわい。天候と進行状況により大手門、からめ手門付近の散策にとどめることがあります。また体力に自信のない方はバスに残留も可能です。

②大手口駐車場で降車。元気組は３の丸、本丸をへてからめ手口駐車場で、回送したバスに乗車する。行程山道、急斜面、階段あり、およそ70分。

③大手口（獅子谷口）＝高天神城の正面玄関。駐車場の小テラスが大手馬出し跡と考えられている。

高天神城史跡看板＝

（史跡看板）高天神城跡略図。高天神城攻防砦図。鶴翁高天神城略年表

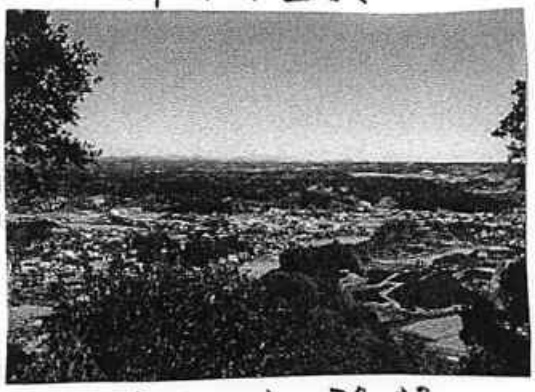
（史跡看板）高天神城想像図＝高天神城は室町時代、駿府の今川氏から遠江侵攻の拠点にとして築いたとされ、戦国時代には駿河、遠江をめぐる武田氏、徳川氏の激しい攻防の舞台となりました。元亀２年には、武田信玄が徳川方となった高天神城を攻めており、このときには大規模な戦闘は行われませんでした。天正２年５月には、信玄の息子勝頼が当城に攻め寄せ、徳川方の城主小笠原与八郎長史は１か月ほどの籠城と激しい戦闘の末、開城し武田方に降っています。その後、武田方となった高天神城は徳川家康の攻撃をたびたび受けることになります。天正３年５月の「長篠の戦い」以降、勢力が衰えた武田氏は当城を支えきれず、天正９年３月 22 日、ついに落城しました。高天神城はその後すぐに廃城となり、現在に至っています。

（史跡看板）高天神城と井伊直政＝徳川家康と武田信玄、勝頼親子が攻防を繰り広げた高天神城、（中略）天正８年から始まった第２次高天神城の戦いへ徳川の武将として井伊直政が参戦したといわれています。具体的な武功として徳川家康の寝こみを襲うため武田勝頼が送り込んだ刺客を討ち取ったと

本丸跡

高天神城 碑

天神社



本丸からの眺望

からめて口 ↑→

思い出アルバム 10/11 45名 9 稲川宮、鴻巣宮一中山道を歩く

明春 ↓次回 3/13 鎌倉稲村ケ崎

当面のスケジュール（詳細は「会報号外」を参照ください）

１２月定例会		休会
１月新年会	（１７日＝水曜日）	銀座・ライオン
２月研修会	（抽選待ち）	春季研修会
３月研修会	（１３日＝火曜日）	稲村ケ崎と極楽寺坂切通し
４月定例会	（１１日＝水曜日）	千葉城と家康茶屋御殿、国指定史跡決定の加曾利貝塚

いう武功や武田方への水の補給路を断つことによる日乾し作戦で功績を上げたとされています

④伝追手（大手）門跡

⑤城攻め開始。尾根道、そして登り坂。右上、３の丸から横矢

⑥３の丸（与左衛門平）＝南側に突きだした曲輪。原与左衛門が大将を務めたので「与左衛門平」ともいう。眺望がすばらしく遠州灘が見通せる。ここで一息。

⑦主郭、御前曲輪下を通りぬける。ここもま上からの横矢が強烈だ。

⑧御前曲輪＝本丸の南東、本丸前に位置することからついた名前だが、本来２の丸と称すべきだろう。大河内正局が幽閉されたとされる洞窟、昭和戦後の模擬天守礎石がある。

⑨本宮＝高天神社の元の鎮座地。江戸中期に現在地に遷宮された。

⑩本丸＝中心となる曲輪だが規模は小さい。土塁、帯曲輪が残る。ここからの景色もすばらしい。（史跡看板）元亀２年３月、武田信玄来攻に備えて城主小笠原長忠２千騎をもって籠城、本丸には軍監大河内政局、武者奉公渥美勝吉以下 500 騎と遊軍 170 騎が詰めた。天正２年５月武田勝頼当地包囲猛攻、６月 28 日激戦、７月２日休戦、９日開城、城主長忠、武田方に降り、城兵東西に分散し退去、武田方武将横田尹松城番として 1000 騎を率いて入城した。天正７年８月城兵交代、武田方猛将岡部丹後守直幸 1000 騎を率いて入城した。天正９年３月徳川家康来攻、包囲 10 か月、城内飢えに瀕し 22 日夜半大将岡部直幸、軍監江馬直盛以下残兵 800、二手に分かれて城外に総突し激闘全滅した。23 日家康入城検視、武者奉行孕石元泰誅せられた。城郭消滅廃城となる

⑪やや下ると東峯と西峯の分岐点に出る。大きな「高天神城説明看板」、からめ手口までもう一息。

⑫両側は急ガケ、尾根道をいくつか掘り切って防御を固める。

⑬井戸曲輪、かな井戸

⑭正面鳥居、石段から先は西峯。神社は西の丸だが石段前でUターン。
高天神社＝城中守護の神社。およそ 290 年前に本丸から移築。神社裏に勝頼が築いた掘り切り、その先、堂の尾曲輪、せいろう曲輪と続く。今回はからめ手口に降りる。

⑮三日月井戸＝岩山の礫層を染み出た雨水が三日月型に溜まった井戸。
（史跡看板）天正２年７月より籠城した武田勢は飲料水に恵まれるようにと水乞い祈願をこめて井戸を造った。今もごくわずかながらも岩壁から染み出る垂水が絶えることはない

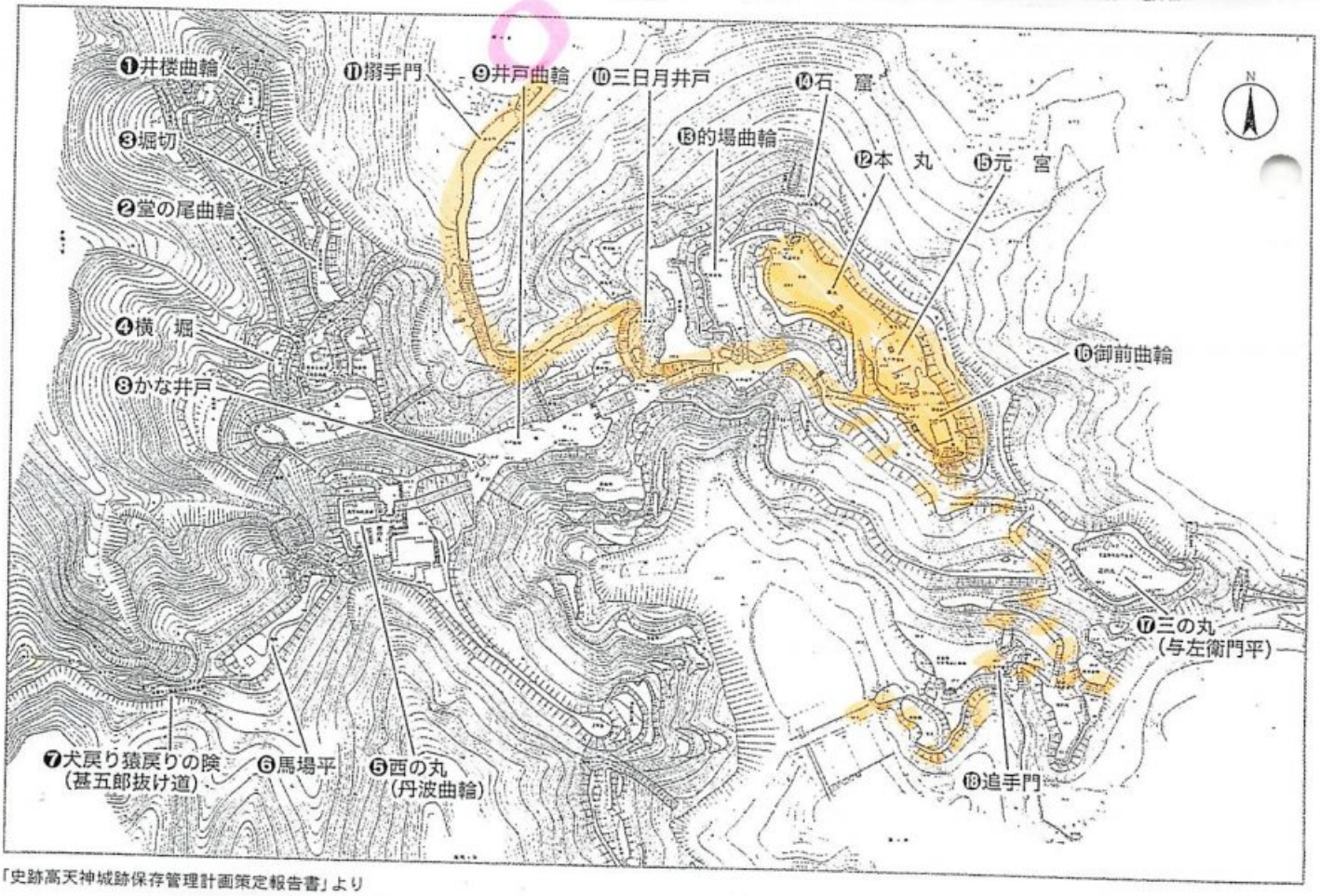
⑯石階段を降りる。およそ 200 段。けがのないようゆっくり降りる。

⑰からめ手門＝（史跡看板）元亀から天正２年にかけて渡辺金太夫照が大将として城兵２１０余騎を率いて守備した所である

⑱最後の見学地を終えて、一路出発点の東京・田町をめざす。　以上

138/E

西城（峰）
西の丸
二の丸
大堀切
かなめ手口
本丸
徳川軍
空ぼり土塁
三の丸
東城（峰）
大手口



「史跡高天神城跡保存管理計画策定報告書」より